ISSN-0285-5712

紀　要　第35号

（論文）
中野遺跡の剥片集中遺構について　1～20
－主に出土した剥片の分析から－　須原　拓

東北地方・縄文晩期の土偶(6)　21～44
－後期末～晩期初頭を主体とする北部三県の遺跡・北部三県以外の資料・(4)(5)の補遺－　金子　昭彦

岩手県域の太平洋沿岸中部地域における６世紀から８世紀の土器様相について　45～70
米田　寛・佐藤　剛

南部屋敷　71～100
中村　隼人

岩手県における近・現代遺構の検討　101～120
－炭窯跡について－　阿部　勝則

（研究ノート）
県内出土の縄文土器胎土について(2)　121～130
河本　純一

（資料紹介）
気仙地域における弥生時代後期に属する土器について　131～136
野中　裕貴

平成28年3月
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

序

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、出土資料の整理と記録保存を目的として調査報告書を刊行してまいりました。

また､これら資料の活用を図るため普及啓蒙事業や考古学関連分野の調査研究にも努めております。昭和56年以降、研鑽の成果を広く公開するために紀要を刊行してまいりましたが、このたび第35号を発刊する運びとなりました。

本紀要には、論文等７編を収録いたしました。これらは、職員が野外の発掘調査や室内整理、報告書作成などの諸業務の合間に、個々の研究成果をまとめたものであります。本書が学術研究の基礎資料として、また地域史や社会教育の資料として広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、紀要の作成にあたり、ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成28年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　菅　野　洋　樹

例　言

1　この紀要は、埋蔵文化財の調査及び研究事業の一環として、考古学及び考古学関連分野の研究を推奨し、考古学をはじめとする学術振興に寄与するとともに、埋蔵文化財保護思想の普及を図ることを目的として作成したものである。

2　本紀要には、論文５編、研究ノート１編、資料紹介１編を収録している。

3　引用図面は、各執筆者がそれぞれ許可を得て掲載している。

4　本年度の編集委員の構成は、次のとおりである。

編集委員　文化財専門員　　北　村　忠　昭
編集委員　文化財専門員　　北　田　　勲
編集委員　文化財調査員　　久　保　賢　治

中野遺跡の剥片集中遺構について

－主に出土した剥片の分析から－

須　原　　拓

大船渡市中野遺跡では、縄文時代中期中葉～末葉（大木８ｂ式～大木10式期）に比定される「剥片集中遺構」が４棟の竪穴住居から、計６箇所見つかっている。本稿は、これらの剥片集中遺構について、剥片の出土状態や属性分析（母岩分類・形態分類・接合状態）から検討し、各剥片集中遺構の特徴を抽出、その性格を導き出そうと試みた。結果、中野遺跡の剥片集中遺構は石器製作後に残った剥片を廃棄したものの可能性が高いことを指摘した。

１．はじめに

縄文時代の遺構で、石器素材剥片がまとまった状態で出土するもの（施設）を「剥片集中（遺構）」と呼称することがある。ただし遺構の定義は明確でなく、剥片の出土状態は必ずしも一様ではないので、遺跡（報告書）によって、「貯蔵剥片（施設）」や「剥片集中区（地点）」など様々に呼ばれている。

阿部勝則氏の集成によると、2003年段階、県内43遺跡で105例の剥片集中遺構が確認されており、そのうち７割近くが縄文時代中期の範疇に含まれ、またその多くは竪穴住居内で検出されている（阿部2003）。出土した剥片は、形態の特徴から特殊なものではなく、むしろ剥片間の接合状態が良好なものが多い。したがって剥片集中遺構は、縄文中期を中心として、集落（竪穴住居）内で行われた石器製作に関わる遺構（施設）と推測して良さそうであり、過去の調査事例でもそのような前提で考察されることが多い（例えば岩手県教委1980）。

剥片集中遺構が最も多く見つかる竪穴住居内において、その出土位置を詳しくみてみると、床面上だけではなく、埋土中からも検出されている。この出土状況の差異は、出土した剥片の意味合いの差異とも関わってくる。すなわち出土した剥片は石器製作に必要な素材という面と、または石器製作後に残って廃棄されたものという面の二者が考えられ、これに伴い剥片集中遺構の性格も必要な素材剥片の貯蔵（遺棄）か、あるいは、残った使用できない剥片を廃棄した痕跡か二者が考えられる。

大船渡市（旧三陸町）中野遺跡はリアス式海岸にあたる吉浜湾と越喜来湾に挟まれた半島の中央に位置し、海に面した南向きのやや急斜面に立地する縄文時代の遺跡である。平成22・23年の調査で縄文時代中期中葉から末葉（大木８ｂ式～ 10式期）の竪穴住居・住居状遺構合わせて77棟を検出し、該期における大規模集落であることが判明した。そのうち、竪穴住居４棟（大木８ｂ式期２棟・大木10式２棟）で６箇所、また遺構外で１箇所の剥片集中遺構を確認しており、これらの剥片集中遺構だけで合わせて176点の剥片・ユーズドフレイク（U フレイク）・リタッチドフレイク（R フレイク）・石鏃失敗品が出土した。竪穴住居内で確認された剥片集中遺構６箇所のうち、４箇所は床面上で検出したが、他の２箇所は壁溝内や住居埋土で検出しており、出土状態からはこれらの剥片集中遺構が上述の二者の性格のうちどちらに関わるものか判断するのは難しい。そこで本稿では、この６箇所の剥片集中遺構について、剥片類の出土状態の他、剥片の属性を観察・検討することで、これらの剥片集中遺構の性格、すなわち出土した剥片が住居に伴い石器製作に用いるための素材として遺棄（貯蔵）していったものか、あるいは住居廃絶後に石器製作で排出された剥片をまとめて廃棄していったものなのか考察する（註１）。

２．剥片の分類について

中野遺跡では3120点の石器類が出土しているが、そのうち1855点が剥片であり、全体の半数以上を占めている。また剥片集中遺構から出土した剥片の石材は、全て北上山地系の頁岩製であるが、中野遺跡の剥片石器・剥片・石核合わせて2424点のうち2281点（全体の95％）が北上山地系の頁岩製であり、したがって剥片集中遺構から出土した剥片は中野遺跡の石器類と比較しても特殊なものとは考えられず、石器製作に利用されたものであると推測する。

剥片集中遺構から出土した剥片類については母岩分類を行っており（註２）、その結果、34個（註３）の母岩が確認された。各母岩については肉眼観察（色調・光沢・表面特徴・混入物の有無）を行っており、その結果も合わせて第１表左に示している。

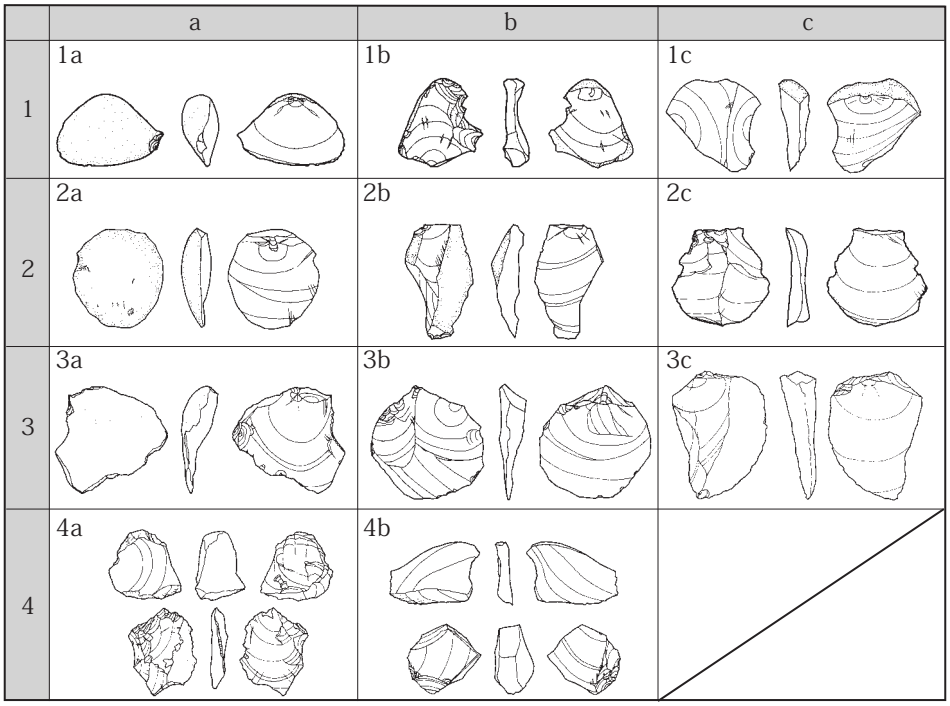
詳細は後述するが、各剥片集中遺構は３個以上の母岩から剥離された剥片で構成されており、単一母岩の剥片のみ出土する剥片集中遺構はない。上述の通り、母岩はすべて北上山地系の頁岩製であるが、第１表に示した通り、母岩どうしの属性はそれぞれ異なる点が多く、規則性が薄いことが分かる。したがって石器製作の原石獲得には中野遺跡周辺の山地を選択され、そこから採取した頁岩を素材としていることが想像できるが、その一方、細かい材質にはあまり拘っていなかったもとと推測する。

出土した剥片については、母岩分類のほかに、打面・背面の形態を基準とした形態分類（11細分）を行っている（註４）。分類の内容については、次の通りである（第１図参照）。

１ａ類：自然面を打面とし、背面の全てが自然面の剥片。
１ｂ類：自然面を打面とし、背面の一部に自然面が残る剥片。
１ｃ類：自然面を打面とし、背面に自然面が残っていない剥片。
２ａ類：１回剥離した面を打面とし、背面の全てが自然面の剥片。
２ｂ類：１回剥離した面を打面とし、背面の一部に自然面が残る剥片。
２ｃ類：１回剥離した面を打面とし、背面に自然面が残っていない剥片。
３ａ類：２回以上剥離した面を打面とし、背面の全てが自然面の剥片。
３ｂ類：２回以上剥離した面を打面とし、背面の一部に自然面が残る剥片。
３ｃ類：２回以上剥離した面を打面とし、背面に自然面が残っていない剥片。
４ａ類：打面・背面が不明瞭で、上記１ａ～３ｃ類にあてはまらない剥片で、自然面が残るもの。
４ｂ類：打面・背面が不明瞭で、上記１ａ～３ｃ類にあてはまらない剥片で、自然面が残らないもの。

以上の11細分である。分類の目的は、その剥片が剥離作業の際、初期の頃に剥離されたものであるのか、ある程度作業が進んでから剥離されたものかを推測することにある。自然面が残っている剥片（例えば１ａ・１ｂ・１ｃ類）は原石の表面上から剥離されたもので、剥片剥離作業の初期に近い段階と推測され、また自然面の残らない剥片（例えば３ｂ・３ｃ類）であれば、原石表面（自然面）が無くなった状態のさらにその後の作業によって剥離された剥片であると推察できる。母岩毎の剥片類の総点数と形態分類別の点数を第１表右に示している。

これらの母岩分類や形態分類の結果を基に、次項では各剥片集中遺構の検出状態や出土した剥片類の属性についてみていく。

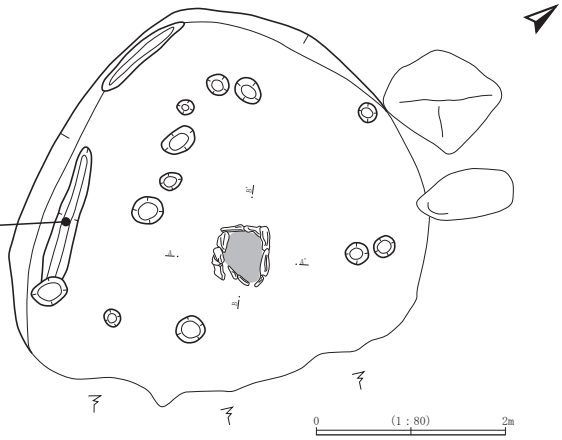


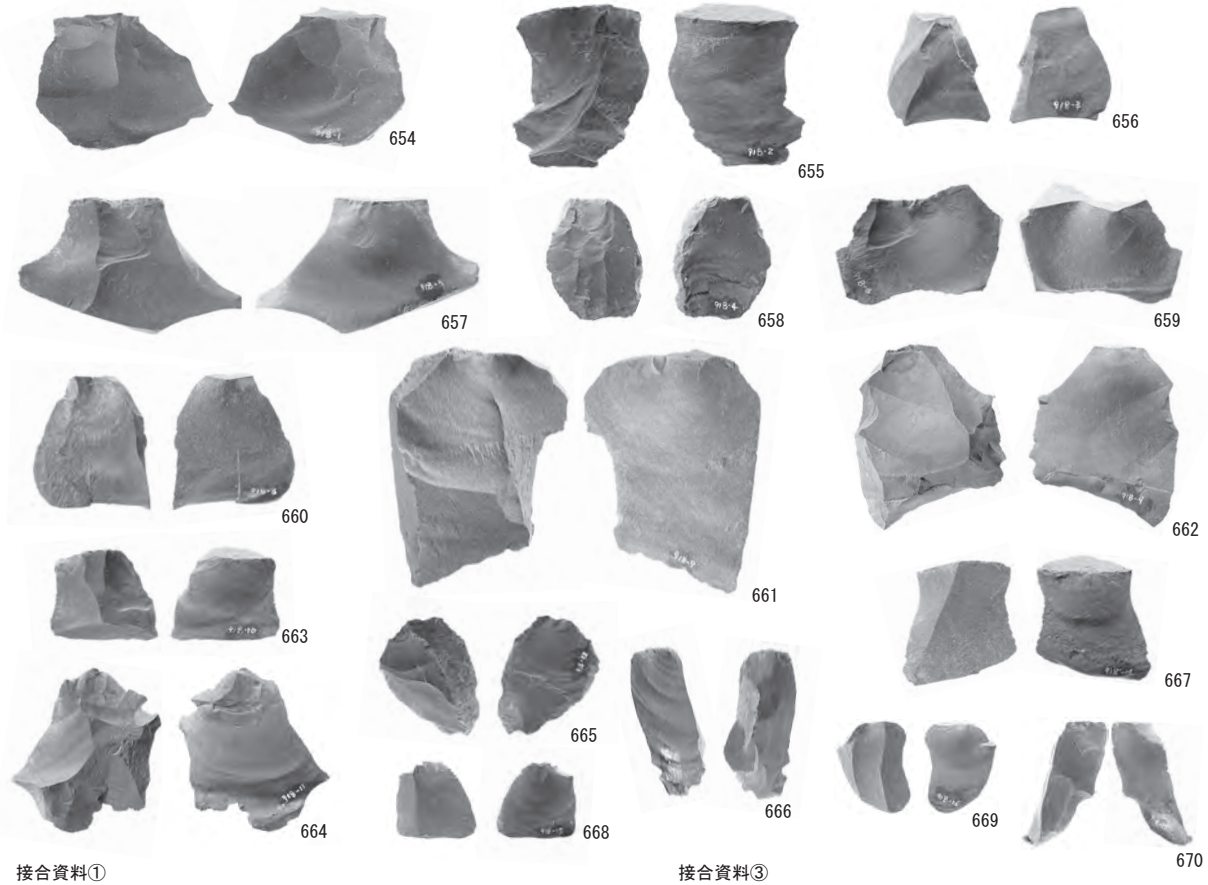
第１図　剥片分類図

第１表

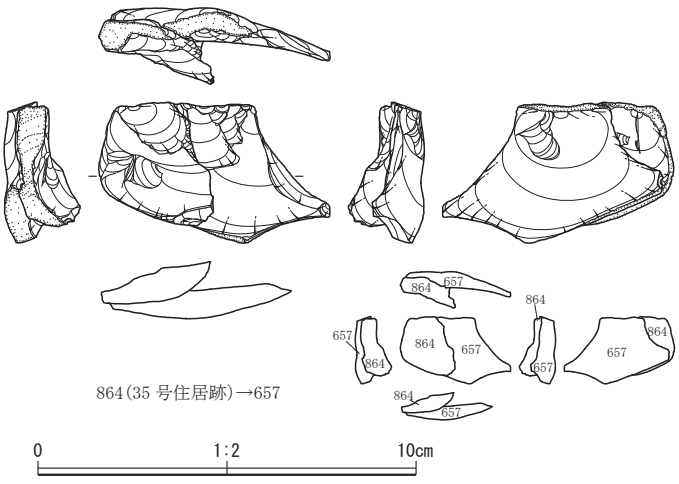
	母岩の特徴						分類別点数（点）											U/Rフレイク	石鏃失敗品	計
	番号	剥離面色調	自然面色調	光沢	表面特徴	混入物	1a	1b	1c	2a	2b	2c	3a	3b	3c	4a	4b			
32号住居	14	黄灰色（2.5Y4/1）灰黄色の縞模様	不明	あり								1								1
	19	褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄色（2.5Y6/4）	なし	ザラザラ	透明粒		2	1											3
	21	黄灰色（2.5Y4/1）	黄褐色（2.5Y5/4）	あり		白色粒子			3			1			1					5
	22	灰色（5YR4/1）	灰オリーブ色（5YR4/2）	あり	ややツルツル				3						1	2	2			8
33号住居フレイク集中範囲1	7	黒褐色（10YR3/1）灰黄褐色の縞模様入る	明黄褐色（10YR6/6）	あり							4									4
	9	褐灰色（10YR4/1）	不明	あり		白色粒子					1	11			4	5				21
	10	灰色（5YR6/1）	灰白色（５YR7/1）	なし	ややザラザラ											1				1
33号住居フレイク集中範囲2	23	灰黄褐色（10YR4/2）	不明	あり	ややツルツル	白色粒子									2					2
	24	褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄色（2.5Y6/3）	あり		透明粒		2	2		3	2			1	6		1		17
	25	灰黄褐色（10YR5/2）	明黄褐色（2.5Y6/6）	なし	ザラザラ	白色粒子									1					1
	26	褐灰色（10YR4/1）	オリーブ黄色（5Y6/4）	あり		透明粒		2	1		1	1								5
	27	黄灰色（2.5Y5/1）	淡黄色（2.5Y8/3）	なし	ザラザラ							2				1				3
	28	黄灰色（2.5YR4/1）	灰黄色（2.5YR6/2）	なし	ザラザラ	透明粒		1	2						1					4
	29	黒褐色（2.5Y3/1）	淡黄色（2.5Y8/3）	あり	ツルツル									1	1	2				4
	30	灰オリーブ褐色（2.5Y3/3）	淡黄色（2.5Y8/4）	あり		白色粒子					2					1				3
	31	灰黄褐色（10YR4/2）	灰黄色（2.5Y6/2）	なし	ザラザラ	白色粒子		2	2		1	1		1	1					8
	32	黄灰色（2.5Y5/1）	灰白色（5Y7/2）	なし	ツルツル	透明粒		2							1					3
	33	黄灰色（2.5Y4/1）	浅黄色（2.5Y7/4）	なし	ザラザラ	白色粒子					7	1								8
	34	暗灰黄色（2.5Y4/2）	オリーブ黄色（5Y6/3）	なし	ツルツル	白色粒子						2		1		1				4
	35	黄灰色（2.5Y5/1）	灰白色（7.5YR8/2）	なし	ツルツル	透明粒		1						1		1				3
	36	灰黄褐色（10YR5/2）	灰黄色（2.5Y7/2）	あり	ややザラザラ	白色粒子					1									1
	37	浅黄色（2.5Y7/3）	明黄褐色（10YR7/6）	なし	ツルツル	透明粒					1									1
	38	褐灰色（10YR4/1）	灰白色（5Y7/1）	あり	ツルツル	白色粒子		5			1				1		1			8
33号住居フレイク集中範囲3	1	黒色（5Y2/1）	不明	あり	ツルツル				1						1				1	3
	2	黄灰色（2.5Y5/1）	暗灰黄色（2.5Y5/2）	なし	ザラザラ			2	1							4				7
	3	黄灰色（2.5Y4/1）	浅黄色（2.5Y7/3）	なし	ややザラザラ				1							1	1	1	1	5
	9	褐灰色（10YR4/1）	不明	あり		白色粒子						5				1				6
	16	にぶい黄橙色（10YR7/3）	不明	あり	ツルツル													1		1
	17	灰黄褐色（10YR4/2）	浅黄橙色（10YR8/3）	あり	ツルツル	白色粒子												1		1
34号住居	12	黄褐色（2.5Y5/3）	極暗赤褐色（2.5YR2/4）	あり	ツルツル			1												1
	15	オリーブ黒色（5Y3/1）	オリーブ黒色（5Y3/1）	あり	ツルツル	白色粒子		1												1
	19	褐灰色（10YR4/1）	にぶい黄色（2.5Y6/4）	なし	ザラザラ	透明粒		2												2
	20	灰白色（5Y7/1）	淡黄色（2.5Y8/4）	なし	ツルツル			1	1								1	1		4
	21	黄灰色（2.5Y4/1）	黄褐色（2.5Y5/4）	あり		白色粒子		1			2									3
	22	灰色（5YR4/1）	灰オリーブ色（5YR4/2）	あり	ややツルツル			3								1				4
54号住居	11	灰黄褐色（10YR5/2）	灰黄色（2.5Y6/2）	あり	ツルツル	黒斑			2		2	3				1	3			11
	13	灰色（5Y6/1）	にぶい黄色（2.5Y6/3）	なし	ややザラザラ												1			1
	18	灰黄褐色（10YR5/2）	にぶい黄橙色（10YR7/2）	あり	ツルツル			1				2			2		1			6

剥片集中遺構出土状況



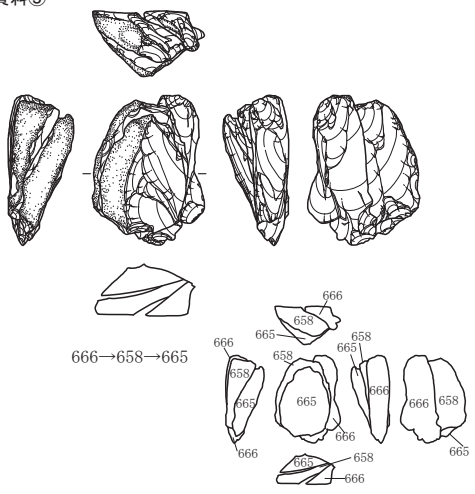


接合資料①



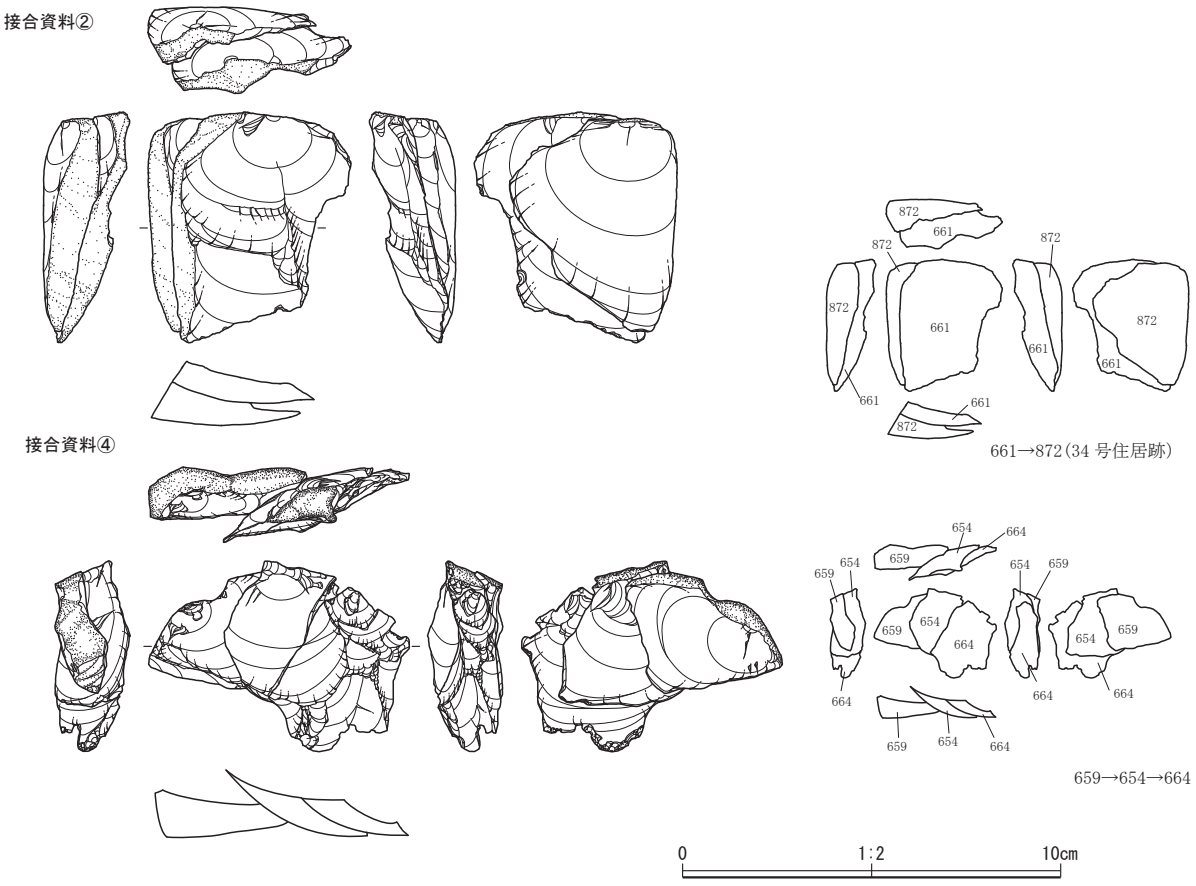
864(35 号住居跡)→657

接合資料③



666→658→665

第２図　32 号住居跡 (1)



第３図　32 号住居跡 (2)

第２表　32 号住居跡　剥片集中遺構　剥片一覧

掲載番号	出土位置･層位	分類	母岩	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
654	32号住居壁溝内	1c	22	35.69	46.62	13.49	11.89	接合資料④
655	32号住居壁溝内	1c	21	43.47	34.24	13.63	11.97	−
656	32号住居壁溝内	3c	21	30.27	26.93	6.47	4.30	−
657	32号住居壁溝内	1c	22	35.87	59.53	9.15	15.18	接合資料①
658	32号住居壁溝内	4a	22	32.83	25.52	8.83	6.34	接合資料③
659	32号住居壁溝内	1b	19	33.93	44.68	11.49	8.30	−
660	32号住居壁溝内	2c	21	35.18	30.71	6.64	5.35	−
661	32号住居壁溝内	1b	19	63.58	47.17	11.02	22.54	接合資料②
662	32号住居壁溝内	2c	14	47.04	42.68	8.16	14.63	−

掲載番号	出土位置･層位	分類	母岩	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
663	32号住居壁溝内	1c	21	25.39	28.61	10.25	6.58	−
664	32号住居壁溝内	4b	22	43.15	35.89	8.52	8.03	接合資料④
665	32号住居壁溝内	4a	22	34.10	23.55	6.58	4.82	接合資料③
666	32号住居壁溝内	4b	22	39.41	16.52	8.01	4.64	接合資料③
667	32号住居壁溝内	1c	21	33.59	30.53	12.15	7.16	−
669	32号住居壁溝内	1c	19	25.04	18.68	5.25	1.67	−
670	32号住居壁溝内	1c	22	33.61	13.78	4.69	1.91	−
668	32号住居壁溝内	3c	22	20.36	21.11	4.27	1.70	−

３．各剥片集中遺構について

⑴　32号住居跡　壁溝内（第２・３図、第２表）

大木８b 式期。径４m の不整円形、石囲炉を伴う竪穴住居で壁溝内で検出した。ただし概ね埋没しており、床面とほぼ同じ高さである。掘り込んだ上に埋設した形跡はなく、第２図左上写真で示した通り、剥片は雑然と重なった状態で出土した。また出土した剥片のなかには、後述する35号住居跡の剥片集中遺構の剥片と接合するものがあった。したがって本遺構は35号住居跡の剥片集中遺構と同時期存在である可能性が高い。

剥片は17点である。母岩は４個（母岩14・19・21・22）確認した（第２表）。４つの母岩の色調は

それぞれ異なるが、全体的に灰色に偏る。母岩別に点数をみていくと、母岩22が最も多く（８点）、母岩21がそれに次いでおり（５点）、両母岩が本遺構の剥片の大半を占めている。

分類では１ｃ類が最も多く（７点）、次いで１ｂ・２ｃ・３ｃ類が２点ずつである。見方を変えて、自然面打面の剥片点数を数えると１ｂ・１ｃ類合わせて９点であり、自然面打面の剥片の多さがこの剥片群の特徴ともとれる。剥片の平面形態は縦長が多い（655・656など）が、横長（654・659・657）や不整形（664）もあり、意識的に縦長を製作していたとは断言できない。大きさでは、661が最も大きいが、その他は３～４㎝大と１～２㎝大とに二分できる。

接合資料は４点（第４図接合資料①・②・③・④）である。接合資料の①・③・④は母岩22で、本遺構の出土のなかでも点数が多い母岩である。接合資料②は母岩19で、本遺構では点数が少ないが、34号住居跡の剥片と接合している。接合資料①・②・④は自然面打面の剥片群が接合したものである。いずれも同一方向から加撃し、連続的に剥離作業を行っているのが特徴である。接合資料①と④両者は接合しなかったものの、同一作業によって剥離したものと推測できる。また接合資料③の剥片はいずれも打面・背面が分からない剥片どうしが接合しているため、４ａ類に分類しているが、自然面が残っている点、剥離方向が同一である点から接合資料①・④と同じ作業で剥離された剥片群である可能性が高い。

⑵　33号住居跡　「フレイク集中範囲１」（第４・５図、第３表）

大木10式期。５ｍ前後の不整な楕円形、複式炉と土器埋設炉を伴う竪穴住居で、北壁際床面上で３箇所の剥片集中遺構を確認した（註６）。３箇所はいずれも床面下を掘り込んだ形跡はなく、床面上で剥片が出土している。調査時はこの掘り込みを有さない在り方から、住居の付属施設なのかどうか判断に迷い、仮称で「フレイク集中範囲１・２・３」とした。本稿では、剥片集中遺構の範囲に含めたが、名称については報告書の通り、この仮称を用いることとする。

フレイク集中範囲１は住居北壁際に位置する。床面上であるが、柱穴２の検出面上で確認した（第４図）。したがって柱穴が埋没した後なので、住居自体が廃絶されていた可能性もある。

剥片は26点で、母岩は３個（母岩７・９・10）確認した（第３表）。剥片点数を母岩別にみていくと、母岩９が21点、母岩７は４点、母岩10は１点で、母岩９が大半を占めている。色調は最も多い母岩９が濃い灰色を呈すので、全体的には灰色基調に偏るとも言えるが、次に多い母岩７は黒褐色に黄色の縞模様であり、母岩９とは異なる。

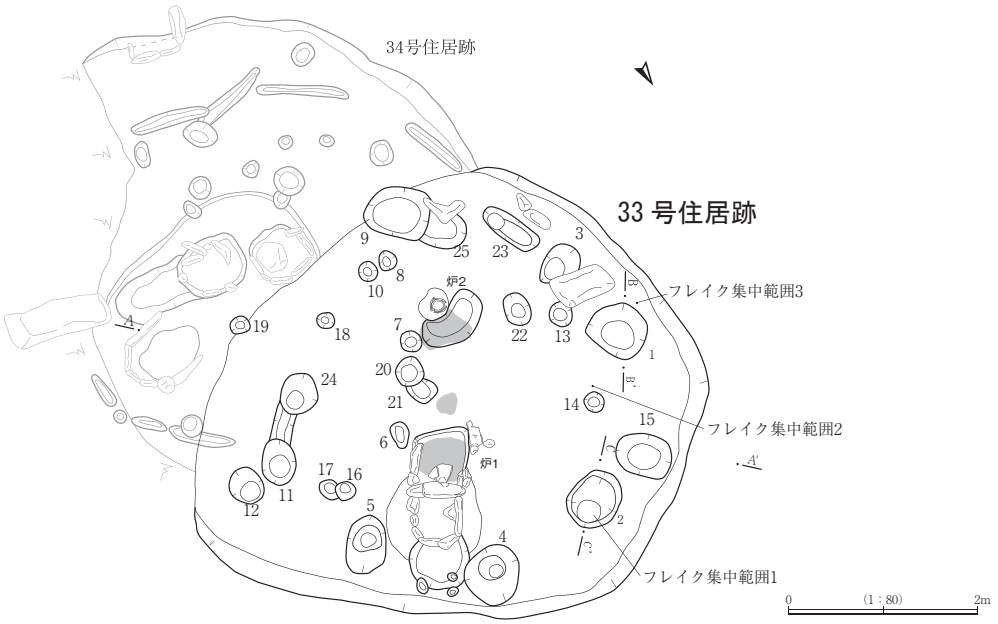
分類では２ｃ類が多く（11点）、これに２ｂ類（５点）、３ｃ類（４点）が次いでいる。打面・背面の分からない４ａ類（６点）を除くと、全体的に自然面の残らない剥片が多いのが特徴で、自然面の残る剥片の多かった32号住居跡の剥片集中遺構とは様相を異にする。剥片の形態は、比較的縦長が多い傾向があり、特に717～719は他よりも長大である。ただし不整形な剥片も少なくないので、意識的に縦長の剥片を製作しているとは断言できない。大きさでは長さ3.5㎝（後半）～５㎝の範疇に含まれるものが主体であるが、そこに外れる大きさの剥片も少なくない。

接合資料は２点（第５図接合資料⑥・⑩）で、どちらも母岩９である。接合資料⑩の716を除き、いずれも縦長の剥片の２ｂ類・２ｃ類が接合している。両者の打面をみると、おそらく、元々単一打面と考えられ、両接合資料は接合しなくとも同一方向から連続的に縦長の剥片を剥離する、同一作業で剥離された剥片群と考えられる。

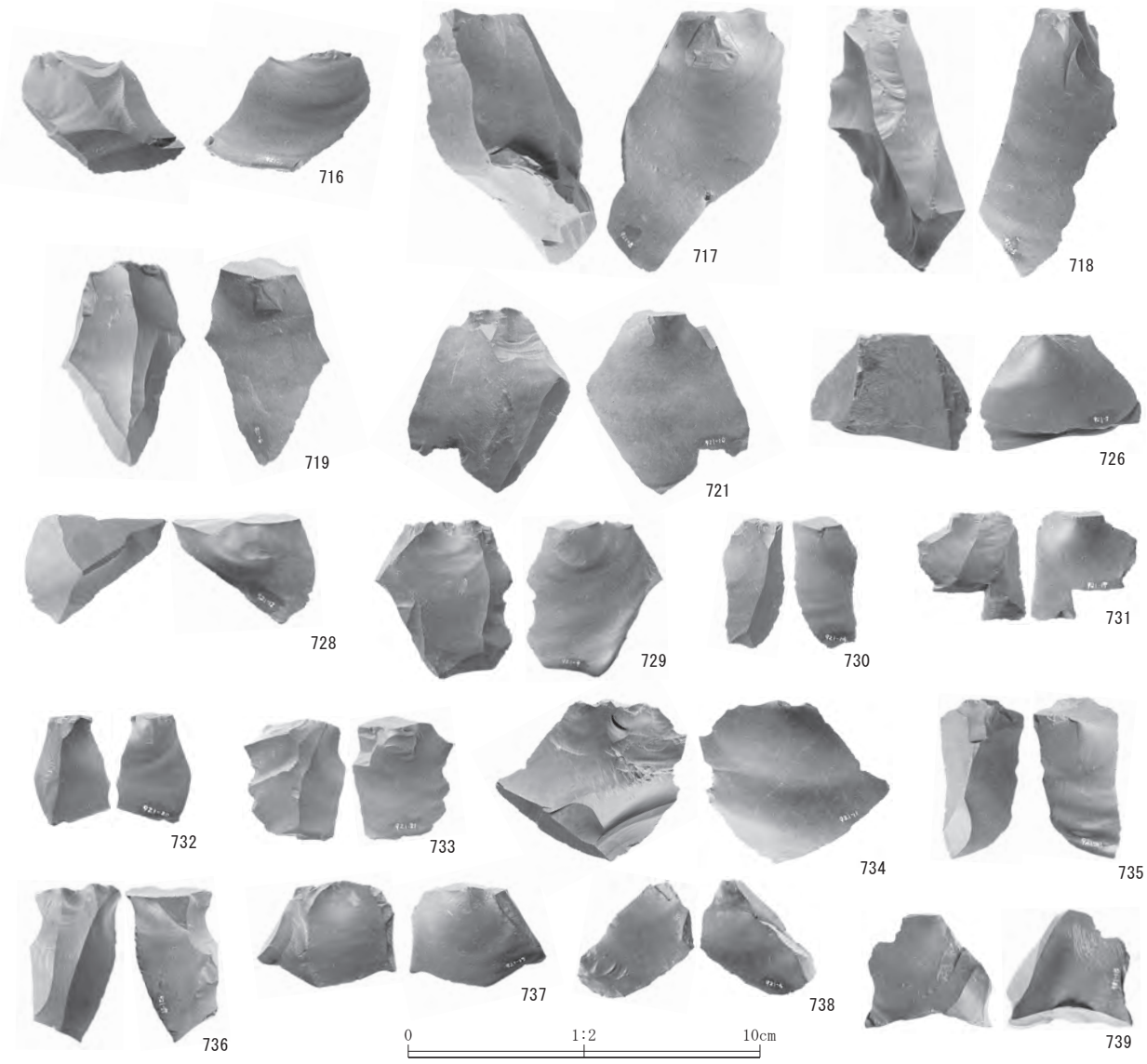
⑶　33号住居跡　「フレイク集中範囲２」（第６～８図、第３表）

33号住居跡床面のやや北西側寄りに位置する、柱穴14の脇、床面上で確認した。

剥片74点とＵフレイク１点で、他と比べて剥片点数が多い（第３表）。ただし母岩の数も16個（母



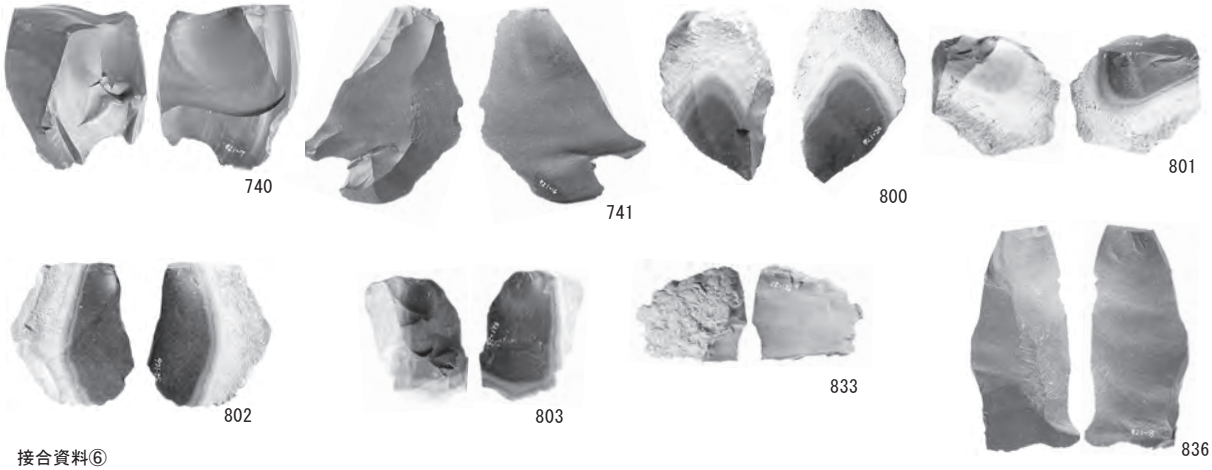
フレイク集中範囲 1



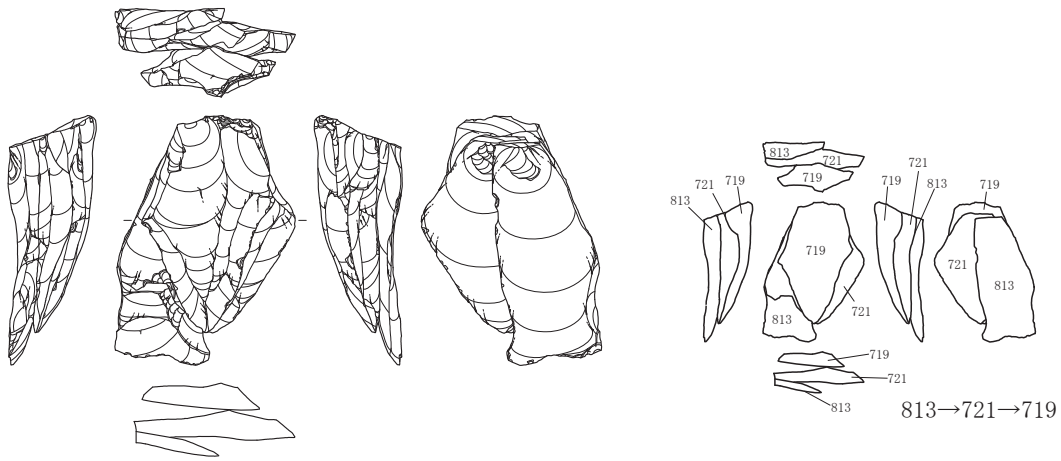
第 4 図　33 号住居跡 (1)

岩23～38）で、他よりも圧倒的に多く、母岩別の剥片点数は、最も多い母岩24でも17点で全体の２割強に過ぎず、他の母岩に至っては３～８点を数えるのみである。したがって本遺構は、多量の母岩からわずかずつの剥片を寄せ集めてきたようにも見受けられる。当然、剥片の色調も灰色基調、黒色基調、黄褐～オリーブ色基調とばらついており、また剥片の平面形態は縦長、横長、不整形と様々で、一定の形態を想定し、製作した意図があるとは見受けられない。大きさでも長幅合わせて2.5～4.0cmの範囲に収まるものが全体の半数であるが、残り半数はその範囲から外れて1.5～7.0cmまで、大小様々である。

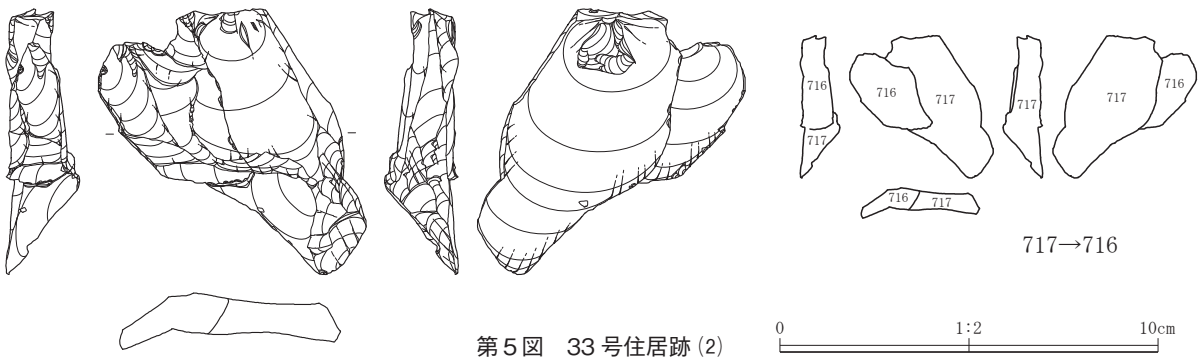
分類では２b類・２c類が多いが、１b・１c・３b・３c類も一定量あるので突出して多いとは言えない。また分類点数を母岩別にみても、ばらつきが目立つ（第３表）。例えば最も点数が多い母岩24でも、分類別では１b類・１c類・２b類・２c類・３c類が２～３点ずつで、いずれかの分類に偏る



接合資料⑥

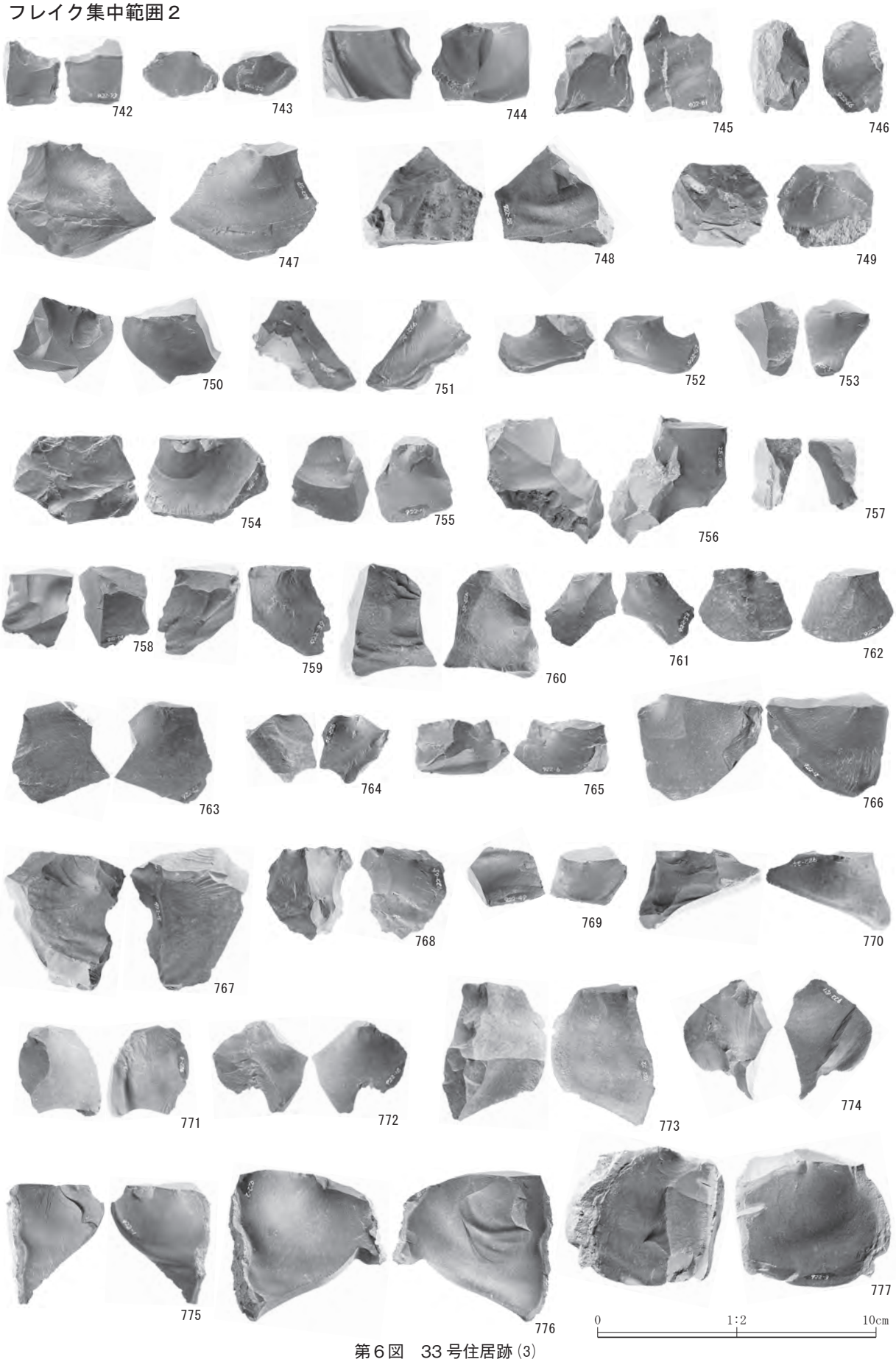


接合資料⑩

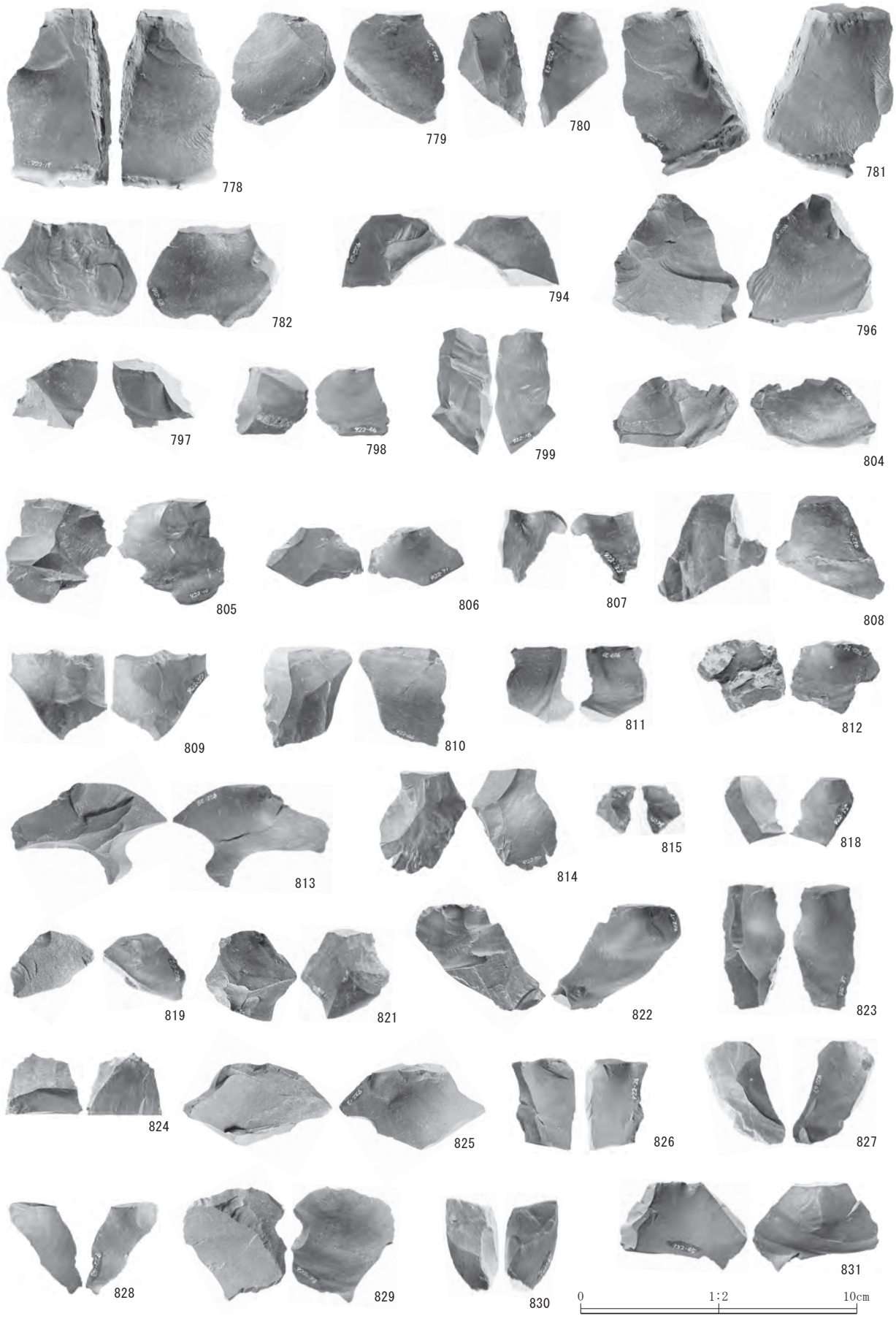


第５図　33 号住居跡 (2)

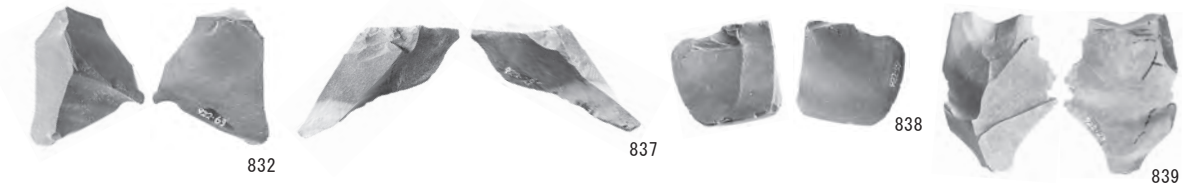
フレイク集中範囲２



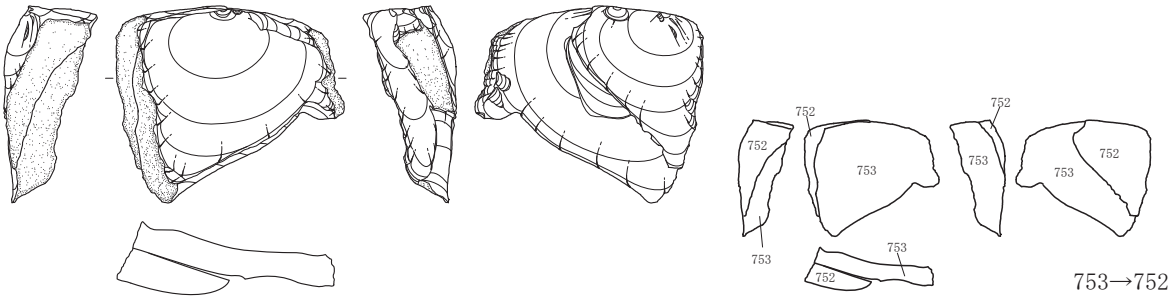
第６図　33 号住居跡 (3)


778
779
780
781
782
794
796
797
798
799
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
818
819
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
0
1:2
10cm

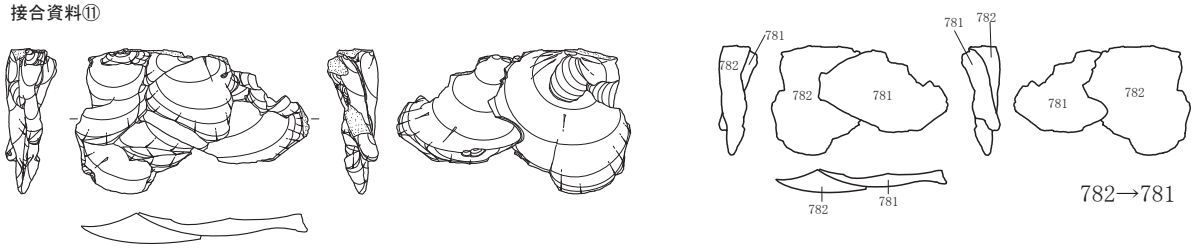
第７図　33 号住居跡 (4)



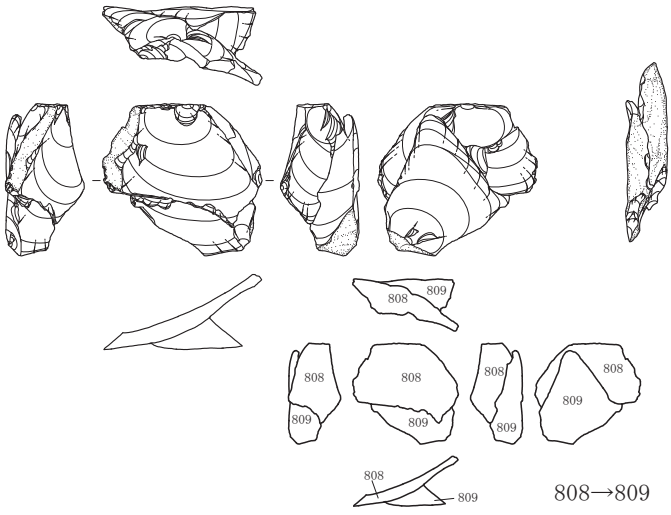
接合資料⑤



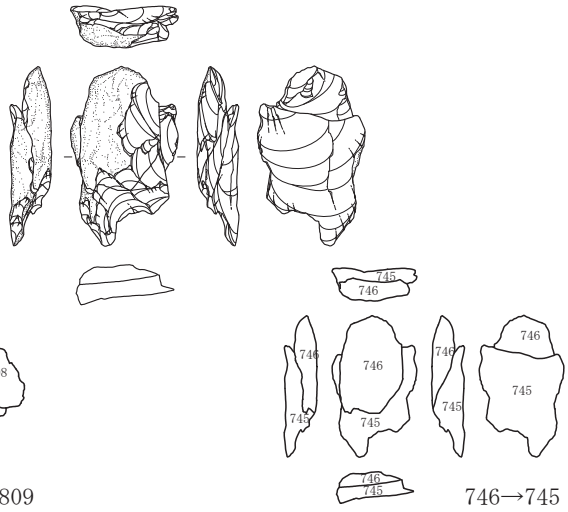
接合資料⑪



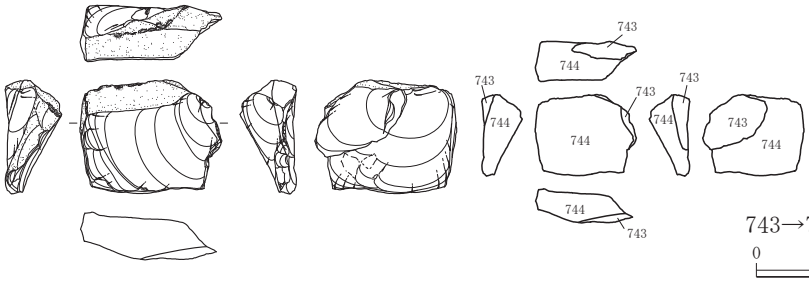
接合資料⑫

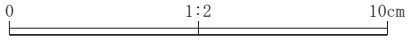


接合資料⑬



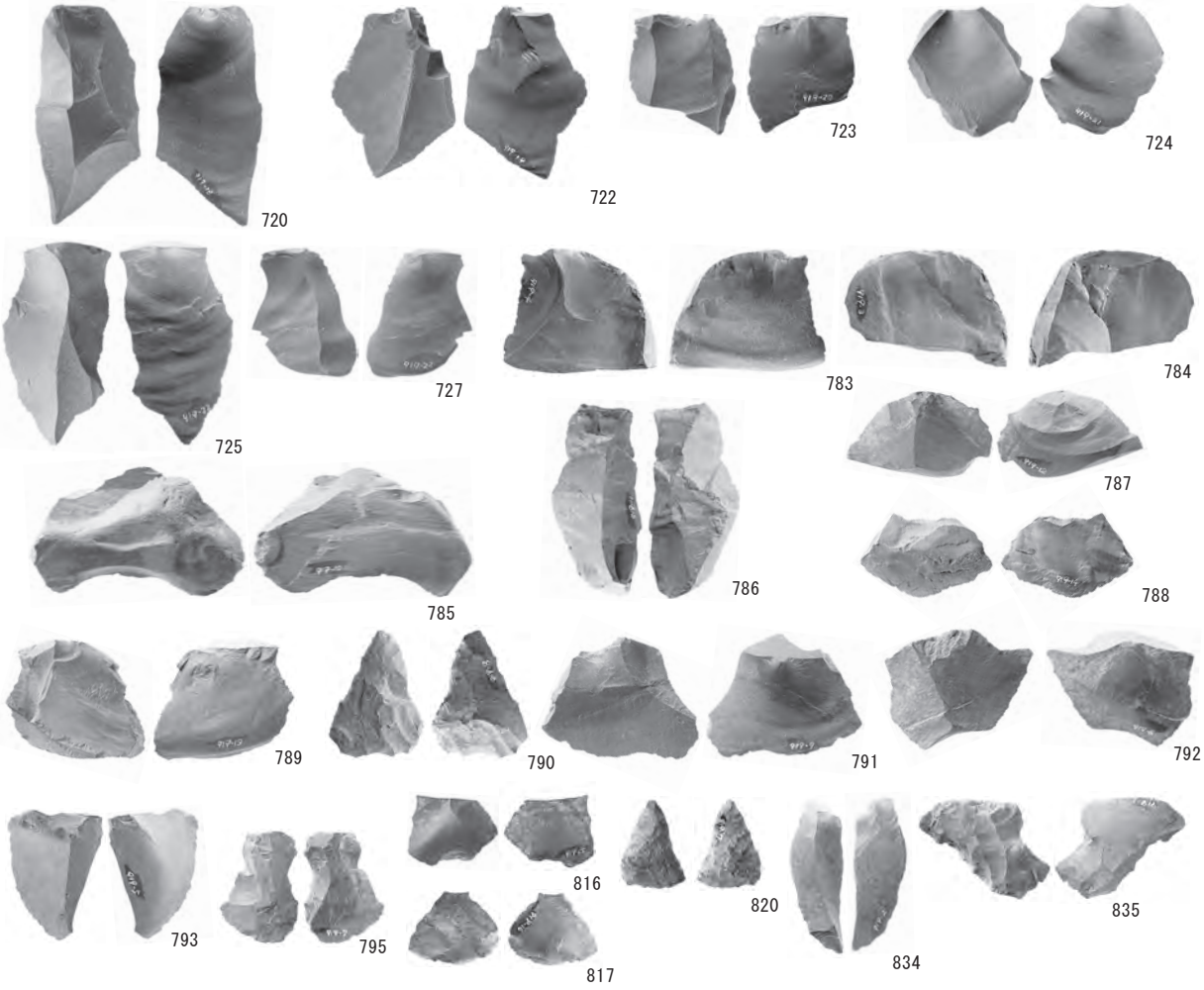
接合資料⑭



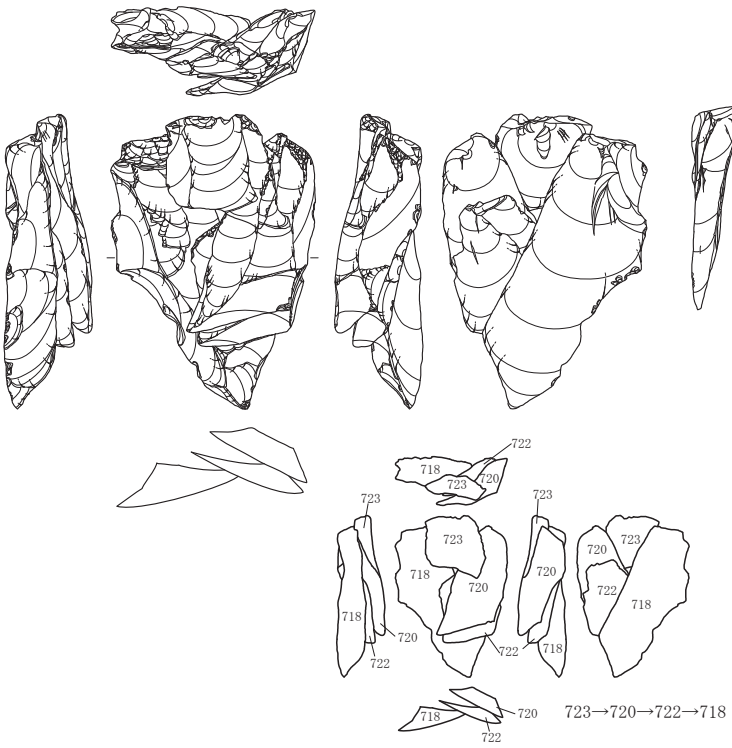


第８図　33 号住居跡 (5)

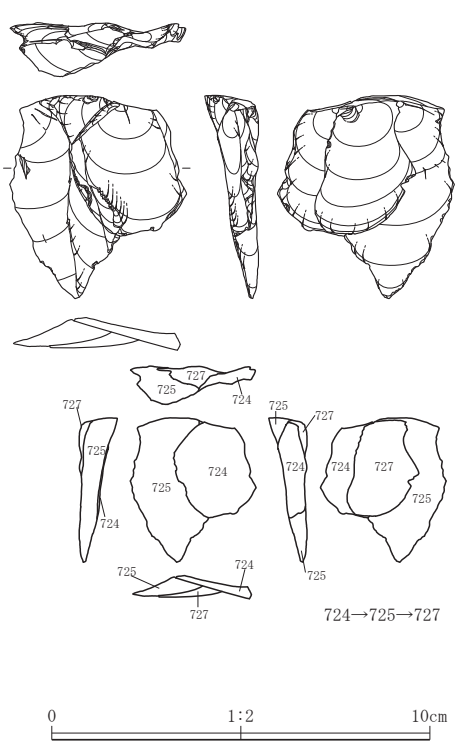
フレイク集中範囲３

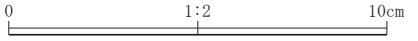


接合資料⑦

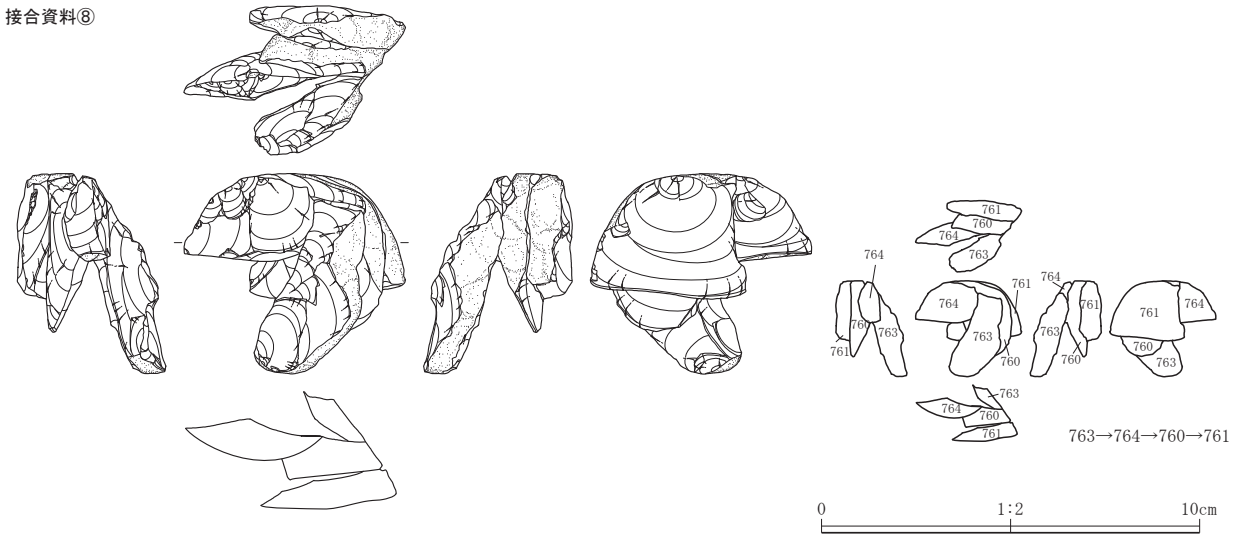


接合資料⑨





第９図　33 号住居跡 (6)



第 10 図　33 号住居跡 (7)

第 3 表　33 号住居跡　剥片集中遺構　剥片一覧

掲載番号	出土位置・層位	分類	母岩	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
716	フレイク集中範囲1	4a	9	33.25	46.43	11.07	11.34	接合資料⑩
717	フレイク集中範囲1	2c	9	71.31	45.89	17.71	37.01	接合資料⑩
718	フレイク集中範囲1	2c	9	76.02	31.38	11.89	22.59	接合資料⑦
719	フレイク集中範囲1	2c	9	58.84	35.31	13.71	14.71	接合資料⑥
721	フレイク集中範囲1	2c	9	52.72	47.01	9.34	16.04	接合資料⑥
726	フレイク集中範囲1	2b	9	31.41	54.38	9.27	14.39	—
728	フレイク集中範囲1	2c	9	31.56	41.09	14.76	11.04	—
729	フレイク集中範囲1	2c	9	46.03	39.07	6.88	7.76	—
730	フレイク集中範囲1	2c	9	37.15	18.74	7.28	3.35	—
731	フレイク集中範囲1	2c	9	33.25	28.75	6.22	4.63	—
732	フレイク集中範囲1	2c	9	30.99	22.09	6.41	3.13	—
733	フレイク集中範囲1	2c	9	35.40	28.90	13.66	9.77	—
734	フレイク集中範囲1	3c	9	46.03	52.10	11.08	18.60	—
735	フレイク集中範囲1	3c	9	47.14	23.77	11.65	9.56	—
736	フレイク集中範囲1	4a	9	46.08	26.05	14.04	14.46	—
737	フレイク集中範囲1	3c	9	30.48	39.17	6.62	6.39	—
738	フレイク集中範囲1	4a	9	37.63	23.80	11.35	8.24	—
739	フレイク集中範囲1	4a	9	39.63	36.75	15.32	9.89	—
740	フレイク集中範囲1	4a	9	43.51	37.65	20.75	22.36	—
741	フレイク集中範囲1	3c	9	52.88	35.79	9.40	10.75	—
800	フレイク集中範囲1	2b	7	46.51	29.61	9.77	8.65	—
801	フレイク集中範囲1	2b	7	31.88	34.33	8.51	8.97	—
802	フレイク集中範囲1	2b	7	38.43	31.58	8.36	9.70	—
803	フレイク集中範囲1	2b	7	36.20	24.17	8.93	6.23	—
833	フレイク集中範囲1	4a	10	29.32	25.44	8.47	5.83	—
836	フレイク集中範囲1	2c	9	58.84	28.64	6.58	9.71	接合資料⑥
742	フレイク集中範囲2	Uフレ(1b)	24	24.48	20.35	9.17	3.20	—
743	フレイク集中範囲2	4a	24	16.05	27.14	6.63	1.53	接合資料⑭
744	フレイク集中範囲2	2c	24	29.40	36.12	12.86	12.85	接合資料⑭
745	フレイク集中範囲2	4a	24	40.63	32.04	7.23	6.15	接合資料⑬
746	フレイク集中範囲2	4a	24	33.66	21.59	7.77	4.96	接合資料⑬

掲載番号	出土位置・層位	分類	母岩	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
747	フレイク集中範囲2	1b	24	44.83	52.85	15.24	20.10	—
748	フレイク集中範囲2	1b	24	39.77	40.68	13.05	14.51	—
749	フレイク集中範囲2	1c	24	31.85	34.83	10.68	10.96	—
750	フレイク集中範囲2	1c	24	26.63	29.45	12.51	9.65	—
751	フレイク集中範囲2	2b	24	29.68	40.71	9.68	5.36	—
752	フレイク集中範囲2	2b	24	21.46	34.37	8.31	3.40	—
753	フレイク集中範囲2	2b	24	28.47	23.44	10.02	3.11	—
754	フレイク集中範囲2	2c	24	30.74	44.55	10.92	13.12	—
755	フレイク集中範囲2	3c	24	31.06	27.90	9.67	6.17	—
756	フレイク集中範囲2	4a	24	54.00	36.74	12.50	17.07	—
757	フレイク集中範囲2	4a	24	26.63	16.57	7.64	2.69	—
758	フレイク集中範囲2	4a	24	39.03	30.32	20.69	16.08	—
759	フレイク集中範囲2	1b	31	32.54	27.53	12.55	8.59	—
760	フレイク集中範囲2	1b	31	41.85	34.75	12.16	13.58	—
761	フレイク集中範囲2	1c	31	26.61	26.65	5.98	2.65	—
762	フレイク集中範囲2	1c	31	26.34	33.67	8.13	6.13	—
763	フレイク集中範囲2	2b	31	37.37	35.46	8.22	9.53	—
764	フレイク集中範囲2	2c	31	24.90	24.42	4.66	1.70	—
765	フレイク集中範囲2	3b	31	20.49	34.06	10.14	6.14	—
766	フレイク集中範囲2	3c	31	37.53	44.46	14.57	15.66	—
767	フレイク集中範囲2	4b	38	52.34	42.30	13.15	24.80	—
768	フレイク集中範囲2	1b	38	33.46	32.09	9.86	8.83	—
769	フレイク集中範囲2	1b	38	21.86	28.28	7.62	3.75	—
770	フレイク集中範囲2	1b	38	30.87	42.58	12.45	10.89	—
771	フレイク集中範囲2	1b	38	35.75	31.81	8.01	7.85	—
772	フレイク集中範囲2	1b	38	32.94	33.97	10.65	5.55	—
773	フレイク集中範囲2	2b	38	50.99	36.57	12.33	14.66	—
774	フレイク集中範囲2	3c	38	33.78	39.55	9.09	6.09	—
775	フレイク集中範囲2	2b	33	42.11	33.99	15.89	13.21	接合資料⑤
776	フレイク集中範囲2	2b	33	54.34	57.86	19.15	30.89	接合資料⑤
777	フレイク集中範囲2	2b	33	49.84	55.95	15.96	37.33	—

掲載番号	出土位置・層位	分類	母岩	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
778	フレイク集中範囲2	2b	33	65.78	37.02	10.91	24.85	—
779	フレイク集中範囲2	2b	33	41.72	35.52	13.44	13.52	—
780	フレイク集中範囲2	2b	33	43.54	23.76	5.99	3.83	—
781	フレイク集中範囲2	2b	33	61.01	41.68	18.93	31.61	—
782	フレイク集中範囲2	2c	33	38.15	48.42	13.34	13.67	—
794	フレイク集中範囲2	2c	26	27.28	39.31	10.86	7.59	—
796	フレイク集中範囲2	1b	26	47.69	46.01	11.66	20.49	—
797	フレイク集中範囲2	1b	26	24.99	32.77	11.75	5.93	—
798	フレイク集中範囲2	1c	26	25.60	28.01	5.95	3.51	—
799	フレイク集中範囲2	2b	26	45.43	21.48	6.66	6.42	—
804	フレイク集中範囲2	1b	28	29.39	45.46	8.29	6.38	接合資料⑪
805	フレイク集中範囲2	1c	28	38.40	35.58	10.39	10.15	接合資料⑪
806	フレイク集中範囲2	3c	28	22.60	34.78	7.67	2.67	—
807	フレイク集中範囲2	1c	28	27.16	23.50	5.54	1.05	—
808	フレイク集中範囲2	2c	34	40.66	40.10	11.67	9.61	—
809	フレイク集中範囲2	2c	34	33.21	35.98	10.10	8.47	—
810	フレイク集中範囲2	3b	34	34.12	35.80	11.07	10.17	—
811	フレイク集中範囲2	4a	34	28.06	24.33	7.67	3.62	—
812	フレイク集中範囲2	3b	29	26.91	32.36	8.26	3.31	—
813	フレイク集中範囲2	3c	29	39.29	56.35	9.76	9.36	—
814	フレイク集中範囲2	2c	27	25.82	39.54	8.09	7.41	—
815	フレイク集中範囲2	4a	29	17.49	14.66	4.15	0.75	—
818	フレイク集中範囲2	2c	27	25.21	23.05	6.02	2.33	—
819	フレイク集中範囲2	4a	27	32.94	20.51	8.90	3.49	—
821	フレイク集中範囲2	4a	29	32.75	32.36	14.54	10.35	—
822	フレイク集中範囲2	2b	30	40.10	47.09	9.95	10.55	—
823	フレイク集中範囲2	2b	30	45.70	23.40	9.79	6.77	—
824	フレイク集中範囲2	4a	30	27.72	21.59	10.28	5.25	—
825	フレイク集中範囲2	1b	32	31.89	53.35	16.60	16.07	—
826	フレイク集中範囲2	1b	32	32.84	22.64	7.34	4.64	—
827	フレイク集中範囲2	1b	35	37.30	30.53	6.06	5.54	—

掲載番号	出土位置・層位	分類	母岩	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
828	フレイク集中範囲2	3c	32	31.57	24.35	5.39	1.88	—
829	フレイク集中範囲2	3b	35	41.89	37.50	8.21	8.73	—
830	フレイク集中範囲2	4a	35	35.12	20.02	9.11	5.58	—
831	フレイク集中範囲2	3c	23	31.88	45.43	13.51	9.77	接合資料⑫
832	フレイク集中範囲2	3c	23	33.56	31.89	12.80	8.49	接合資料⑫
837	フレイク集中範囲2	4a	25	50.58	20.88	10.36	6.14	—
838	フレイク集中範囲2	2b	36	32.58	31.80	7.13	5.66	—
839	フレイク集中範囲2	2b	37	42.73	31.21	9.64	7.23	—
720	フレイク集中範囲3	2c	9	59.29	28.62	12.65	12.85	接合資料⑦
722	フレイク集中範囲3	4a	9	46.38	32.86	6.10	7.45	接合資料⑦
723	フレイク集中範囲3	2c	9	30.33	28.33	9.83	4.62	接合資料⑦
724	フレイク集中範囲3	2c	9	34.93	33.57	9.68	4.00	接合資料⑨
725	フレイク集中範囲3	2c	9	54.95	29.20	9.96	9.17	接合資料⑨
727	フレイク集中範囲3	2c	9	33.88	28.40	7.48	3.62	接合資料⑨
783	フレイク集中範囲3	4a	2	30.20	43.76	10.83	14.16	接合資料⑧
784	フレイク集中範囲3	1b	2	36.19	40.94	9.87	15.97	接合資料⑧
785	フレイク集中範囲3	4a	2	34.24	57.24	13.70	22.68	—
786	フレイク集中範囲3	4a	2	51.86	23.27	10.62	11.46	接合資料⑧
787	フレイク集中範囲3	1c	2	22.34	38.18	12.29	7.92	接合資料⑧
788	フレイク集中範囲3	4a	2	23.44	35.05	8.46	5.03	—
789	フレイク集中範囲3	1b	2	31.35	38.41	11.86	11.98	—
790	フレイク集中範囲3	石鏃未成品	3	33.94	25.26	8.70	5.06	—
791	フレイク集中範囲3	Uフレ(2c)	3	32.54	41.65	9.73	8.65	—
792	フレイク集中範囲3	1c	3	30.60	39.51	14.22	11.04	—
793	フレイク集中範囲3	4a	3	34.76	26.97	12.86	6.09	—
795	フレイク集中範囲3	4b	3	29.31	20.80	7.81	3.81	—
816	フレイク集中範囲3	3c	1	22.52	24.11	5.88	2.23	—
817	フレイク集中範囲3	1c	1	19.71	23.91	5.92	1.91	—
820	フレイク集中範囲3	石鏃未成品	1	23.22	17.34	6.47	2.03	—
834	フレイク集中範囲3	Uフレ(4a)	17	41.36	15.77	6.83	3.13	—
835	フレイク集中範囲3	Rフレ(2c)	16	22.45	35.16	10.00	6.06	—

傾向は見受けられない。本遺構の剥片群は母岩、形態、大きさ、分類、どれをみても規則性が全くないと言える。また742は１ｂ類を素材とするＵフレイクで、縁辺に微細剥離が見受けられるが、製品ではない。このような石器類が混じる点は前述の２例と異なる。

接合資料は４個の母岩（23・24・28・33）で５点（第８図接合資料⑤・⑪・⑫・⑬・⑭）見受けられる。接合資料⑤は母岩33の２ｂ類どうしで打面が接合することから同一方向から加撃し連続的に剥離されたと推測する。背面の自然面の有無に違いはあるが、フレイク集中範囲１の接合資料⑥・⑩と類似する剥離作業の在り方をする。しかし他は接合資料⑤とは別の様相を呈しており、接合資料⑪（母岩28）は１ｃ類と３ｃ類が接合、接合資料⑫（母岩23）も１ｃ類と３ｃ類の接合だが、打点が同一方向ではないので、剥片の属性と同様にその在り方に規格性は薄いと言える。

⑷　33号住居跡　「フレイク集中範囲３」（第９・10図、第３表）

西壁際に位置する柱穴１の脇床面上で確認した。

剥片は18点とＵ・Ｒフレイク３点、石鏃失敗品２点で、母岩は６個（母岩１・２・３・９・16・17）確認した。６個の母岩の色調をみてみると黒色基調、黄褐色基調、灰色基調とばらつきがある。母岩別に剥片点数をみると、母岩２は７点、母岩９は６点でこの２個が拮抗している。言い換えれば、

本遺構ではこの２個の母岩が構成する剥片の主体となっている。なお母岩９はフレイク集中範囲１でみられた剥片の母岩でもあり、１個の母岩が２箇所の剥片集中遺構で見受けられている。剥片の平面形態は縦長が多い（720・725・786など）が、横長も一定数見受けられ（783～785）、他の遺構と同様、意識的に縦長の剥片を製作しているとは断言できない。大きさでは長幅合わせて2.0～4.0㎝の範囲に集中する傾向がある。

分類は２ｃ類が多く、その点はフレイク集中範囲１の剥片の在り方と類似する。しかし次いで多いのは１ｂ類、１ｃ類であり、自然面打面の剥片がやや目立つ点はフレイク集中範囲１と異なる。

前述の通りＵ・Ｒフレイク（790・834・835）と石鏃失敗品（790・820）があり、石鏃失敗品では790が母岩３で、820は母岩１であり、どちらも主体となる母岩２・９から製作されたものではない。母岩３は他にＵフレイク１点、剥片３点が出土しているが分類も異なり、また接合しなかった。ＵフレイクとＲフレイクの母岩は母岩16・17もあるが、この母岩は剥片がなく、Ｕ・Ｒフレイクのみである。

接合資料は３点（第９・10図接合資料⑦・⑧・⑨）である。接合資料⑦・⑨は母岩９で、２ｃ類・４ｂ類が接合する。同じ打面から同一方向に加撃し、連続的に縦長の剥片を剥離している。前述のフレイク集中範囲１の接合資料⑥・⑩も同じ母岩９で、剥片の形態（接合した剥片の多くが縦長である点）分類が共通する。したがって、これらの接合資料は、同一作業で剥離した一連の剥片群と考えられ、それが２箇所の剥片集中遺構に分配されたことになる。接合資料⑧は母岩２で、同一方向から連続的に剥離作業を行っている。接合資料⑦・⑨と同様にもみえるが、自然面を打面とする点や、剥片の形態が必ずしも縦長でなく、やや不揃いな点等が異なる。

⑸　34号住居跡　炉周辺（第11図、第４表）

大木８ｂ式期。残存部が狭く、平面形や床面規模など不明な点が多いが、３基の石囲炉を伴う竪穴住居で、３基の炉のうち中央の石囲炉の北側に隣接する床面上で確認した。剥片の出土状態は第11図上写真で示した通りで、剥片は雑然と重なった状態で出土している。

剥片14点とＲフレイク１点で、母岩は６個（母岩12・15・19・20・21・22）確認した。母岩の色調は灰色基調が多いものの、黄褐色基調や黒色基調もあり、一様ではない。剥片母岩別に点数をみてみると、母岩20（４点）と母岩22（４点）とが全体の大半を占めている。なお母岩22は32号住居跡の剥片集中遺構の剥片にも見受けられた母岩である。

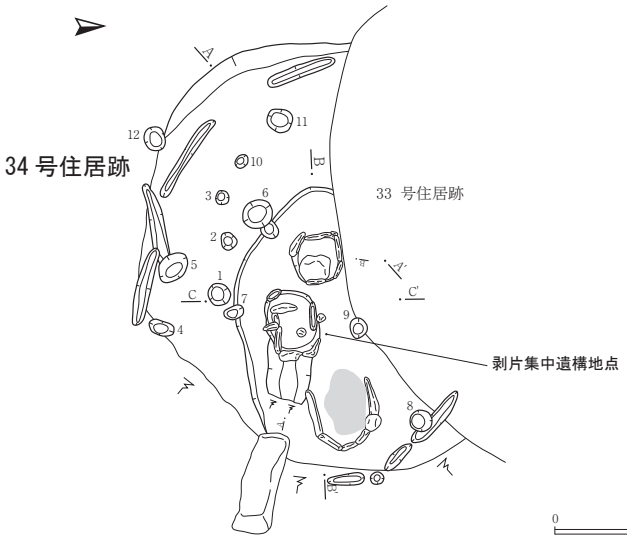
分類は１ｂ類が多く（10点）、他は１ｃ類・２ｂ類・４ａ類が１、２点ずつである。見方を変えると、自然面の残る剥片（１ｂ類・１ｃ類・２ｂ類・４ａ類）が多く、この点は同時期の32号住居跡の剥片集中遺構の在り方と類似する。形態では縦長で、かつ歪なものが多い。大きさは長幅合わせて3.0～5.0㎝の範囲に含まれるものが多いが、この範囲から外れているものも少なくない。

接合資料は４点（第11図接合資料①・②・④・⑮）で、前述の通り、接合資料①・②・④は32号住居跡の剥片と接合する。接合資料⑮は母岩21で、１ｂ類２点が接合する。同じ打面から同一方向に加撃し、連続的に剥離しており、この在り方は接合資料①・②・④と共通している。したがって32・34号両住居跡の剥片集中遺構は同時期存在と考えられ、また共通する複数個の母岩で同一の技法を用いた剥離作業が行われている。

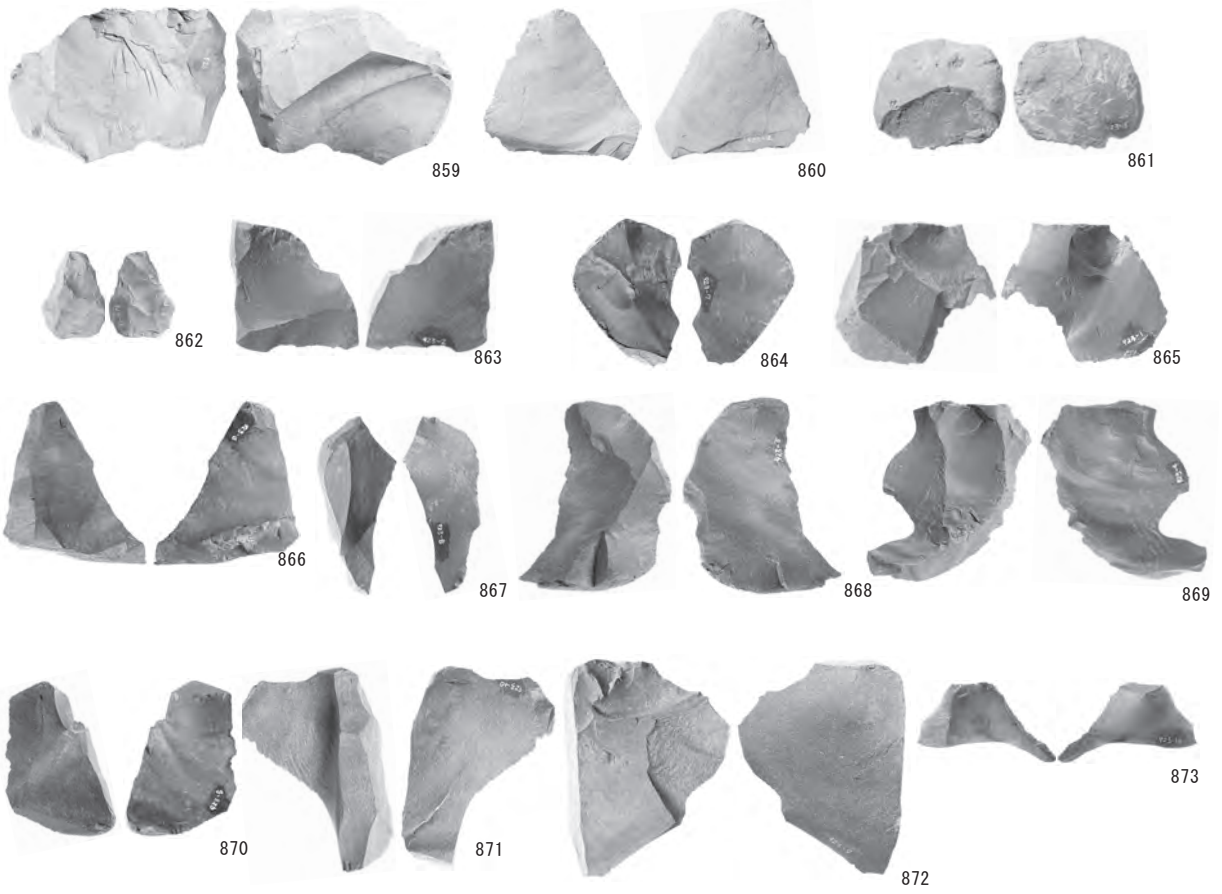
⑹　54号住居跡　埋土中（第12図、第５表）

大木10式期。5.5×6.0m の楕円形で、複式炉を伴う竪穴住居で埋土中（下位）で確認した。したがって、この剥片集中遺構は住居廃絶後のものと推測される。

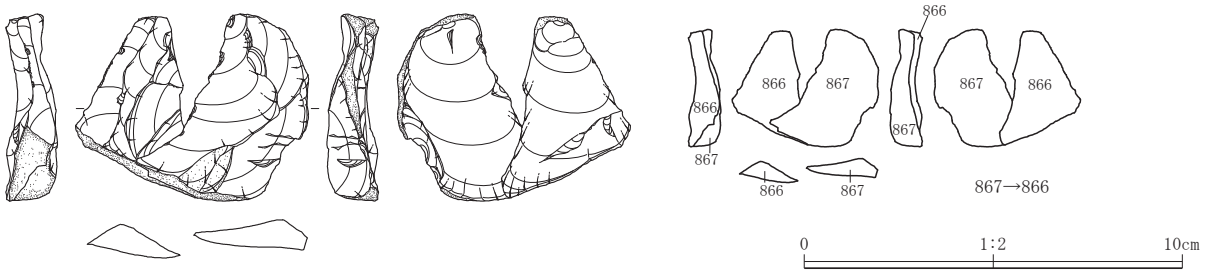
剥片は18点で、母岩は３個（母岩11・13・18）確認した。３個の母岩の色調はもっとも多い母岩11



剥片集中遺構地点　剥片出土状態



接合資料⑮



第 11 図　34 号住居跡

第４表　34 号住居跡　剥片集中遺構　剥片一覧

掲載番号	分類	母岩	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
859	Rフレ (4b)	20	40.97	59.33	17.86	24.12	−
860	1c	20	38.36	41.10	6.52	8.52	−
861	1b	20	35.09	29.51	8.90	7.92	−
862	4d	20	23.12	17.23	5.10	1.73	−
863	1b	22	31.79	46.18	10.49	12.54	接合資料④
864	1b	22	38.05	28.54	10.44	9.96	接合資料①
865	1b	22	37.32	41.78	11.53	11.15	−
866	1b	21	40.56	37.89	11.28	9.97	接合資料⑮
867	4a	22	46.51	21.01	11.53	6.46	−
868	1b	21	49.71	40.63	12.52	15.02	接合資料⑮
869	2b	21	47.67	39.04	5.60	8.84	−
870	1b	15	41.81	28.53	9.57	9.53	−
871	1b	19	35.90	53.61	11.35	12.17	−
872	1b	19	56.83	44.54	13.96	26.44	接合資料②
873	1b	12	20.79	36.67	5.65	1.79	−

が灰黄褐色であるので、それに偏る。剥片点数を母岩別にみると、母岩11が最も多く（11点）、全体の半数以上を占める。それに次ぐ母岩18は６点、母岩13に至っては１点のみである。

分類は２c類が最も多いが、５点を数えるに過ぎず、他に１b類・１c類・２b類また４a類・４b類が２、３点ずつとややばらつきが目立つ。見方を変えれば、最も多い２c類と４b類を合わせて、自然面の残らない剥片が多いと言える。平面形態は縦長で歪なものが多いが、全てがそうではないので規則性は感じられない。1201は横長で、他と比べても大型の剥片である。

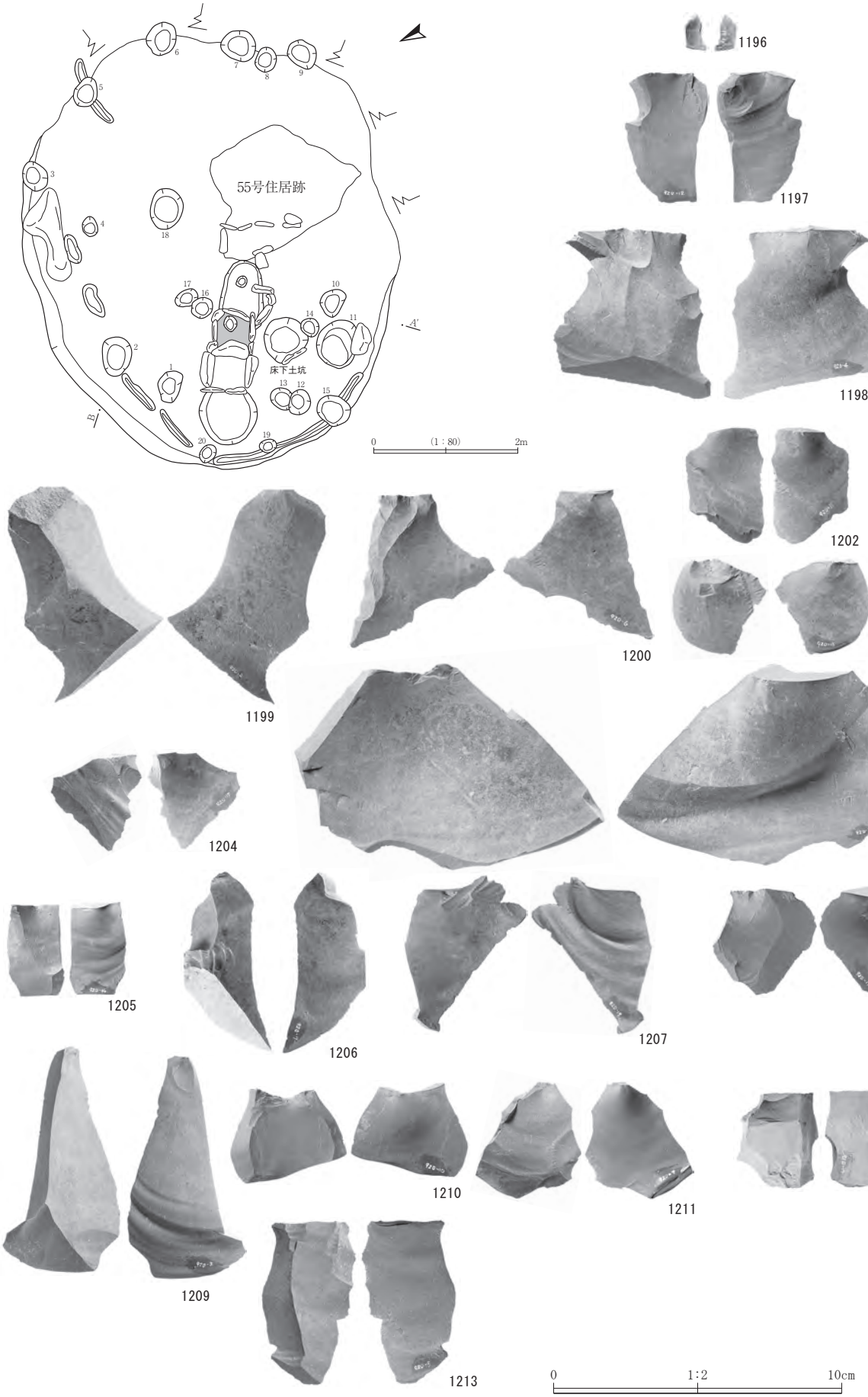
接合資料は１点（第12図接合資料⑯）で、分類で最も多かった２c類ではなく、１c類２点が接している。また両者は他の接合資料の多くに見られたように、同一方向から打撃を加えて、剥離したものではなく、やや位置がずれている。

４．まとめ

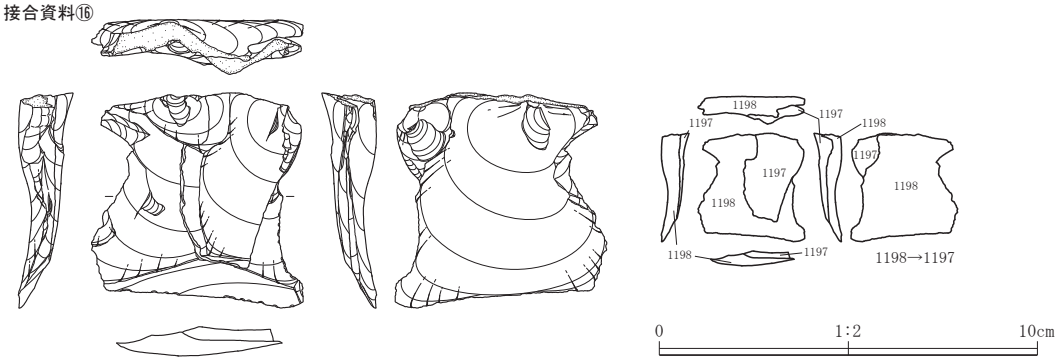
以上、各剥片集中遺構についてみてきた。次に、これらの遺構を時期ごとにまとめて概観した上で、中野遺跡で確認された、これらの剥片集中遺構の性格について検討する。

大木８b 式期に比定されるのは32号住居跡と34号住居跡の剥片集中遺構である。両遺構は主体となる母岩が母岩21・22である点、自然面が残る剥片が多い点、また両遺構の剥片が接合している（接合資料①・②・④）点から、同時期存在と推定できる。その上で、出土状態をみてみると、32号住居跡の剥片集中遺構は住居壁溝内で検出し、一方、34号住居跡の剥片集中遺構は住居床面で検出するという違いがある。一見すると34号住居で石器製作を行い、32号住居跡内に剥片が廃棄されたとも考えられる。ただし両遺構の剥片は共通点が多く（主体となる母岩、形態分類）、したがって、両遺構の剥片は同じ性格を持つものと考えられる。そうなればむしろ、33号住居跡の剥片集中遺構も32号住居跡と同様、石器製作後に残った剥片を廃棄したものである可能性が高い。

大木10式期に比定される剥片集中遺構は、33号・54号住居跡で、特に33号住居跡では床面上で３箇所の剥片集中遺構が確認された。フレイク集中範囲１とフレイク集中範囲３は主体となる母岩が共通（母岩９）する点、自然面の残らない剥片が多い点、また両遺構の剥片が接合している点から、両遺構は同時期存在と考えられる。両遺構の剥片を前述の32・34号住居跡の剥片と比較してみると、打面の状態（自然面・単一剥離面）など属性に共通性があり、同様な性格ではないかと推測する。また加えて32・34号住居跡の剥片集中遺構とフレイク集中範囲３からは２点の石鏃失敗品、R・U フレイクが出土している。完成品ではない石器が混じる点も含めると、フレイク集中範囲１・３は石器製作の痕跡というより、住居内に廃棄された剥片を集めたものの可能性が高い。またフレイク集中範囲２は、剥片点数が75点と最も多いが、母岩も16個で多く、母岩毎の剥片点数はむしろ少ない。剥片の属性をみても、大きさ・形態・分類どれもばらつきが目立ち、見つかった剥片集中遺構の中でも、剥片の属



第 12 図　54 号住居跡 (1)



第 13 図　54 号住居跡 (2)

第５表　54 号住居跡　剥片集中遺構　剥片一覧

掲載番号	分類	母岩	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
1196	4a	11	11.05	6.00	1.00	2.00	−
1197	1c	11	58.20	57.00	10.02	20.81	接合資料⑯
1198	1c	11	39.82	43.59	6.70	4.42	接合資料⑯
1199	2b	11	73.73	48.37	10.89	23.09	−
1200	2c	11	52.34	54.13	5.84	6.09	−
1201	2b	11	68.78	107.07	18.20	75.98	−
1202	2c	11	40.17	27.29	6.18	4.59	−
1203	2c	11	33.65	33.15	5.53	2.53	−
1204	4b	11	31.36	32.48	6.33	2.84	−

掲載番号	分類	母岩	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
1205	2c	18	32.31	20.74	6.92	2.58	−
1206	4b	11	63.12	30.70	9.12	9.06	−
1207	4b	11	54.12	31.92	5.19	6.22	−
1208	1b	18	37.25	34.71	9.05	5.23	−
1209	3c	18	77.20	40.53	15.04	23.80	−
1210	2c	18	32.27	39.15	7.07	6.31	−
1211	3c	18	41.78	32.04	5.25	5.09	−
1212	4c	13	33.00	28.70	10.66	8.34	−
1213	4b	18	56.71	31.36	4.91	7.53	−

性に最も統一感がない。したがって石器製作の痕跡とは考えがたい。もう一つの住居である、54号住居跡の剥片集中遺構は埋土中（下位）で検出しており、元々、住居に伴う石器製作とは考えられない。出土した剥片のうち、母岩11と18の剥片を比較しても、両者は形態分類にばらつきがあり、石器製作用の素材とは考えにくい。

以上のように、中野遺跡で見つかった剥片集中遺構は２時期に大別することができるが、どちらの時期も、石器製作のために貯蔵された素材剥片と考えるには根拠が薄く、むしろ石器製作後に残った剥片を廃棄したものの可能性が高い。

なお第６表は各遺構出土の剥片を形態分類毎に集計したものである。どの剥片集中遺構においても石器製作時に多く排出されると考えられる３ａ～３ｃ類が少ない。この点について、第６表下に示した遺跡全体から出土した剥片の形態分類別点数と比べると、３ａ～３ｃ類が少ないのは、剥片集中遺構に限ったことではなく、遺跡全体に言えることでもあることが分かる。また中野遺跡では、石核が６点しか出土していない（第６表右下）。剥片集中遺構の母岩だけでも34個あることと比較しても、これは非常に少ない。この２つの点から、中野遺跡における石器製作では、排出した剥片や石核の多くは集落（遺跡）の外へと廃棄（搬出）していた可能性が高いと考える。そうなると、住居内の剥片集中遺構に残された剥片には、ただ廃棄されただけではなく、別の意味合いがある可能性もあり、疑問が残ってしまった（註７）。

中野遺跡で確認された剥片集中遺構は以上のように、石器製作後に残った剥片を廃棄したものの可能性が高いが、この点、必ずしも他の遺跡の剥片集中遺構も該当するとは限らない。竪穴住居の床面を掘り込み、剥片を貯蔵する例（例えば、盛岡市湯沢遺跡（岩埋文1978）、大船渡市長谷堂貝塚（岩埋文2001）、二戸市吉田館（岩埋文2008）など）や、出土した剥片が単一母岩で、接合状態がかなりよく、剥離作業が復元できるものが一括して出土する例（花巻市（旧石鳥谷町）高畑遺跡（岩手県教

第６表　分類別剥片集計表

出土位置/分類		1a類	1b類	1c類	2a類	2b類	2c類	3a類	3b類	3c類	4a類	4b類	合計	その他	石核
32号住居跡（大木8b式期）	埋土中出土			1		1	2			1	5	4	14		
	剥片集中遺構		2	7			2			2	2	2	17		
33号住居跡（大木10式期）	埋土中出土		1	7	3	5	17			6	6	19	64		3
	フレイク集中範囲1					5	11			4	2	4	26		
	フレイク集中範囲2		14	6		17	10		4	9	10	3	73	2	
	フレイク集中範囲3		2	3			5			1	6	1	18	5	
34号住居跡（大木8b式期）	埋土中出土		2	4	1	3	15		1	1	4	18	49		1
	剥片集中遺構		10	1		1					1	1	14	1	
54号住居跡（大木10式期）	埋土中出土		1	5	1	4	20			1	13	29	74		
	剥片集中遺構		1			3	5			3	1	5	18		
中野遺跡全体から出土した剥片		2	68	125	11	116	444	2	18	89	406	574	1855		6

育委員会1980）など）は、中野遺跡の剥片集中遺構とは別の性格を有する可能性が考えられる。また秋田県では、主に石匙の素材として剥片（石刃）が貯蔵されるという指摘もある（吉川2012）。このような事例との比較については時期差や地域差があるのかどうかも含め、今後の課題とする。

註

⑴　中野遺跡報告書はすでに刊行しており（岩埋文2015）、剥片集中遺構出土の剥片類は全点掲載している。しかし、刊行後、改めて見直したところ、観察表に相当量の誤植がある事が分かった。これは整理・執筆責任者である筆者の責任である。本稿で改めて、修正した観察表を提示したい。なお、本稿で扱う遺物の遺物番号は全て報告書（岩埋文2015）での掲載番号を採用している。また剥片については、「フレイク」とも呼称され、筆者は調査報告書（岩埋文2015）で「フレイク」の名称を用いた。ただし本稿では検討する「剥片集中遺構」という名称との兼ね合いを考え、紛らわしくならないように「剥片」の名前を用いる。くどいようだが本稿で検討する「剥片」は中野遺跡発掘調査報告書で「フレイク」とされている遺物のことを指している。

⑵　当センター村木敬氏の協力を得た。なお、母岩番号は報告書に記した番号を利用しており、そのため、本稿では番号が飛んでいる。

⑶　実際には38個の母岩が確認されているが、母岩４・５・６・８については本稿では触れない遺構外の剥片集中遺構の剥片群の母岩であるので、今回は割愛した。これらの詳細は岩埋文2015を参照。

⑷　分類項目の設定に際し、新潟県元屋敷遺跡の剥片整理方法を参考にした（新潟県朝日村教育委員会2002）。

⑹　出土した剥片周辺は掘り込みなどを有していないので、これらは遺構（付属施設）とするか判断に迷い、調査の際は「フレイク（剥片）集中範囲」という仮称を用い、そのまま報告書内でも使用することとした。

⑺　大場正善氏は山形県高瀬山遺跡 SX241に残された剥片（石器製作残滓）について、「意図的に SX241に溜めていた」可能性を示唆し、その理由として「コドモ」が小形石器を製作する練習用に残しておいたのではないかと指摘する（大場2014）。大場氏は詳細な石器観察の上でこのような結論に達しており、本稿はそこまで至っていないので、同等に考えることはできないが、中野遺跡の剥片集中遺構の剥片にもこのような性格があった可能性が全くないとは言い切れない。

参考文献

阿部勝則　2003「岩手県における縄文時代中期の剥片集中遺構について」『紀要ＸＸⅡ』（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県教育委員会　1980『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅴ－』（岩手県文化財調査報告書第49集）

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター関連

1978『湯沢遺跡（都南村湯沢遺跡）』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第２集）

2004『長谷堂貝塚発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第434集）

2008『吉田館遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第520集）

2015『中野遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第636集）

大場正善　2014「高瀬山遺跡縄文中期末葉の石器資料集積遺構出土資料の技術学分析」『研究紀要』第６号（山形県埋蔵文化財センター）

吉川耕太郎　2012「縄文時代の石材資源開発－秋田県域を事例に」『東北地方における中期／後期変動期　４・３・Ka イベントに関する考古学現象①』予稿集

東北地方・縄文晩期の土偶(6)

－後期末～晩期初頭を主体とする北部三県の遺跡・北部三県以外の資料・(4)(5)の補遺－

金　子　昭　彦

東北地方･縄文時代晩期土偶のデータ･ベース化の一環として､今回は後期末～晩期初頭を主体とする北部三県の遺跡出土土偶を扱い（第８表)、次いで北部三県以外の資料（第９～11表)､最後に本稿(4)(5)の補遺として北部三県の晩期前葉以降の土偶（第12表）を扱った。今回で収集はいったん終了だが、組成・地域差を検討できるまでは至らず、広範囲点在土偶など、二、三注目すべき点を挙げるにとどまった（小括)。

１．はじめに

本稿は、前稿(5)の続きで、北部三県の後期末～晩期初頭を扱う予定であった。今年度岩手県立博物館に配置転換になり、2007年発行第214集以降埋蔵文化財センターに送付されてこなかった宮城県教育委員会の報告書が配架されていることに気づいた。そこで、北部三県以外の道県についても、『土偶とその情報』研究会収集資料以外のものを集め表にすることにした。ただし、岩手県外の市町村発行報告書には特に遺漏が多いものと思われ、御教示いただければ幸いである。また、本稿(4)で割愛した寺下遺跡の報告書等が入手できたので、補遺として北部三県晩期前葉以降の資料を扱った。

２．表の見方（補遺）

形態名は、原則として金子（2003）による。大型遮光器土偶に系譜を引く大洞Ｃ２式以降の土偶をこれまで大型遮光器系列と呼称したが、その後の検討で大洞Ｃ２式第Ⅲ段階古期までを大型遮光変土偶（略称“大遮変”)、第Ⅲ段階新期以降を大型逆出形土偶（略称“大逆出”）と分類したので（金子2015d)、今後このように呼称する。これまで、金子（2003）に定義した形態の変異と捉えられるものは全て“○○変”土偶と呼んでいたが、“大遮変”を任命したことにより、もう少し厳密に、“○○変”は、本来の分布圏の中での変異に限り、分布圏の外に見られる変異、つまり○○系と呼称されるものより変異が大きく判断がつかないものは、“類○○”土偶と呼ぶことにする。

時期区分。後期末については、これまで高柳（小林）圭一氏の瘤付土器編年を使用してきたが、より東北北部の地域性に準拠した中門亮太氏の瘤付土器編年が発表され（2013)、今回はこの辺りの時期に焦点を当てるので、北部三県については氏の編年を使用することにした。表記は瘤○期とする。

記載要綱は、(1)～(5)と同じである。大綱は(1)冒頭に記し、(2)～(5)冒頭で補足している。なお、資料は、明らかに当該期から外れる場合は表から除外した。また、報告書の記載を参考にできなかったり不十分であったりした場合には網掛けしている。

掲載箇所欄で文献名を引用する際、発行機関・発行年（西暦）で示しているが、発行年は下二桁のみを記し、発行機関は、次のように略称している。○○県の教育委員会→県教、○○県の埋蔵文化財センター→県埋､○○県立博物館（青森県立郷土館含む）→県博､○○市町村の教育委員会→○○（市町村名)、それ以外の機関→機関名の最初の二文字（財団法人等は除いて)。ただし、国立歴史民俗博物館は歴博と略した。

図番号は、通しで示されている場合には､「○図△」の「○図」は原則として省略した。また、そうでなくても枠をはみ出す場合は「図」を省略し、特に北海道埋蔵文化財センターの報告書は図番号が長く、かなり簡略化せざるを得なかった（第11表)。

備考欄で類例を引用した際の数字は、本稿⑴～⑸の表番号（通しで付けている）である。

３．北部三県の後期末～晩期初頭以前を主体とする遺跡

今回の検討では、晩期初頭については、文様がなくても顔は比較的区別することができたが（高柳1987）、後期後葉と後期末の間は全く区別することはできず、後期後葉と考えて後期末の資料を割愛し、後期末と考えて後期後葉の資料を載せてしまっていると思われる。岩手県長倉Ⅰ遺跡の資料（第８表4114～4217）を扱う際途方に暮れたが、現時点の理解で何とか貫徹した。御寛恕を乞うとともに今後の検討で修正していきたい。

資料としては、青森県沖中遺跡の「赤ちゃん土偶」が注目される（第８表4101）。ほとんどの土偶は大人の女性を表しているものと思われるが、この手のものが稀に表れるということは何を意味しているのであろうか。

さらに注目されるのが、岩手県釜石環状列石遺跡出土例である。慶應義塾大学の江坂輝弥氏の調査で出土した下半身と、表採され地元で保管されてきた上半身が、八木勝枝氏によって接合することがわかり腕以外復元された大型遮光器土偶の祖形（？）である（岩手県立博物館　2012：p.31）。現在は写真のみで本稿では割愛したが、来年度八幡平市教育委員会から報告書が刊行される予定である。なお、レプリカは岩手県立博物館で常設展示されている。

高さは24㎝あり、頭部は中空、胴部には磨消縄文が施され、大型遮光器土偶に近い特徴を持っており、眼は、粘土を貼付した上に沈線で描く貼付遮光器眼で、楕円形貼付から遮光器眼への漸移的変化を示している。黒い色調や全体的な質感もである。しかし、乳房は小さく、足も比較的大きく長い形で爪先に刻目で指を表現しており、大型遮光器土偶とは隔たりが大きく、次の段階で大型遮光器土偶に変化するとは思えない。全身中空という特徴も併せ、やはり大型遮光器土偶の成立は画期と捉えておいて良いのではないだろうか（金子　1997:p.395）。頭部の中空も、上下方向の輪積によるものではなく、小形の鉢等を転用したような状態で土器そのものに近い。内面は非常に丁寧に磨かれている。後期の伝統で（第８表4153ほか）膝には隆帯が巡り、縄文地に玉抱三叉文が施されている。胴部中央の割口を見ると、粘土板を三枚貼り合わせたような状態が看取できる。

何より興味深いのは、両足の裏に深い貫通孔を持ち、背中が極めて平らなことである。まるで何かに据え付けていたような形なのである。長期にわたる接触の結果としか考えられない磨滅痕が、片脚欠損重要文化財の青森県亀ヶ岡遺跡例（本稿⑵第２表1169）の後頭部、中から小型土偶が出土したことで有名な青森県宇鉄遺跡出土の大型遮光器土偶もどき（同1116）の臀部に認められている（金子2014b：p.134）。用途に関わる重要な特徴ではないだろうか。

秋田県北秋田市漆下遺跡（秋田県教育委員会　2011）では、後期末瘤付土器第Ⅳ段階までの土器は出土しているが、晩期の土器はなく、後期も前～後葉の初め（瘤付土器第Ⅰ段階）がほとんどで、それ以降は少ない。後期後葉の可能性のある土偶は出土しているが（第２分冊第246図20、第３分冊第305図11、第308図４、第310図５、第322図２、第343図18、第502図５）、後期末まで下るものは確認できなかったので、本稿では割愛した。

以下、第８表の補足をする。

・青森県弘前市野脇遺跡（第８表4032～4045）（青森県教育委員会　1993）

段ボール約200箱分の後期末～晩期末土器が出土しているが、近世集落跡の大幅な改変を受けている。中葉までの可能性もあるが、前葉を主体としているように見える。図と本文の記載と番号が合わず、本稿では図を優先し、本文の番号は、以下の間違いと判断した。３→４、４→３、７→14、８→13、

第８表　後期末～晩期初頭を主体とする北部三県の遺跡　（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位						残存率	現長cm	接合	付着物		つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡		掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腰	腕	脚				赤	黒				立地	評価		
4032	青	野脇	大遮	BC1？	△						小片	3				中空			沖積	拠？	県教93→123図1	眉～鼻貼付。目下刺突充填。口貫通
4033	青	野脇	後期以来？	前葉？	△						小片	4.9		△		中空口貫通			沖積	拠？	県教93→123図2	眉～鼻貼付。顔縁刺青様短沈線。耳貫通孔
4034	青	野脇	後期以来？	前葉？	△						小片	4.6				板状耳貫孔			沖積	拠？	県教93→123図3	眉～鼻貼付。後頭部沈線文様。遮光器眼？
4035	青	野脇	後期以来？	後後？	○						1/10	3.2				★頭頂深孔			沖積	拠？	県教93→123図4	耳沈線。後頭沈線文様。眉隆帯上縄文？
4036	青	野脇	大遮	B2？	△						小片	5.6				中空			沖積	拠？	県教93→123図5	顎下縄文。口貫通
4037	青	野脇	後期以来？	B1？？		○					3/10	6.9				「中空」？？	線		沖積	拠？	県教93→123図6	正中隆帯刺突。脇腹三叉文。板状？
4038	青	野脇	後期以来？	晩？		△			○		1/6	2.7							沖積	拠？	県教93→124図7	手との間沈線。手B突起？　小遮？？
4039	青	野脇	後期以来？	前葉？		△			△		1/7	3.4				「頭空？」			沖積	拠？	県教93→124図8	首下V沈線。蔓状沈線。竪縞
4040	青	野脇	小遮？？	前葉？		△					小片	3				「胴中空」			沖積	拠？	県教93→124図9	蔓状沈線
4041	青	野脇	後期以来？	～初？				？		？	不明	3.6					？		沖積	拠？	県教93→124図10	「腕」。写真無。パンツ区画？　足？境沈線
4042	青	野脇	小遮？	前葉？						△	小片	3.2				中空			沖積	拠？	県教93→124図11	「腕」。足？境沈線
4043	青	野脇	後期以来？	後後？		？			？		不明	5.4							沖積	拠？	県教93→124図12	脚？「腕」。肩との境段。腕との境刻目沈線
4044	青	野脇	後期以来？	後後？						△	小片	3.4							沖積	拠？	県教93→124図13	写真無。足境手づくね凹
4045	青	野脇	後期以来？	～後末				△		○	不明	3.7					？		沖積	拠？	県教93→124図14	パンツ区画？内条線。
4046	青	蔵主町	後期以来	B1古？	◯						小片	6.2		◯		（耳貫孔）			扇端	？	県教14→縄26	顔部位貼付。コーヒー豆目口。弧眉縄文
4047	青	石郷	後期以来	～後末	○						小片	4				中空			扇端	拠点	平賀79→62図1	眉～鼻3字隆帯。目短沈線。★口貫通
4048	青	石郷	後期以来	～後末	○						小片	4.9							扇端	拠点	平賀79→62図2	目眉接す。目口珈琲豆状。鼻耳未貫通孔
4049	青	石郷	後期以来	後前？	○						小片	3.8				★口貫通孔			扇端	拠点	平賀79→62図3	首長。丸顔。眉～鼻隆帯。目短沈線。口凹
4050	青	石郷	小遮？	C1古？	○						1/8	2		○					扇端	拠点	平賀79→62図4	頭T字状。頭頂刻目、周囲刺突。顔貼付
4051	青	石郷	後期以来	後後？	○						1/7	5.1							扇端	拠点	平賀79→62図5	頭頂尖る。眉～鼻Y字隆帯。摩耗。4058類例
4052	青	石郷	後期以来	後後？		○	◎	○	○		3/7	5.5				板状	◎		扇端	拠点	平賀79→62図7	乳～正中～臍Y字隆帯。パンツ区画。手反る
4053	青	石郷	後期以来	後後？	△	◎	◎	◎	◎	○	7/10	5.8			割口	板状			扇端	拠点	平賀79→62図8	首黒付。乳臍貼付。無文。腰幅広→後期中葉？
4054	青	石郷	後期以来	後後？		○					1/4	3.3				板状			扇端	拠点	平賀79→62図9	無文。後期中葉？
4055	青	石郷	後期以来	後後？			◎	○			1/5	4.8				板状	線		扇端	拠点	平賀79→62図10	正中～臍隆帯上刺突。背中入組文
4056	青	石郷	結髪？？	後後？		○	△				1/8	6.7					乳		扇端	拠点	平賀79→62図11	摩耗。無文。後期中葉？
4057	青	石郷	後期以来	？			？				小片	4.6							扇端	拠点	平賀79→62図13	腹？　無文。土偶？
4058	青	石郷	後期以来	～後末	◎	◎	◎	◎	○	○	4/5	11.5					▼		扇端	拠点	平賀79→63図15	▼短沈線。尖頭。眉～鼻T貼付。腹貼付上縄文
4059	青	石郷	後期以来	～後末		○	◎	◎		○	3/5	10.4					●		扇端	拠点	平賀79→63図16	正中刺突列パンツ区画▼短沈線。腹膨上刺突
4060	青	石郷	後期以来	～後末						△	不明	10							扇端	拠点	平賀79→63図17	沈線。刺突文多
4061	青	石郷	後期以来	～後末						△	不明	5.8							扇端	拠点	平賀79→63図18	無文。土偶？
4062	青	石郷	後期以来	～後末						？	不明	3.7							扇端	拠点	平賀79→63図19	無文。土器の脚？
4063	青	石郷	後期以来	～後末						△	小片	4							扇端	拠点	平賀79→63図20	無文
4064	青	石郷	後期以来	～後末						△	不明	3							扇端	拠点	平賀79→63図21	無文。土偶？
4065	青	石郷	後期以来	～後末						△	小片	4.1							扇端	拠点	平賀79→63図22	水平沈線。縄文帯
4066	青	川原平(1)	後期以来	瘤6？	○						1/10	8		○	割口	胴中空			低段	拠点	県教06→図18-1	頭頂把手、黒付。三叉文。縄文。註2
4067	青	川原平(1)	後期以来	～初						△	小片	1.6							低段	拠点	県教06→図18-2	爪先刻目3
4068	青	川原平(1)	後期以来	～初？	○						1/10	7		○	割口	耳貫通孔			低段	拠点	県教06→図18-3	弧状縄文眉近接貼付眼。口横三叉文。首黒付
4069	青	川原平(1)	小遮？	前半？				○		○	1/5	3.8				肛門未貫孔			低段	拠点	県教06→図18-4	下腹△隆帯。蔓状C字文。足との境沈線
4070	青	川原平(1)	後期以来	後後？	○						1/9	7.4		○		耳貫通孔			低段	拠点	県教06→図18-5	頭T状。後頭、後首瘤突起。眉縄文。口横三叉
4071	青	川原平(1)	結髪？	A1？						△	小片	3.2				中空			低段	拠点	県教06→図18-6	大逆出？　足楕円形。爪先刺突3
4072	青	川原平(2)	後期以来	後後？		○	○	△			2/5	10.4					線		低段	拠点	県教06→図18-7	乳間環状～正中線貼付上縄文。背磨消縄文
4073	青	滝端	大遮祖形	B1新	○						小片	6		○		中空			高段	拠点	階上00→64図1	貼付遮光器眼。口も。顎区画直線。眉と顎縄文
4074	青	滝端	大遮祖形	B1新？	△						小片	4.3		○		中空			高段	拠点	階上00→64図2	口貼付貫通。顎竹管刺突多。首一点鎖線沈線
4075	青	滝端	大遮	BC1？	△						小片	4.8				中空		註3	高段	拠点	階上00→64図3	B2？　後頭部山字文。頭頂B突起。縄文
4076	青	滝端	大遮	B2？	△						小片	7.5				中空			高段	拠点	階上00→64図4	★大。眉端トグロ巻。顎弧区画内刺突。縄文
4077	青	滝端	大遮祖？	B1	○						1/10	4.8							高段	拠点	階上00→64図5	貼付遮光器？　顎直線区画内縄文。後頭凹結髪
4078	青	滝端	小遮	BC2？	○						1/5	3.3			割口	頭のみ中空			高段	拠点	階上00→64図11	首に黒付。摩耗
4079	青	滝端	屈折B？？	C2古	○						1/7	3.6							高段	拠点	階上00→64図12	頭薄い。貼付眼。後頭角張った渦巻文？
4080	青	滝端	後期以来	後期末	○						1/10	4.3		○		耳貫通孔			高段	拠点	階上00→64図13	頭頂二股。後頭結髪貼付。縄文。口周三叉文
4081	青	滝端	小型無文	C2？	○	△			○		3/10	4.5				板状			高段	拠点	階上00→64図14	鼻大縦長貼付。眼貼付。類例1114。
4082	青	滝端	小型無文？	C2？？	◎	○			○		2/5	5.1				板状	乳		高段	拠点	階上00→64図15	乳大。正中線・側頭部小波状註4。眼短沈線
4083	青	滝端	後手出産	後後？	○	○	◎	○			2/3	8				分割塊技法	線		高段	拠点	階上00→65図19	首～正中Y隆帯。眉～鼻3隆帯。目口無？
4084	青	滝端	小遮	B2？			○	○		○	1/3	5.1			割口		パ		高段	拠点	階上00→65図21	胴長1系列。脚黒付。パ区画。腹入組三叉文
4085	青	滝端	小遮？？	B2？？			○	◎		○	2/5	3.8				胴肛門貫通	パ		高段	拠点	階上00→65図22	パンツ区画。腹刺突列。背中入組文？
4086	青	滝端	小遮	前葉			○	◎		△	3/10	4.3				中空	◎		高段	拠点	階上00→65図23	パンツ区画、▼短沈線。蔓文
4087	青	滝端	後期以来	B1新？		○	○				3/10	8.2				弧板。註5	線		高段	拠点	階上00→65図24	屈折A？　背中磨消縄文（入組文、三叉文）
4088	青	滝端	小遮？註6	C2？				◎			3/10	6				板状			高段	拠点	階上00→65図25	胴長2b系列？　表裏対弧状多重線
4089	青	滝端	屈折像A	後末？	○	◎	◎	◎	◎	○	9/10	5.3				首ソケット			高段	拠点	階上00→65図27	後頭突起。コーヒー豆眼。眉弧。浮彫文様
4090	青	滝端	後期以来	後末？		△			○		1/6	6					乳		高段	拠点	階上00→66図29	磨消縄文？　沈線一部三叉文。手先刻目4
4091	青	滝端	後期以来	後末？			○	◎		○	3/8	13.3					◎		高段	拠点	階上00→66図30	正中臍貼付。磨消縄文。沈線一部三叉文
4092	青	滝端	後期以来	瘤5？		○	△				1/3	7.3				首ソケット	◎		高段	拠点	階上00→66図33	乳大、正中隆帯。背中沈線間突列→時期
4093	青	滝端	大遮	BC1	△	△			○		1/10	9				中空			高段	拠点	階上00→66図35	磨消縄文。首点列。手先浅い刻目
4094	青	滝端	小遮	B2？		△			○		1/10	5.5			割口				高段	拠点	階上00→66図37	磨消縄文。三叉文。手先丸い。胴黒付
4095	青	滝端	大遮？？	前葉？						△	小片	10.5				中空			高段	拠点	階上00→66図38	★大。脚途中帯縄文。類例2340
4096	青	滝端	x字形	C2古	△	○	◎	◎	○	◎	7/10	10.8		○		小形板状			高段	拠点	階上00→66図40	帯状文系列。隆帯上刺突多。C字入組文
4097	青	滝端	x字形	C2中？	○	○	○		◎		2/3	5				小形板状	線		高段	拠点	階上00→66図41	正中線系列。正中刺突列。体部多重線。肩水平
4098	青	滝端	小型無文	C2	◎	○	◎	◎	◎	○	9/10	6.3				小形板状	線		高段	拠点	階上00→67図45	正中刺痕列、首にも。類例1114。クマ？
4099	青	沖中	屈折像A	B1	○	○					1/4	10.8				耳貫通孔			沖段	半？	三戸00→57図1	大遮祖形。類縄文。磨消縄文。入組三叉文
4100	青	沖中	屈折像A	B1古？		○	○		△		3/10	10							沖段	半？	三戸00→57図2	首下三叉文。磨消縄文。後首下円形突起
4101	青	沖中	★赤ちゃん	後末？	◎	◎	◎	◎	◎	◎	1	6.9				★尻未貫孔			沖段	半？	三戸00→57図4	★完形で出土。背中入組文。顔下未貫通孔
4102	青	沖中	後期以来	後末？						△	小片	4.3				中空			沖段	半？	三戸00→57図5	足と脚の境沈線。無文
4103	岩	上野場3	小遮系？	～A1					△		1/10	2.2							丘陵	小？	県埋06→243	手先十字印刻→類例1026。手境二重沈線
4104	岩	上野場3	後期以来？？	後期？						？	小片	3.9							丘陵	小？	県埋06→244	「右脚」。無文。大洞C2式期包含層出土。
4105	岩	上野場3	後期以来？	後後？						？	小片	4.8							丘陵	小？	県埋06→245	剥離片。「脚」。磨消縄文。同上包含層出土
4106	岩	上野場3	？	後晩期						△	小片	2.4				中空			丘陵	小？	県埋06→246	「右脚」。脚太く丸い。足倒卵形。爪先刻目
4107	岩	上野場3	結髪変？	A1？						△	1/10	4.6							丘陵	小？	県埋06→254	O脚。足境平行線
4108	岩	上野場3	？	後晩期						△	小片	2.8				中空			丘陵	小？	県埋06→255	足丸みを帯びた逆台形。爪先刻目4。雑
4109	岩	上野場3	？	後晩期						△	不明	3							丘陵	小？	県埋06→256	屈曲。無文。粗雑
4110	岩	上野場3	？	後前？					△		不明	3							丘陵	小？	県埋06→257	無文。手づくね風
4111	岩	上野場3	結髪変？	A1？				◎		○	1/5	6.3							丘陵	小？	県埋06→258	ガニマタ。無文。青森県観音林遺跡に類例

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位						残存率	現長cm	接合	付着物		つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡		掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腰	腕	脚				赤	黒				立地	評価		
4112	岩	上野場3	後期以来？	後末？						？	不明	4.5							丘陵	小？	県埋06→259	変形工字文意匠沈線。土器？
4113	岩	上野場3	？	不明							不明	3.4				「中空」？？			丘陵	小？	県埋06→260	無文。土偶でない？
4114	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末	△	○	◎	○	◎	○	7/10	7.1					◎	袋坑	丘陵	拠点	県埋00→845	正中隆帯パンツ区画。乳隆帯。背中入組文
4115	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△	◎	○		△	3/8	6.9					◎	坑覆	丘陵	拠点	県埋00→871	正中隆帯パンツ区画？▼文様？　刺突列
4116	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	2.8						坑覆	丘陵	拠点	県埋00→883	足前へ突き出す。脚縄文地多重沈線
4117	岩	長倉Ⅰ	後期以来	後後？	○						1/10	5.6		○		耳貫通孔			丘陵	拠点	県埋00→2323	後頭部突起貫通孔。眉目顎縄文。首隆帯
4118	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		○	◎	○	△		1/2	7.2			註7		◎		丘陵	拠点	県埋00→2328	乳丸大。正中～腹逆T字隆帯上刺突。他無文
4119	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		○	◎	△			1/3	5.3					線		丘陵	拠点	県埋00→2331	正中刻目2列。脇腹平行線。背中入組文？
4120	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		◎	◎	◎		○	7/10	6.2					線		丘陵	拠点	県埋00→2332	正中沈線、刺突列。腰帯縄文。背中磨消縄文
4121	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末			○	○			1/5	5.7					線		丘陵	拠点	県埋00→2333	正中隆帯刺突。磨消縄文（パンツ区画？）
4122	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		◎	◎	◎	○	○	7/10	11.6					◎		丘陵	拠点	県埋00→2334	乳丸大。正中隆帯上刺突。背中入組文
4123	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△			△		小片	3.8							丘陵	拠点	県埋00→2336	縄文地多重沈線
4124	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	4.2							丘陵	拠点	県埋00→2340	膝頭突起貼付。爪先上げる。無文
4125	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						？	小片	6							丘陵	拠点	県埋00→2341	腕？脚？胴？　隆帯上刺突。入組文
4126	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末					？		小片	2.8							丘陵	拠点	県埋00→2347	「足」。肘？に瘤突起。多平行線
4127	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	1/9	7.3							丘陵	拠点	県埋00→2348	脚平行隆帯上縄文。爪先刻目4
4128	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	1/10	2.6							丘陵	拠点	県埋00→2352	膝瘤突起。足との境平行線。爪先刻目3
4129	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	1/10	2.8							丘陵	拠点	県埋00→2353	無文。足との境沈線。爪先刻目列
4130	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	5.2			註7				丘陵	拠点	県埋00→2354	膝瘤突起に刺突。その付け根沈線以外無文
4131	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△	○	○		△	2/5	5.7					線		丘陵	拠点	県埋00→2360	正中刺突2列。背中平行線と円形意匠
4132	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末			△	◎		○	1/6	6.3							丘陵	拠点	県埋00→2361	臍円形貼付。足凹。無文
4133	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△	△		△		1/10	5				首ソケット			丘陵	拠点	県埋00→2365	磨消縄文
4134	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△					小片	3.1							丘陵	拠点	県埋00→2366	肩破片。背中平行線
4135	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△					小片	3.3							丘陵	拠点	県埋00→2369	肩破片。背中平行線。磨消縄文
4136	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△			○		小片	3.7							丘陵	拠点	県埋00→2370	肩多重短沈線。腕短い。腕刺突。手先刻目
4137	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末					○		1/10	4.5							丘陵	拠点	県埋00→2371	縄文地沈線。手先刻目列
4138	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末					○		1/10	5.4							丘陵	拠点	県埋00→2372	碇肩。手凹。手先刻目3。無文
4139	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	2.5							丘陵	拠点	県埋00→2376	刺突。爪先刻目4
4140	岩	長倉Ⅰ	大遮？	BC1？					△		小片	4.1				中空			丘陵	拠点	県埋00→2380	手先突起陰刻
4141	岩	長倉Ⅰ	後期以来	B2？						？	小片	2.5				中空			丘陵	拠点	県埋00→2383	両端三叉文間に刺突。C字入組文。光沢
4142	岩	長倉Ⅰ	大遮？	C1？						△	小片	2.4				中空			丘陵	拠点	県埋00→2384	無文。光沢
4143	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△			△		小片	4.8							丘陵	拠点	県埋00→2389	肩。磨消縄文。
4144	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末					？	？	小片	6				中空			丘陵	拠点	県埋00→2390	腕か脚。隆帯ほかはほぼ無文
4145	岩	長倉Ⅰ	大遮？？	BC1？					△		小片	6.8				中空			丘陵	拠点	県埋00→2391	手突起刻目。無文
4146	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		○	◎	○			2/5	7.8					線		丘陵	拠点	県埋00→2399	正中隆帯刺突。縄文地文様（意匠タスキ？）
4147	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		○					小片	4			註8	首ソケット			丘陵	拠点	県埋00→2400	平行沈線文様意匠多。タスキ掛け？
4148	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		○	△				1/8	2.6				「首ない」	線		丘陵	拠点	県埋00→2401	正中沈線。平行沈線による文様（意匠不明）
4149	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末	△	○	○		△		1/6	5.1					線		丘陵	拠点	県埋00→2403	正中隆帯刺突。背中入組文。後期後葉？
4150	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤4期				△	○		△	1/10	9.1			中空			丘陵	拠点	県埋00→2407	細い帯縄文上に瘤突起。★腹三叉文貫通
4151	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△	◎	○			1/3	5.4					線		丘陵	拠点	県埋00→2412	正中～腰逆T字隆帯刺突。臍孔。背中沈線文
4152	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	3.8							丘陵	拠点	県埋00→2415	僅かに湾曲。縄文。膝瘤突起剥離？
4153	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤4？	◎	◎	◎	◎	◎	○	9/10	28			割口	頭耳貫通孔	線		丘陵	拠点	県埋00→2416	正中～腰逆T隆帯。膝肘貼付。磨消縄文。註9
4154	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末			○	△			1/7	4.9					線		丘陵	拠点	県埋00→2419	正中～腰逆T隆帯？刺突（腰部分剥離）
4155	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤4期		△	△				小片	4.4				中空			丘陵	拠点	県埋00→2424	細い帯縄文上に瘤突起
4156	岩	長倉Ⅰ	大遮	BC2？			△	○		○	1/3	12				中空			丘陵	拠点	県埋00→2425	腹入組三叉文透彫。部位境断続線。磨消縄文
4157	岩	長倉Ⅰ	大遮？	BC2	△	◎	◎	○	◎	◎	4/5	14.7				中空			丘陵	拠点	県埋00→2426	★腹尻貫通孔。第二系列。裁痕列。縄文無？
4158	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	3							丘陵	拠点	県埋00→2430	図と写真印象異なる。脚上多重線
4159	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末	△	○	◎	○		○	4/7	9.4					◎		丘陵	拠点	県埋00→2431	乳大、正中隆帯刻目。刻目列による文様
4160	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤5？	△	◎	◎	○			1/2	7.3					◎		丘陵	拠点	県埋00→2432	乳大、正中～腰逆T隆帯刺突。刺痕列文様
4161	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤6期	○	◎	△		△		3/8	14			註7		線		丘陵	拠点	県埋00→2433	正中隆帯刻目。入組帯縄文三叉文。口三叉文
4162	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	3							丘陵	拠点	県埋00→2436	部位境沈線。爪先刻目4。後期後葉？
4163	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末	△	○	○	◎	○		4/7	7.6					線		丘陵	拠点	県埋00→2438	正中～腰逆T隆帯刺突。タスキ入組文。瘤2？
4164	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤6期				○		○	1/10	10..6							丘陵	拠点	県埋00→2440	磨消縄文。入組部に三叉文。膝突起。爪先刻目
4165	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤4？		○	○		○		2/5	9			割口		◎		丘陵	拠点	県埋00→2441	乳高、正中逆T隆帯。細い帯縄文。腰黒付
4166	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末	◎	◎	◎	◎	○	◎	9/10	15.3			註7		▼		丘陵	拠点	県埋00→2442	▼短沈線2。結髪状。平行線文様。脚前へ
4167	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末					○		小片	5							丘陵	拠点	県埋00→2444	腕途中平行線。手先刻目列
4168	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末	○	○	○	○		◎	7/10	15			割口	後頭横貫通	線		丘陵	拠点	県埋00→2444	正中～臍隆帯。平行線文様。腕首黒付
4169	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤6？						？	小片	6							丘陵	拠点	県埋00→2452	磨消縄文。文様の付け根に三叉文
4170	岩	長倉Ⅰ	大遮変	BC1	○	△	○	○	○		2/3	18				中空			丘陵	拠点	県埋00→2453	★楕円形隆起眼他違い無。磨消縄文。耳貫孔
4171	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		○	△		○		2/5	7				首ソケット	線		丘陵	拠点	県埋00→2454	首飾り、正中隆帯刻目。背中入組文。手刻目
4172	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末				△			小片	3							丘陵	拠点	県埋00→2455	腰片？　磨消縄文
4173	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△			○		1/6	5.2					乳		丘陵	拠点	県埋00→2456	水平隆帯刻目。腕()沈線文
4174	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末			△	△			1/8	6.3		○			◎		丘陵	拠点	県埋00→2458	▼貼付？正中～腰隆帯刺突。腰重△沈線
4175	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	5.2							丘陵	拠点	県埋00→2461	脚上多重線。膝頭貼付。下と同一個体？
4176	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	4.6							丘陵	拠点	県埋00→2462	脚上多重線。膝頭貼付。上と同一個体？
4177	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		○	○	○		△	1/2	11.4					線		丘陵	拠点	県埋00→2466	正中～腰逆T隆帯刺突。ほか無文
4178	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	3.5							丘陵	拠点	県埋00→2468	縄文。膝頭貼付
4179	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末			○	◎		○	1/2	6.3		？			線		丘陵	拠点	県埋00→2476	正中隆帯刺突列。腰多重沈線。「赤色顔料？」
4180	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	4			註7				丘陵	拠点	県埋00→2477	膝頭突起貼付刺突多
4181	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		○	△		△		1/4	5.3			割口		？		丘陵	拠点	県埋00→2479	正中刺突列・無文。首黒付。後期中～後葉？
4182	岩	長倉Ⅰ	屈折A？	瘤6？			？	？			小片	6.5							丘陵	拠点	県埋00→2480	臍？貼付。腰隆帯刺突。太もも縄文地三叉文
4183	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末				△		△	1/8	6.3		○					丘陵	拠点	県埋00→2483	腰多重線上鋸歯文変形（▽と組み合わせ）
4184	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末				○			1/7	5					線		丘陵	拠点	県埋00→2484	正中隆帯刺突。平行線文様（()意匠他）
4185	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△					小片	3.8					乳		丘陵	拠点	県埋00→2485	乳大。磨消縄文。沈線深い
4186	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	2.2							丘陵	拠点	県埋00→2488	縄文。爪先刻目4
4187	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末					△		小片	2.8							丘陵	拠点	県埋00→2489	「足」。縄文。手との境沈線。手先刻目4
4188	岩	長倉Ⅰ	大遮	前葉	△						小片	4							丘陵	拠点	県埋00→2490	右耳。縄文。耳？B突起
4189	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末			？				小片	4.2							丘陵	拠点	県埋00→2497	沈線間刺突列による文様
4190	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	3.1							丘陵	拠点	県埋00→2499	膝頭？貼付上刺突多。～後期後葉？
4191	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末			○	◎		△	1/3	3.8					線		丘陵	拠点	県埋00→2500	正中～臍貼付。平行線による文様
4192	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	3.6							丘陵	拠点	県埋00→2501	脚～足L字状。膝頭平行線。爪先刻目3

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位						残存率	現長cm	接合	付着物		つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡		掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腰	腕	脚				赤	黒				立地	評価		
4193	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末			○	◎		△	1/3	7.4		?			線	住覆	丘陵	拠点	県埋00→2506	正中～臍貼付上刺突。磨消縄文
4194	岩	長倉Ⅰ	後期以来	後後？						△	小片	3.9							丘陵	拠点	県埋00→2516	爪先刻目列
4195	岩	長倉Ⅰ	後期以来	後後？						△	小片	3.2			割口				丘陵	拠点	県埋00→2518	爪先刻目列。脚黒付
4196	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	5							丘陵	拠点	県埋00→2519	隆帯上縄文、刺突。爪先刻目。後期後葉？
4197	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	4							丘陵	拠点	県埋00→2520	隆帯上刻目列。爪先刻目
4198	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						△	小片	2.9							丘陵	拠点	県埋00→2521	爪先刻目列
4199	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						○	1/10	4.2							丘陵	拠点	県埋00→2522	膝平行線。爪先刻目。後期後葉？
4200	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末							小片	4.9							丘陵	拠点	県埋00→2528	「右足」。磨消縄文。突起剥落。土偶？
4201	岩	長倉Ⅰ	大遮？	～BC1		?					小片	4.9				中空			丘陵	拠点	県埋00→2529	「右胸」。磨消縄文。「割れ口上処理？」
4202	岩	長倉Ⅰ	後期以来	後末？		△					小片	3.6							丘陵	拠点	県埋00→2530	隆帯状乳房。背中磨消縄文
4203	岩	長倉Ⅰ	屈折A？	～B2？					△		小片	4.5			割？				丘陵	拠点	県埋00→2531	腕途中隆帯陰刻玉抱三叉文？ 1655類例？
4204	岩	長倉Ⅰ	大遮	BC1？		△			△		小片	8.7				中空			丘陵	拠点	県埋00→2532	磨消縄文。磨消内裁痕？ 手先半円文
4205	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末	△	△					小片	4.3				「中空？」			丘陵	拠点	県埋00→2533	首沈線間刺突列。「土器の一部？」
4206	岩	長倉Ⅰ	大遮	BC1		△			○		小片	9.1				中空			丘陵	拠点	県埋00→2534	磨消縄文。裁痕列。手先半円文
4207	岩	長倉Ⅰ	大遮？	前葉？						?	小片	3.8				中空			丘陵	拠点	県埋00→2535	無文
4208	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末						?	小片	5.7							丘陵	拠点	県埋00→2536	大型土偶。磨消縄文？
4209	岩	長倉Ⅰ	大遮	BC1？					△		小片	3.5				中空			丘陵	拠点	県埋00→2538	無文。手先浅い刻目
4210	岩	長倉Ⅰ	大遮？？	BC1？					△		小片	2.5				中空			丘陵	拠点	県埋00→2539	無文。手先浅い刻目
4211	岩	長倉Ⅰ	大遮	前葉		△					小片	2.4				中空			丘陵	拠点	県埋00→2540	「肩」。磨消縄文
4212	岩	長倉Ⅰ	後期以来	瘤6？		?					小片	3			割？	中空			丘陵	拠点	県埋00→2541	胸？「下腹」。三叉文。乳房隆帯？ 縄文
4213	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末					△		小片	2.8							丘陵	拠点	県埋00→2542	「左足」。磨消縄文
4214	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～B1		△					小片	3.8				中空			丘陵	拠点	県埋00→2543	磨消縄文。三叉文
4215	岩	長倉Ⅰ	大遮？？	BC1？		△					小片	3.2				中空	乳		丘陵	拠点	県埋00→2544	縄文
4216	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末		△	◎	○			1/3	8.4					線		丘陵	拠点	県埋00→2545	正中～腹隆帯刺突。背中入組文
4217	岩	長倉Ⅰ	後期以来	～後末					?		小片	2.6							丘陵	拠点	県埋00→2550	「足」。縄文。瘤状突起に刺突
4218	岩	駒板3	後期以来	～後末		△					小片	3.5						住覆	低段	半？	県埋09→150	肩。ミミズ腫状文様？瘤突起。瘤3～5期
4219	岩	駒板3	後期以来	～後末		△					小片	3.3							低段	半？	県埋09→151	肩。ミミズ腫状文様。刺突列
4220	岩	大平	後期以来	後末？	△	○	◎	◎		◎	3/5	4.5					線		高？	小？	一戸06→79図1	胸～正中Y隆帯、臍輪貼付続く
4221	岩	小屋野	後期以来	瘤5？		△					小片	2.3						住覆	扇状	註10	県埋12→64	「脚？」肩？ 刻目列
4222	岩	坊館跡	後期以来	～B1	○						小片	4.1							段丘	小規	県埋89→18-17	眉弧状。目口凹。後頭部剥落？
4223	岩	滝ノ沢	大遮？	B2？						△	小片	5.8				中空			中段	小規	北上99→図11-2	大遮の割に不整形。B1式期？
4224	岩	泉屋	屈折像A	後期末	△	○	◎	○	○	○	7/10	19.4	△		割口		◎		堤防	半？	県埋01→787	パンツ内縄文▼沈線。背中入組文・註11
4225	岩	泉屋	後期以来？	後末？	○						小片	3.4							堤防	半？	県埋01→790	目口凹。鼻貼付鼻孔。摩耗ひどい
4226	岩	伊勢堂Ⅲ	小遮	BC2	◎						1/5	6.1				中空			低段	註12	一関10→30図2	王冠突起。耳B突起。首裁痕列。後頭蔓状鋸歯
4227	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来	後末？	△						小片	1.6				板状			低段	註12	一関10→30図3	眉～鼻3字隆帯貼付。目短沈線
4228	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来	後末？	◎						不明	3.3							低段	註12	一関10→30図7	頭頂B突起様2。額瘤突起。眉～鼻3字貼付
4229	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来	後末？	△						小片	2.8							低段	註12	一関10→30図9	眉～鼻3字隆帯貼付。楕円形隆起眼
4230	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～	◎	○					不明	4.2				板状			低段	註12	一関10→31図11	目浅い凹。耳B突起。背中対向弧線
4231	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～	◎	○	○				不明	4.6							低段	註12	一関10→31図12	頭頂凹2. 目刺突。口短沈線。小型無文土偶？
4232	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～				○		○	不明	5				板状	パ		低段	註12	一関10→31図13	パンツ区画内4平行線。裏無文。土偶でない？
4233	岩	伊勢堂Ⅲ	屈折A？	後後～？		◎	◎	○	◎	△	2/3	5					線		低段	註12	一関10→31図14	後中？ 正中隆帯沈線。腕腰接続。肩腰刺突列
4234	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～		○	○				不明	5.5					線		低段	註12	一関10→31図15	正中沈線。背中入組文
4235	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～			◎	△			小片	4.7				板状	線		低段	註12	一関10→31図16	正中隆帯臍円貼付（上刺突）続く。腰隆帯
4236	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～			◎	◎		○	1/2	4.8					線		低段	註12	一関10→31図17	正中隆帯臍円貼付（上刺突）続く。裏沈線文
4237	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～				◎		○	不明	5					線		低段	註12	一関10→31図20	正中～腰逆T隆帯。臍刺突。足裾広がり
4238	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後？	○						不明	4.5				首管孔			低段	註12	一関10→31図24	頭頂二突起。眉鼻T隆帯。頬横線。耳貫通孔
4239	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～		△					小片	5					乳		低段	註12	一関10→31図25	乳大、垂れ。表裏沈線文。摩耗
4240	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～	△	○					不明	3.8			割口		線		低段	註12	一関10→31図26	首～正中Y隆帯。肩、乳黒付。乳剥落。背無文
4241	岩	伊勢堂Ⅲ	後期以来？	後後～			?	?			不明	5					線		低段	註12	一関10→31図27	正中刺突？臍表現？背中入組文？
4242	岩	伊勢堂Ⅲ	結髪？？	後～末						○	不明	2.1							低段	註12	一関10→50図2	短足。足先刻目。後期後半？？
4243	岩	伊勢堂Ⅲ	結髪？？	後～末						○	不明	2.4							低段	註12	一関10→50図4	足先刻目列。後期後半？？
4244	岩	鳥喰Ⅲ	後期以来	後後？						△	小片	3.2							丘？	散？	県教01→27図28	隆帯上刻目？ 爪先刻目3
4245	岩	鳥喰Ⅲ	結髪？？	末？？		○	○				不明	5.6							丘？	散？	県教01→27図29	首飾状沈線。背中左右刺突2列
4246	秋	二重鳥B	後期以来	Ⅳ～B1	○						小片	5.1							扇端	註13	北秋09→1155	口両脇三叉文。耳貫通孔。結髪貼付。細長い
4247	秋	二重鳥B	屈折A？	後末？		?	?	?			不明	5.4				胴縦貫孔			扇端	註13	北秋09→1156	胴縦に貫通孔。肩平行沈線。土偶？
4248	秋	二重鳥B	後期以来	後末？	△	◎	○				1/6	7.8					乳		扇端	註13	北秋09→1157	乳房大。首前傾。首V沈線
4249	秋	二重鳥B	後期以来	後末？		○	◎	△			1/5	9.2							扇端	註13	北秋09→1158	臍、腹一字状貼付。胴正面）（沈線
4250	秋	二重鳥B	後期以来	後末？			△	○		○	1/8	7.8				胴縦管孔	?		扇端	註13	北秋09→1159	貼付臍？を区画する方形意匠沈線。胸）（
4251	秋	二重鳥B	後期以来	後末？		○	◎	○	◎		2/3	3.8					パ		扇端	註13	北秋09→1160	パンツ区画。臍貼付周り刻目列。背中入組文
4252	秋	二重鳥B	後期以来？	後末？					?		小片	3.3							扇端	註13	北秋09→1161	「腕」。無文
4253	秋	二重鳥B	後期以来	後末？				△		△	小片	3.9					パ		扇端	註13	北秋09→1162	「右腿」。パンツ区画沈線
4254	秋	二重鳥B	後期以来	後末？		?					小片	3.2				中空			扇端	註13	北秋09→1186	「左肩」。低い環状貼付中央貫通孔。土偶？
4255	秋	二重鳥B	屈折像A	後末？	○	○	◎	○	○		4/7	23.6			割口				扇端	註13	〃1219、1222～3	同一3片。合掌。頸V隆帯端ボタン。註14
4256	秋	二重鳥B	後期以来	後末？	○						小片	3.9							扇端	註13	北秋09→1220	眉～鼻貼付。弧状眉。目口短沈線
4257	秋	二重鳥B	後期以来	後末？	○						小片	4.1							扇端	註13	北秋09→1221	丸顔。耳貫通孔。目口凹
4258	秋	二重鳥B	後期以来	後末？	△	○			△		1/7	6.8							扇端	註13	北秋09→1224	首下隆帯
4259	秋	二重鳥B	屈折A？	後末？						△	小片	5.4							扇端	註13	北秋09→1258	爪先短沈線3。かかと厚い
4260	秋	二重鳥B	屈折A？	後末？					?	?	小片	6.3							扇端	註13	北秋09→1259	「膝or肩」。菱形区画線内円形沈線内刺突
4261	秋	二重鳥B	屈折A？	後末？			○	◎			1/6	4.2					線		扇端	註13	北秋09→1260	正中沈線、パ区画。腰沈線。下腹円形貼付
4262	秋	虫内Ⅰ	屈折像A	～B1			○	◎		○	不明	5.3						墓？	低段	拠点	県教98→221-16	腰直角に曲げる。爪先刻目4
4263	秋	虫内Ⅰ	後期以来？	～B2？					△		小片	4						墓坑	低段	拠点	県教98→233-9	手の間沈線。腕沈線文様三叉文？
4264	秋	虫内Ⅰ	小型無文	～中？		◎	◎	◎	△	○	不明	3.4				★貫通孔		墓？	低段	拠点	県教98→238-34	★口？尻貫通孔。無文
4265	秋	虫内Ⅰ	後期以来	瘤Ⅲ？				△		△	小片	4.5			割口		パ	配？	低段	拠点	県教98→299-3	配石？炉？焼土。パンツ区画。二重線文様
4266	秋	虫内Ⅰ	後期以来	～後末	○	△					1/5	8.2		○					低段	拠点	県教98→423-15	環状結髪。眉～鼻T。★耳貫通孔。首V沈線
4267	秋	虫内Ⅰ	後期以来	後後？	○						1/10	6.5			註15				低段	拠点	県教98→423-16	帽子状突起、環状貼付。目鼻T。口刻目
4268	秋	虫内Ⅰ	後期以来	後後？	○						小片	5.8		○					低段	拠点	県教98→423-17	環状結髪？ 眉鼻YT。口横三叉文。隆起眼
4269	秋	虫内Ⅰ	後期以来	後中？						△	不明	9.2			割口				低段	拠点	県教98→423-18	太い脚。爪先刻目列。ミガキ痕
4270	秋	虫内Ⅰ	後期以来	後後？				△	◎		1/5	8.8			割口		線		低段	拠点	県教98→423-19	正中～臍貼付。腰パンツ内？縄文
4271	秋	虫内Ⅰ	後期以来	後末？	○						1/10	7.5			註16	耳貫通孔			低段	拠点	県教98→424-1	環状結髪。眉弧状。頬二重弧線。縄文
4272	秋	虫内Ⅰ	後期以来？	～後末		?					小片	7.3							低段	拠点	県教98→424-3	「肩」土偶？ 厚板状。胎土分析→他と異質
4273	秋	虫内Ⅰ	後期以来	～後末					△		小片	5.6							低段	拠点	県教98→424-4	「腕」。腰沈線文様縄文。胎土分析

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位						残存率	現長cm	接合	付着物		つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡		掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腰	腕	脚				赤	黒				立地	評価		
4274	秋	虫内Ⅰ	小遮？？	BC1？	△	△			○		1/8	6.6				中空			低段	拠点	県教98→424-9	遮光器眼でなく貼付？　口貼付。裁痕列
4275	秋	虫内Ⅰ	小遮	～C1古				△		○	1/8	4.8							低段	拠点	県教98→424-10	蔓状文様。胎土分析
4276	秋	虫内Ⅰ	大遮？	～C1古		？					小片	3.2				中空			低段	拠点	県教98→424-11	「肩」。磨消縄文。裁痕列。胎土分析
4277	秋	ヲフキ	後期以来	～後末		○	○				3/10	6.2			割？		線		丘陵	註17	県教03→768	首～正中～臍Y字意匠刻目。「黒色付着物」
4278	秋	ヲフキ	後期以来	後後？			○	○			1/6	6.8					◎		丘陵	註17	県教03→780	正中臍沈線。腹膨。腰多重沈線文様
4279	秋	ヲフキ	後期以来	～後末			△	△			1/9	5.7					パ		丘陵	註17	県教03→783	パンツ区画。平行線による文様。後後？
4280	秋	ヲフキ	後期以来	瘤4？	◎						1/8	7.6			割口	耳貫通孔			丘陵	註17	県教03→788	帯縄文狭い。後頭結髪貼付。首黒付
4281	秋	ヲフキ	後期以来	後後？	○						1/7	5.7				耳貫通孔			丘陵	註17	県教03→791	後頭部縁取る細縄文帯、中央丸突起上刺突
4282	秋	ヲフキ	後期以来	～後末	◎						1/7	4.8				後央接合面			丘陵	註17	県教03→793	平坦な後頭部剥落？　眼貼付下短沈線
4283	秋	ヲフキ	後期以来	後末？	○						1/7	5							丘陵	註17	県教03→794	口横三叉文。眉不整沈線
4284	秋	ヲフキ	小遮	C1古？	○						1/7	5.3							丘陵	註17	県教03→795	後頭部蔓文
4285	秋	ヲフキ	屈折像A	後末？					△		小片	6.6							丘陵	註17	県教03→796	弧を描く腕。腕途中隆帯上刺突列
4286	秋	ヲフキ	後期以来	～後末						△	小片	5.4							丘陵	註17	県教03→799	脚上多重線刺突。膝頭貼付上刺突。踵上がる
4287	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末					？		不明	7							丘陵	註17	県教03→800	肘？裏表ミミズ腫れ状貼付。手先？刻目
4288	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末					？		小片	5.4							丘陵	註17	県教03→801	屈曲。ミミズ腫れ貼付。上記に似るが無文
4289	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末					？	？	不明	3.7							丘陵	註17	県教03→803	腕か脚。緩やかに屈曲。平行線。多重線
4290	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末					？	？	不明	5.3							丘陵	註17	県教03→804	腕か脚。緩やかに屈曲。平行線
4291	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末						○	1/10	3.4							丘陵	註17	県教03→808	縄文地。膝？に平行線。踵上がる
4292	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末						△	不明	4.4							丘陵	註17	県教03→810	膝軽く曲がる。膝短沈線。踵上がらない
4293	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末						△	不明	6.2			割口				丘陵	註17	県教03→811	膝平行沈線内刺突列。爪先刻目3。上黒付
4294	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末						△	小片	4.3							丘陵	註17	県教03→812	菱形文と足の形→瘤1期？　平行線内刻目列
4295	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末						△	不明	4.3							丘陵	註17	県教03→813	脚まっすぐ。膝平行線。爪先刻目2
4296	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末						△	小片	4							丘陵	註17	県教03→815	無文。爪先刻目5
4297	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末						○	1/10	8.1							丘陵	註17	県教03→816	上多重線区画内刺突。膝貼付。爪先刻目3
4298	秋	ヲフキ	後期以来？	～後末		△			△		小片	3.5							丘陵	註17	県教03→851	肩に隆帯上縄文
4299	秋	堀ノ内	後期以来？	～後末	△	○	○				1/3	10.3	○					墓？	扇状	拠点	県教08→81図15	遺構外頭～胴上片と接合。剥落して棒状
4300	秋	堀ノ内	？	～B1？					？		小片	1.5						墓？	扇状	拠点	県教08→83図14	「脚」→隆帯を持つ→腕？　類例1655？
4301	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	○						1/6	4.6						墓覆	扇状	拠点	県教08→85図1	ターバン結髪、眉弧貼付。目貼付。顔斜め
4302	秋	堀ノ内	？	後期？			○	○		△	不明	5.4					線	坑上	扇状	拠点	県教08→91図12	正中沈線。棒状無文
4303	秋	堀ノ内	後期以来？	後後？			？				小片	3.8						袋坑	扇状	拠点	県教08→132図4	臍付近？　貼付上細かい刺突
4304	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	△	○	○		○		2/5	10						柱坑	扇状	拠点	県教08→134図28	頭頂二角状。顔剥落。手反らせる。★敲打痕
4305	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	○						1/6	5.8				耳貫通孔			扇状	拠点	県教08→279図1	丸顔。目口円形貼付に刺突。後頭～首刺突
4306	秋	堀ノ内	屈折像A	B1古	○	○			△		3/10	10.8		○		耳貫通孔			扇状	拠点	県教08→279図2	弧状眉。磨消縄文。三叉文。胸表裏ボタン
4307	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	○						1/6	6.5			割口	耳貫通孔			扇状	拠点	県教08→279図3	頭頂縄文。後頭突起。後首下円形突起
4308	秋	堀ノ内	後期以来	瘤6？	○						1/6	5.8				★口～管孔			扇状	拠点	県教08→279図4	頭頂縄文。後頭突起。口脇三叉文。耳貫孔
4309	秋	堀ノ内	後期以来	～B1？	○						1/8	6.4			割口	★頭頂～孔			扇状	拠点	県教08→279図5	楕円形眼貼付。口周竹管状刺突。首黒付
4310	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	△						小片	4			割口				扇状	拠点	県教08→280図1	眉～鼻T字貼付。楕円形眼貼付
4311	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	△						小片	4.5							扇状	拠点	県教08→280図2	顔剥落。頭頂渦状結髪貼付
4312	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	△						小片	3.3				★口～管孔			扇状	拠点	県教08→280図4	剥落して顔のみ。鼻貼付鼻孔。「人面土器？」
4313	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	△	○	◎	◎	○	○	3/5	14				★首～肛門孔	線		扇状	拠点	県教08→280図5	正中沈線。背中入組文？　尻二山貼付。手反る
4314	秋	堀ノ内	後期以来	～後末			○	○		○	1/3	9.4					パ		扇状	拠点	県教08→280図6	パンツ区画線。臍？蕾状貼付刺突。足凹
4315	秋	堀ノ内	後期以来	～後末	△	○	○	△	○		5/9	9							扇状	拠点	県教08→281図1	手反る。乳腹剥落
4316	秋	堀ノ内	後期以来	～後末		○	○		◎		1/2	7.2					線		扇状	拠点	県教08→281図2	正中隆帯。乳弧状隆帯。手反る
4317	秋	堀ノ内	後期以来	～後末		○	◎	○			1/3	4.9				★～肛門孔	パ		扇状	拠点	県教08→281図3	パンツ区画。貼付臍周り三叉文？　背中文様？
4318	秋	堀ノ内	後期以来	～後末		○	○	◎		◎	5/9	7			割口		線		扇状	拠点	県教08→281図4	正中～臍雫形隆帯。足凹。側面剥離。上黒付
4319	秋	堀ノ内	後期以来	～後末		△	○	○			1/4	5.1					線		扇状	拠点	県教08→281図5	正中～臍隆帯刻目。腰脇突出
4320	秋	堀ノ内	後期以来	後後？	○						1/7	4.2							扇状	拠点	県教08→282図1	双頭。額平行線。
4321	秋	堀ノ内	後期以来	～後後		△					小片	3.8							扇状	拠点	県教08→282図2	細い帯状磨消縄文。後期中葉？
4322	秋	堀ノ内	後期以来	～後末		○	◎	○		△	2/5	8				★首～肛門孔	パ		扇状	拠点	県教08→282図3	パンツ区画。背中入組文
4323	秋	堀ノ内	？	？						△	小片	5.7							扇状	拠点	県教08→282図4	脚まっすぐ。足楕円形。無文
4324	秋	堀ノ内	？	？				△		○	不明	7.7							扇状	拠点	県教08→282図5	無文。「貫通孔あり」
4325	秋	堀ノ内	後期以来	後後？						△	小片	5.3							扇状	拠点	県教08→282図6	脚太く足細い。かかと上がる。爪先刻目3
4326	秋	堀ノ内	小遮	C1古？			○	◎		△	1/3	5.8							扇状	拠点	県教08→282図7	腰張り出す。部位境裁痕列。尻広斜文ⅡOa1
4327	秋	堀ノ内	小遮	C1新？		△			○		小片	4.4							扇状	拠点	県教08→282図8	肩に平行線、入組文
4328	秋	堀ノ内	大遮	～BC1	△	△					1/6	11.2	△			中空			扇状	拠点	県教08→283図1	首ノ字文。裁痕列無。磨消縄文。後首下突起
4329	秋	堀ノ内	大遮	～C1古		△	△	△			1/6	ー		○		中空			扇状	拠点	県教08→283図2	★近隣4片同一個体。乳周裁痕列。磨消縄文
4330	秋	堀ノ内	大遮	～B2	△						小片	3.3				中空			扇状	拠点	県教08→283図3	区画線内刺突。顎？？
4331	秋	堀ノ内	大遮？	BC？		？					小片	3.6				「中空」			扇状	拠点	県教08→283図4	「胸」→乳？　裁痕列無
4332	秋	堀ノ内	大遮？	前？				？			小片	3.5		○		中空			扇状	拠点	県教08→283図5	「胴」。磨消縄文。貼付文？
4333	秋	堀ノ内	大遮？？	前？	？						小片	2.3				中空			扇状	拠点	県教08→283図6	「頭？」→頭頂？　入組三叉文。裁痕列？

第９表　宮城県の土偶　（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位						残存率	現長cm	接合	付着物		つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡		掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腰	腕	脚				赤	黒				立地	評価		
4334	宮	山王囲	？	？	？						小片	2.5						住柱	堤防	拠点	一迫97→22図3	柱穴出土。「首」「弥生」山王Ⅲ？　土偶？
4335	宮	山王囲	結髪	A1	○	△					1/8	6				中空			堤防	拠点	一迫98→9図4	顔部位貼付。鼻上方。頭頂孔。胸工字文？
4336	宮	山王囲	結髪？	A1？		△			△		小片	3		○					堤防	拠点	栗原07→4図2	肩瘤突起2。沈線
4337	宮	山王囲	結髪？	A1？	？						小片	2.4							堤防	拠点	栗原07→4図3	「頭」。多重短沈線は結髪？
4338	宮	諏訪	後期以来	～後末						△	小片	1.5							丘陵	拠点	県教10→165-3	★特大。縄文。沈線。爪先五股
4339	宮	諏訪	結髪？	～A´古						△	小片	1.9				足上中空			沖積	拠？	県教10→13図11	足隅丸長方形。爪先短沈線10
4340	宮	愛宕山	大逆出？	A1	△						小片	3.4		○					沖積	拠？	県教10→16図7	頭頂二股突起。輪郭に沿って沈線。「赤漆」
4341	宮	愛宕山	屈折B？	～A1							小片	4.6				後頭接合痕			沖積	拠？	県教10→31図11	結髪土偶？　耳貫通孔。口以外貼付眉弧
4342	宮	愛宕山	結髪	A´古				△		○	1/5	6.2		○		脚中空			沖積	拠？	県教10→33図4	腰脚境線斜。腰多重円刺突。爪先刻目。「赤漆」
4343	宮	諏訪	刺突文？	A´古？						△	小片	2				足上中空			沖積	拠？	県教10→46図11	爪先刻目列。★足裏貫通孔
4344	宮	北小松	小型無文？	C2？？					△		小片	2.7							丘陵	拠？	県教10→56図4	無文粗雑
4345	宮	北小松	大逆出？	A1	△						小片	2.7							沖積	拠点	県教11→30図3	頭頂二股突起。輪郭に沿って二重線。側面沈線
4346	宮	北小松	肩パット	A1～2		△			○		1/10	3.4							沖積	拠点	県教11→30図4	肩瘤突起。その下突起と刺突隆帯。手境沈線
4347	宮	北小松	？	？							不明	3.3							沖積	拠点	県教11→37図1	二角状突起側面沈線。貫通孔2。土器？
4348	宮	北小松	土器？	～初頭							小片	3							沖積	拠点	県教11→37図2	「角」。歪み。沈線。屈折像A類腕？

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位 頭	胸	腹	腰	腕	脚	残存率	現長cm	接合	付着物 赤	黒	つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡 立地	評価	掲載箇所	備考
4349	宮	北小松	？	初？？				？			不明	4.6				「中空」			沖積	拠点	県教11→37図3	屈折像Aの腰？肛門貫通孔？
4350	宮	北小松	後期以来	～後末						△	小片	4.8							沖積	拠点	県教11→37図4	足境二重線。踵上がる。爪先刻目4
4351	宮	北小松	？	？						△	小片	2.2							沖積	拠点	県教11→37図5	足との境沈線。土偶でない可能性も
4352	宮	北小松	結髪変？	～A´				△		○	1/7	5							沖積	拠点	県教11→37図6	ガニマタ。腰刺突多
4353	宮	北小松	結髪？	～A´						△	小片	2.7				足上中空			沖積	拠点	県教11→37図7	足首締まらない。脚上方沈線。大逆出？
4354	宮	北小松	結髪？？	？						△	小片	0.8				足上中空			沖積	拠点	県教11→37図8	粗雑。爪先短沈線10以上。大逆出土偶？
4355	宮	北小松	結髪変？	A´？				△		○	1/5	4.8							沖積	拠点	県教11→53図15	腰沈線パンツ区画？　摩耗。大逆出土偶？
4356	宮	北小松	後期以来	瘤Ⅲ？			○	○		△	1/4	6.4					パ		沖積	拠点	県教11→79図6	パンツ内文様。背中入組文内刻目。三叉文？
4357	宮	北小松	後期以来	～後末		△					小片	2.5			割口				沖積	拠点	県教11→79図7	肩。帯縄文、沈線文様
4358	宮	北小松	結髪変	A1？					○		小片	4.9						集石	沖積	拠点	県教14→48図25	肩表多重線、裏円形文二段。粗雑
4359	宮	北小松	？土偶？	？							不明	3.6				端側面刺突		集石	沖積	拠点	県教14→48図26	先端短沈線5、その上直行沈線3、円形沈線
4360	宮	北小松	結髪変？	A1？		○	○	○			3/8	7.8					▼	集石	沖積	拠点	県教14→49図1	▼円形文。乳○。腰二重線下刺突。背6字文
4361	宮	北小松	大逆出	第Ⅴ？		△	△				小片	5.6						集石	沖積	拠点	県教14→49図2	胸▽刻目隆帯。背中隆帯上縄文沈線。乳垂
4362	宮	北小松	折衷？	A´古？				△		○	不明	5.6						土坑	沖積	拠点	県教14→184図6	蟹股中央二重弧線、周囲刺突多。爪先刻目
4363	宮	北小松	後期以来	～後末		◎	◎	◎		◎	2/3	12.2					◎		沖積	拠点	県教14→130図2	胸～正中T字隆帯刻目。パンツ。背中入組文
4364	宮	北小松	後期以来	瘤Ⅳ？			◎	◎			不明	7.5			割口		●		沖積	拠点	県教14→130図3	正中隆帯、パ区画、▼短沈線。三叉文。「漆」
4365	宮	北小松	？大遮変？	C2？？	△						小片	5							沖積	拠点	県教14→132図6	裏剥離。口貫通。遮光器から変化した眼？
4366	宮	北小松	小逆出？	C2後半	◎						不明	3.5							沖積	拠点	県教14→132図7	大逆出？頭頂突起二線。鼻孔上向。後頭隆帯
4367	宮	北小松	大逆出	第Ⅴ？	△						小片	3				中空			沖積	拠点	県教14→133図1	鼻孔から弧線。目上三叉文。後頭多重線。A1？
4368	宮	北小松	？（脇腹弧）	C2？	○	○	◎	○		△	7/10	8.3				★目？貫孔	乳		沖積	拠点	県教14→134図1	顔凹。脇腹、背中対向多重弧。背首円文
4369	宮	北小松	大遮系？	C2？	△						小片	2.5				耳飾突起			沖積	拠点	県教14→134図2	目縁刻目列。額十字沈線。後頭雲形沈線
4370	宮	北小松	大逆出系？	A1？		◎	◎	○	◎		2/5	8					▼		沖積	拠点	県教14→134図3	▼刺突。胸V刻目隆帯。背中工意匠沈線
4371	宮	北小松	？（脇腹弧）	C2？		△	◎				不明	5.5					線		沖積	拠点	県教14→134図4	正中隆帯縄文。脇腹多重弧線。背首円文
4372	宮	北小松	屈折像B	C2？				○	△		不明	6.2					◎		沖積	拠点	県教14→135図1	正中刻目隆帯、パ区画。★類例1051。註18
4373	宮	北小松	鯨面？？	A前後	○						小片	6.2				耳貫通孔			沖積	拠点	県教14→135図16	目短沈線。鼻大。頬多重短沈線。後頭部註19
4374	宮	北小松	大逆出	第Ⅴ？	○						小片	3.3				中空			沖積	拠点	県教14→136図1	鼻孔から、耳？弧線。後頭多重線。A1？
4375	宮	北小松	大逆出系？	第Ⅴ？		○			○		1/7	3					線		沖積	拠点	県教14→136図2	正中、肩～乳隆帯刻目。背中縄文地沈線
4376	宮	北小松	大逆出系？	A1？				△		○	不明	6.2				中空			沖積	拠点	県教14→137図12	上部多重線
4377	宮	北小松	類刺突文	A´新？		◎	◎	○	○	○	3/5	15.6				胴空隙	パ		沖積	拠点	県教14→167図1	肩パット逆屈曲。胴無文。肩腰刺突多
4378	宮	北小松	後期以来？	～後末	○	○	◎		◎		1/2	8.6				板状	線		沖積	拠点	県教14→234図2	正中隆帯刻目。顔上向。弧状眉刻目。手境線
4379	宮	北小松	屈折像A	～後末						△	小片	4.5							沖積	拠点	県教14→234図3	脚多重平行線。爪先刻目3
4380	宮	北小松	小型無文	C2？	◎	◎	◎	◎	○	○	9/10	7							沖積	拠点	県教14→235図2	頭頂前へ突出。顔無。いかり肩O脚
4381	宮	北小松	小型無文？	C2？			◎	○			1/7	4.6							沖積	拠点	県教14→235図3	屈折像B？　無文。
4382	宮	北小松	結髪系	A1		○	◎	◎		○	7/10	5.7				★乳凹			沖積	拠点	県教14→236図1	★肛門孔。刺痕列腰、背6。胸円文。腰多重線
4383	宮	北小松	結髪	A1		○	◎	△			3/10	6.4				中空			沖積	拠点	県教14→236図2	V刻目隆帯上細い乳房。背平行線。腰縄文
4384	宮	北小松	？結髪？	A1？		△			○		不明	3							沖積	拠点	県教14→237-16	いかり肩。手先二股。胸◇意匠？深い沈線
4385	宮	北小松	？結髪？	A1？	◎	◎	○		○		不明	6.6				板状			沖積	拠点	県教14→237-22	頭二股分かれる。無文
4386	宮	北小松	結髪	A1	△						小片	2		○					沖積	拠点	県教14→238図1	結髪部分破片（透かし彫り）。多重線。刻目列
4387	宮	北小松	入墨屈折B	C2？					○		小片	6							沖積	拠点	県教14→238図2	長く細い腕。入墨状沈線。手先短沈線4
4388	宮	北小松	結髪系	～A´古						△	1/6	8.4				中空			沖積	拠点	県教14→238図3	側面貫通孔★中心に多重円、外刺突。註20
4389	宮	萩田	結髪変形	？		△	◎	△			不明	9.4				棒板状	線		丘麓	？	県教00→p.85	正中沈線。背中6字文。腰隆帯？刺突多
4390	宮	里浜貝塚	小型無文	？	◎	◎	◎	◎	△	○	2/3	5.7							丘陵	拠点	小井02→9図2	顔無。乳房貼付上弧線（爪形圧痕？）
4391	宮	里浜貝塚	小型無文？	？	◎						不明	4							丘陵	拠点	小井02→9図4	頭～耳山形。耳突起状。首長い
4392	宮	里浜貝塚	？	？					△		小片	1.5		○					丘陵	拠点	小井02→9図9	細かい条線多。腕？
4393	宮	里浜貝塚	小型無文？	？		△			○		不明	2.8							丘陵	拠点	小井02→9図10	手の作出無
4394	宮	里浜貝塚	小型無文？	？						？	不明	3							丘陵	拠点	小井02→9図11	途中で90°近く曲がる。無文屈折像の脚？
4395	宮	里浜貝塚	小型無文？	？				？			小片	2.3							丘陵	拠点	小井02→9図13	腰？
4396	宮	里浜貝塚	小型無文？	？							小片	1.4							丘陵	拠点	小井02→9図14	部位不明
4397	宮	里浜貝塚	結髪	～A´古	△	○	◎	△			2/5	6					◎		丘陵	拠点	鳴瀬98→165	正中刺痕？、パ刺突沈線。背匹字文？註21
4398	宮	鍛冶屋敷前	後期以来	～B1	◎						1/10	5							沖積	小？	仙台00→119-15	眉～鼻T字。目口楕円貼付。摩耗
4399	宮	元中田	結髪	青木？	△						小片	4				★耳貫通孔			堤防	註22	名取99→16図8	結髪破片。耳下がる突起。頭頂多重線
4400	宮	元中田	結髪？？	註23			○	○		○	不明	5.4					線		堤防	註22	名取99→39図8	正中沈線、背面も。腰平行線
4401	宮	鍛冶沢	後期以来	瘤Ⅱ？						△	小片	4						住床	丘陵	拠点	県教10→10-1	無文
4402	宮	鍛冶沢	後期以来？	～後末		○	○	◎		△	不明	10.5					▼	註24	丘陵	拠点	県教10→10-2	▼短沈線。幅広棒板状。無文。肩隆帯状に高い
4403	宮	鍛冶沢	後期以来？	～B2		△			○		不明	3.2						坑覆	丘陵	拠点	県教10→48-1	「右腕」。三叉文。手先刻目2. 乳瘤突起？
4404	宮	鍛冶沢	後期以来？	～後末？						△	小片	1.3						坑覆	丘陵	拠点	県教10→48-2	足先。爪先刻目4
4405	宮	鍛冶沢	後期以来？	～後末				○		△	不明	6				厚板状		窪み	丘陵	拠点	県教10→105-6	無文手づくね粗雑
4406	宮	鍛冶沢	結髪変？	？			○	○			不明	6.2				棒板状	線		丘陵	拠点	県教10→95-16	胴上割口孔。正中逆T状沈線か6字文
4407	宮	鍛冶沢	後期以来？	～後末	◎	○			○		3/10	1.7							丘陵	拠点	県教10→164-2	細刺突列による文様後頭部にも。顔無文
4408	宮	鍛冶沢	後期以来？	～後末					？		小片	4.3							丘陵	拠点	県教10→164-3	「脚」。曲がる。縄文。後期中葉？屈折像A？
4409	宮	鍛冶沢	後期以来？	～後末					△		小片	4.2							丘陵	拠点	県教10→164-4	沈線に沿う細刺突列→4407に似る
4410	宮	鍛冶沢	後期以来	後後？		○					1/4	5.7					線		丘陵	拠点	県教10→164-5	写真無。正中隆帯刺突。背中無文。側面沈線？
4411	宮	鍛冶沢	後期以来	後中？			○				1/7	4.8							丘陵	拠点	県教10→164-6	写真無。表裏無文
4412	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末		○			△		1/4	4.8					線		丘陵	拠点	県教10→164-7	写真無。正中刺突列。背中無文
4413	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末						△	小片	3.5							丘陵	拠点	県教10→164-8	長靴形。無文。ミガキ？
4414	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末		○					1/4	5				上割口管孔	線		丘陵	拠点	県教10→164-9	正中隆帯脇沈線。表裏両脇弧線。背中6文
4415	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末		？					不明	2.8							丘陵	拠点	県教10→164-10	「右胸」？。刻目帯。ボタン貼付。土偶？
4416	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末						？	小片	2.7							丘陵	拠点	県教10→164-11	写真無。「腕」。弧を描く。膝頭か裏貼付
4417	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末					？		小片	1.8							丘陵	拠点	県教10→164-12	写真無。「腕」。無文棒状。土偶でない？
4418	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末						△	小片	3.7				突起何表？			丘陵	拠点	県教10→165-1	写真無。★脚裏瘤状突起。爪先刻目4
4419	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末						△	小片	1.7							丘陵	拠点	県教10→165-2	縄文。沈線。爪先三股
4420	宮	鍛冶沢	後期以来	～後末						△	小片	1.5							丘陵	拠点	県教10→165-3	★特大。縄文。沈線。爪先五股

第10表　山形・福島県の土偶　（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位 頭	胸	腹	腰	腕	脚	残存率	現長cm	接合	付着物 赤	黒	つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡 立地	評価	掲載箇所	備考
4421	山	小山崎	後期以来	後末？	○						不明	6.5							山麓	小？	遊佐15図213-6	弧状眉刻目。口両脇三叉文。後頭瘤突起2
4422	山	小山崎	後期以来	後末？	○						不明	6.3				耳貫通孔			山麓	小？	〃図215-10	頭頂鉢巻状。後頭高い突起。類縄文

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位						残存率	現長cm	接合	付着物		つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡		掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腰	腕	脚				赤	黒				立地	評価		
4423	山	釜淵C	x字形	C1新？	◎	◎	◎	◎	◎	◎	1	6.2				小形板状			段丘	拠？	県埋03→95図2	陰刻文系列。X隆帯刻目列。26g
4424	山	釜淵C	類大遮	C1？		○	◎	○		○	4/7	12.2		○		中空	線		段丘	拠？	県埋03→95図3	正中～腰逆T隆帯、肩隆帯点列。胸V沈線
4425	山	釜淵C	小型無文？	中葉？	◎	○	◎	○	△	△	7/10	3.6				小形板状			段丘	拠？	県埋03→95図4	頭突起状顔無。首飾り状刺突列ほか無文
4426	山	釜淵C	x字形	C2古？		○	○	○	○		1/3	3.1				小形板状			段丘	拠？	県埋03→95図5	陰刻文系列。陰刻対向三叉文。側面陰刻
4427	山	釜淵C	類結髪	A1？	○						1/10	3.5		○		中空			段丘	拠？	県埋03→95図6	★後頭貫通孔。目凹。眉刻目隆帯
4428	山	釜淵C	後期以来	～B1	○						1/10	5.2							段丘	拠？	県埋03→95図7	後頭傾斜。眉～鼻T貼付。目口沈線。耳刺突
4429	山	釜淵C	類大遮	～C1			○	◎		◎	1/5	7.5		○		腹のみ中空			段丘	拠？	県埋03→95図8	山字文。C字文。足との境沈線
4430	山	釜淵C	結髪？	A1			○	△			1/8	5.2		○		中空			段丘	拠？	県埋03→96図1	大逆出？　V字刻目隆帯
4431	山	釜淵C	屈折A？	～B1？			○	◎		△	1/8	8.3							段丘	拠？	県埋03→96図2	摩耗ひどい。腹部滴膨らみ臍孔。背中入組文？
4432	山	釜淵C	大逆出	第Ⅴ	△	◎	◎	△		△	3/8	10.3		○		中空	線		段丘	拠？	県埋03→96図3	★腰補修孔。胸～正中Y隆帯。腕縄文地三叉文
4433	山	釜淵C	大逆出	A1		△			○		小片	3.7							段丘	拠？	県埋03→96図4	多重線一部工字文
4434	山	宮の前	大遮変	Ⅱ～Ⅲ	○	△					1/7	5.8				中空			中段	拠点	県埋99→117図1	後頭貫通孔2。口貫通。顎胸刻目隆帯
4435	山	宮の前	註25	B1？	△		◎	◎	△	○	5/6	12.6				頭中空？	線		中段	拠点	県埋99→117図2	正中隆帯。耳貫通孔。三日月貼付乳。背中○線
4436	山	宮の前	結髪	A1	○	△					1/6	10.5				中空			中段	拠点	県埋99→117図5	刻目隆帯の装飾、眉、乳。手先短沈線3
4437	山	宮の前	結髪？	A1？	△						小片	3.7			割口				中段	拠点	県埋99→117図6	首黒付。表裏剥落。写真無。頭頂刻目列
4438	山	宮の前	註26	C2？				？			小片	5							中段	拠点	県埋99→117図8	S字入組文。沈線間刺突列
4439	山	宮の前	類大遮変	第Ⅱ？	◎	△					1/6	5.6				中空？			中段	拠点	県埋99→118図10	後頭貫通孔2。口目？貫通。首下刻目隆帯
4440	山	宮の前	鯨面？	～A1？	◎						不明	5.7							中段	拠点	県埋99→118図11	眉～鼻T貼付。口下ほか短沈線。目口沈線
4441	山	宮の前	大逆出	A1			△	△		△	1/8	6.3				中空			中段	拠点	県埋99→118図12	摩耗。腰工字文
4442	山	宮の前	類大遮	～中葉		△	△				小片	3.3				中空			中段	拠点	県埋99→118図13	写真無。S字入組文。首断続線？
4443	山	宮の前	？	～晩？						△	不明	5							中段	拠点	県埋99→118図15	写真無。脹脛。爪先刻目2。屈折像B類？
4444	山	宮の前	？	～晩？							不明	6.4							中段	拠点	県埋99→118図16	写真無。無文棒状。土偶？
4445	山	宮の前	類結髪？	A1？				△		○	1/6	4.7							中段	拠点	県埋99→118図17	腰張る。腰上平行線。摩耗→爪先刻目列？
4446	山	宮の前	？	～晩？						○	不明	3.9							中段	拠点	県埋99→118図18	写真無。無文。真っ直ぐな脚に小さい足
4447	山	作野	大逆出	Ⅴ～A1	△						小片	3				中空			扇頂	拠点	県埋12→67図1	貼付眼上縄文。眼下弧線。口円形沈線
4448	山	作野	大逆出	第Ⅴ		○			◎		1/5	3.5				中空			扇頂	拠点	県埋12→67図2	肩縄文地三叉文。乳頂点の▽隆帯刻目列
4449	山	作野	？	？					？		不明	4.2							扇頂	拠点	県埋12→67図3	「腕」。縄文。土偶？
4450	山	作野	刺突祖？	A1		△	△				小片	6.4				中空			扇頂	拠点	県埋12→67図4	結髪変形？　乳刻目隆帯。脇腹縄文地文様
4451	山	作野	類大逆？	第Ⅴ			△	△			1/10	5.3				中空	バ?		扇頂	拠点	県埋12→67図5	パンツ区画？　腰縄文地三叉文。★脇腹文様
4452	山	作野	大逆出？	～A1						△	小片	2.9				中空			扇頂	拠点	県埋12→67図6	爪先短沈線。足裏円形
4453	山	高瀬山	結髪系	A2	○	△					1/6	6.5							低段	小規	県埋05→289図6	両端突出刺突結髪。背中刺突2列。目口沈線
4454	山	砂子田	結髪	A2	○						1/9	3.5				頭頂深い刺突			扇端	半拠	県埋03→185-22	写真無。双角状結髪両端竹管文。口周刺突
4455	福	大平後関	関節隆帯？	～A1？						△	小片	5.4		○				土坑	扇端	半？	福島05→15-6	隆帯上短沈線。爪先刻目列。足形雫？形
4456	福	大平後関	類大逆出？	A1？	△						小片	4.7		○		「中空」？			扇端	半？	福島05→47-3	顔縁取る隆帯。目耳貼。間接隆帯？類結髪？
4457	福	勝口前畑	？	弥中？			？	？			小片	4.7				貫通孔		→	低？	註27	福島97→97-28	写真無。勾玉製作跡出土。工字文系の文様？
4458	福	勝口前畑	台式？？	弥中後		△	◎	△			不明	4.7				貫通孔			低？	註27	福島97→104-31	平行線による鋸歯文、網目文。図天地逆？
4459	福	宮畑	註28	C2？	◎	◎	◎	◎	△	◎	9/10	5.8					●	柱穴	低段	註29	福島04→93-3	▼刺突、正中斜目2列パンツ内条線。幾何学文
4460	福	宮畑	？	～A1？						△	不明	3.9						川跡	低段	註29	福島04→195-1	脚丸く踵短足長い→後期中～後葉？　足境線
4461	福	宮畑	類大逆出	A1？			△	△		○	不明	4.7						川跡	低段	註29	福島04→195-3	腰上多重円。極端な短足。足境沈線
4462	福	宮畑	註30	C2	○	◎					不明	6.6				板状	線		低段	註29	福島04→271-2	正中線。眉～鼻T貼付。目短沈線。口刺突
4463	福	宮畑	屈折B？	C2？	◎	◎	◎	○			4/5	6.1							低段	註29	福島04→271-5	目口凹。首沈線、腰平行線。摩耗？無文
4464	福	宮畑	類x字？	C2？	◎	◎	◎	◎	○	○	7/10	6.1				小形板状	線		低段	註29	福島04→271-6	胸～正中T刺突列。背中対向△陰刻。註31
4465	福	宮畑	類大逆変	A1？			△	○		○	1/2	6.3	△				▼		低段	註29	福島04→273-1	▼刺突。腰工字文風文様。ガニマタ
4466	福	宮畑	類大逆	A1？	○						1/7	6.4				耳貫通孔			低段	註29	福島05→29-4	双頭。眉、顎刻目隆帯。目鼻貼付。口凹
4467	福	宮畑	類結髪？	A1？	△	○	○				不明	4.6					線		低段	註29	福島05→29-5	大逆出？　肩直線的。無文。後期中葉？
4468	福	宮畑	類大逆？	～A1？						△	1/9	6				★中くり抜き	線	岩傍	低段	註29	福島05→29-6	脚断面円形。無文。管孔状中空
4469	福	宮畑	後期以来	瘤Ⅳ		○	○	△	△		3/8	12.3				首割口凹	線		低段	註29	福島10→107-10	正中Y隆帯縄文。背中入組文+三叉文
4470	福	宮畑	類x字形？	C2？		◎	○	○	△		4/7	5.9				小形板状	線		低段	註29	福島10→108-1	正中線、輪郭沿刺刺痕列？首下瘤突起？摩耗
4471	福	宮畑	大遮変	Ⅰ～Ⅱ				△			小片	4.5				中空			低段	註29	福島10→108-2	腰刻目隆帯直線。★肛門貫通孔。雲形文。摩耗
4472	福	東羽黒平	類結髪？	A1併？				△		△	1/9	7							段丘	散？	県教15→36-8	摩耗。腰浮線網状文。短足。2309類例
4473	福	原町西町	類大遮変？	C2中？						△	不明	4.1							中段	拠？	南相10→78図3	脚弧を描く。足との境沈線。爪先刻目列
4474	福	浦尻貝塚	類大遮	C1？	○						1/9	6.5							中段	拠点	小高10→図65-1	摩耗。後頭部突起貫通孔。首との境無？
4475	福	浦尻貝塚	？	～C2？	○	○	◎	△			不明	5.3							中段	拠点	小高10→図65-2	顔無。首隆帯。胸表裏▽区画。腰刻目隆帯
4476	福	浦尻貝塚	後期以来	～後末	△	○	○	○			1/3	7.8					線		中段	拠点	小高10→図65-5	正中隆帯刺突。背中6字重ね描き？　後後？
4477	福	荒屋敷	台式	A1？	○	◎	◎	◎	－	○	9/10	6.3					線	岩傍	段丘	半拠	三島90→209図2	正中沈線。顔突出。背中渦巻文。脇腹つ文
4478	福	荒屋敷	類大逆出	A1？	○						1/9	3.6							段丘	半拠	三島90→209図3	双頭状。耳貫通孔。後頭刻目隆帯、瘤突起
4479	福	荒屋敷	台式？	C2後？		△	○				不明	8.1		◎		下割口管孔			段丘	半拠	三島90→209図5	厚板状。表裏渦巻文
4480	福	荒屋敷	類結髪？	A1？	△	○	◎				不明	10.3							段丘	半拠	三島90→210図1	写真無。胴長棒状。隆帯状乳房。無文
4481	福	荒屋敷	類x字形？	C2？		◎	◎	△			不明	6.1		○		小形板状	線		段丘	半拠	三島90→210図3	写真無。正中沈線。背中6字文？
4482	福	荒屋敷	大逆出？	～A1						△	小片	1.2				中空？？			段丘	半拠	三島90→210図5	足楕円形。爪先刻目列。★足裏貫通孔
4483	福	荒屋敷	類大逆？	A1？		△			○		1/10	3.5		○		ミガキ			段丘	半拠	三島90→210図6	写真無。肩刺突隆帯？上長楕円形文連続
4484	福	荒屋敷	類大逆？	A1？		△			△		小片	3.8		○					段丘	半拠	三島90→211図1	写真無。肩浮線文状多重線
4485	福	荒屋敷	？	後葉？						？	小片	1.8		○					段丘	半拠	三島90→211図2	大型土偶足？
4486	福	荒屋敷	大逆出？	～A1						△	1/10	4.1				中空			段丘	半拠	三島90→211図4	写真無。脚太く丸く球状。爪先刻目列多
4487	福	荒屋敷	類結髪？	A1？		○	△				1/7	6		○					段丘	半拠	三島90→211図5	肩浮線文状沈線。乳房隆帯状？
4488	福	荒屋敷	類結髪？	A1？			△	△		○	1/7	8.5				表裏貼合せ	パ		段丘	半拠	三島90→211図6	パンツ区画。胴部に文様
4489	福	荒屋敷	類x字形？	C2			○				1/6	3.4				小形板状	線		段丘	半拠	三島90→213図4	正中刺突列。他にも刺突列。脇腹多重円
4490	福	町B	註32	～A1		△			△		1/8	4.4						住床	低段	拠点	郡山05→6図32	肩瘤突起。肩パット区画内多重円。刻目隆帯
4491	福	町B	註33	C2	△	○	○	○			4/7	19							低段	拠点	郡山05→206-21	★肛門刺突。間接隆帯刺突列。肩パット区画
4492	福	町B	後期以来？	B2？	◎	◎	◎	◎	△		4/5	6.3				小形板状			低段	拠点	〃262-652	頭頂二股。腰刺突2列。背中入組三叉文？
4493	福	町B	類x字形？	C2	◎	○	○	△			不明	5.6				小形厚板状	線		低段	拠点	〃262-653	正中刺痕列。顔無。体脇沿う沈線。裏T刺痕列
4494	福	町B	註33に同	C2？	△	○	◎	△			不明	12.5			割口	大形板状			低段	拠点	〃262-654	首黒付。沈線間刺突列。背中X渦巻文
4495	福	町B	類大逆出	C2				△		○	不明	3.3							低段	拠点	〃263-664	縄文地多重円。足台形様で裏楕円形
4496	福	町B	註33に同	C2		○	◎	○	○	○	4/5	11.8				★肛門刺突			低段	拠点	〃263-665	脇腹背中渦巻文。背中左右連続隆帯刻目列
4497	福	町B	？	C2？			◎	◎		○	不明	3.6							低段	拠点	〃329-760	腰隆帯刻目列。O脚。関節隆帯土偶の小型？
4498	福	町B	屈折B？	C2				△		○	1/6	8.5							低段	拠点	〃330-773	後後？腰縄文地沈線文。脹脛。爪先刻目3
4499	福	小滝	結髪T字？	弥前？	◎	◎	◎	◎	◎	？	不明	3.2				「下端欠損」			丘裾	散布	県教93→62図19	Y～T字棒状。無文。8.6g。土偶？註34
4500	福	沢目木B	註35	C2後半		○	○	○	○		不明	6.3	△	○		尻から管孔	線		谷底	半？	県教06→22-6	剥落多。正中刺突2列。腰縄文。肩パット？
4501	福	沢目木B	関節隆帯？	C2？					？		小片	2.8							谷底	半？	県教06→22-7	写真無。「腕」。刺突隆帯下三叉文
4502	福	沢目木B	？	中葉？						△	小片	1.6							谷底	半？	県教06→22-8	写真無。足不整楕円形。手づくね

第 11 表　北海道の土偶　（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	形　態	時　期	部　位						残存率	現長 cm	接合	付着物		つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺　跡		掲載箇所	備　　考
					頭	胸	腹	腰	腕	脚				赤	黒				立地	評価		
h232	北	朝日	？	晩期？			不	明			不明	2.4				板状			低？	半？	道埋15図Ⅴ-38の6	縁取って刻目、短沈線。粘土添付上十字文
h233	北	朝日	屈折B？	C2？						△	小片	4.3							低？	半？	道埋15図Ⅴ-38の7	爪先刻目列
h234	北	朝日	屈折B？	C2？						△	小片	3.9							低？	半？	道埋15図Ⅴ-38の8	爪先刻目列
h235	北	朝日	タン板？	後葉？		△	◎	◎		◎	3/5	11	△			大形板状			低？	半？	道埋15図Ⅴ-38の9	腰括れ強い。胸から下刺突地に幾何学文様
h236	北	朝日	小型無文	晩期？	○	○	△	△	△		4/7	5				小形板状			低？	半？	道埋15図Ⅴ39の10	★肛門刺突。頭B突起様陰刻？
h237	北	梅川4	タンネ板	A1？		○					1/7	7.4				大形厚板状			丘？	半？	道埋14図Ⅳ-2-123-5	★同一2片。表裏縄文、片面上多重線
h238	北	梅川4	タンネ板？	C2後？					○		小片	4.1		○		板状			丘？	半？	道埋14図Ⅳ-2-123-6	図90°異なる？　表裏沈線（片面縄文地）
h239	北	梅川4	タンネ板？	C2後？		？			？		不明	7.2		○		板状			丘？	半？	道埋14図Ⅳ-2-123-7	図90°異？　表裏縄文、片面上工字意匠沈線
h240	北	「ワニシ」	聖山系？	聖山？	○						不明	4.2							？	？	松田13→図1	側頭部突起列。後頭部貼付に貫通孔2
h241	北	栄浜3	？	中葉？		△					不明	3.6							海段	半？	八雲08→197	写真無。無文？
h242	北	栄浜3	類小遮？	中葉	△	○	◎	◎	○	○	7/10	4.8							海段	半？	八雲08→198	★肛門刺突。胸と腰一周隆帯。手先二股
h243	北	栄浜3	類屈折B？	中葉	◎	○	○				不明	7.2				板状	線		海段	半？	八雲08→199	頭円形。縄文地刺突列、沈線文。類例h73
h244	北	栄浜3	類小遮？	中葉？	◎	○	○				1/3	4.9							海段	半？	八雲08→200	★肛門刺突。胸一周隆帯剥落。無文？
h245	北	栄浜3	類屈折B？	中葉		△			△		不明	3.8		○					海段	半？	八雲08→201	表裏一筆書き状曲線文様。h73類例？
h246	北	栄浜3	類小遮？	中葉		◎	◎	◎	◎	◎	4/5	4.3							海段	半？	八雲08→202	★肛門刺突。胸腰一周隆帯。四肢先B突起状
h247	北	栄浜3	在地小遮？	中葉	◎	◎	◎	○	◎	◎	9/10	6.6		○					海段	半？	八雲08→203	★頭横貫通孔、肛門刺突。腰一周隆帯。註36
h248	北	栄浜3	類小遮？	中葉	△	◎	◎	◎	◎	○	4/5	6.2				肛門浅刺突	線		海段	半？	八雲08→204	正中線両端渦。腰隆帯。胸背文様。註37
h249	北	新道4	聖山？？	中？？		○	○	△			1/2	5.4				板状		住覆	海段	半？	道埋15図Ⅳ-25の96	後期後葉住。摩耗。胴腰間沈線→パンツ？
h250	北	新道4	聖山？？	中？？					△		小片	3.2						住覆	海段	半？	道埋15図Ⅳ-25の97	後期後葉住。摩耗。肩からL字垂下。無文
h251	北	新道4	屈折像B	C2？					○		小片	3.5							海段	半？	道埋15図Ⅳ-25の98	手先刻目5。無文。丁寧なつくり（ミガキ？）

h242・h246・h247：栄浜３（北海道）
4490・4494・4496：町Ｂ（福島）
4459・4462～4464：宮畑（福島）
4371・4387：北小松（宮城）
4500：沢目木Ｂ（福島）
4458：勝口前畑（福島）
2215：三貫地（福島）
1051：東裏（岩手）
968：九年橋（岩手）

第１図　北部三県以外の土偶ほか（出典は表参照）

第 12 表　北部三県・晩期前葉以降を主体とする遺跡の補遺　（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	県	遺跡名	形態	時期	部位						残存率	現長cm	接合	付着物		つくり（製作痕）	女性	出土位置	遺跡		掲載箇所	備考
					頭	胸	腹	腰	腕	脚				赤	黒				立地	評価		
4503	青	亀ヶ岡	小遮	～BC2		◎	◎	◎	◎	◎	3/4	8.3							砂丘	拠点	歴博15→図65	肩張短足系列。背中菱形文二段。黒光り
4504	青	亀ヶ岡	大逆変	第Ⅱ？	△	△	△				1/6	7.1				中空			砂丘	拠点	歴博15→図66	口耳後頭貫通孔。顎胸刻目隆帯。縄文地文様
4505	青	亀ヶ岡	小遮	BC2？	◎						1/6	4.6		○					砂丘	拠点	歴博15→図67上	頭頂B突起三叉文。後頭、首裁痕列
4506	青	亀ヶ岡	小遮系列？	C2古？	◎						不明	3.1							砂丘	拠点	歴博15→図67下	大遮模倣系列？→頭頂丸玉状突起4。
4507	青	亀ヶ岡	大逆変	第Ⅱ？	○						1/9	4.5				頭平坦			砂丘	拠点	歴博15→図68上	頭頂突起列。眉目縄文。後頭雲形文。口貫通
4508	青	亀ヶ岡	大遮	BC2？	△						小片	4.6		→		中空			砂丘	拠点	歴博15→図68左	★黒漆+赤彩。口貫通孔。額縄文。顎竹管文
4509	青	亀ヶ岡	註38	C2前半	△	◎	○				2/5	7.6				大形板状	線		砂丘	拠点	歴博15→図69	正中刺痕列。表輪郭線。裏雲形文等
4510	青	亀ヶ岡	x字変形	C2新？	○	◎			◎		3/7	5.2				小形板状	乳		砂丘	拠点	歴博15→図70下	天地逆。顔無。手づくね無文。類例1193
4511	青	亀ヶ岡	小型無文？	C2？	◎	○			○		不明	2.7					乳		砂丘	拠点	歴博15図71最上	双頭。丸い乳大。晩期でない？
4512	青	石名坂	小遮	BC2？	○						1/7	5.5				頭中空？			丘陵	拠点	黒石87→39図1	写真無。胴長系列？　後頭、首裁痕列、沈線
4513	青	上尾駁(1)	結髪変？	A1？	○	◎	◎	△			不明	8				後頭深刺突	◎		低段	半？	県教88→102図1	正中刺痕列？、パンツ内条線。胸刻目隆帯
4514	青	上尾駁(1)	結髪？	A1？		△			○		小片	4			不明				低段	半？	県教88→164図7	手表現無。腕先貫通孔。肩～胸沈線間刻目
4515	青	二ツ森貝塚	屈折像B	C2			○	◎			1/5	5.3					◎		高？	散？	七戸07→46-22	正中沈線、パンツ区画内条線？
4516	青	明戸	結髪？	A1？	○						1/8	3.3							低段	半？	十和83→7図13	頭T字状
4517	青	明戸	屈折B？	C2？	◎	◎	◎	○	△		不明	5.3					パ		低段	半？	十和83→7図14	★顔凹で細部表現無。パンツ内短沈線
4518	青	明戸	x字形	C2古？	◎	◎	◎	◎	◎	◎	完形	4.9				小形板状	線		低段	半？	十和83→7図15	正中線系列。正中沈線。無文。目鼻断続線
4519	青	明戸	屈折B？	C2？			○	○			不明	6.9					線		低段	半？	十和83→7図16	正中～腹隆帯(腹△凹み)。首隆帯。無文
4520	青	明戸	屈折B？	C2？	△	○	○		△		不明	4.7					◎		低段	半？	十和83→7図17	胸▽区画～正中沈線。乳突出。腕と手間沈線
4521	青	明戸	x字形	C2古？		◎	◎	◎	◎	◎	3/4	2.2		○	割口	小形板状	◎		低段	半？	十和84→60図1	▼凹？正中刺突列。裏対向△彫去。手足B突起
4522	青	風張(1)	結髪	A1～		△					小片	4.4						住覆	段？	註39	八戸08→26図8	後期住。背中片。縦線対称に竹管状刺突2列
4523	青	是川	屈折像B	C2			△	△			1/8	8					パ		低？	拠？	歴博15→図112	図天地逆。パンツ内縄文。ミガキ？
4524	青	是川	大遮	C1古？				△		△	小片	5				中空			低？	拠？	歴博15図113上	下腹渦巻文裁痕列磨消縄文。脚との境突起列
4525	青	是川	大遮変？	Ⅲ古？	？	？					小片	3.3				中空			低？	拠？	歴博15図113中	右肩？　隆帯刺突列。腕先？磨消縄文
4526	青	是川	結髪？	A´古？		△					小片	4.3				中空			低？	拠？	歴博15図114上	乳房隆帯上沈線。腕元沈線。背平行沈線
4527	青	寺下	大遮祖？	B1新？		○	○		△		不明	3.8			割口		線	住覆	斜面	半？	階上07→13図20	正中隆帯。磨消縄文(魚眼状文、三叉文)
4528	青	寺下	類大逆出	A1？	◎	△			○		1/5	7.8							斜面	半？	階上07→64図35	頭頂二山突起。肩沈線。胸縄文帯？眉直線
4529	青	寺下	小型無文？	～初？	○						不明	3							斜面	半？	階上07→64図36	鼻大。目口短沈線。耳貫通孔。後期？
4530	青	寺下	大逆出	A1	△						小片	2.8							斜面	半？	階上07→64図37	目刻目貼付下弧線。後頭部三本線
4531	青	寺下	x字形	～C1？	◎	◎	◎	◎	△	◎	略完	4.3				小形板状			斜面	半？	階上07→64図38	陰刻文系列。陰刻多い。乳瘤突起
4532	青	寺下	小遮系？	C2古？	○						1/7	2.4				頭のみ中空			斜面	半？	階上07→64図39	頭側突起。目沈線？
4533	青	寺下	小型無文？	後後～		○	◎	◎			不明	6.1							斜面	半？	階上07→64図40	乳瘤貼付、他無文
4534	青	寺下	類x字？	C2古？	◎	○	◎	○	◎	◎	略完	5.8				小形板状			斜面	半？	階上07→64図41	目楕円沈線。★体貫通孔3。四肢突起。文様
4535	青	寺下	類x字？	C1新？	○	△	△		○		不明	5.8				小形板状			斜面	半？	階上07→64図42	目楕円沈線。★体貫通孔。腕B突起。蔓文
4536	青	寺下	小型無文？	後後～	○	○	◎	◎	◎	○	一欠	8.4				★管孔4			斜面	半？	階上07→64図43	頭頂、肛門、口？、腹管孔。口？、臍貼付。註40
4537	青	寺下	小遮	C1古？	△	○	○	○	○	○	2/5	8.8			割口	首に黒付			斜面	半？	階上07→64図44	肩張短足系列。首腕裁痕列。蔓状文様
4538	青	寺下	？	？		△					小片	2.5			割口	乳？黒付			斜面	半？	階上07→64図45	首肩隆帯。後期末かC2式古頃の小遮？
4539	青	寺下	大遮変？	C2古？		？					小片	1.8				中空			斜面	半？	階上07→64図46	縄文地雲形状沈線
4540	青	寺下	結髪？	A1～		△			○		小片	3							斜面	半？	階上07→64図47	肩～手。突起状無文
4541	青	寺下	大遮	～BC2		△					小片	6			割口	中空			斜面	半？	階上07→64図48	第一系列。背中片。磨消縄文(方形入組文)
4542	青	寺下	結髪？	A1？		△					小片	4.4				中空	乳		斜面	半？	階上07→64図49	胸～背中刻目隆帯。2011類例。大逆出？
4543	青	寺下	大遮変	第Ⅰ？		△			○		小片	4				中空			斜面	半？	階上07→64図50	肩刻目隆帯。肩沈線文。腕中実
4544	青	寺下	後期以来？	後末？		○			○		不明	2.5					線		斜面	半？	階上07→64図51	正中沈線。背中対向弧線
4545	青	寺下	後期以来？	後末？		△			○		不明	2.5							斜面	半？	階上07→64図52	腕との境平行線。手先に向かって尖る
4546	青	寺下	小遮？？	～C1？					○		小片	3							斜面	半？	階上07→64図53	手B突起(弧線陰刻)。小遮にしては粗雑
4547	青	寺下	大逆出？	A1？				△		△	小片	6				中空			斜面	半？	階上07→64図58	腰脇？曲線文。脚との間三本線
4548	青	寺下	大遮変？	C2古？				△		○	不明	4.4				輪積中空			斜面	半？	階上07→64図59	無文。大遮変の表面剥落摩耗？？
4549	青	寺下	屈折A？	後末？			△	○		○	不明	4.2				足先前へ	パ		斜面	半？	階上07→64図60	パンツ区画線。腰脇円形沈線。腹剥落。小遮？
4550	青	寺下	大遮変？	C2古？						△	1/7	6.3				中空			斜面	半？	階上07→64図61	無文だが脚の途中に隆帯めぐり上に刺痕列
4551	青	剣吉荒町	刺突文系？	後～末				△		△	不明	4.8		○					低段	半拠	県教15→図30-3	足との間沈線。腰～脚縄文
4552	青	剣吉荒町	結髪	A2～？			△	△			1/10	3		○		脚中空？	◎		低段	半拠	県教15→図30-4	パンツ内刺突。正中刺痕列？
4553	青	剣吉荒町	結髪	A2～？		△	△				小片	4.8		○		中空			低段	半拠	県教15→図30-5	写真無。天地逆？右背中？　二重つ意匠文
4554	青	剣吉荒町	結髪？？	後～末						△	小片	1.2				脚中空？			低段	半拠	県教15→図30-6	写真無。大逆出土偶？
4555	青	剣吉荒町	結髪？？	後～末						△	小片	1.5				脚中空			低段	半拠	県教15→図30-7	大逆出土偶？
4556	青	(宮沢頭)	結髪	A1？	○						1/7	7				中空			段丘	？	県埋97→98-129	頭頂短沈線。後頭刺突多。耳貫通孔
4557	岩	浅石	刺突文系？	弥中期				？		？	不明	6							段丘	註41	県埋02→317	中期中葉。腰？刺突帯。足楕円形。足裏刺突
4558	岩	城内	大逆出？	C2中？		△			○		1/8	3.3				中空			堤防	半拠	紫波85→27図9	磨消縄文合体型？手短沈線。後期後半に誤り
4559	岩	城内	大逆出？	C2中？						△	1/8	4.3				中空			堤防	半拠	紫波85→28図12	無文。ミニチュア土器と勘違い
4560	岩	安堵屋敷	類x字？	C2前半		○	○	○			不明	9.2				板状	線		堤防	半拠	県埋84DR138-1	正中線刻目隆帯。脇腹多重線。背中二重弧線
4561	岩	大洞地	結髪	A´新？		△					小片	3.8						住状	低段	小？	大東04→18図16	床面出土。背中平行線刺突列。胸も刺突列？
4562	岩	大洞地	x字？註42	後葉～	△	○	◎	◎		△	7/10	6.8				小形板状	線		低段	小？	大東04→24図80	正中刺突列。背6文。輪郭沿う平行線。股刺突
4563	岩	大洞地	結髪？？	後葉～		△			○		不明	3.2							低段	小？	〃29図131	腕と肩の間隆帯上刺突列
4564	岩	大洞地	結髪？？	後葉～	△						小片	2.8							低段	小？	〃36図212	眉鼻目口貼付、鼻以外上刻目列
4565	岩	大洞地	結髪？？	後葉～					○		小片	2.7							低段	小？	〃36図213	多重線、一部三角意匠。土偶でない？？
4566	岩	大洞地	刺突文	青木？		◎	◎	○			2/3	7				★肛門孔			低段	小？	〃36図225	正面文様無。裏磨消状刺突。背中沈線
4567	岩	水無Ⅰ	結髪？？	後葉？				○			不明	3						住？	丘？	小？	大東05→図307	第35図307。ガニマタ。無文
4568	岩	水無Ⅰ	結髪	？	○						不明	4.4				首下中空？			丘？	小？	〃42図353	おかっぱ状結髪沈線端刺突。目口短沈線
4569	岩	水無Ⅰ	結髪	～A2？		○					1/4	4.7				板状	線		丘？	小？	〃51図355	正中6、背中にも。肩方形区画内竹管2列
4570	岩	水無Ⅰ	結髪	～A´？	○	◎	◎	○			4/7	11.3				脚巨大	◎		丘？	小？	〃51図372	正中6、パンツ内刺突。首飾沈線刻目。肛門孔
4571	岩	水無Ⅰ	結髪	～A´？	△	○	◎	○	△	○	7/10	8.3					●		丘？	小？	〃51図373	▼線。正中6裏も。パンツ内刺突。首飾線。つ文
4572	岩	水無Ⅰ	小結髪？	後葉？				△		○	不明	3.6							丘？	小？	〃62図412	腰脇？曲線文
4573	秋	神谷地	大遮	BC2？	△						小片	3.3			割口	中空		土坑	堤？	拠点	横手15図171-14	写真無。目丸い。目下黒付。後頭部裁痕列？
4574	秋	神谷地	小型無文？	前？	○						不明	3.2						土坑	堤？	拠点	横手15図182-1	写真無。★口貫通孔。鼻貼付。目凹
4575	秋	神谷地	小遮	BC2？	△	○			○		1/7	3.8						〃	堤？	拠点	横手15図182-2	写真無。肩張短足系列。腕裁痕列。手B突起
4576	秋	神谷地	小遮？？	BC2			○	◎		◎	3/10	8.8				中空		〃	堤？	拠点	横手15図182-3	大遮模倣系列？大遮？　C字文多
4577	秋	神谷地	小型無文	前？	◎	◎	◎	◎	◎	○	略完	3.2				口肛門管孔	線	〃	堤？	拠点	横手15図182-4	写真無。★口？盲孔から正中線。背中円形凹
4578	秋	神谷地	後期以来	B1？		△			△		1/10	10.7			割口	中空	乳	〃	堤？	拠点	〃図188-120	大遮祖？乳丸大。磨消縄文陰三叉文。註43
4579	秋	神谷地	大逆出	第Ⅳ？			△	△			小片	3.4				中空			堤？	拠点	横手15図209-4	写真無。磨消縄文
4580	秋	神谷地	小遮？？	BC？					△		小片	3.7			割口	中空			堤？	拠点	横手15図209-5	写真無。腕途中平行線。手B突起。2357類例？
4581	秋	神谷地	大逆出	V～A1	○						小片	4.3				中空			堤？	拠点	横手15図209-6	写真無。頭頂突起。後頭多重線
4582	秋	相野々	大遮	C1新	◎	○			◎		2/5	12		○		中空			？	？	横手08→40	肩突起列2。背中の文様意匠不明(摩耗？)

９→11、11→７、12→９、13→８、14→12。

・青森県弘前市蔵主町遺跡（第８表4046）（青森県教育委員会　2014）

近世の城下町を主体とする遺跡で大幅に改変され、縄文時代は遺物の出土のみで、当時の様子を窺うことができない。

・青森県旧平賀町石郷遺跡（第８表4047～4065）（平賀町教育委員会　1979）

後期中葉以前に遡りそうな土偶が見られるが（報告書：第62図３、８、11？）、報告書には、後期末以前の土器にはふれておらず（p.23）、掲載土器も瘤付第３期以前のものは見られないので、土偶もこれ以降のものとして扱った。報告書第62図６（に相当する図）、第62図12は、土偶かどうかはっきりしないので割愛した。第62図14は、女性器形土製品なので割愛する。

・青森県西目屋村川原平(1)遺跡（第８表4066～4071）（青森県教育委員会　2006）

試掘調査結果で、現在本調査が行われ膨大な遺物が出土している。晩期初頭の土偶に恵まれ、本来なら、この報告書が刊行されてから本稿を草すべきだったが、致し方ない。時期によるものか、人面付土器が多い。

・青森県階上町滝端遺跡（第８表4073～4098）（階上町教育委員会　2000）

「土偶とその情報」研究会集成資料重複分については割愛した（第２表1470～1475、1477）。報告書第64図６～10は、頭頂部の形状、目鼻の表現から、後期後葉と思われるので割愛した。第65図16は、肩等の輪郭、乳房の形から、後期後葉と推測される。背中の平行沈線は、この時期同じものは見られず懸念されるが割愛する。第65図20は、積極的な根拠はないが、膝頭を表現し無文であることから後期後葉と判断して割愛した。第66図31は、乳の大きさと背中の磨消縄文から後期中～後葉、32は、正中～臍の貼付、膝頭の表現から、後期後葉の可能性が高いので、割愛した。36も、後期後葉の可能性が高いと判断して割愛した。

・岩手県軽米町上野場３遺跡（第８表4103～4113）（(財)岩手県文化振興事業団　2006）

無文の小破片が多く特定しにくいが、掲載土器を見る限り、本稿の対象期以外はほとんど見られないので、明らかに時期が異なる場合以外は資料に含めた。

・岩手県軽米町長倉Ⅰ遺跡（第８表4114～4217）（(財)岩手県文化振興事業団　2000）

313点出土し、255点掲載されている（報告書：p.209）。縄文時代後期前葉～晩期中葉の土器が主に出土し、後期後葉までが多い。したがって、後期末以降の可能性が高いものを扱うことになるが、現時点で後期後葉と末の違いを掴み切れないでいるため、後葉の土偶も多く含んでいると推測される。時期推定のしにくい小片は割愛することにした。観察表に重さが記されていないのが残念である。第315図2503は、土偶として扱われているが、蓋様の摘み状の部分の両面に顔が描かれたもので、本稿では土器の一部と判断して割愛した。第317図2548は、土器の一部と判断した。第317図2551も、透かし彫り状に貫通孔が認められ、土偶に相当する部位を求めるのは難しいことから割愛した。

・岩手県軽米町駒板３遺跡（第８表4218～4219）（(財)岩手県文化振興事業団　2009）

縄文時代後期後葉～末の集落跡だが、竪穴住居跡が10棟も検出されている割に出土土器は、他時期も含め42×32×30㎝コンテナ約11箱と少ない。土製品、石製品の出土も少なく、最も多いのは無文の環状土製耳飾で、11点出土している。その他には、人面付香炉形土器、ヒスイに見える勾玉などがある。当該期は、遺跡数、住居数、遺物量も少ないので、これでも十分拠点集落なのかもしれない。

・岩手県一戸町大平遺跡（第８表4220）（一戸町教育委員会　2006）

当該期の掲載土器は少ないが、「十腰内Ⅵ群土器」のみで（報告書：p.181）、瘤付土器第Ⅳ段階を含む可能性はあるが、後期後葉土器の出土はない。

・**岩手県盛岡市小屋野遺跡**（第８表4221）（(財)岩手県文化振興事業団　2012）

出土土器は後期中葉の割合が比較的高く、土偶も後期中葉の可能性のあるものを削除した結果、４点中１点しか該当しなかった。

・**岩手県平泉町泉屋遺跡**（第８表4224～4225）（(財)岩手県文化振興事業団　2001）

奥州藤原氏の時代（12世紀）を中心にした遺跡である。縄文時代は、大洞Ｂ１式古期の土器埋設遺構１基、縄文時代の可能性のある土坑14基、土器は42×32×30cmのコンテナで21箱出土し、後期前～中葉、晩期初頭を中心にした後期後葉（瘤付土器第Ⅱ段階）～晩期前葉（大洞Ｂ２式）土器が出土しているが、後者は晩期初頭以外は僅かである。立地と調査結果からは晩期初頭の格付けが難しい。土・石製品の出土は少ないが、人面付注口土器（報告書第１分冊：第115図）や装飾品の出土から、半拠点集落の可能性を考えた。

報告書第２分冊第93図786は、土偶でないと判断して割愛した。

・**岩手県一関市伊勢堂Ⅲ遺跡**（第８表4226～4243）（一関市教育委員会　2010）

後期中～後葉、特に後葉の土器は比較的多く掲載されているので、本稿では、後期末以降の可能性が高いものにとどめ、小片ではっきりしないものは扱わなかった。なお、報告書第30図８は、天地逆で、瘤付土器の深鉢口縁部突起であろう。第32図23も、土器等の一部と思う。

・**秋田県北秋田市二重鳥Ｂ遺跡**（第８表4246～4261）（北秋田市教育委員会　2009）

当該期は、瘤付土器第Ⅲ段階～大洞Ｂ１式新段階までしか掲載されていないようである。報告書で「土偶耳たぶ？」とされた（p.154）第119図716は、写真が掲載されていないので確認できないが、土偶に見えないので割愛した。第154図1154は、縄文時代中期末のため割愛した。

・**秋田県旧山内村虫内Ⅰ遺跡**（第８表4262～4276）（秋田県教育委員会　1998）

『資料集』に速報的にトレース前の図が掲載された分については、本稿⑵で扱っている。その際にもふれたが、なぜか『資料集』にあって報告書に掲載されていない土偶がある（秋田34の３、７、８）。報告書282図版８は、写真がないので不確実だが、図を見る限り土器の一部で土偶とは見えないので割愛した。

・**秋田県旧象潟町ヲフキ遺跡第２次調査**（秋田県教育委員会　2001）

出土した土偶（報告書：第100図19）は「大木７ｂ式前後に属する可能性が強い」（報告書：p.38）とされるが、その特徴から後期中葉を中心にした時期のものと考える。第３次調査の結果（第８表4277～4298）から後期後葉以降の可能性もあるが、小片のため割愛した。

・**秋田県旧象潟町ヲフキ遺跡第３次調査**（第８表4277～4298）（秋田県教育委員会　2003）

出土土器は、僅かな前、中期土器片もあるが、後期前～晩期前葉がほとんどで、その中でも後期中葉～後葉の初め（瘤１～２期）を主体とする。土偶は小片が主体なので、注意を要する。769は、文様から中期末？、818は文様から中期末、820、821は、結髪から後期前葉、850は形と装飾から後期前葉、766、773～777、787、789、797、798は、顔の形、肩の刺突、腰の鋸歯文当から後期中葉、840は文様から後期後葉（瘤１期）と判断して割愛した。846は、腰の張り出し、刺突２列で文様を描く手法から、後期中葉と判断した。Ｓ字という意匠はほとんど見られないが、宮城県入大遺跡例（『土偶とその情報』研究会　1994：宮城図版26の８）にある。847は、腹部が大きく膨らんで表現されていることと鋸歯文から、同じく後期中葉と判断した。「土製品」とされたその他の中にも（857。855も？）、土偶の可能性のある破片が見受けられるが、写真が掲載されていないので、決め手に欠ける。

770と778は、背中にタスキ状入組文を持ちながら、770は腰に鋸歯文、778は腰を張り出すというプロポーションが後期中葉の特徴を示している。これは、幅広の縄文部を残す瘤付１期土器の特徴に共

通し、本例はこの時期に相当しよう。いずれにしろ、主体となる土器の時期から、後期末以降まで下るものは少ないと判断されるので、はっきりしないものは割愛することにしたい。

・秋田県湯沢市堀ノ内遺跡（第８表4299～4333）（秋田県教育委員会　2008）

総数56点（48個体）出土したそうだが、43点しか掲載されていない（報告書：p.156）。写真はさらに少なく、確認できなかったため誤認している資料が存在している可能性がある。後期中葉の土偶は割愛した。報告書第120図１は、当該期には珍しい岩偶で、完形に近い（砂質凝灰岩製）。第303図２は、腕のみの岩偶破片だが、土偶のそれに似る（流紋岩）。第194図２は、瘤付第５期の人面付注口土器である。

第104図16の土偶は、脚から足先へ連続しており、こうした特徴は後期前～中葉に顕著なので（『土偶とその情報』研究会　1994：萢内、立石、新山権現社遺跡など）、割愛した。

秋田県横手市オホン清水Ａ遺跡で、当該期の背中に入組文を持つ土偶が数点出土しているようだが（横手市　2007：第５図）、報告書（横手市教育委員会　1984、2005）を見ることができず、断念した。なお、本資料は、『土偶とその情報』研究会の資料集でも（1994、1996）、土偶研究会の集成（山田　2007）でも転載されていない。

４．宮城県の土偶

相原（2007）によれば涌谷町ツナギの沢貝塚で小型遮光器土偶が出土しているが、報告書（涌谷町教育委員会　2004）が当センターにも岩手県立博物館にもなく見ることはできなかったので割愛した。『土偶とその情報』研究会（1996）に掲載された本稿⑵第２表2028の新江川遺跡出土の類結髪土偶頭部が、改めて『古川市史』（古川市　2006）に掲載されたそうだが（相原　2007）、今回見ることはできなかった。本稿⑵で扱った第２表2109は、『土偶とその情報』研究会（1996）では「嘉倉貝塚」出土とされていたが、後に「倉崎貝塚」に訂正されている（佐藤　2013）。立地は変わらず、「評価」は情報が少なくて不明である。また、「頭頂部には僅かに赤彩の痕跡が認められる」とされた（同：p.4）。

以下、第９表の補足を行う。

・旧田尻町北小松、愛宕山、諏訪遺跡（第９表4344～4357）（宮城県教育委員会　2010、2011）

複雑に開析された低丘陵とそれに取り囲まれた沖積地からなる。調査は圃場整備に伴って行われ、丘陵裾を中心に遺構、遺物が発見されている。主として丘陵の広がりに従って別々の遺跡として括られているが、一連のものである可能性もある。

・旧田尻町北小松遺跡（第９表4358～4388）（宮城県教育委員会　2014）

上記参照。良好な資料を層位的に取り上げ報告しているため、今後の研究に大いに寄与するものと思われる。ただし、報告書には、型式学的吟味を経ずに出土層だけで時期を判断する例が認められる。また、地点別に報告されているため、出土土偶の全体数を把握しにくく、今回脱稿直前に取りこぼしに気づいて表の番号の打ち直し、多くの訂正を強いられた。

オールカラーの写真図版が素晴らしく、「サメ歯装着具」という貴重な出土品がある。大洞Ｂ２式～Ｃ１式土器の出土が少ないのである意味当然だが、これだけの出土量がありながら遮光器土偶が１点も出土していないことが注目される。

報告書第136図３は、胴部の刺突から後期後葉以前と推測され、同４は、腰のあたりの形が後期前葉のそれに似ているので、割愛した。後期後葉以前の土器の掲載は少ないが、報告書第81図２は後期後葉、同16は後期中葉と思われる。報告書第137図１、13の頭部破片は、「動物形土製品」とされている。土偶の可能性もあると思うが、見慣れないので割愛したい。報告書第234図１の土偶は、同じ個

所から後期中葉の土器が出土していることもあり（第187図１）、山形土偶と判断した。

宮城県では稀な後～晩期の土偶多出遺跡である。岩手県境から20㎞程度しか離れていないのに様相は既に大きく変化していて、東北地方北部の“流儀”で判断できず時間を要した。ただし、ほぼそのままの土偶もあり（第９表4367、4374、4387）、それが在地化した土偶（4362、4369、4377、4388）、それらとはあまり関係のない在地の土偶（4368、4371、4373 ？、4375 ？、4385）が混在する。

土面が出土している（報告書：第133図８）。左目縁～端の小片なので不明瞭だが、確かに土面の中では鼻曲り型に最も近いように思われる。そうすると、これまでの分布を大幅に南に広げることになる（約100㎞）。また、刻目を持つ眉の特徴から、大洞Ｃ２～Ａ１式期に相当する可能性が高く、湾曲することが特徴な眉がほぼ水平になっていることから､「新しくなるとおとなしく横に座ってくる」（金子　2001：p.170）という変遷観に合致し、この点で今のところ最も新しい例の可能性がある。なお、報告書第236図９の「動物形土製品（イモムシ）」は、その可能性は低く、腕飾りの可能性のある第五段階（大洞Ｃ２式後半）の弧状土製品と思われる（金子　2009）。

・旧高清水町萩田遺跡（第９表4389）（宮城県教育委員会　2000）

古代以降の複合遺跡で、さらに開田時に大幅に破壊されているため詳細不明。

・旧鳴瀬町里浜貝塚西畑地点（第９表4390～4396）（小井川和夫・山田晃弘　2002）

里浜貝塚西畑地点の調査は六次にわたって行われたが、報告書は第１～３次分しかなく、これは、それ以降の報告とされる（小井川･山田　2002:pp.1～２）。しかし､土偶については､第１～３次分（東北歴史資料館　1983）の再掲載が主体を占め（同：９図１、５～８、12）、何より残念なのは、観察表や個々の記載がないことである（同:p.50）。なお､９図３の土偶は､『土偶とその情報』研究会（1996）に掲載されていたため、本稿⑵第２表2042として示した。

・旧鳴瀬町里浜貝塚西畑地点（第９表4397）（鳴瀬町教育委員会　1998）

表には示さなかったが、もう１点土偶が出土している。肩パットらしき部位に多くの刺突が施されるが（報告書：図版35の508）、写真のみで詳細不明なため割愛した。

・東松島市里浜貝塚寺下囲地点（東松島市教育委員会　2010）

土偶が１点出土している（報告書：第８図19）。脚のみの破片だが、その湾曲する形と刺突から後期後葉と判断し割愛した。当該期の土器も掲載されている（同：第７図５、６、第８図５）。

・蔵王町鍛冶沢遺跡（第９表4401～4420）（宮城県教育委員会　2010）

遺物包含層出土土器は、後期中葉～晩期末まで、それほど大きな変動もなく出土している。それに対し、明確な晩期土偶は１点も見られない。ただし、北部三県後期土偶の特徴を明確に有してもいない。そこで、明らかに後期後葉以前と判断されるもの以外は資料に含めることにした。

土偶は貧弱だが、瘤付土器第Ⅱ段階の貝形土製品（報告書：図版15の７）や内面渦状石製品（図版171の６、７）などの貴重な遺物が出土している。７は盤形に近く、そうすると筆者の編年が間違っていたことになるが（金子　2011）、もう一点に比べて大きく浅皿形の未成品の可能性もあるのではないかと考える。浅皿形の石製品は、東北地方南部でも福島県荒屋敷遺跡で既に発見されている（金子　2011：第４図36）。

５．山形県の土偶

表に示した以外に、長井市中里遺跡から晩期前葉の土偶が出土している由だが（小林ほか　2004）、報告書（長井市教育委員会　2003）が埋蔵文化財センターにも岩手県立博物館にも寄贈されておらず、また出土土偶は脚部のみの小片であるため、割愛することにした。以下、第10表の補足をする。

・**遊佐町小山崎遺跡**（第10表4421～4422）（遊佐町教育委員会　2015）

掲載土器は、縄文時代後晩期では後期前～中葉がほとんどを占めるので、土偶も後期末以降と特定できないものは割愛した。

・**真室川町釜淵Ｃ遺跡**（第10表4423～4433）（(財)山形県埋蔵文化財センター　2003）

表に示した以外に、写真のみ掲載された資料がある（報告書：写真図版80の14、15）。両方とも大型遮光器系土偶の腕部破片だが、片面写真のみで詳細な記載もないので割愛した。

・**村山市宮の前遺跡第３次調査**（第10表4434～4446）（(財)山形県埋蔵文化財センター　1999）

報告書第117図７の土偶は、肩が水平方向に張り周囲に文様がない。肩が張るものは晩期にも多いが、そのほとんどは文様を持ち、逆に無文に近い晩期中葉の屈折像Ｂ類の肩は水平方向に張らない。乳房が小さめなのが気がかりだが、本稿では後期中～後葉と判断して割愛した。第117図９の図からは現物がイメージできず写真もないため割愛した。第118図14は、当該期の「手」としてはあまり見られないもので、突起や縄文が施されている。確証はないが後期末以前として割愛した。第118図15、16、18も、後期末～晩期でない可能性が高いが、あまり特徴がなく、そうでない確証もないので資料に含めた。

・**村山市作野遺跡第３次調査**（第10表4447～4452）

第２次調査報告書（(財)山形県埋蔵文化財センター　2011）掲載土偶（第66図１）は、報告書では「後期末葉の瘤付土器Ⅲ～Ⅳ段階」とされているが(p.42)、小林圭一氏の言うとおり（小林　2012:p.39）後期後葉と思われるので割愛した。

・**寒河江市高瀬山遺跡（HO 地区）**（第10表4453）（(財)山形県埋蔵文化財センター　2005）

報告書第289図５の棒状土偶は、口から下に向かって貫通孔が認められ、後期末～晩期の動物形中空土製品に共通する（金子　2001：第22図）。本例も当該期の可能性があるが、この土偶が出土した11区から晩期初頭前後の土器は、晩期前葉の土器片が僅かに認められるだけで（第287図５）、ほぼ出土していない。

・**天童市砂子田遺跡第２・３次調査**（第10表4454）（(財)山形県埋蔵文化財センター　2003）

出土土器は、時期による偏りを見せ、後期中葉～後葉、晩期後葉大洞Ａ２式という二つの集中時期があるが、晩期初頭も僅かに出土しているので（報告書：第138図1210～1212）、調査区域外にこの間をつなぐ土器が埋もれている可能性もある。ただし、本稿では概ね実態を示しているものと判断し、晩期でないと判断された土偶は後期後葉以前として割愛した。報告書第185図24は出土位置から後期後葉の可能性が高い。23は文様から、26は形から、後期後葉と判断して間違いないと思う。25は、形から後期後葉の方が可能性が高いと思われる。確信は持てないが、上述の判断から割愛した。なお、小林圭一氏も同様の判断を示している（2004：p.3）。

・**小国町下叶水遺跡**（(財)山形県埋蔵文化財センター　2009）

後期後葉～晩期後葉の拠点集落で、掲載土器は後期後葉が最も多いが、その他の時期もそれほど遜色がなく、晩期の土偶が出土していても不自然でない。しかし、新潟県境ということで、その方面の影響が強いせいか（小林　2010：p.53）、東北地方の流儀で捉えられる晩期土偶がない。その他の土・石製品には晩期のものが確実に存在する。例えば、土版（報告書:第188図２）とボタン状石製品（同:６）は東北地方北部と全く遜色がなく、前者は稲野彰子氏第４～５類中間（大洞Ｃ２式期）（稲野1983）、後者は筆者のⅢｂ（大洞Ｃ２式古）期に相当する（金子　2010）。その他は変異が大きいが、報告書第187図20の美々４型中空動物形土製品もどきは、全体形と文様から大洞BC２式期頃（金子2001：pp.154～157）、第188図１の正中線中空土版（金子　印刷中）もどきは、文様から晩期初頭

前後に位置づけられる可能性が高い。岩版は、地域色が強いが、文様から、晩期初頭～前葉と推測されるものが出土している（報告書:第188図８、９）。これらが何を意味するのか、非常に興味深いが、稿を改めたい。

６．福島県の土偶

福島市勝口前畑遺跡から気になる遺物が出土している。第１図右端上4457に示したものがそれで、報告書では「土偶と考えられる」とされている（福島市教育委員会　1997:p.215）。写真を見る限り（報告書：写真図版４）筆者も同感である。問題は、その時期である。文様の類似性から調査でも土器が多く出土している川原町口式期と思われるが、福島県では土偶形容器でさえ弥生時代中期中葉には消滅することになっており、中期後葉のこの土偶はどこから来たのだろうか。中期後葉と特定されているのは今のところ岩手県橋本遺跡にしかない（金子　2015c）。本例は、台式土偶に似た形をしているが、貫通孔を持つ。極めて重要な土偶で、発見されたのも比較的古いのに全く話題に上っていないのが不思議である。

浪江町田子平遺跡からは、晩期初頭～前葉の竪穴住居跡も検出され、土偶も十数点出土している（福島県教育委員会ほか　2010）。晩期初頭～前葉の耳飾も出土しており、土偶にもその可能性があるものが見られるが（報告書：図55の１？、193の５、194の２）、類例が見つからなかったので割愛した。３号住居跡出土の晩期初頭のもの（報告書：図13の16）は、報告書の記載どおり土偶でないと判断した（土器の一部）。土器の出土量から判断すれば後期末の土偶が存在するはずだが、特定できず、基本的に全て後期中～後葉の土偶と判断した。22号住居跡から出土した土偶の可能性のある土製品（報告書:図42の26）は、出土土器の傾向から後期末の可能性が高いが、岩手県川目Ａ遺跡の類例（(公財)岩手県文化振興事業団　2012：遺物図版320～321）から、後期中～後葉と判断した。流涙型土面と小型土面状土版（報告書：図193の１、２）が注目される。

会津若松市坊主山遺跡でも、土偶片が出土している（会津若松市教育委員会　2009）。土器は、後期後葉～晩期後葉も出土しているが、主体は後期中葉で、土偶の方に明らかに前者に属すると推測できるものがないので割愛した。

中野（2015）で大熊町塚ノ草遺跡出土の類遮光器土偶を知ったが、掲載誌（中野　1996）を見ることができなかったので割愛する。

以下、第10表の補足を行う。

・福島市宮畑遺跡（第10表4459～4471）

縄文時代中期～晩期に（少なくとも断続的には）長期に営まれた拠点的集落であるため、明瞭な特徴を示さない土偶の時期を特定するのは容易ではない。『史跡整備発掘調査報告１』（福島市教育委員会　2005）は、写真も掲載されず特に悩んだが、この調査では「晩期の遺物は極めて少なく」（同:p.49）という所見から、後期との区別がはっきりしないものは割愛することにした。

『史跡整備発掘調査報告６』（福島市教育委員会　2010）図107の９の土偶は、背中に円形沈線を持ち、この文様は晩期に見られ（第10表4459）当該期の可能性があるが、この調査では後期の遺物が主で、本土偶も後期中葉の可能性が十分あり、写真もなく見極められないので割愛した。

・南相馬市原町西町遺跡（第10表4473）

報告書（南相馬市教育委員会　2010）第78図４は、土偶でないと判断して割愛した。

・旧小高町浦尻貝塚（第10表4474～4476）

最初に刊行された『浦尻貝塚１』（小高町教育委員会　2005）は、概報編で、出土遺物に関しては

その後に本報告され、『浦尻貝塚１』掲載の類遮光器土偶は、『浦尻貝塚４』（南相馬市教育委員会 2010）でも報告されたが、『浦尻貝塚１』で写真のみ掲載された写真260の２、３については未だ報告されていない。両方とも、大洞Ｃ２式期の可能性が高く、報告が待たれる。

出土量の割に晩期の土偶が少なく、後期の土器・土偶の割合と逆転しているが、上記のように未報告のものがあるようなので、現時点では何とも言えない。

・三島町荒屋敷遺跡（第10表4477～4489）

報告書（三島町教育委員会　1990）第209図１は、『資料集』（『土偶とその情報』研究会　1996）掲載品で、既に表にしている（本稿第２表2311）ので割愛した。第209図４、第210図２は、不明瞭で、写真も詳しい記載もないので割愛した。第210図４は、記載はあるが写真はなく不明瞭のため割愛した。第211図３は、写真も記載もあるが、不自然な中空で土偶には見えないので割愛した。

・郡山市町Ｂ遺跡（第10表4490～4498）

報告書（郡山市教育委員会　2005）第262図658は土偶でないと判断した。同656は、イノシシ形土製品の鼻か。その他割愛したものは、時期が異なる（後期前～後葉）と判断したものである。報告書に個々の遺物の記載や観察表がないため詳細が分からず残念である。

・小野町沢目木Ｂ遺跡（第10表4500～4502）

胴部にＸ字意匠を持ち全身像と推察される土版が出土している（福島県教育委員会ほか　2006：図22の９）。文様の多くが刻目帯で表現されており後期末と思われるが、背中の渦巻状の文様が気になる。出土土器の多くと同じ大洞Ｃ２式期とすれば、土版との共通点が取り沙汰される時期であり（鈴木　2010：p.24）、土偶の一部と捉えるべきなのかもしれない。

７．北海道の土偶

北海道の資料は、参考収集なので、他時期の可能性のあるものについては収集しておらず、特に後期末のそれは第８表東北地方のように熱心に集めていない。“比較的残りが良く晩期の可能性が高いもの”という恣意的な収集である。番号は第５表からの続きである。以下、第11表の補足をする。

・厚真町朝日遺跡（第11表 h232～h236）

報告書（（公財）北海道埋蔵文化財センター　2015）図Ⅴ－38の６は、類例を見つけられなかったが、報告書どおり（p.130）土偶として扱った。ただし「頭部の装飾部分」には違和感を覚える。図Ⅴ－39の11は、報告書では土偶の可能性も指摘され（p.130）、国宝著保内野遺跡出土土偶に似た土偶の足の可能性も窺われるが、開きすぎており足？も小さく無機質な感じも受けるので、土偶でないとした。

・八雲町栄浜３遺跡（第11表 h241～h248）

掲載土器がそれほど多くなく、半拠点集落と位置づけるには躊躇を覚えるが、時期が限定され（ほぼ大洞Ｃ１式併行期？）、土偶が８点、石製勾玉１点出土しているため、そう扱った。土器の装飾は、口縁部の突起、沈線に限られ、明確な文様は見られない

松前町東山遺跡では、ｘ字形土偶の起源を考えるうえで極めて重要な資料が出土しているようだが（阿部　2006）、残念ながら周囲に報告書（松前町教育委員会　2004）がなく、割愛せざるを得なかった。

余市町栄浜７遺跡では、腰が大きく突出する小型無文の土偶が出土し、晩期前葉～中葉の可能性が高いようだが（阿部　2010）、やはり周囲に報告書（松前町教育委員会　2004）がなく、割愛せざるを得ない。

恵庭市西島松２遺跡から、完形に近い身長４㎝程度の小形土偶が出土している（（財）北海道埋蔵文化財センター　2010）。調査では晩期（中葉？）の土器が最も多く出土しているので（報告書第１分

冊 p.65)、晩期の可能性がある。しかし、晩期の道央の土偶は、本稿(3)で検討したタンネトウＬ式板状土偶を初めとして、東北地方の大型土偶の模倣あるいはそこから変化した土偶がほとんどで、在地の小型土偶ははっきりしない。本例の胸の中央に貫通孔があり、これは、男性土偶として有名なウサクマイＡ遺跡例（本稿(3)：第３図８）の胸の大きな窪み（大木式北部板状Ｏ脚土偶に似る）に通じるものだろうか。しかし、タンネトウＬ式板状土偶の眼部は通常刺突で、本例のように短沈線ではない。腕を初めとする平面形、厚い棒板状の断面形も、大きく異なっている。調査で出土した他の土製品は、スタンプ状、オロシガネ状と、後期中葉を主体とするものが多いので－本例が後期中葉の特徴を持つわけでもないが－後期の可能性を考え、本稿では割愛する。

恵庭市西島松５遺跡の平成13年度調査区の盛土等からは、後期後葉～晩期初頭の大量の遺物が出土した（(財)北海道埋蔵文化財センター　2004：p.507)。この地域の晩期初頭土器は後期末からの伝統が極めて強く、他地方の人間が判断するのは容易でないが、注口土器は東北地方に近い器形で、明確に三叉文を持つものもあり、晩期も明らかに含まれていることは分かる。報告者は、土偶に対しても伴出型式名を明記しているが（Ⅷ章　一覧表)、ほとんどが比較的小さな破片であることもあって、現在の土偶研究の状況では、何とも言えない。そこで、本稿ではすべて割愛することにした。(5)の報告書についても同様だが（(財)北海道埋蔵文化財センター　2008)、こちらには縄文が施される比較的残りの良い下半身が出土している（図Ⅴ－93)。

８．北部三県・晩期前葉以降の遺跡（第６、７表）補遺

岩手県旧大東町教育委員会発刊の報告書は、2003年３月の奥付のある第27集畑中Ⅲ遺跡の報告書以後当センターには寄贈されていなかったが、今年度芦東山記念館で開催された「春季特別展こんにちは、大東町の土偶です」で、その後も報告書が刊行されていたことを知った。一関市に合併される際の混乱で送付されなかったのかもしれない。芦東山記念館では報告書を頒布していたので、当該期土偶掲載の報告書を入手して本稿を草した次第である。以下、第12表の補足をする。

・青森県つがる市亀ヶ岡遺跡（第12表4503～4511）

報告書（国立歴史民俗博物館　2015）図68下段右の異質な顔の土偶は、「後期？」とされており、晩期の可能性もあるが積極的な根拠もないので、本稿でも割愛した。図70の上の土偶は後期、図71の下半の土製品は、土偶でなく、土器の一部等と判断して、割愛した。

・青森県六ケ所村上尾駁(1)遺跡Ｃ地区（第12表4513～4514）

第12表4513は、『土偶とその情報』研究会（1996）の収集漏れである。4514は、報告書（青森県教育委員会　1988）で「前・後期の土製品・石製品」とされているもので（p.249)、『土偶とその情報』研究会（1994）に掲載されており、本来は本稿(3)第４表で扱うべきものであったが、当時筆者も後期後半の可能性を考えていた。今回、腕の先が尖り手の明確な表現を持たないことから結髪土偶の可能性を疑った。平行線間刻目を胸に持つ土偶は、後期後半にあるが、本遺跡の当該期掲載土器は非常に少ない。また、後期後半の場合は本例のように１条の刻目帯以外は無文ということはほとんどない。

・青森県十和田市明戸遺跡（第12表4516～4521）

『土偶とその情報』研究会（1996）の収集漏れである。概報（十和田市教育委員会　1983）には、写真のみで図が掲載されていないものがあるが、これらについては割愛した。不鮮明だが、大洞Ｃ１式新期の大型遮光器土偶頭部、大洞Ａ１式期の大型逆出形土偶がある。

・青森県八戸市是川遺跡（第12表4523～4526）

収集品であり、是川中居遺跡の出土品か不明だそうである（国立歴史民俗博物館　2015：p.278)。

報告書図114下段の土偶脚は、かかとが上がるような形、膝頭表現、爪先の刻目、パンツ状表現から、後期後葉の可能性が高いものと考え（註１）、割愛した。図113最下段は、土偶であるかどうかもはっきりしないので割愛した。

青森県むつ市江豚沢遺跡で晩期後葉以降の土偶六点出土しているのを知ったが（小笠原　2013）、報告書（高瀬編　2012）を見ることができなかったので割愛した。

・青森県階上町寺下遺跡（第12表4527～4550）

後期後葉の住居も検出されているが、出土土器の主体は晩期中葉なので積極的に取り上げた（階上町教育委員会　2007）。ただし、後期後葉の可能性が高いと思われる報告書第18図20、21、第64図54、56、57は割愛した。また、第64図55の大きな破片も、晩期の土偶に相当する部分を想定できないので割愛した。

・岩手県旧大東町水無Ⅰ遺跡（第12表4567～4572）

報告書（大東町教育委員会　2005）第52図版369は、359と同様後期の可能性を残すので（あるいは土偶でない？）割愛した。

比較的まとまった数の結髪土偶が出土しているが、在地色の強い劣品で、一般的な編年（金子2004）で位置づけられないものがほとんどである。

・秋田県横手市神谷地遺跡（第12表4573～4581）

遺構欄で、同じ土坑から出土した場合は「〃」とし、異なる土坑の場合は「土坑」と記した。

秋田県旧仙北町星宮遺跡の報告書（仙北町教育委員会　1999）が、岩手県立博物館には寄贈されていたので補おうとしたが、写真のみで、文章や表による記載がないので断念した。ちなみに、写真には、ほぼ片脚欠損のみの大洞Ｃ１式古期大型遮光器土偶、大洞Ｃ２式第Ⅴ段階？と大洞Ａ１式期の大型逆出形土偶、屈折像Ｂ類土偶、x 字形土偶などが掲載されている。貴重な資料なので、ぜひ図化して報告書を刊行していただきたいと思う。

秋田県横手市オホン清水Ａ遺跡で結髪土偶の脚部が出土しているようだが（横手市　2007）、報告書を見ることができず割愛した。

９．小括

今回で収集はひとまず終りである。当初の予定では、組成、地域差を示すつもりであったが、とてもそこまで至らなかったので、二、三気の付いたことを挙げておく。

註31に記した x 字形土偶（第１図右端最上4464）とともに、屈折像Ｂ類土偶も東北地方南部にほとんど見られない。x 字形土偶と異なり、こちらは日本海側（山形県）にも見られないようだ。第１図中央4463の福島県宮畑遺跡例は、変容が著しく屈折像Ｂ類とするのにも躊躇を覚えるが、宮城県南部の築瀬浦遺跡例（本稿第２表2097）に似ていて、これからさらに変容した例と考えれば理解できる。この他、大型逆出形や結髪土偶からの変容なのか、ガニマタを呈する土偶が、宮城～福島県に認められる（第２表2100、2254、第９表4352、第10表4465ほか）。

屈折像Ａ類の一部、小杉康氏（2005）の言う「後ろ手出産土偶」を筆者も収集したが（金子2014a）、青森県滝端遺跡にも存在することを知った（第８表4083）。註18に記したように、孤立的存在で気になっていた岩手県東裏遺跡例（第１図中央上1051）の類例を見つけた（その左4371）。やや異なるが、4371の類例も北小松遺跡から既に出土しており（本稿⑵第２表2015）、北小松遺跡が本場で、東裏例はここから運ばれたのかもしれない。

宮城県北小松遺跡に、入墨屈折像Ｂ類土偶の類例を見つけた（第１図左上端4387）。この土偶は、

これまで、秋田県秋田市戸平川遺跡、岩手県盛岡市上平Ⅱ、宇登遺跡で発見されている（本稿(1)：第１図）。なぜ100㎞も離れて点在しなければならないのだろうか。土偶の用途を探る重要な鍵になる可能性がある。

註

(1) 例えば、青森県風張(1)遺跡出土例（『土偶とその情報』研究会　1994：青森県図版12の10）など。

(2) 頭頂部香炉形土器のそれのように橋状把手わたす。目は、後頭部から一続きの貼付でアイマスク状に表現される。後頭部円形ボタン状貼付を縁取る三叉文。首にも隆帯が巡り三叉文が施される。貼付上は全て縄文が施されている。

(3) 観察表（報告書:p.95）に「45号土坑（平成10）」出土とあるが､図および記載が見当たらない。掲載土器はある（報告書:第46図７、８）。

(4) 側頭部が小波状になるのは、道南～津軽地方の聖山式土偶に良く見られる（金子　2015b：第８図）。聖山式のそれと異なり、後頭部に突起貼付が認められないが、頭頂部に向かって薄くなる断面形は非常によく似ている。

(5) 板状だが内側に反っていて屈折像Ａ類の可能性がある。「首と体部貼り合わせた痕跡と化粧粘土を塗った様子が良く分かる」（報告書：p.95）。

(6) 両者とも、胴部前面に対弧状の多重線が施される特徴的な板状土偶である。大洞Ｃ１～Ｃ２式期の岩版・土版に類似した文様を持つこの土偶の起源が不明である。最も似ているのは、小型遮光器系列土偶の胴長２ｂ系列であるが（金子　2015b）、両者とも頭部がないので何とも言えない。もし該当するにしても、津軽地方のそれとは趣が異なる（むしろ北海道南部に似る）。

(7) 観察表（第61表）に「アスファルト付着」とあるが、図には表現されず（黒塗り箇所なし）、写真にも見えない。割れ口か。

(8) 観察表に「背中にアスファルト付着」とあるが（p.718）、写真を見る限り、そのようには見えない。

(9) 後頭部円形突起左右に貫通孔。耳貫通孔。細い帯縄文。口周囲にも帯縄文。胴（接続）、左脚（剥離）に黒付。

(10) 土器は、後期中葉から晩期後葉まで大きな断絶もなく出土しているが、それぞれの時期の量は極めて少ない。継続性は認められるが、捨て場は検出されず、９棟検出された竪穴住居跡のうち後期後葉～末に該当するのは３棟程度しかない。駒板３遺跡に見るように、当該期の拠点集落は遺構・遺物が少ないので注意を要するが、本遺跡の場合は、駒板３遺跡と異なり目立った土製品・石製品の出土はなく、立地からも、小規模集落が継続していたと判断して良いと思われる。

(11) 左脚とそれ以外が接合し、左脚の割口に黒色付着物。背面首下低い円形突起。パンツの区画は、正面Ｔ字、背面方形。首～正中～腹隆帯上刺突列。腹隆帯上刺突。背中、脇腹に長方形区画。手は反る。

(12) 出土量が明らかでなく、掲載土偶数の割に掲載土器が少ないため、遺跡の格を推し量るのは難しいが、岩手県長倉Ⅰ遺跡のような、後期後葉～晩期前葉の拠点集落と考えてよいのだろうか。

(13) 該期の竪穴住居跡検出数が１棟のみであり、掲載遺物が僅かなため大したことのない遺跡の印象を受けるが（報告書：p.226）、捨て場も検出されていることから拠点集落と考えたい。

(14) 手に黒色付着物。丸顔。結髪状貼付。肩、腕他に隆帯。肩瘤状貼付。隆帯上縄文。

(15) 観察表や図版423の網掛けでは、頭頂と首の割れ口に「アスファルト付着」となっている。

(16) 観察表に「右腕折損面にアスファルト付着」とある（報告書：p.439）。

(17) 三次にわたる調査が行われ、三冊の報告書が出されているが、地点による違いも比較的大きく、後期後半は第３次Ⅰ区で主に検出され、その周囲のみ調査区への展開が予想されるため、現時点では遺跡の格を判断することはできない。小規模集落以上は確実と思われる。

(18) 表の4371と同様の文様装飾を持つが、より稚拙で、脇腹の渦巻文や背中の文様（意匠不明）は浅い。岩手県東裏遺跡出土例（第１図中央上1051）が、岩手県内で特殊で、どこから来たのかと悩んでいたが、やっと類例を見つけることができた（第１図左端上4371）。

(19) 後頭部に斜縄文が施されているが、なぜか原体は三種類ある。★

(20) 足の形小判形。爪先刻目５？

(21) 胸水平沈線。背中６字文。乳房円形貼付。肩パット？

(22) 古墳時代以降に大きく改変されており、それ以前の様子を窺うことはできない。ただし、改変を受けたとしても遺物は出土するはずで、掲載遺物の傾向から小規模集落以下であったと思われる。

(23) 腰の平行線は、宮城県旭壇遺跡例（『土偶とその情報』研究会　1996：p.160の５）のような隆帯から変化した可能性があり（青木畑式期）、正中線を挟んで平行線が途切れるという同じような意匠の中期前葉と思われる例が、宮城県椿貝塚で出土している（『土偶とその情報』研究会　1996：p.164の４）ので、中期前葉と推測する。

(24) 掘立柱建物跡の柱穴（SB2220－Ｐ３）掘方埋土から出土。しかし、掘立柱建物跡は、４本柱略正方形の単純な構成であり、規模も含めて竪穴住居跡が削平された可能性がある。実際報告書に掲載された削平竪穴住居跡（報告書第図版８）とほとんど変わらない。

(25) 一見在地の系列かと思うが、正中線Ｙ字形系列土偶の晩期に類例が見られる（第１表４、135、284、第２表1314など）。脚が極端

に小さいのは地域性であろう。３字状の眉～鼻貼付。脇腹に臼状意匠の文様。側頭部にＢ突起？

⑵6　東北地方南部～関東地方北部（太平洋側に多い）に見られる遮光器系土偶（例えば群馬県板倉北木戸遺跡出土の仮面土偶など）の破片と思われるが、図の展開が不明で（二つの破片？）、よくわからない。「肩部」とされているが（報告書：p.192）、沈線間刺突列が斜にかかるとはやや考えにくい。瘤状の小突起は乳房なのだろうか。

⑵7　勾玉製作跡が検出され、拠点集落と思われるが、竪穴住居跡は確認されていない。

⑵8　東北地方北部の当該期分類（金子　2003：図１～３）では当てはまるものがない（第１図中央左4459）。最も近いのは、大きさと形から小型無文土偶となるが、本例には文様装飾がある。正中線とパンツ状区画から、屈折像Ｂ類あるいは大型裸土偶としたいところだが、屈折像でも大型でもない。パンツ状区画は紐状の部分が脇腹に伸びているので大洞Ｃ２式期と思われる（金子　2012：註38）。写真が掲載されていないので定かではないが、眉～鼻は貼付で鼻が大きく、目は眉との交差点に短沈線で施される。胴と首、腕の境には平行線が認められる。全体形と背中の円形文は、福島県御山遺跡例（本稿⑵第２表2305）によく似る。背中の円形沈線は、宮城県長根貝塚出土の大洞Ｃ２式期第Ⅴ段階？大型逆出形土偶（変形？）（本稿⑵第２表2011）にも認められる。

⑵9　北海道～東北地方の亀ヶ岡式土器が分布する範囲でも、北部三県以外は遺跡の格（評価･分類）がはっきりしない（金子　2012:p.17）。北部の拠点集落では、遺物の種類・量が格段に多く一目瞭然だが、それ以外では不明瞭である。宮畑遺跡でも、中葉～後葉は拠点集落とするに値する遺構・遺物量が認められるが、それ以前はそうでもない。半拠点集落とした方が良いかと思うが、前葉の土器埋設遺構も検出され、また、山形県の晩期前葉のように元々遺物の種類・量が少なく当該期の拠点集落がはっきりしないとすれば、これでも拠点集落に値するのかもしれない。

⑶0　一見するとｘ字形土偶の天地逆に思われるが、顔の表現を持つので（写真では不明瞭だが）、乳房を持たないのが気になるが、このままで良いようである（第１図最上4462）。背中に多重円を持ち、多重円～渦巻文は、福島県～千葉県前浦式分布圏の晩期中葉土偶にしばしば見られるので（『土偶とその情報』研究会　1996）、この時期の土偶であることは間違いないが、今回類例を見つけることはできなかった。★二又頭頂部貫通孔。輪郭に沿う三本沈線。背中三重円。

⑶1　写真無。輪郭に沿って刺突列。ｘ字形土偶からの変容が大きいが、全体形と背中の対向△文から判断した（第１図右端最上4464）。ｘ字形土偶は、以前から、東北地方以外では日本海側での分布が目立ち太平洋側では宮城県以南での状況が不明であった（金子　1995）。日本海側では、長野県館遺跡でも東北地方とあまり変わらない土偶が出土しているのに（金子　1995：第４図84）、太平洋側では福島県でさえこれほど変容しているのはなぜであろうか。

⑶2　破片が比較的小さい割に情報量が多く、将来的には正しく位置づけられそうだが、現時点では難しい（第１図中央下4490）。肩関節上の刻目隆帯、肩の瘤状突起、背中の肩パット状区画から、註33で定義した関節隆帯土偶に最も近いが、肩に多重線が施されている。大洞Ａ１式期の大型逆出形土偶に近い特徴だが、大型逆出形のそれが平行線なのに対し、本土偶は多重円である。現時点では、大型遮光器系列土偶の影響を受けて成立した関節隆帯土偶が、異なる時期に再び大型遮光器系列土偶の影響を受けて変異したものと推察する。

⑶3　首、肩、腰、胴などに隆帯（上に刺突か刻目）が巡る土偶で、“関節隆帯土偶”と仮称する。同じ調査で出土した第１図右端中央4496、左端下4494も、類例である。4496は、下腹の隆起が△状を呈し、脇腹に渦巻文が認められることと肩～腕が水平になることから、大洞Ｃ２式第Ⅲ段階古期の大型遮光器土偶（金子　2015d：第２図４、５）が在地化したものと推測される。この二つの例は隆帯以外にも文様を持つが、無文のものが福島県新地町三貫地遺跡で出土している（第１図右端中央2215）。また、千葉県を中心に分布するⅠ字文土偶（堀越　1993、安井　2012：９、10、12、16、30？、41、43？、44～46、53、57、64？など）は、町Ｂ例と文様が異なるだけと言っても過言ではない。いずれも中実で、断面形がどちらかと言えば角張る。そこで、両者を“関節隆帯土偶”と総称し、その中の福島系列、Ⅰ字文系列と捉えることにしたい。装飾に隆帯を多用するのはミミヅク土偶の伝統であろうか。もしそうだとすれば、福島系列は、逆方向からの影響も受けていることになる。大型遮光器系列の在地化は、しばしば認められることであり、関東地方でも（金子　1993：p.149）、北海道でも見られる（金子　2012：pp.1～７）。なお、山梨県金生遺跡出土の上部に橋状把手を持つ土器なのか土偶なのか一見はっきりしないもの（新津　1993：第７図）も、今回関節隆帯土偶の仲間であると気づいた。新津氏が土偶と指摘したとき（1993）には違和感を持っていたが。

⑶4　宮城県の南部（阿武隈川流域）に、１点中期前葉（金子2015c:p.65）かと思われる土偶が椿貝塚から出土している（『土偶とその情報』研究会　1996：p.164の４）。結髪土偶の一種、抽象的なＴ字系列で、小滝遺跡の土偶も、この系列に含められる。ただし、椿貝塚のそれは明瞭に文様を持ち、断面形も土偶に一般的な板状で、腕も他と違って上に向けるなど、平面形以外に小滝例と共通点はない。しかし、本稿では、小形、無文、棒状という特徴が、“周縁部の消滅期”という境遇によるものと判断し、小滝例を土偶と判断した。“小形、無文、棒状”という特徴は、他の土偶の消滅期にも認められる（金子　2015c：註８）。

⑶5　胴部正面にｘ字形土偶に似た意匠の文様を持つ土偶で（第１図右端下4500）、既に鈴木正博氏が注視している（鈴木　2010：p.23、p.42）。ｘ字形土偶が日本海側に比べ宮城県南部以南の太平洋側に顕著でないのは（金子　1995：第１表）、本土偶が関係するのであろうか。完形に近い例として、福島県御山遺跡例があるが（本稿第２表2305）、相違点も多い。取りあえず“Ｘ意匠文土偶”と呼んでおくが、全容は不明で、将来変更を余儀なくされる恐れがある。特に、註33で定義した関節隆帯土偶とは肩パット等共通する点も多く、その関係が注視されるが、Ｘ意匠文土偶には正中線表現が多く見られるが関節隆帯土偶はほとんどなく、違いも明瞭に存在する。分布は共通し、太平洋側東北地方南部～関東地方北部に出土する（鈴木　2010）。

⑶6　晩期中葉の道南～道央の境に小型遮光器土偶の肥満化脚大（第１図左端最下968）に近似を示す小型抽象系列（金子　2015b:第２図）

が在地化する動きが見られる。おそらく、搬入例？→第１図中央下 h242、h246→本例（第１図右端最下 h247）→八雲町栄浜３遺跡出土の腰部突出土偶（阿部　2010：図４の55）と変遷するのであろう。本例の側頭部貫通孔は、タンネトウＬ式板状土偶と共通し、おそらく大洞Ｃ２式期に大型遮光器系列、小型遮光器系列の両方とも在地化がなされたようである。

(37)　こちらは註36と異なり、胴長系列に近い小型抽象系列（金子　2015b：第２図）が在地化したものと思われる。胸の隆帯を残さなかった代わりに胴部文様の一部を残している。

(38)　全体が良く似た類例として亀ヶ岡遺跡例がある（本稿第２表1164）が、こちらの背中は無文で表にも輪郭に沿う沈線が見られない。また、乳房の形は、同じく亀ヶ岡遺跡出土屈折像土偶の優品（本稿第２表1172）とも共通し、亀ヶ岡遺跡の地域性なのかもしれない。

(39)　弥生時代前期末～中期まで数十棟の竪穴住居跡が検出されているようで、土器・石器以外の土石製品の出土が少ないのが気になるが、拠点集落として良いのかもしれない。

(40)　脚のはずれた部分にも細い管孔があり、「脚部をつけるために芯をつかったものと考えられる」（報告書：p.88）

(41)　遺構、遺物とも少ないが、岩手県の弥生時代中期中葉という時代を考慮すれば、拠点集落として扱って良いのかもしれない。

(42)　x 字形土偶正中線系列に似るが（金子　1995）、背中に平行線があり、その下に６字文が施され、股間に刺突が充填されるなど、明らかに晩期後葉以降の特徴を持つ。乳房が縦に長い楕円形である点も x 字形土偶と異なる。これまで x 字形土偶の中で最も新しいと考えていた大洞Ａ１式期岩手県陸前高田市寺前Ⅱ遺跡例は帯状文系列で（金子　2001：p.26の註２）、本例より古い可能性が高いが、うまく繋がらない。類例の増加を待ちたい。

(43)　首～背中黒付。同じ土坑出土の掲載土器には大洞Ｂ１式は見えない。

参考文献

会津若松市教育委員会　2009『坊主山遺跡発掘調査報告書』会津若松市文化財調査報告第119号

相原淳一　2007「宮城県の土偶(2)」『第４回土偶研究会発表資料』（北秋田市大会）

青森県教育委員会　1988『上尾駁(1)遺跡Ｃ地区発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第113集

1993『野脇遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第149集

2006『川原平(1)・(4)遺跡、大川添(2)遺跡、水上遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集

2014『蔵主町遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第547集

青森県立郷土館　1987『馬渕川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第40集考古－11

秋田県教育委員会　1998『虫内Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第274集

秋田県教育委員会　2001『ヲフキ遺跡』秋田県文化財調査報告書第322集

秋田県教育委員会　2003『ヲフキ遺跡』秋田県文化財調査報告書第352集

秋田県教育委員会　2008『堀ノ内遺跡』秋田県文化財調査報告書第432集

秋田県教育委員会　2011『漆下遺跡』秋田県文化財調査報告書第464集

阿部明義　2006「2004年度北海道土偶情報」『第３回土偶研究会発表資料』土偶研究会

2010「2008年度北海道土偶情報」『第７回土偶研究会栃木大会発表資料』土偶研究会

一関市教育委員会　2010『伊勢堂Ⅲ遺跡・佐野脇Ⅱ遺跡・観音寺遺跡・佐野脇Ⅰ遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』一関市埋蔵文化財調査報告書第９集

一戸町教育委員会　2006『大平遺跡』一戸町文化財調査報告書第56集

一迫町教育委員会　1997『国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

一迫町教育委員会　1998『国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

稲野彰子　1983「岩版」『縄文文化の研究第９巻　縄文人の精神文化』雄山閣

岩手県教育委員会　2001『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成12年度）』岩手県文化財調査報告書第112集

(財)岩手県埋蔵文化財センター　1984『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第74集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1989『坊館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第145集

2000『長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集

2001『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第399集

2002『浅石遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第403集

2006『上野場３遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第477集

2009『駒板３遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第563集

2012『川目Ａ遺跡第５次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第589集

2012『小屋野遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第596集

岩手県立博物館　2012『第63回企画展　土偶まんだら』

小笠原雅彦　2013「2012年青森県土偶情報」『第10回土偶研究会奈良県大会資料』

小高町教育委員会　2005『浦尻貝塚１』小高町文化財調査報告第６集

金子昭彦　1993「関東地方の遮光器系土偶」『埼玉考古』第30号　埼玉考古学会
1995「いわゆるｘ字形土偶の編年について」『縄文時代』第６号　縄文時代文化研究会
1997「東北地方北半部における縄文時代後期後半の土偶」『土偶研究の地平　『土偶とその情報』研究論集⑴』勉誠社
2001『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史４　同成社
2003「土偶はどれだけ壊れているか」『日本考古学』第15号　日本考古学協会
2004「結髪土偶と刺突文土偶の編年」『古代』第114号　早稲田大学考古学会
2009「東北地方・縄文晩期における弧状土製品」『物質文化』87号　物質文化研究会
2010「北日本・縄文晩期のボタン状製品」『岩手考古学』第21号　岩手考古学会
2011「北日本・縄文晩期の三角玉ほかの装飾品」『岩手考古学』第22号　岩手考古学会
2012「東北地方・縄文晩期の土偶⑶」『紀要』ＸＸＸⅠ　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2014a「馬渕川流域における縄文晩期土偶の地域性」『第11回土偶研究会八戸市大会資料』事務局：青森市埋蔵文化財調査センター内
2014b「土偶と装飾品の比較」『縄文時代』第25号　縄文時代文化研究会
2015a「東北地方・縄文晩期の土偶⑸」『紀要』第34号　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2015b「小型遮光器系列土偶の編年」『青森県考古学』第23号　青森県考古学会
2015c「縄文土偶の終わり」『考古学研究』第62巻第２号　考古学研究会
2015d「大洞Ｃ２式期・大型遮光器系列土偶の編年」『古代』第138号　早稲田大学考古学会
印刷中「東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物⑴」『岩手県立博物館研究報告』第33号
北秋田市教育委員会　2009『二重鳥Ｂ遺跡』北秋田市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
北上市教育委員会　1999『滝ノ沢遺跡Ⅴ』北上市埋蔵文化財調査報告第40集
小井川和夫・山田晃弘　2002「里浜貝塚西畑地点出土遺物」『東北歴史博物館研究紀要』３
黒石市教育委員会　1987『石名坂遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告第６集
郡山市教育委員会　2005『阿武隈川築堤関連　町Ｂ遺跡』
国立歴史民俗博物館　2015『亀ヶ岡遺跡・是川遺跡縄文時代遺物』国立歴史民俗博物館資料図録11
小杉　康　2005「子生みの造形・鼻曲りの造形」『地域と文化の考古学Ⅰ』六一書房
小林圭一ほか　2004「山形県2002年度土偶情報」『第１回土偶研究会発表資料』土偶研究会（青森県埋蔵文化財調査センター内）
小林圭一　2010「山形県2008年度土偶情報」『第７回土偶研究会発表資料』土偶研究会（青森県埋蔵文化財調査センター内）
小林圭一　2012「山形県2010年度土偶情報」『第９回土偶研究会岩手県大会資料』土偶研究会（青森県埋蔵文化財調査センター内）
栗原市教育委員会　2007『国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ⅳ』栗原氏文化財調査報告書第５集
佐藤憲幸　2013「興野コレクションの土偶②－嘉倉貝塚・倉崎貝塚－」『東北歴史博物館研究紀要』14
三戸町教育委員会　2000『沖中遺跡・沖中⑵遺跡発掘調査報告書』三戸町埋蔵文化財調査報告書第１集
紫波町教育委員会　1985『城内遺跡』
鈴木正博　2010「所謂『有髯土偶』出現前夜」『栃木県考古学会誌』第31集
仙台市教育委員会　2000『鍛冶屋敷Ａ遺跡・鍛冶屋敷前遺跡』仙台市文化財調査報告書第245集
仙北町教育委員会　1999『星宮遺跡』仙北町文化財調査報告書第３集
大東町教育員会　2004『大洞地遺跡発掘調査報告書』大東町文化財調査報告書第29集
2005『水無Ⅰ遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』大東町文化財調査報告書第30集
高瀬克範編　2012『江豚沢Ⅰ』
高柳圭一　1987「東北地方に於ける縄文時代後期後半の土偶」『遡航』第５号　早稲田大学大学院文研考古談話会
東北歴史資料館　1983『里浜貝塚Ⅱ』東北歴史資料館資料集７
『土偶とその情報』研究会　1994『土偶シンポジウム２秋田大会　東北・北海道の土偶Ⅰ』
1996『土偶シンポジウム５宮城大会　東北・北海道の土偶Ⅱ』
十和田市教育委員会　1983『明戸遺跡発掘調査概報』十和田市埋蔵文化財発掘調査報告第２集
1984『明戸遺跡発掘調査報告書』十和田市埋蔵文化財発掘調査報告第３集
長井市教育委員会　2003『市内遺跡発掘調査報告書⑾』山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第22集
中門亮太　2013「東北地方北部における瘤付土器の基礎的研究」『古代』第131号　早稲田大学考古学会
中野拓大　1996「双葉郡大熊町塚ノ草遺跡採集の遮光器土偶」『いわき地方史研究』第33号
中野幸大　2015「福島県の土偶情報（2013年度）」『第12回土偶研究会北海道大会資料』
名取市教育委員会　1999『元中田遺跡』名取市文化財調査報告書第40集
鳴瀬町教育委員会　1998『里浜貝塚　平成９年度発掘調査概報』鳴瀬町文化財調査報告書第３集
新津　健　1993「山梨における後晩期土偶」『埼玉考古』第30号　埼玉考古学会
階上町教育委員会　2000『滝端遺跡発掘調査報告書』

2007『寺下遺跡・笹畑遺跡発掘調査報告書』
八戸市教育委員会　2008『風張⑴遺跡Ⅵ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第119集
東松島市教育委員会　2010『里浜貝塚』東松島市文化財調査報告書第８集
平賀町教育委員会　1979『石郷遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第７集
福島県教育委員会ほか　1993『東北横断自動車道遺跡調査報告21』福島県文化財調査報告書第292集
2006『こまちダム遺跡調査報告４　沢目木Ｂ遺跡』福島県文化財調査報告書第431集
2010『常磐自動車道遺跡調査報告58』福島県文化財調査報告書第461集（田子平遺跡）
福島市教育委員会　1997『勝口前畑遺跡７』福島市埋蔵文化財報告書第99集
2004『宮畑遺跡（岡島）』福島市埋蔵文化財報告書第173集
2005『史跡宮畑遺跡　史跡整備発掘調査報告１』福島市埋蔵文化財報告書第180集
2010『史跡宮畑遺跡　史跡整備　発掘調査報告６』福島市埋蔵文化財報告書第206集
古川市　2006『古川市史第６巻　資料Ｉ考古』
㈶北海道埋蔵文化財センター
2004『恵庭市西島松５遺跡⑶』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第209集
2008『恵庭市西島松３・西島松５遺跡⑸』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第248集
2010『恵庭市西島松２遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第265集
2014『千歳市梅川４遺跡⑶』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第306集
2015『厚真町朝日遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第313集
2015『木古内町新道４遺跡⑷』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書第320集
堀越正行　1993「Ｉ字文土偶、その系統と分布」『埼玉考古』第30号　埼玉考古学会
松田宏介　2013「河野常吉旧蔵『ワニシ』出土土偶について」『北海道考古学』第49輯　北海道考古学会
松前町教育委員会　2004『東山遺跡』
三島町教育委員会　1990『荒屋敷遺跡Ⅱ』三島町文化財報告第10集埋蔵文化財調査報告書Ⅴ
（福島県）南相馬市教育委員会　2010『浦尻貝塚４』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第15集
2010『野馬土手（原町区西町地区）原町西町遺跡』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第16集
宮城県教育委員会　2000『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第183集
2010『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第222集
2010『北小松遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第223集（諏訪、愛宕山遺跡）
2011『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告書第226集
2014『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告書第234集
八雲町教育委員会　2008『栄浜２・栄浜３遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
安井健一　2012「南関東地方における晩期土偶研究の現状と課題」『千葉大学文学部考古学研究室30周年記念　考古学論攷Ｉ』
山内幹夫　1992「福島県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集（土偶とその情報）
㈶山形県埋蔵文化財センター
1999『宮の前遺跡第３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第65集
2003『砂子田遺跡第２・３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第113集
2003『釜淵Ｃ遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集
2005『高瀬山遺跡（HO 地区）発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集
2009『下叶水遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第177集
2011『作野遺跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第194集
2012『作野遺跡第３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第205集
山田祐子　2007「秋田県2005年度土偶情報」『第４回土偶研究会発表資料』土偶研究会（北秋田市）
遊佐町教育委員会　2015『小山崎遺跡発掘調査報告書―総括編―』遊佐町埋蔵文化財調査報告書第10集
横手市　2007『横手市史　資料編　考古』
2008『横手市史　通史編　原始・古代・中世』
横手市教育委員会　1984『オホン清水～第３次遺跡発掘調査報告書～』
2005『オホン清水Ａ遺跡第Ⅳ・Ⅴ次　薬師前Ｂ遺跡』
2015『神谷地遺跡・小出遺跡』横手市文化財調査報告第32集
涌谷町教育委員会　2004『ツナギの沢貝塚』涌谷町文化財調査報告書第６集

岩手県域の太平洋沿岸中部地域における６世紀から８世紀の土器様相について

米田　寛・佐藤　剛

岩手県域における６世紀から８世紀の土器様相の検討は、調査例が多く、資料の豊富な内陸部を中心として進められてきた。太平洋沿岸部地域はこれまで調査例が少なかったため、詳細な検討が出来なかった。しかし、現在、太平洋沿岸地域では、甚大な被害をもたらした東日本大震災からの迅速な復旧と復興を進めており、それに伴う復興事業により調査例は激増し、資料の蓄積が進んでいる。特に沿岸の中部地域である宮古市と山田町、大槌町においては、過去の調査例も含めて顕著である。そのため、岩手県太平洋沿岸の中部地域における６世紀から８世紀の土器群の体系的な理解を行い、それに反映される古代の地域社会を検討する。

１．はじめに

岩手県域においては６世紀から８世紀の土器群の検討は、主に調査例が多く、資料が豊富な内陸部を中心として進められてきた（高橋　1982、相原・遠藤　1983、辻編　2007）。太平洋沿岸地域はこれまで調査例が少なかったため、詳細な検討が出来なかった。しかし、現在、太平洋沿岸地域では甚大な被害をもたらした東日本大震災からの迅速な復旧と復興を進めており、それに伴う復興事業により調査例は激増し、資料の蓄積が進んでいる。特に沿岸の中部地域である宮古市と山田町、大槌町においては、過去の調査例も含めて、顕著である。樋口知志（2013）による文献史学からの検討によれば、８世紀前葉の中部地域は郡家が設置された閉村のあった地域とされており、古代の地域社会を考えていくうえで重要な位置を占めている。

そのため、岩手県域の太平洋沿岸中部地域における６世紀から８世紀の土器群の体系的な理解を行うことにより、それに反映する古代の地域社会を検討する。

土器群の体系的な理解は、辻秀人（2005）により、細別器種を検討し、様式を把握することで行う。この方法により、土器群の様相を明らかにする。

２．細別器種の分類と変遷

土器群における細別器種の分類は、宮城県北部・沿岸部の６世紀から８世紀の土器群を検討した佐藤敏幸（2007）による分類を参考とする。個別の内容については、地域的な特徴を検討するために、新たに示す。

各段階は、基準資料を中心とする土器群における細別器種の変遷を基に得られた時間軸を、細別器種の集合体を基に、主要な器種の出現や脱落によって集合体の構造が大きく変化すれば細別器種の集合体を区分し、区分した中で主要な細別器種は存続するが、主要な細別器種の出現や脱落によって構造が変化したと考えられる場合、細別器種の集合体を細分したものである。ここでいう土器群における細別器種の集合体が土器様式である。

時間軸は５つの段階に細分した。佐藤（同）の各段階（一段階－５世紀末から６世紀前葉頃、二段階－６世紀中葉から後葉頃、三段階６世紀末から７世紀前半頃、四段階－７世紀中葉から後半頃、五段階－７世紀末から８世紀初頭、六段階－８世紀前葉から前半頃、七段階－８世紀中葉から後半頃、八段階－８世紀末から９世紀初頭頃）の細別器種とその変遷過程全体を比較し、各段階との対比を行いやすいように、一・二段階、三段階、四段階、五・六段階、七段階と呼称した。

佐藤（同）は各段階を村田晃一（2007）による宮城県中部から南部と対比している。また､辻（2007b）により、菅原祥夫による福島県中通り地方中部（2007）、高橋千晶による岩手南部（2007）とも対比している。それぞれの各段階はおおむね整合していると考え、各地域の段階でも用いる。

なお、土器群における基準資料は各段階に示した。

⑴ 坏 （第１・２・５図、第１表）

法量により、概ね口径16cm以上の大型、13 ～ 15cm程度の中型、12cm前後以下の小型に分けた。しかし、厳密な区分を行った訳ではない。径20cm前後以上は特大に相当するが、本稿では、特大型を鉢Ａとして異なる細別器種と捉えた。

坏Ａ

丸底の底部で、口縁部が外反し、内面に稜を形成する椀形のもの。古墳時代中期から継続する器形である。成形は輪積痕と調整の観察から坏Ｂよりも径の小さい輪台から積み上げており、底部に厚みを残すことが多く、坏Ｂよりも厚手に仕上がる資料が主体である。辻（2007b）の坏１に該当する。

当該地域では未確認である。

佐藤（同）による宮城県北部・沿岸部では一段階で消失するが、菅原（同）の福島県中通り地方中部や村田（同）による宮城県中部から南部では二段階まで存続する。

坏Ｂ

丸底の底部で、屈曲して長い口縁部が外反あるいは直線的に開くもの。いわゆる外反・外傾の有段丸底坏である。成形は、輪積痕と調整の観察から坏Ａよりも径の大きい粘土円盤もしくは輪台から積み上げており、底部に厚みを残すことが少なく、坏Ａよりも薄手に仕上がる資料が主体である。当該地域に限らず、宮城県北部より北の地域では外面の全面をミガキ調整するものと、出現段階から底部の丸みが強いものが多く、地域的な特徴が認められる。辻（2007b）の坏２に該当する。

一・二段階では主体で、三段階以降に客体となり、五段階で消失する。三段階では中型がみられ、四段階から小型が出現する。三段階では深めの器形で、四段階では深めのものが多いものの、浅く扁平なものが少数ながらも一定量認められる。

坏Ｃ

丸底の底部で、体部で屈曲し、長い口縁が内弯するもの。いわゆる内傾・内弯の有段丸底坏。成形と地域的な特徴は坏Ｂと共通する。辻（2007b）の坏３に該当する。

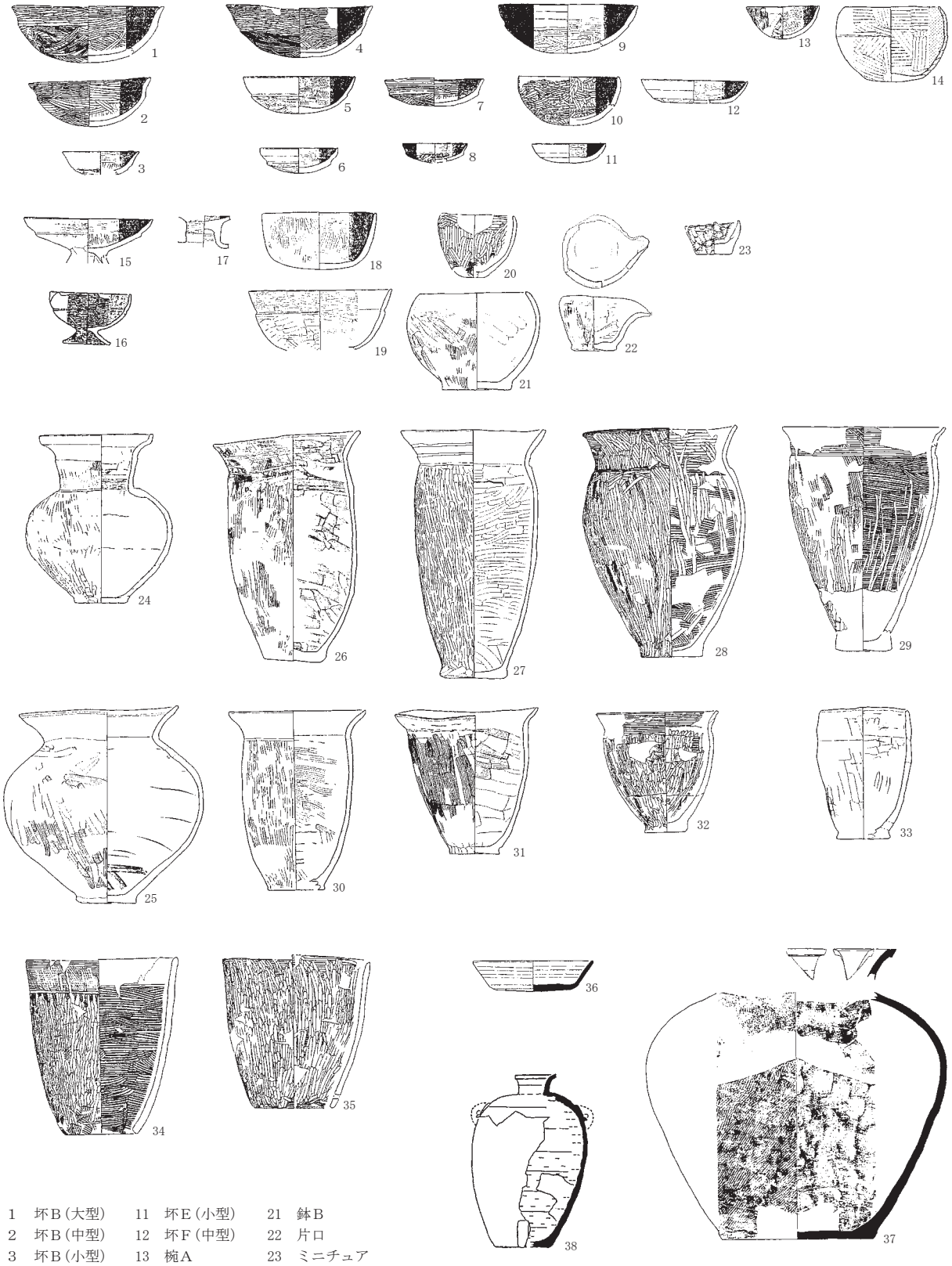
一・二段階ではごく少量で、三段階以降に坏Ｂに代わって主体となり、五・六段階まで継続する。三段階では大型と中型または大型とそれ以外という法量分化が認められ、四段階では小型が出現し、大・中・小型の法量分化が明瞭になる。三段階ではほぼ深めのもので、浅く扁平なものが少数ながらも一定量認められ、四段階では扁平なものが主体である。四段階から平底化が進み、平底化が進んだ五段階では坏Ｆとの区分が不明瞭となる。

佐藤（同）による宮城県北・沿岸地域では、二段階に出現し、四段階以降に坏Ｂに代わって主要な細別器種となり、八段階まで継続する。

坏Ｄ

底部が丸底で、体部で屈曲し、口縁が直立するもの。口縁と底部の境界は稜、もしくは段を形成する。その特徴から須恵器模倣と考えられる。

一･二段階で中型､三段階で小型がごく少量みられ､四段階に中･小型坏が多くみられる｡このことは、坏Ｃが三段階では大型と中型または大型とそれ以外という法量分化が認められ、四段階では小型が出現し、大・中・小型の法量分化が明瞭になる様相とは異なる。これらのことから坏Ｄは、須恵器



1　坏B（大型）　11　坏E（小型）　21　鉢B
2　坏B（中型）　12　坏F（中型）　22　片口
3　坏B（小型）　13　椀A　23　ミニチュア
4　坏C（大型）　14　椀B　24　壺A
5　坏C（中型）　15　高坏A　25　壺D
6　坏C（小型）　16　高坏A　26　甕A３
7　坏D（中型）　17　高坏B　27　甕A３　31　甕B２　35　甑B
8　坏D（小型）　18　鉢A　28　甕A５　32　甕C１　36　須恵器坏
9　坏E（大型）　19　鉢A　29　甕A５　33　甕C１　37　須恵器甕（中型）
10　坏E（中型）　20　鉢B　30　甕B１　34　甑A　38　須恵器甕（小型）

第１図　岩手県沿岸中部地域の細別器種

坏の模倣と考える。また、坏Ｃの小型坏の出現は、律令的土器様式の影響とともに、坏Ｄの影響の可能性もある。四段階で隆盛するが、当該地域では五段階の資料を今のところ確認できていない。

佐藤（同）による宮城県北・沿岸地域では、五段階にほぼ消失し、須恵器模倣は平底化の進行した坏Ｃ・Ｆに引き継がれると考えられており、当該地域と同様である。

坏Ｅ

半球形の椀形のもの。器高が高く深身のものと器高が低く浅身のものがある。古墳時代中期に出現するものや北関東地方の坏に類似する器形を含む。そのため、この器形をもって直ちに古墳時代中期に出現するものや北関東系に限定されるものではなく、椀形であれば本類に含めた。内外面ミガキ・黒色処理されるものは金属器模倣の可能性がある。

一・二段階には一定量存在し、七段階まで継続する。三段階では大型と中型または大型とそれ以外という法量分化が認められ、四段階では小型が出現し、大・中・小型の法量分化が明瞭になる。

坏Ｆ

平底もしくは平底風のもので、口縁部が直線的である。底面はやや広い。外底部調整はハケ・ケズリがみられる。底部外面のケズリは底面から底面と体部の立ち上がりの角までを行っているものが多いことから、同時期の須恵器坏の底部調整の回転ヘラケズリの模倣の可能性がある。

四段階に出現し、現状では五・六段階にはみられない。その出現は佐藤（同）による宮城県北部・沿岸地域と同時期である。

坏Ｇ

ロクロによる回転ナデ調整のもの。

佐藤（同）によれば、須恵器生産遺跡では８世紀前半（六段階並行期―筆者注）には一時的に登場するが、継続せず、９世紀（八段階並行期―筆者注）に主体となる。

今回の資料には含まれない。

⑵　椀（第１・３・５図、第１表）

口径／器高の比率が0.6前後からそれ以上の深身のもの。同年代の坏にくらべて深身となる。

椀Ａ

深い半球形の胴部ないしは底部に、短めの口縁部が外反するもの。

当該地域では未確認である。

椀Ｂ

平底または平底風の底部から屈曲して立ち上がり、体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾するもの。調整は、ミガキ、黒色処理主体で、外面をハケ調整するものは少ない。金属器模倣と考えられる。当該地域の椀類では主体を占める。当該地域では一般集落から安定して出土するが、城柵官衙遺跡ほどの出土量ではない。佐藤（同）による宮城県北部・沿岸部では、城柵官衙遺跡からの出土量が多いとされ、当該地域でも出土量が多量の場合に限って官衙的なものと言える。

三段階にみられ、それ以降に増加する。四段階では内外面黒色処理も一定量含まれる。四段階以降は平底化が一層進む。

椀Ｃ

ロクロによる回転ナデ調整のもの。

佐藤（同）による宮城県北部・沿岸地域では、須恵器工人との接触の早い大崎・石巻地域では八段階に出現し、主体となり、それより北の栗原・桃生地域では城柵遺跡を除いて出現は遅くなる。

今回の資料には含まれない。

⑶　高坏（第１・３・５図、第１表）

坏Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆの坏身に脚のついたもの。脚部は高脚や、円形・長方形の透かし孔をもつものがある。透かし孔をもつ高坏は須恵器や金属器の模倣と考えられる。

佐藤（2007）による宮城県北部･沿岸部では、官衙的性格の遺跡とその周辺で出土する傾向がある。

高坏Ａ

坏Ｂ・Ｃ・Ｆに脚のつくもの。その出自から在地の系譜と考えられる。

当該地域では四段階に出現し、主体となる。

高坏Ｂ

坏Ｄ・Ｅに脚のつくもの。その出自から坏Ｄに脚のつく高坏は須恵器模倣、坏Ｅに脚のつく高坏は金属器模倣と考えられる。出土量は少ない。

宮古市津軽石大森遺跡では四段階に透かし付高坏が出土している。佐藤（同）による宮城県北・沿岸北部地域では、四段階から五段階に透かし付高坏が一定量存在しており、同時期に透かし穴付須恵器高坏の模倣が認められる。

⑷　鉢（第１・３図、第１表）

鉢Ａ

有段丸底の坏Ｂ・Ｃの相似形を大振りにしたもので、口径20㎝前後以上のもの。形態的には特大型の坏となる。

三段階に出現し、四段階以降に隆盛する。大型坏は、三段階に坏Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの中で一定量を占めていたが、四段階以降にほぼ消失している。このことから、四段階では大型坏の用途を鉢Ａが担った可能性がある。また、「特大型の坏」であることから、三段階に大型坏で賄われていた用途が、四段階では一度の盛付け量が増えることにより特大型を必要とした可能性があると考えたい。

鉢Ｂ

口径20㎝前後以上の平底または平底風のもので、被熱痕跡がないもの。

津軽石大森遺跡では四段階に、口縁に一部欠損があり、片口鉢の可能性もある資料が出土している。

一・二段階にはみられ、三段階まで継続する。鉢Ｂはバラエティーがあり、古墳時代中期から継続する細別器種であることから、資料の増加を待ってその消長を追いたい。

⑸　片口（第１・３図、第１表）

片口の付くもの。高橋（同）によれば、小型のものは東北北部地域に多いとされる。

高橋（同）による岩手県内陸南部では、六段階でほぼ消失する。当該地域では検討資料が少なく、消長を判断できないが、津軽石大森遺跡では三段階から四段階にみられる。

⑹　ミニチュア土器（第１・３・５図、第１表）

坏・椀形と壺・甕形があり、手づくねと工具調整のものに分かれる。

一・二段階から五・六段階まで継続するものの、資料が僅かであるため、資料の増加を待ってその消長を追いたい。四段階の津軽石大森遺跡の壺形は、口縁部が長い碇肩のものである。東海産須恵器壺類のうち湖西窯が碇肩の傾向があり、湖西窯産を模倣した可能性がある。

⑺　壺（第１・３・５図、第１表）

壷Ｂ・Ｃ・Ｄについては佐藤（2007）の分類とは異なり、本稿で新たに設定した。

壺Ａ

小型～中型で、胴部が球形で直線的に立ち上がる頸部や口縁がつくもの。当該地域では小型の赤彩壺があり、頸部が長く外反するものや、受け口状口縁もある。胴部形態が須恵器壺類に類似している

ため須恵器模倣と考えられる。三段階と四段階にみられる津軽石大森遺跡資料は撫肩のものである。東海産須恵器壺類のうち、猿投窯が撫肩の傾向があり、猿投窯産を模倣した可能性がある。

当該地域では三段階に出現し、少数ながらも次段階以降もみられる。

壺Ｂ

小型～中型で、胴部の中央が張り、くびれが弱く、外反する口縁部がつくもの。東北南部を中心とする古墳時代中期からの系譜で考えられるものである。

当該地域では未確認である。

壺Ｃ

底部が平底で、胴部が球形に膨らみ、頸部のしまりが弱く、短めの口縁が外反するもの。壺Ｄに比べて口径が大きい。東北南部を中心とする古墳時代中期からの系譜で考えられるものである。

今回の検討では、明瞭な壺Ｃは確認できなかった。壺Ｄに含まれている可能性もある。

壺Ｄ

中型～大型で、底部が平底で、胴部が球形に膨らみ、短めの口縁部が外反するもの。頸部有段が多く、「球胴甕」と呼ばれていた器形であるが、コゲなど二次被熱痕跡がみられないことから壺とする。

成形は、輪積痕と調整の観察から、胴部下半まで作り、別に上半を作り接合しているものがほとんどで、その場合は接合部にタテ方向のミガキ調整を伴うものがある。

当該地域では三段階に出現し、七段階まで継続する。当該地域の三段階以降の資料であり、段が明瞭な資料主体である。三段階と四段階では胴部最大径が下半～中部にあるものが主体である。

佐藤（同）による宮城県北・沿岸地域では、頸部の段が６世紀（一段階から二段階並行期）では不明瞭で、７世紀（三段階並行期）に入って明瞭化していく。

⑻　甕（第１・４・５図、第１表）

法量により、器高25㎝以上のＡ（大型）、25～18㎝程度のＢ（中型）、18㎝前後以下のＣ（小型）に分けた。しかし、厳密な区分を行った訳ではない。

甕Ａ（大型甕）

高さ25㎝以上の大型のもの。胴部形態に応じてＡ１・Ａ２・Ａ３・Ａ４・Ａ５・Ａ６に分離した。なお、Ａ４・Ａ５・Ａ６については佐藤（2007）の分類とは異なり、本稿で新たに設定した。

Ａ１は胴部の丸みがあり、東北南部を中心とする古墳時代中期からの系譜と考えられるもの。Ａ２は胴部が楕円形のもので、東北南部を中心とする古墳時代中期からの系譜と考えられるもの。Ａ３は胴部最大径が下半から中央部にある下膨らみ形態のもの。Ａ４は胴部最大径が上半にあり、ケズリ甕の影響が把握できるもの。Ａ５は胴部の最大径が上半にあり、底部に向かって窄まるもので、東北北部の古墳時代後期からの系譜と考えられるもの。Ａ６はロクロによる回転ナデ調整のもの。

Ａ１・Ａ２・Ａ４・Ａ６は当該地域では未確認である。

Ａ１・Ａ２は東北南部を中心とする古墳時代中期からの系譜で考えられるものである。外来系のものであり、当該地域では古墳時代中期の様相が不明瞭なため、今後も引き続き検討していきたい。Ａ３は胴部の下半が膨らむもので、三～七段階で甕Ａの主体を占める。出現は佐藤（同）による宮城県北・沿岸北部地域と同時期である。三段階では底部の立ち上がりが明瞭であるが、四段階以降不明瞭になっていく。三段階には口縁部が長いものや口縁部に平行沈線のみられるものがあり、口縁部の特徴に「東北北部型土師器」の影響がみられるものがある。成形は、底部から胴下部まで成形後に乾燥の工程を経て、胴中部より上位を成形している。したがって、それより上位の胴部が下半に乗る形状となり、接合部に段やハケ・ミガキ調整等が伴うことがある。辻（2007a）によれば、このよう

な工程で製作される長胴甕は栗囲式期に特徴的なものである。また、Ａ３の中には器形が胴部楕円形となるＡ２に類似するものと胴部最大径が中央にあるものを含めている。当該地域において現在確認できる資料では、成形技法と系譜がＡ３と同じであるためである。Ａ４は、佐藤（同）によれば、七段階から八段階以降にケズリ甕の増加が明確となる宮城県北部・沿岸地域では主体となるが、当該地域ではケズリ甕が確認できない。器形のみが類似するものはあるが、現状ではＡ５の系譜で考えられるものである。Ａ５は胴部最大径が上半にあり、底部に向かって窄まるものである。底部は強く張出し、ミガキ調整が主に用いられる甕で、いわゆる「東北北部型土師器」の系譜で追えるものである。

甕Ｂ（中型甕）

高さ18～25cm程度の中型のもの。Ｂ１は甕Ａを小型化した相似形のもの。Ｂ２は甕Ａの器高を低くしたもの。Ｂ３はロクロによる回転ナデ調整のもの。

Ｂ１・Ｂ２は三段階～四段階まで確認できる。五・六段階では甕Ａの寸胴化によって消失し、大型甕Ａと小型甕Ｃの法量となる。

当該地域ではＢ３は未確認である。

甕Ｃ（小型甕）

高さ18cm未満の小型のもの。いわゆる「小甕」で、スス・コゲなど火に掛けられた痕跡を有する。ただし、カマド内支脚に転用された壺にスス・コゲが付着している場合は分離することが困難であったため、本類に含まれている可能性がある。Ｃ１は非ロクロのもの。Ｃ２はロクロによる回転ナデ調整のもの。Ｃ１は一・二段階から五・六段階まで安定して確認できる。

当該地域ではＣ２は未確認である。

⑼　甑（第４図、第１表）

法量により、器高18cm以上のＡ（大型）、18～12cm程度のＢ（中型）、12cm前後以下のＣ（小型）に分けた。しかし、厳密な区分を行った訳ではない。

甑Ａ（大型甑）

高さ18cm以上の大型のもの。

当該地域では検討資料が少なく、消長を判断できないが、一・二段階にみられる。

甑Ｂ（中型甑）

甑Ａに比べて器高がやや低い中型のもの。

当該地域では検討資料が少なく、消長を判断できないが、一・二段階にみられる。

甑Ｃ（小型甑）

甑Ｂよりさらに小型のもの。

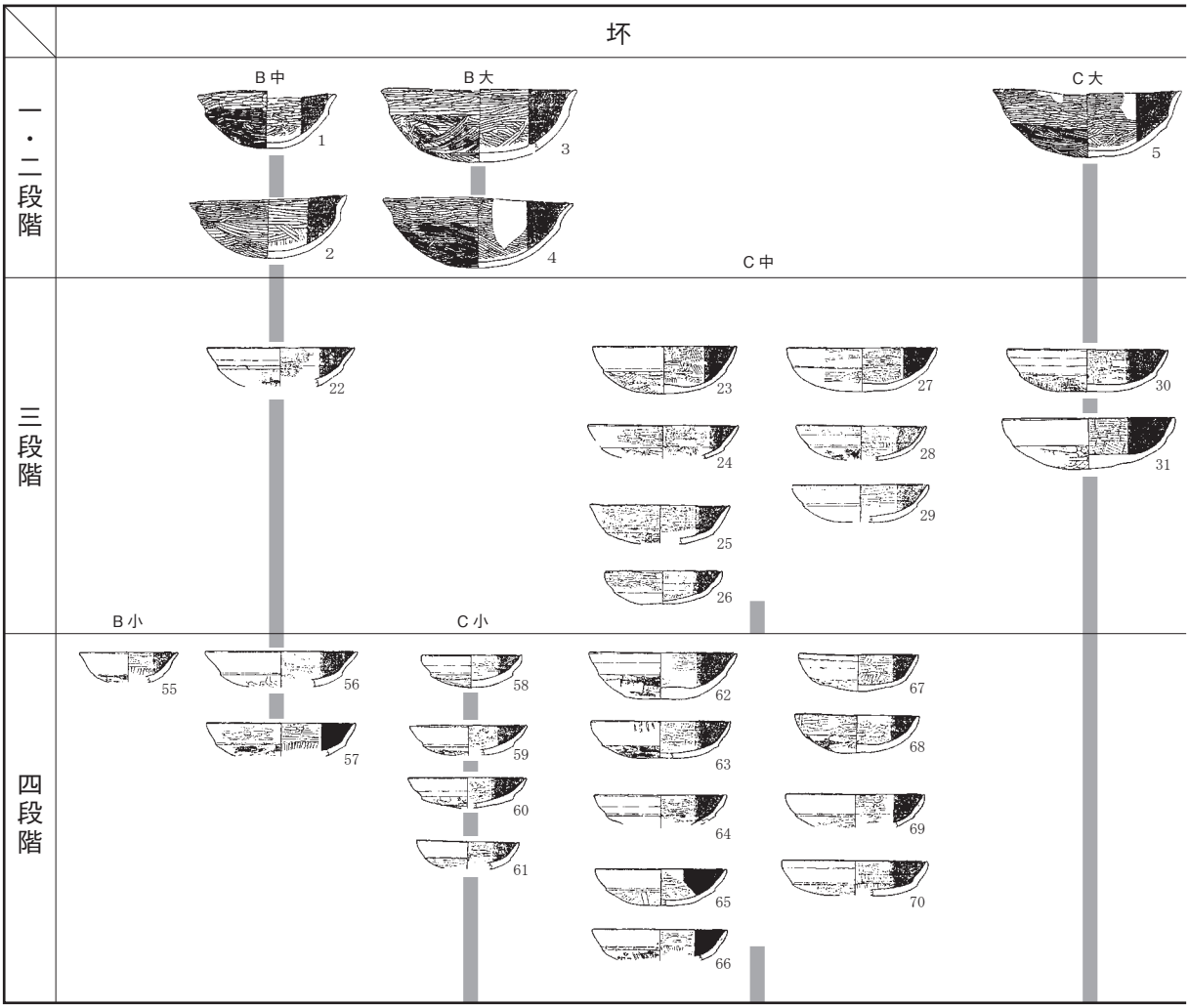
当該地域では未確認である。

３．細別器種の構成と消長

⑴　様式（第２～５図、第１表）

前項までの検討により、基準資料を中心とする細別器種の集合体である、坏Ｂ･Ｃ･Ｄ･Ｅ･Ｆ、椀Ａ･Ｂ、高坏Ａ･Ｂ、鉢Ａ、片口、ミニチュア土器、壺Ａ･Ｄ、甕Ａ３・Ａ５・Ｂ１・Ｂ２・Ｃ１、甑Ｂの構成を、岩手県域の太平洋沿岸中部地域における６世紀末から８世紀の土器様式と捉える。主要な細別器種は坏Ｂ・Ｃ・Ｅ、椀Ｂ、壺Ｄ、甕Ａ３で、坏Ｂ・Ｃと甕Ａ３については栗囲式に特徴的なものである。

この細別器種の構成は、辻（2007b）によれば、総体としては栗囲土器様式と言え、大様式圏内に位置付けられる。辻（2007b）では、栗囲土器様式とその様式圏の広がりは宮城県沿岸部では宮城県



第２図　土器変遷図(1)

沿岸部までとし、岩手県域の太平洋沿岸は北部型栗囲土器様式がみられ、その様式圏としている。本稿での近年増加した資料を用いての検討からは、栗囲土器様式とその様式圏の広がりは、沿岸部では岩手県域の太平洋沿岸中部地域までと捉えることが出来る。

また、この構成の分布する範囲は岩手県域の太平洋沿岸中部地域（宮古市沿岸部、山田町、大槌町のエリア）という地域的なまとまりを示していることから、地域的な小様式圏とも位置づけられる。その地域的な広がりについては今後の検討とする。

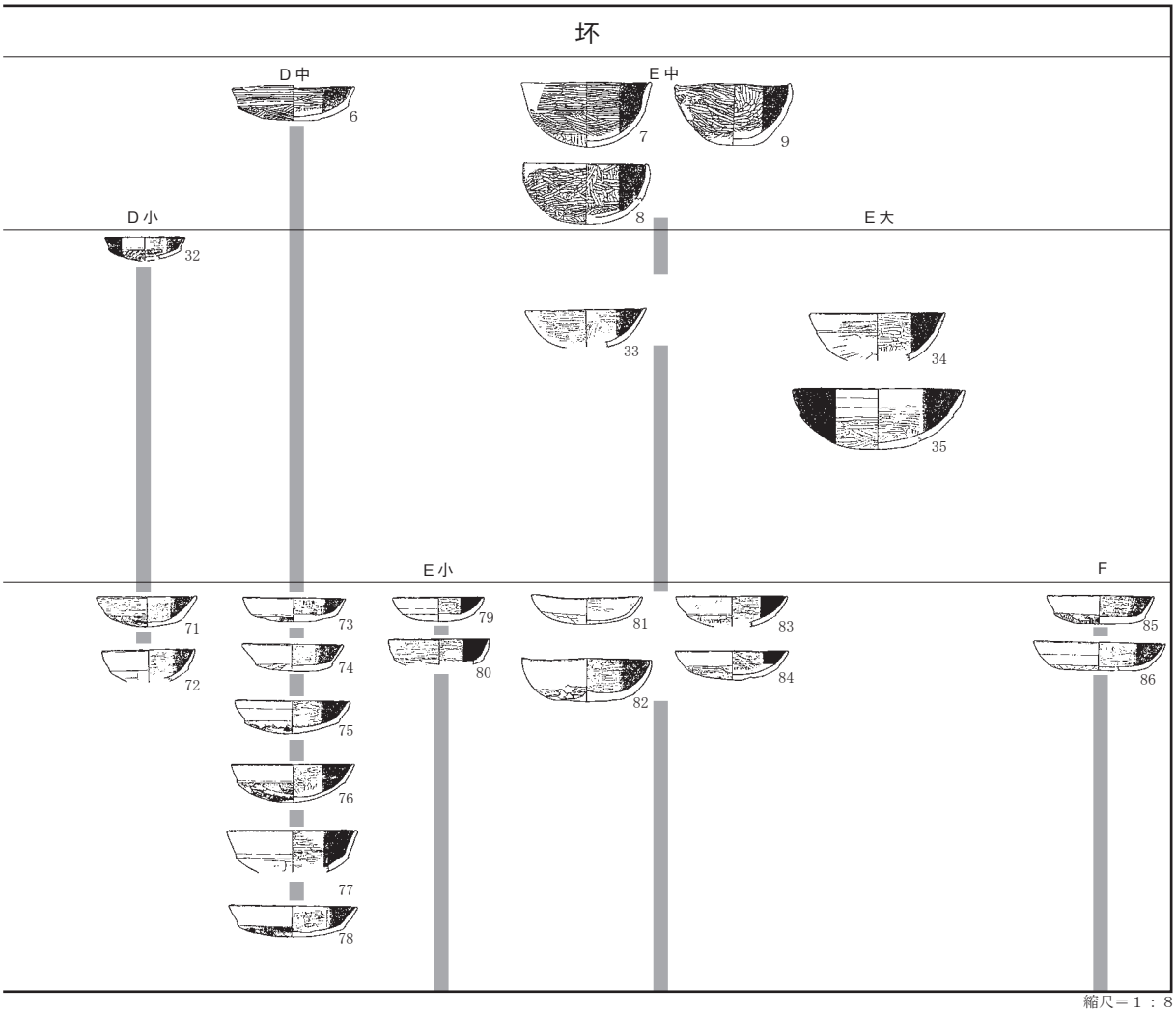
当該地域における栗囲土器様式の時間的な幅は本稿における三段階から七段階である。

⑵　各段階（第２～５図、第１表）

前項で示した細別器種の特徴と変遷を踏まえ、それらの構成と消長から設定した各段階の様相を説明する。

一・二段階

当該地域では、佐藤（2007）による宮城県北部・沿岸部の一段階と二段階の各段階に限定できる資料はない。ただし、近年、沿岸北部の久慈市や中部との中間に位置する野田村周辺において多くの集落遺跡から出土している（注１）。そのなかで、野田村蒲沢遺跡南浜地区・米田地区出土資料（野田村教育委員会　2015）はまとまりを持っており注目される。



蒲沢遺跡南浜地区・米田地区では坏Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、椀Ｂ、ミニチュア土器、甕Ａ５・Ｃ１、甑Ａ・Ｂがみられる。

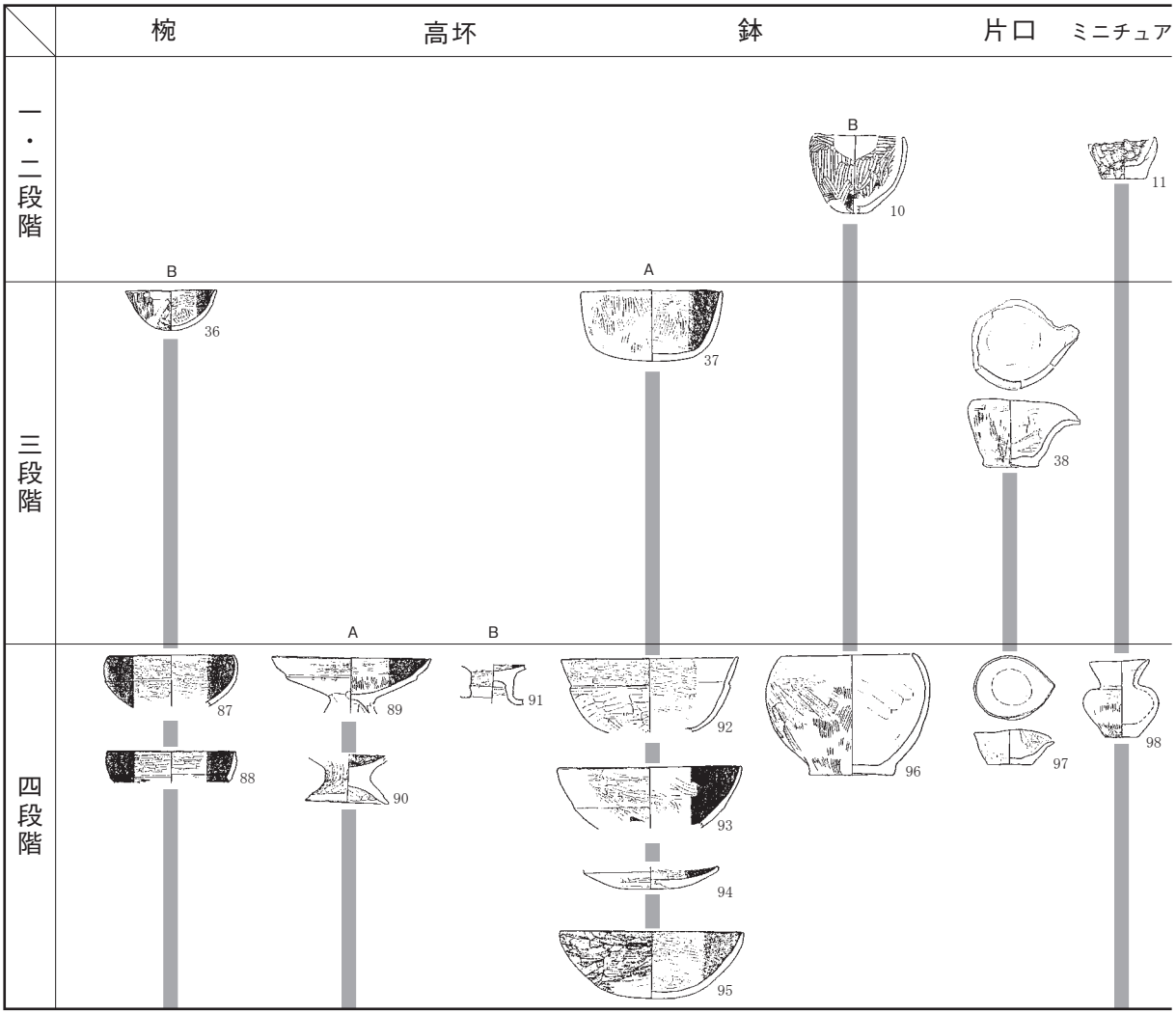
坏は丸底で口縁部が外反する深身の坏Ｂが半数を占め、古墳時代中期以来の半球形で椀形の坏Ｅがみられる。坏Ｃは極少量である。坏類では、須恵器模倣の坏Ｄを除けば、大型と中型または大型とそれ以外という法量分化である。大型甕は当該地域周辺にみられる古墳時代後期の系譜と考えられるＡ５のみで主要な細別器種である。

以上から、一・二段階として設定する。一・二段階はその様相から栗囲土器様式ではなく、別の様式と考える。一・二段階はまとまりのある限定的な資料を基にしており、地域的にも沿岸北部と中部の中間に位置するため、今後に、岩手県沿岸部全域での資料の増加を待って再検討したい。

三段階

宮古市津軽石大森遺跡７・11・17・22・24・28・30号竪穴建物跡出土資料を基準とする。重複関係があり、22・24号は同じく三段階に位置づけた23号竪穴建物跡より古く、28号は四段階に位置づけた26号竪穴建物跡より古い。

三段階に該当する遺跡は津軽石大森遺跡の他に、宮古市狐崎遺跡（宮古市教育委員会　1990)、山田町沢田Ⅰ遺跡（(財）岩文振埋　2000)、大槌町夏本遺跡（(財）岩文振埋　1989）などがある。

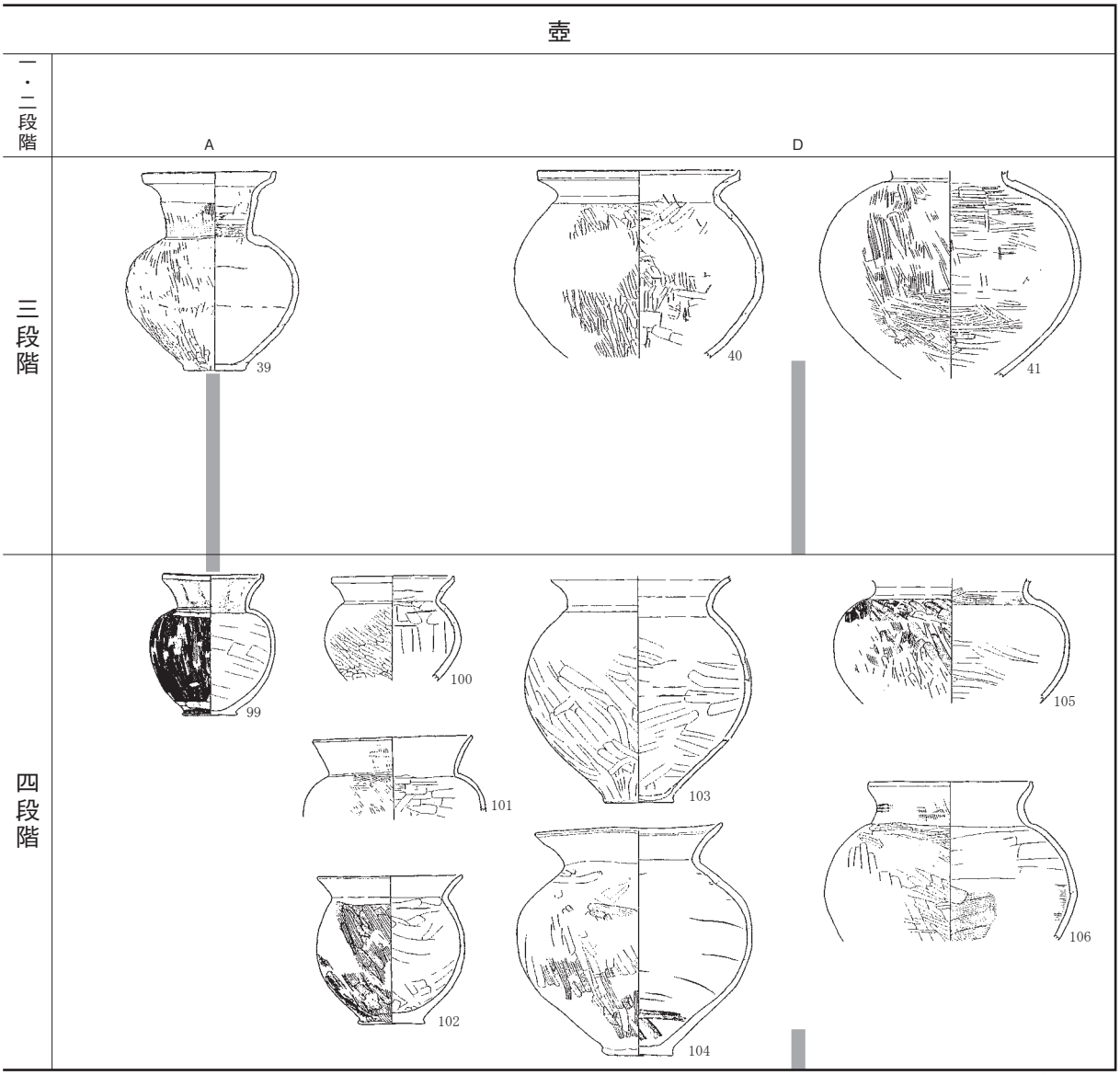


第３図　土器変遷図(2)

細別器種は坏Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、椀Ａ・Ｂ、片口、壺Ｃ、甕Ａ３・Ａ５・Ｂ１・Ｂ２・Ｃ１で構成される。これに前後の関係から、鉢、甑、ミニチュアが加わると推定される。栗囲式に特徴的な甕Ａ３が製作技法も含めて主要な細別器種として出現し、栗囲式に特徴的な坏Ｂ・Ｃが主要な細別器種となっている。これらのことから、当該地域における栗囲土器様式の成立期と考えられる。

坏は、坏Ｃが主体で、坏Ｃに比べれば坏Ｂが客体となっている。坏類は深めのものが多く、浅いものもある。須恵器模倣の坏Ｄの小型品が坏Ｂ・Ｃ・Ｅに先行して出現している。小型坏自体は三段階では客体的と言える。調整はミガキ主体で、口縁部はヨコナデ後にさらにミガキ調整するものも多い。列島内では、７世紀中頃から大陸的な様式の食膳器が徐々に広まりをみせ、東北地方南部でも手持ちで丸底の器を持つスタイルから、直置きまたは小分けの盛り付けされた膳を個々人で食するスタイルが浸透し始める。小型坏の出現は、直置きまたは小分けの盛り付けされた膳を個々人で食するスタイルの出現と連動する現象ととらえておきたい。津軽石大森遺跡の坏もこの段階の須恵器小型坏を模倣したと考えられる。

なお、７号竪穴建物跡出土資料の坏Ｄは陶邑 TK217期の須恵器小型坏に類似する。しかし、それ以外の坏と甕の様相からこの段階と考える。また、坏Ｂは佐藤（同）の宮城県北部・沿岸地域では三段階までは坏類の主体となっている。このことから坏Ｂが客体となっている津軽石大森資料は三段階



縮尺＝１：８

内でも新しい様相を示すと考える。

椀は椀Ｂがあり、その特徴から三段階の椀Ｂは丸底の金属器模倣と考える。

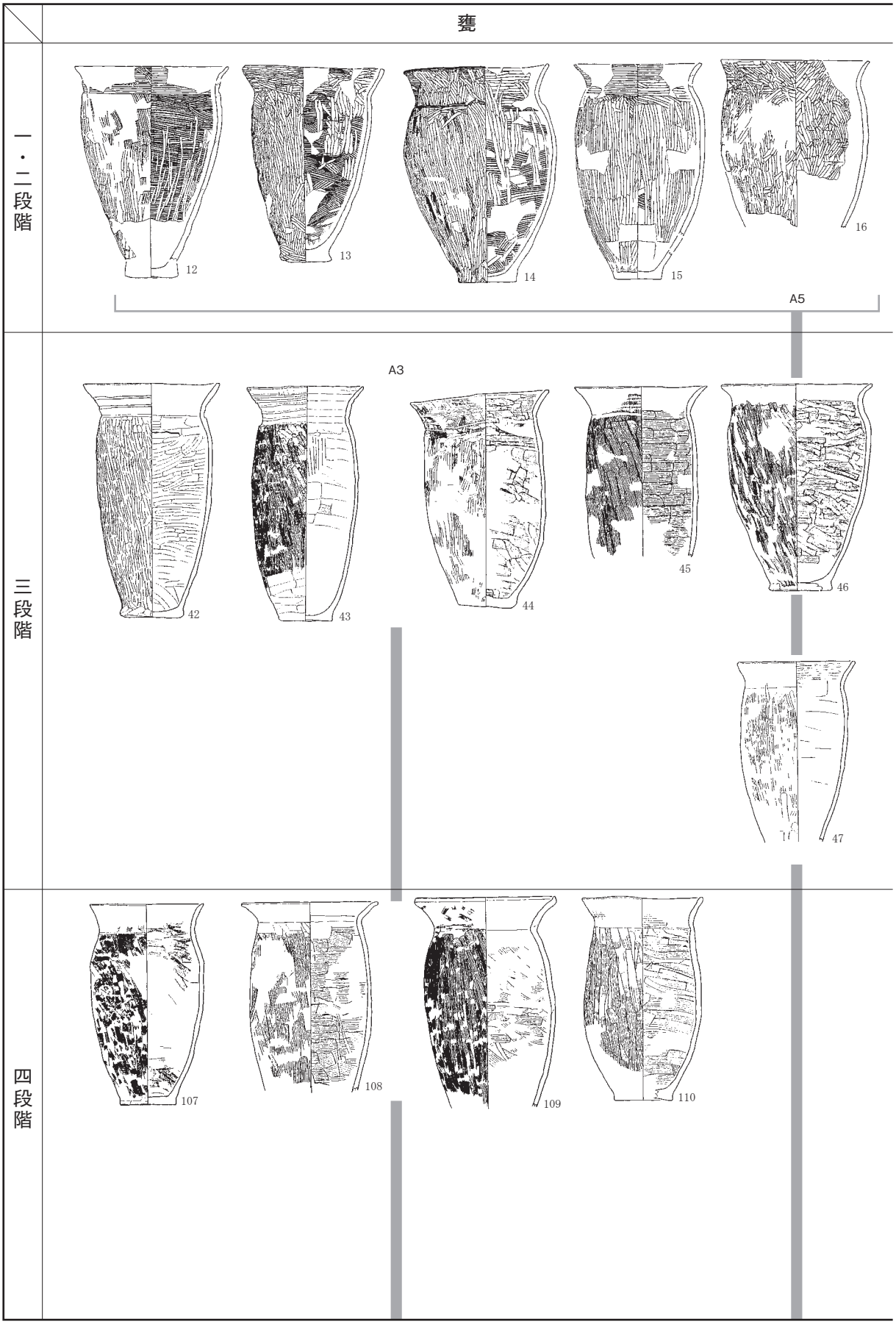
片口は小型鉢に口が付いたものである。

壺は壺Ａ・Ｄが出現する。Ａは撫肩の胴部と直立気味の頸部の特徴から、猿投窯産須恵器壺類を模倣した可能性を指摘できる。Ｄは胴部の膨らみが顕著で、胴部最大径は胴部の中央にある。外面調整はハケ・ミガキともにある。

甕は甕Ａ３・Ａ５があり、Ａ３が主体である。甕Ａ３は津軽石大森遺跡22号竪穴建物跡出土資料が特徴的である。底部の立ち上がりが明瞭なものと不明瞭なものがある。概ね長胴化のピークを迎えた感のある細長い器形が主体となっている点に特徴がある。口縁部が長いものや口縁部に平行沈線の見られるものもあり、口縁部の特徴に「東北北部型土師器」の影響がみられるものがある。甕Ａ５はいわゆる「東北北部型土師器」の系譜が追えるものであるが、一定量存在する。

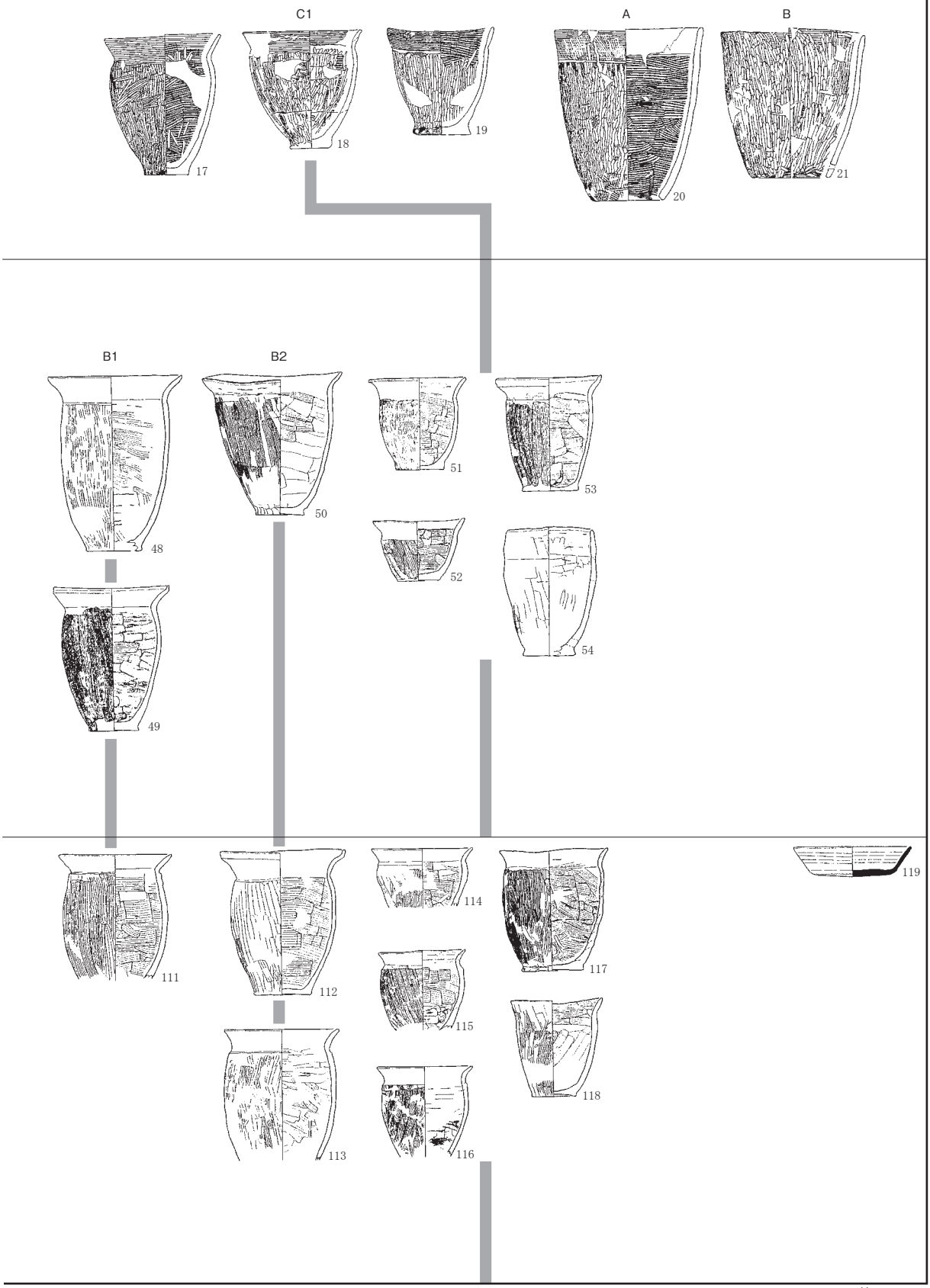
四段階

津軽石大森遺跡２・９・14・15・16・21・23・25・26・31号竪穴建物跡出土資料を基準とする。重

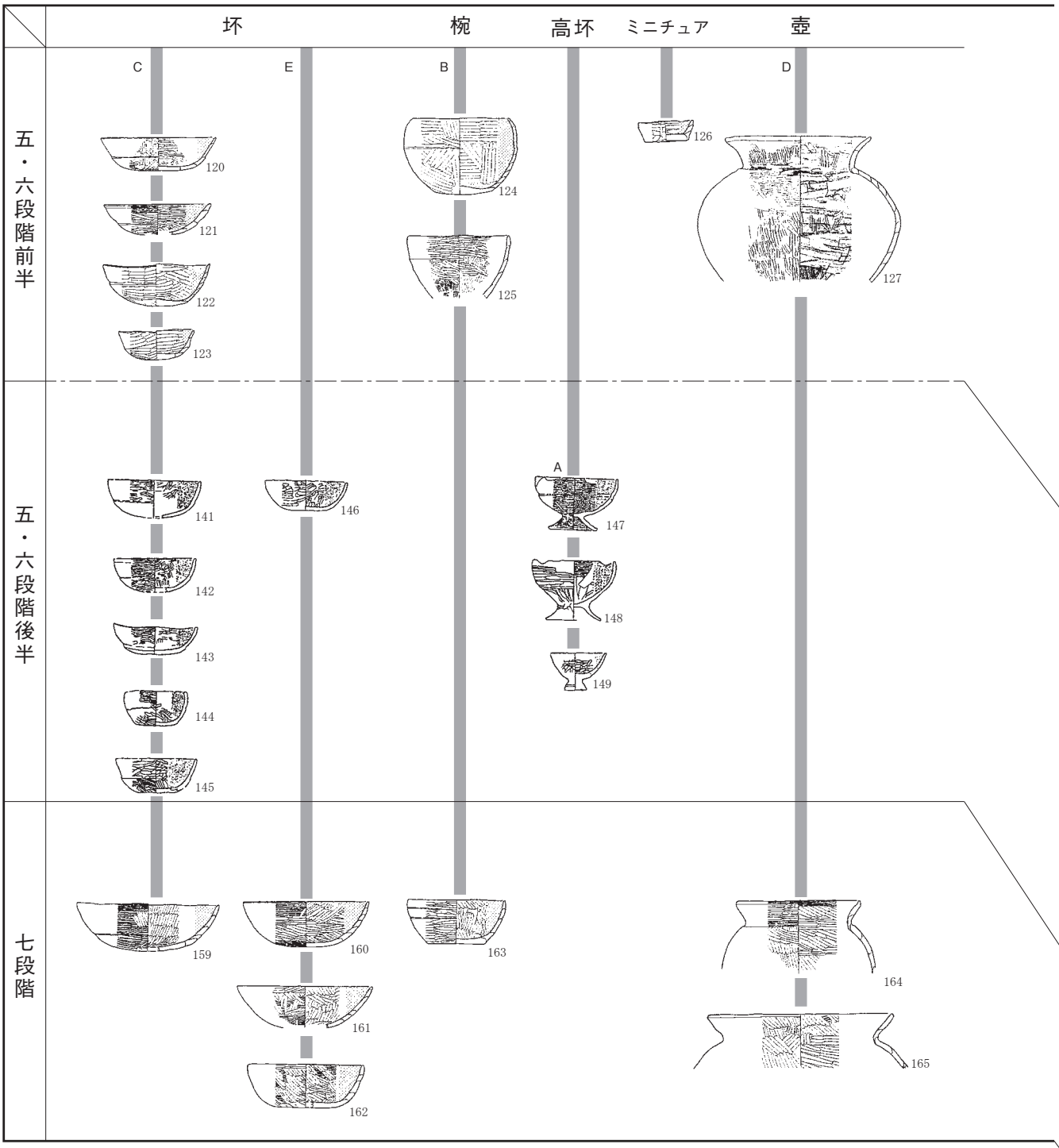


第４図　土器変遷図 (3)

甕　　甑　　須恵器


C1
A
B
17
18
19
20
21
B1
B2
48
49
50
51
52
53
54
111
112
113
114
115
116
117
118
119

縮尺＝１：８

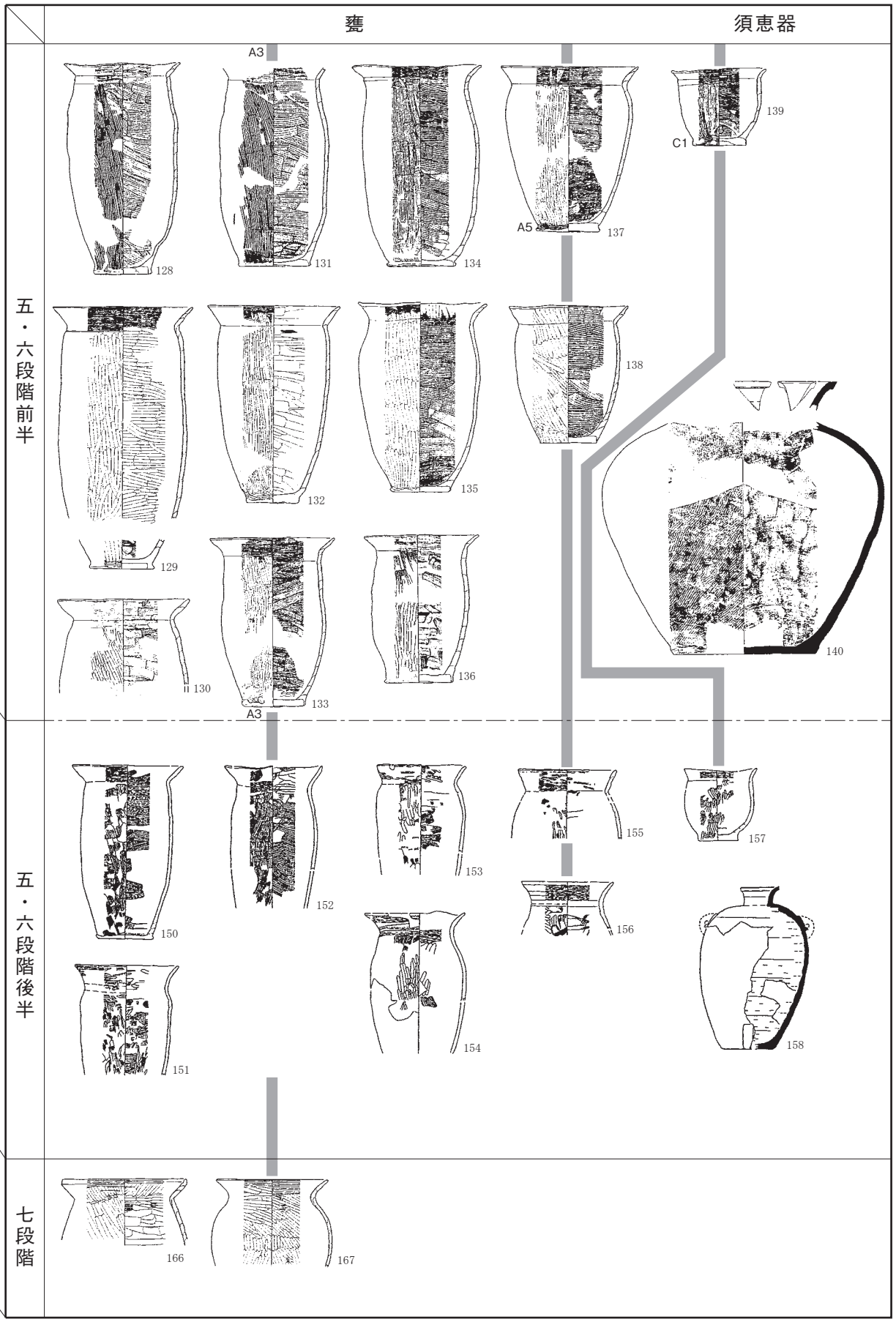


第５図　土器変遷図(4)

複関係から、23号は三段階に位置づけた22・24号より新しく、25・26号は26号より25号が新しい。

四段階に該当する遺跡は津軽石大森遺跡の他に、宮古市鰹沢遺跡第Ⅰ期（宮古市教育委員会1992)、山田町沢田Ⅰ遺跡（同)、大槌町夏本遺跡（同）などがある。

細別器種は坏Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ、高坏Ａ・Ｂ、椀Ｂ、鉢Ａ・Ｂ、片口、壺Ａ・Ｂ・Ｃ、甕Ａ３・Ｂ１・Ｂ２･Ｃ１、ミニチュアで構成される。これに前後の関係から、甕Ａ５、甑が加わると推定される。坏Ｆ、鉢Ａ・Ｂはこの段階に出現している。


甕
須恵器
五・六段階前半
五・六段階後半
七段階
A3
A5
C1
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
150
151
152
153
154
155
156
157
158
166
167

縮尺＝１：８

坏は、坏Ｃが主体、坏Ｂが客体で前段階と変わらないが、浅いものも多く坏の扁平化が進行している。体部の稜ないし段は顕著でない。前段階で須恵器模倣形態の坏Ｄの小型品が坏Ｂ・Ｃ・Ｅに先行して出現したが、四段階で坏Ｂ・Ｃ・Ｅの小型が出現している。大・中・小型の法量分化が明瞭になる様相は律令的土器様式の影響とその浸透と考えられる。一方、三段階にみられた坏Ｃ･Ｅの大型が消失し、代わって特大型と認識可能な鉢Ａが出現している点は、津軽石大森遺跡資料のみの特徴であるのか、今後に検討する必要がある。坏Ｆがこの段階で出現しており、佐藤（同）による宮城県北・沿岸部地域と同時期である。坏類の調整はミガキ主体で、口縁部ヨコナデ後にさらにミガキ調整するものも多いが、三段階に比べると口縁の外面をヨコナデ後にミガキ調整するものは減少している。

椀は椀Ｂがあり、内外面を黒色処理している。器壁も薄く精巧な造りで、金属器模倣である。

鉢は鉢Ａ・Ｂがある。鉢は四段階に出現している。

片口は浅い小型品が出土している。

壺は壺Ａ・Ｄがある。三段階と同様、胴部の膨らみが顕著で、胴部最径は胴中央部にあるものが主体であり、胴部上半に最大径のあるものもある。津軽石大森遺跡の壺Ａは胴部上半に最大径があり、撫肩の胴部や直立気味の頸部の特徴から猿投産須恵器壺類を模倣した可能性を指摘できる。壺Ａは四段階までの隆盛と考えられる。佐藤（同）による宮城県北・沿岸部地域では、五段階にまとまり、次段階で消失するとされる。五段階以降は、須恵器壺類に類似する土師器壺類は、壺Ｄにその特徴が引き継がれており、壺Ａは模倣していない。

甕は甕Ａ３主体である。三段階に比べて口縁部の長いものが減少する。津軽石大森遺跡の甕Ａ３では外面ハケ調整主体である。

須恵器坏が津軽石大森遺跡２号竪穴建物跡から出土している。底部外面の調整は回転ケズリで、平底風丸底に仕上げられている。

五・六段階

山田町間木戸Ⅱ遺跡（(公財)岩文振埋　2015）26・30号竪穴建物跡と宮古市山口館跡（(公財）岩文振埋　1999）SI04・08・13・16・1001出土資料を基準とする。

五・六段階に該当する遺跡は間木戸Ⅱ遺跡、山口館遺跡の他に、宮古市鰹沢遺跡第Ⅱ期（同）などがある。

細別器種は坏Ｃ･E、高坏Ａ、椀Ｂ、壺Ｂ、甕Ａ３･Ａ５･Ｃ１、ミニチュア、須恵器壺で構成される。これに前後の関係から、坏Ｆ、鉢、甑が加わると推定される。

佐藤（同）による宮城県北・沿岸部地域では、六段階に坏Ｂ・Ｄ・Ｅが消失し、坏Ｃ・Ｆに集約されていくとしているが、当該地域では坏Ｅの系譜が存続する点に特徴がある。

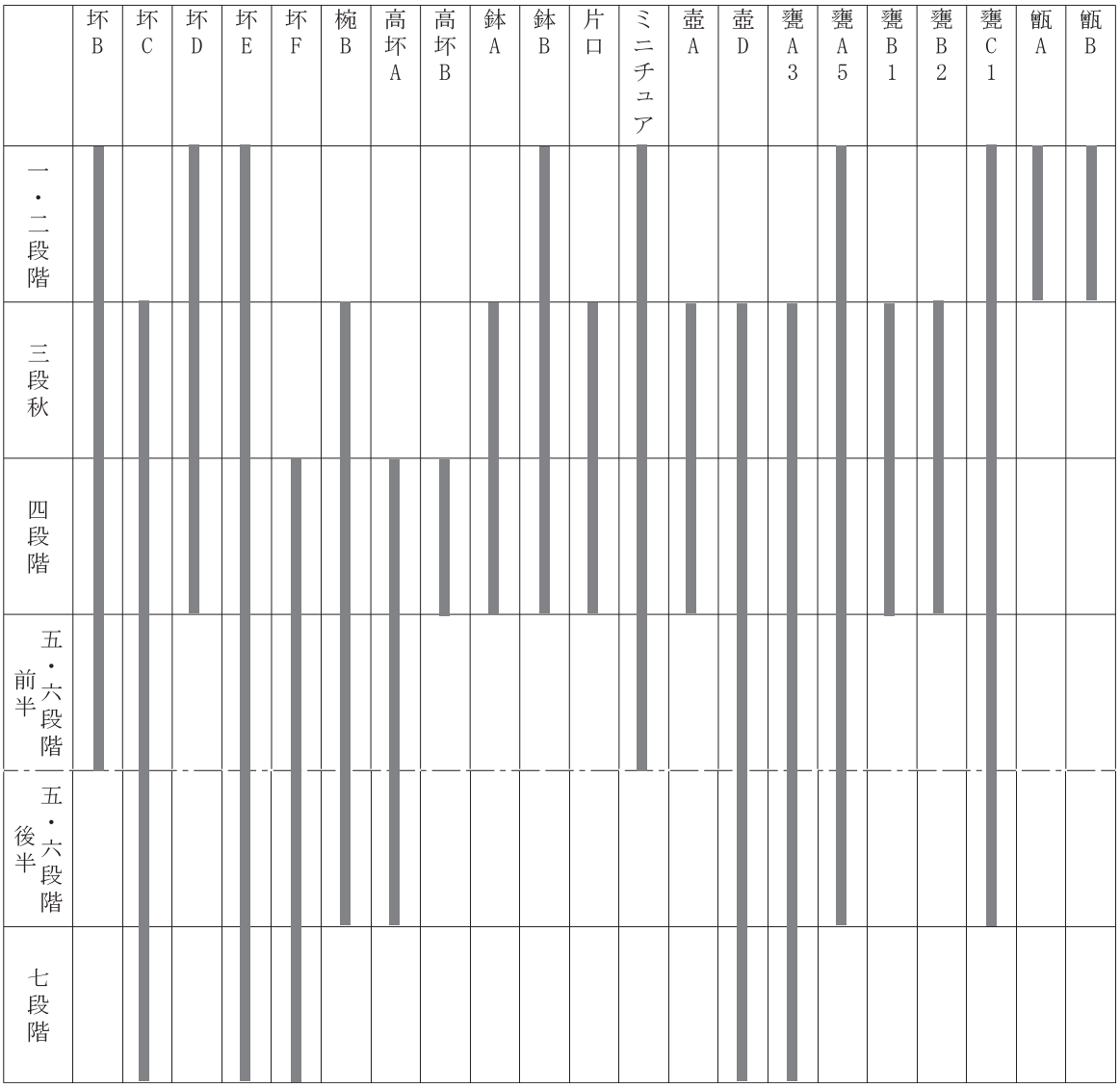
坏類・椀類では平底または平底風のものがみられ、段が不明瞭なものや沈線で表現されるものがある。これらは七段階に向けて相対的に増加する。段の位置は不明瞭なものでも体部の中位にあるものが多く、沈線で表現されるものでも同様である。このことから、前段階に見られた浅く扁平なものからの変化ではなく、深いものが変遷していると考える。以上のことから、当該地域の平底化は扁平なものからの変遷ではなく、平底への指向から徐々に変化していくと捉えておきたい。前段階では坏Ｃ･Ｅの大型が消失し、代わって鉢Ａが増加したが、五段階では資料的制約から鉢Ａが追えない。

椀は金属器模倣の椀Ｂがある。坏類と同様に、七段階に向けて平底化が進む。

高坏は引き続き、高坏Ａがある。

壺は壺Ｄがある。

甕Ａ３・Ａ５は底部径の大きいものが増加していく。



第１表　細別器種の消長

なお、五･六段階は坏Ｃ･Ｅと甕Ａ３･Ａ５の変遷に違いがみられることから、五･六段階前半と五･六段階後半の時期差とした。五・六段階前半は坏Ｃ・Ｅは平底風に変遷するものがある一方、明確な丸底と言えるものが主体である。甕Ａ３･Ａ５では寸動のものがあり、肩部が明瞭なものが多い。五･六段階後半は坏Ｃ・Ｅは平底風のものが主体で、丸底は不明瞭なものが多く、ほとんど見られなくなる。甕Ａ３・Ａ５では肩部が不明瞭なものが多くなる。

五・六段階前半

山田町間木戸Ⅱ遺跡26・30号竪穴建物跡出土資料を基準とする。

坏Ｃ・Ｅは平底風に変遷するものがある一方、明確な丸底と言えるものが主体である。外面調整はミガキ調整である。坏Ｃは中型のものである。坏Ｅは資料的制約から追えず、前後の関係から想定する。

高坏は資料的制約から追えないが、前後の関係から高坏Ａを想定する。

椀は金属器模倣の椀Ｂがある。平底化が進んでおり、内面非黒色処理も存在する。

壺Ｄは、前段階と比べて変化は見られない。一方、前段階で見られた壺Ａは未確認である。ただし、杉本良（1989）によれば、壺Ｄのなかには赤彩壺など東北北部の儀礼的要素を有するとされるもの

も含まれており、赤彩壺の用途は赤彩される壷Ｄが担っていく可能性を想定したい。

甕Ａ３・５の変遷は底部径が大きく、頸部のしまりが弱いものが増加していく。胴部は楕円形を維持しながらも寸胴形に近づいていく。

五・六段階後半

宮古市山口館跡（(公財）岩文振埋　1999）SI04・13・1001出土資料を基準とする。

坏は、五・六段階前半から継続して坏Ｃの中・小型と坏Ｅの小型がある。五・六段階前半で大型が消失した様相を引き続き確認できる。坏Ｃ・Ｅは大多数が平底風に変遷し、明確な丸底と言えるものがほとんど見られなくなる。坏Ｃはこの段階で坏Ｆと区別が困難となっている。

高坏Ａは坏Ｃに短脚が付くタイプであるが、同段階の坏と法量が同じ中・小型がある。

須恵器壺は双耳撫肩の小型壺がある。

甕Ａ５は五・六段階前半と比べて、肩の張りが弱くなり、丸みを帯びているものがみられ、撫肩傾向を強めている。

七段階

山田町間木戸Ⅴ遺跡（(公財)岩文振埋　2015）第３号竪穴建物跡を基準とする。

七段階に該当する遺跡は山田町間木戸Ⅴ遺跡の他に、宮古市鰹沢遺跡第Ⅱ期などがある。

細別器種は坏Ｃ・Ｅ、壺Ｄ、甕Ａ３で構成される。前段階に比べて細別器種の構成が単純化している可能性がある。

坏Ｃ・Ｅは平底や平底風のものがほとんどになる。間木戸Ⅴ遺跡資料では大・中型が存在するが、小型坏が伴っていない。四･五段階で消失していた大型坏が再び出現している点は、前段階と異なる。これと連動して鉢Ａが減少しているようにみえる。佐藤（同）による宮城県北部・沿岸部では、鉢は鉢ＡとＢの区別がつかなくなり、椀の法量を大きくしたもの、坏Ｆの法量を大きくしたものなど、多様な形が現れるとしている。当該地域も同様の傾向として捉えられる可能性がある。

甕Ａ３は全体の形状が不明な資料であるが、五･六段階後半からの撫肩の系譜を辿ることができる。

壺Ｄの外面調整は、三段階以降、一貫してミガキ主体である。

⑶　各段階の放射性炭素年代測定値（AMS）

各段階のなかで、放射性炭素年代測定値（AMS）を得られているものがある。そのため、参考として提示する。

一段階・二段階

一段階と二段階に伴う測定値は得られていない。

三段階

炭素年代測定値は、津軽石大森遺跡22・24・28号竪穴建物跡出土資料から得られている。22号竪穴建物内出土土器付着炭化物から海洋リザーバー効果の影響と考えられる数値と補正値１σ631calAD－680calADと２σ599calAD－700calADと、海洋リザーバー効果の影響がないと考えられる木炭から、１σ655calAD－676calADを得た。また、24号竪穴建物跡内出土土器付着炭化物から海洋リザーバー効果の影響と考えられる数値とリザーバー効果100%と見なして補正した補正値１σ733calAD－810calADを得たが、同じ24号竪穴建物床面出土炭化材は１σ665calAD－690calAD（53.3%）、750calAD－761calAD（14.9%）を得ている。しかし、28号竪穴建物内出土土器付着炭化物から海洋リザーバー効果の影響と考えられる数値と補正値１σ271calAD－356calADを得ており、この３～４世紀という測定結果についてはどのような理由によるか不明である。

年代測定においては、例えば１遺構内出土資料につき１点だけ測定されることが多いが、22・24号

竪穴建物跡のように一括性の期待される資料群を複数測定することが求められる。今のところ三段階の測定値は７世紀代にまとまる。

四段階

炭素年代測定値は、津軽石大森遺跡26号竪穴建物内出土土器付着炭化物から１σ619calAD－650calAD（68.2%）と、その数値を海洋リザーバー効果の影響と想定したときの補正値１σ966calAD－1028calAD（68.2%）を得ている。26号竪穴建物跡は、赤彩壺が出土した建物である。赤彩壺そのものに付着した炭化物の年代測定を実施したが、炭素不足のため測定不能であった。これまで得られていた赤彩土器の年代観よりも古い測定値が同建物内資料から得られたため、マリーン補正を加速器研究所に依頼し、10～11世紀の年代を得たものである。今回の土器様相の成果との比較検討からは、海洋リザーバー効果の影響がない測定値と考えられる。ただし、年代測定値は通常100年程度の測定誤差や古木効果を考慮して解釈が必要なため、１点の測定値を全体に反映するには時期尚早である。

三段階と同様に、一括性のある資料群を複数測定することが求められる結果となった。

五・六段階

炭素年代測定値は間木戸Ⅱ遺跡26号竪穴建物跡埋土中位～下位出土木炭から１σ681calAD－715calAD（40.42%）・１σ744calAD－766calAD（27.8%）を得た。

三・四段階と同様に、１点の測定値を全体に反映するには時期尚早である。一括性のある資料群を複数測定することが求められる結果となった。

七段階

七段階の基準資料に伴う測定値は得られていない。

４．岩手県域の太平洋沿岸中部地域と周辺地域の比較

⑴　宮城県北部・沿岸部との並行関係（第２～５図、第１表）

ここでは、栗囲土器様式圏内における岩手県域の太平洋沿岸中部地域と、その周辺地域である宮城県北部・沿岸部を検討した佐藤（2007）による編年案との各段階の並行関係を様相から検討する。

一・二段階

当該地域では、佐藤（2007）による宮城県北部・沿岸部の一段階と二段階の各段階に限定できる資料はない。

ただし、まとまりのある限定的な資料であり、久慈市周辺の沿岸北部と中部の中間に位置する野田村蒲沢遺跡南浜地区・米田地区では坏Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、椀Ｂ、ミニチュア土器、甕Ａ５・Ｃ１、甑Ａ・Ｂがみられる。

蒲沢遺跡南浜地区・米田地区では、坏は丸底で口縁部が外反する深身の坏Ｂが半数を占め、古墳時代中期以来の半球形で椀形の坏Ｅがみられる。坏Ｃは極少量である。坏類では、須恵器模倣の坏Ｄを除けば、大型と中型または大型とそれ以外という法量分化である。大型甕は当該地域周辺にみられる古墳時代後期の系譜と考えられるＡ５のみである。

佐藤（同）によれば、このような様相は一段階から二段階に相当させる。

一段階の年代は、佐藤（同）によれば、名生館官衙遺跡SK430土壙、SI1217住居跡で陶邑TK47期の須恵器が出土していることから５世紀末から６世紀前葉頃と考えられている。また、二段階の年代は、須恵器が伴わないことから限定できないが、三段階ではごく少数ながらも陶邑TK209期の須恵器が出土していることから、それ以前の、６世紀中葉から後葉頃と考えられている。そのため、一・二段階は五世紀末から６世紀後葉頃と想定しておく。

一・二段階はその可能性のある資料を指摘し、岩手県沿岸部全域での資料の増加を待って再検討したい。

三段階

三段階は、主要な細別器種である坏Ｂ・Ｃ、甕Ａ３は一定量みられ、甕Ａ３は製作工程を含めて成立しており、規格的である。金属器模倣の椀Ｂが一定量存在し、平底風のものもある。須恵器模倣の小型坏Ｄがみられる。食膳具である坏・椀・高坏類の内面はすべてミガキ調整で、黒色処理がほとんどである。貯蔵具である壺の外面はほぼミガキ調整で、煮炊具である甕にも一定量、外面がミガキ調整のものがある。

当該地域の特徴としては、甕Ａ３の口縁部の特徴に「東北北部型土師器」の影響がみられるものがある。Ａ２はＡ３と製作工程の違いはみられず､器形や調整からは区別が不明瞭で､Ａ３に含まれる。Ａ５が安定的にみられる。坏Ｃは他の坏類に比べてやや優勢である。東北北部の古墳時代後期からの系譜で考えられるＡ５が安定してみられる。佐藤（同）によれば、宮城県北部･沿岸部の北半の栗原･桃生地域ではＡ５は比較的に多くみられるものの、それより南の地域では減少する。そのため、Ａ５の主な分布地域は宮城県北部・沿岸部の北半の栗原・桃生地域までである。

津軽石大森遺跡では坏類が豊富に出土しており、集落遺跡における出土量も宮城県域と比べても遜色はない。

なお、津軽石大森遺跡７号竪穴建物出土の須恵器模倣の小型坏Ｄは陶邑 TK217期の須恵器小型坏に類似しており、７世紀中葉のものも含まれている可能性がある。従って津軽石大森は三段階内でも新相に属すると考える。

佐藤（同）によれば、このような様相は三段階に相当させる。なお、ミガキ調整の多用は、宮城県北部・沿岸部でも北半の栗原・桃生地域でより顕著である。

三段階の年代は、佐藤（2007）によれば、陶邑 TK209期の須恵器の出土例から６世紀末～７世紀前半頃と考えられている。

四段階

四段階は、主要な細別器種である坏Ｂ・Ｃが一定量みられ、坏Ｃでは大・中・小型の明瞭な法量分化がみられる。坏Ｂ・Ｃでは器高が浅いものがみられ扁平化が進んでいる。須恵器の調整技法に影響を受けた坏Ｆが出現する。甕Ａ３は安定的にみられる。須恵器模倣の壺Ａが隆盛し、引き続き貯蔵具である壺の外面はほぼミガキ調整で、煮炊具である甕にも一定量外面ミガキ調整のものがある。

当該地域の特徴として、鉢Ａ・Ｂはともに四段階に出現している。

津軽石大森遺跡の16・21号竪穴建物跡では坏類が豊富に出土しており、集落遺跡における出土量も宮城県域と比べても遜色はない。佐藤（同）によれば､このような様相は四段階に相当させる。なお、ミガキ調整の多用は､宮城県北部･沿岸部でも北半の栗原･桃生地域でより顕著である。また佐藤（同）では透かし付高坏や盤の増加を五段階としていることから、津軽石大森の四段階に含まれる資料の中にも五段階に位置付けられるものが含まれている可能性もある。

四段階の年代は、佐藤（同）によれば、陶邑 TK217期（７世紀中葉から後半頃）に相当する。

五・六段階

五・六段階は、金属器模倣の椀Ｂがある。坏類・椀類では平底または平底風のものがみられ、段が不明瞭なものや沈線で表現されるものがあり、次段階に向けて増加していく。甕Ａ３・Ａ５は次段階に向けて底部径の大きいものが増加していく。Ｂ１・Ｂ２も同様の傾向である。

佐藤（同）によれば、このような様相は五段階から六段階に相当させる。佐藤（同）の五段階は主

な様相を挙げれば、下膨れの甕Ａ３の消失、盤の出現、「関東系土師器」の特徴、須恵器の特徴と年代から設定されている。また、六段階は主な様相を挙げれば、坏Ｂ・Ｄ・Ｅ、盤、高坏Ｂの消失、「関東系土師器」の特徴、須恵器の特徴と年代から設定されている。当該地域の様相にはこのような違いが認められず、現状では漸移的な変遷と捉えている。

五・六段階の年代は、前後の時期から相対的に７世紀末～８世紀前半頃と捉えておく。当該地域で伴出している須恵器壺の特徴は８世紀代を通じて存在し、年代の指標としては根拠が不足している。

なお、佐藤（同）によれば、五段階の年代は須恵器蓋のカエリが消失する時期であること、須恵器坏や高台付坏が丸底を呈すること、湖西産須恵器長頸瓶の年代から７世紀末から８世紀初頭頃と考えられている。また、六段階の年代は仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙の時期に相当する大蓮寺窯跡５号窯の製品に類似する須恵器や多賀城創建の古い段階の須恵器が伴うことから８世紀前葉から前半頃と考えられている。

五・六段階前半は、坏Ｃ・Ｅは平底風に変遷するものがある一方、明確な丸底と言えるものが主体である。甕Ａ３の変遷は底部径の大きいものが増加していく。胴部は楕円形を維持しながらも寸胴形に近づいていく。

五・六段階後半は、坏Ｃ・Ｅは大多数が平底風に変遷し、明確な丸底と言えるものがほとんど見られなくなる。坏Ｃはこの段階で坏Ｆと区別が困難となっている。甕Ａ５は五・六段階前半と比べて、肩の張りが弱くなり、丸みを帯びているものがみられ、撫肩傾向を強めている。

五・六段階前半の年代は、前後の時期から大まかに、７世紀末～８世紀前半頃のうちの前半、五・六段階後半の年代は、前後の時期から大まかに、７世紀末～８世紀前半頃のうちの後半と捉えておく。

五・六段階の段階設定と年代については資料の増加を待って再検討したい。

七段階

七段階は坏がほぼ平底の坏Ｃ・Ｅで占められ、丸底は微量となり細別器種数が減少する。鉢も同様である。甕・壺類もほぼ統一され、全体に細別器種数が減少して構成が単純化する。須恵器類は現状では確認できない。

当該地域では七段階の次段階に坏Ｇ・椀Ｃ等のロクロ土師器が導入される。甕Ａ６（ロクロ甕）に類似することからその影響を受けて出現すると考えられる、口縁部が短く外反する長胴甕（非ロクロ、細別器種未設定）の出現も次の段階である。これらのことから、七段階は土師器へのロクロ技術導入以前である。以上のことからのことから、主要な細別器種が交換しており、様式の主要な構造が大きく変化しているため様式を区分し、七段階までを栗囲土器様式と考える。

佐藤（同）によれば、このような様相は七段階に相当させる。しかし、宮城県北部では一般集落においても須恵器の出土量が増加するのに対し、当該地域ではそのような様相は認められない。佐藤（同）では、宮城県北・沿岸部地域では甕と壺の主要な器面調整がケズリに転換しており、甕では胴下半が窄まり、最大径が胴部の上半にある砲弾型のＡ４が大型甕の主体となっている。当該地域ではケズリ調整技術を導入していない。

七段階の年代は、佐藤（同）によれば、多賀城創建期でも新しい時期とされる日の出山窯跡Ｃ地点２号窯に類似する須恵器が伴うこと、桃生城跡が創建されて機能している時期（760年完成～774年海道蝦夷反乱による火災消失）に相当することから、８世紀中葉から後半頃と考えられている。

なお、佐藤（同）によれば、八段階は新たにロクロ成形の土師器形式が登場し、急激に出土量を増す時期で、ロクロ土師器の導入期である。また八段階の年代は、伊治城跡 SI173住居跡から長岡京期（784～794年）に盛行した壷Ｇが出土していること、８世紀末から９世紀初頭に盛行する双耳坏が伴

うことなどから８世紀末から９世紀初頭頃と考えられている。

⑵　栗囲土器様式圏内での様相（第１～４図、第１表）

ここでは前項で得られた各段階の様相と年代観をもとに、辻（2007b）による栗囲土器様式圏内における大枠での様相について検討する。

一・二段階

前項で得られた様相から、一・二段階は当該地域における栗囲土器様式の成立以前である。坏の様相からは、坏Ａ（辻の坏１）が不明瞭なものの、深い坏Ｂ（辻の坏２）が半数を占め、古墳時代中期以来の半球形で椀形の坏Ｅがみられる。坏Ｃ（辻の坏３）は極少量である。坏類は大型と中型または大型とそれ以外という法量分化が認められる。大型甕は当該地域周辺にみられる古墳時代後期の系譜と考えられるＡ５のみである。須恵器類は現状では確認できない。

一・二段階は、辻（2007b）によれば、栗囲土器様式成立以前のＡ－ａ期とＡ－ｂ期が考えられる。坏の様相からは坏Ａ（辻の坏１）が不明瞭なものの、Ａ－ｂ期に該当させる。坏類はこの段階から大型と中型または大型とそれ以外という法量分化が認められる。大型甕の様相は、甕Ａ５のみでＡ３を含んでいない点からＡ－ｂ期以前も想定できるが、東北北部の特徴や影響とも考えられる。

辻（2007b）によれば、Ａ－ａ期の年代観は６世紀前半、Ａ－ｂ期は６世紀中葉から後葉としている。

限定的な資料のため、今後とも検討していきたい。

三段階

前項で得られた様相から、三段階は当該地域における栗囲土器様式の成立期である。坏は深い坏Ｂ（辻の坏２）･坏Ｃ（辻の坏３）が主体である。大型甕は新しく成立するＡ３が主要な細別器種である。大型坏と中型坏または大型坏とそれ以外という法量分化が安定してみられ、小型坏もある。

津軽石大森遺跡では坏類が豊富に出土しており、厳密に比較はしていないが、一般の集落遺跡における出土量としては、宮城県北部・沿岸部地域と比べて、ほぼ同程度かやや少ない程度と考える。少なくとも東北北部型栗囲土器様式よりは明らかに多いことを指摘できる。

当該地域の特徴は、坏類における坏Ｃ（辻の坏３）の割合が高い点である。現在、資料不足であるが、宮城県北・沿岸部地域と同様に坏Ｂ主体はより古相に、坏Ｃ主体はより新相に位置付けられる可能性もある。坏Ｃは、辻（2007b）によれば、北部型と考えられる口縁部が体部の段から大きく内湾して開くものも含んでいる。また、東北北部の古墳時代後期からの系譜で考えられるＡ５が安定してみられる。佐藤（同）による宮城県北部・沿岸部の北半の栗原・桃生地域では、Ａ５は比較的に多くみられるものの、それより南の地域では減少する。そのため、主な分布は宮城県北部・沿岸部の北半の栗原・桃生地域までである。須恵器類は現状では確認できない。

甕類に東北南部の古墳時代中期からの系譜であるＡ２がみられないこと、当該地域の古墳時代中期からの系譜であるＡ５が一定量みられること、いわゆる「関東系土師器」がみられないことから、この様式の成立には東北南部以南からの多くの移住者の影響は看取できない。つまり、当該地域では在地社会が栗囲土器様式を受容して展開するものと考える。

三段階は、当該地域の特徴は異なるものの、様相の共通性が高いことから、大きくは辻（2007b）の栗囲土器様式のＢ－ａ期に該当させる。

辻（2007b）によれば、Ｂ－ａ期の年代は６世紀末から７世紀前半としている。

四段階

前項で得られた様相から、四段階は当該地域における栗囲土器様式の細別器種構成が引き継がれ、変遷している時期である。坏は坏Ｃが主体で、大型甕はＡ３が主要な細別器種で、引き続きＡ５も

みられる。坏・椀類は平底または平底風のものがみられる。坏類は浅いものも多く、扁平化が進行している。律令的土器様式の影響を受けて、坏類に大・中・小型の法量分化が明瞭に認められる。

津軽石大森遺跡の16･21号竪穴建物跡では坏類が豊富に出土しており、厳密に比較はしていないが、一般の集落遺跡における出土量は、宮城県北部・沿岸部地域と比べて遜色はない。須恵器類は中型坏があり、ごく少量である。なお、津軽石大森２号竪穴出土須恵器は宮城県域産と考えられる、７世紀末～８世紀初頭の特徴を有する。そのため２号竪穴は８世紀初頭まで存続していた可能性もある。

四段階は、各細別器種の変遷も含めて様相の共通性が極めて高いことから、辻（2007b）の栗囲土器様式のＢ－ｂ期に該当させる。

辻（2007b）によれば、Ｂ－ｂ期の年代は７世紀中葉から後半としている。

五・六段階

前項で得られた様相から、五･六段階は当該地域における栗囲土器様式が変容していく時期である。坏・椀類は平底または平底風のものが主体となり、浅身のものは減少していく。壺類は大型から中型の壷Ｄがほとんどとなる。甕はＡ５が減少していく。厳密に比較はしていないが、坏類の一般の集落遺跡における出土量は、宮城県北部･沿岸部地域と比べて、ほぼ同程度かやや少ない程度と考える。須恵器類は中型の壷があり、ごく少量である。

五・六段階は大きくは辻（2007b）の栗囲土器様式のＢ－ｃ期に該当させるが、前項で検討したような現状のため、Ｂ－ｃ期の時期を厳密に７世紀末葉～８世紀初めに限定できない。また、様相の共通性として捉えることが出来るのは今のところは次の七段階である。

辻（2007b）によれば、Ｂ－ｃ期の年代は７世紀末葉～８世紀初めとしている。

七段階

前項で得られた様相から、七段階は当該地域における栗囲土器様式における細別器種構成が単純化する時期である。坏類は坏Ｃの中型と大型が主体で、小型は少ない。坏・椀類は平底または平底風のものが主体である。大型甕はＡ５が消失しＡ３でほぼ統一される。壺類は大型と中型の壷Ｄでほぼ統一される。厳密に比較はしていないが、坏類の一般の集落遺跡における出土量は、宮城県北部・沿岸部地域と比べて、ほぼ同程度かやや少ない程度と考える。須恵器類は現状では確認できない。

前述したうちの土師器類の様相は､栗囲土器様式のＢ－ｃ期に引き続く､佐藤(同)による宮城県北部･中部の北半である栗原・桃生地域の七段階の様相と共通するとともに、辻（2007b）の北部栗囲土器様式のＢ－ｄ期にも共通している。須恵器類も含めた土器群の様相は、北部栗囲土器様式との共通性が高い。

辻（2007b）では、細別器種の組み合わせとその変遷を同じくする土器群を、同じ生活様式を持つ人々の反映として、土器様式として捉える立場をとっている。そのため、このような土器群の様相からは、その背景にある生活の仕方は、当該地域がより東北北部社会と共通していくと考えられる。ただし、この段階の様相は前段階から引き続くものが多く、佐藤（同）による宮城県北部・中部の北半である栗原・桃生地域の七段階の様相とも共通する特徴がみられることから、この段階までを栗囲土器様式と認識した。

現状ではこれ以上の検討は出来ないため、指摘するにとどめ、今後も検討していきたい。

⑶　当該地域の土器群をもとにした地域社会の検討

ここでは前項までに得られた様相と年代観をもとに、少し広い観点から当該地域の土器群をもとに地域社会を検討してみたい。

本稿で用いた資料は､通常の一般集落から出土したものである。その意味では､辻(2007b)によれば､

一般的な人々の当時の生活の仕方を色濃く反映したものと言える。

一・二段階（６世紀前半から後葉）では当該地域の古墳時代中期の系譜からの影響が強い甕Ａ５は宮城県北部・沿岸部まで広がっており、沿岸部での交流がうかがえる。ただし、それぞれの地域では前代からの系譜を引く細別器種構成の土器群を用いており、現状ではそれぞれの生活様式は異なっている可能性が高い。

三段階（６世紀末から７世紀）では、古墳時代中期の系譜を引く土器を用いつつも、栗囲土器様式が成立しており、在地社会がその生活様式を受け入れたものといえる。そのなかでも、宮城県北部・沿岸部の北半の栗原･桃生地域、岩手南部との共通性が高く、それらの地域からの影響と考えられる。

四段階（６世紀末から７世紀前半）では、栗囲土器様式が引き継がれ、そこには法量分化がみられ、律令的土器様式の影響がみられる。宮城県北部･沿岸部南半の大崎･石巻海岸平野では､「関東系土師器」が出現し、東北南部以南からの影響も認められるが、当該地域では出現しておらず、少なくとも多くの移住者などの影響はない。

五・六段階（７世紀末葉から８世紀前半）では、栗囲土器様式は変容していき、平底または平底風の置食器が主体となっていく。宮城県北部・沿岸部には、城柵官衙遺跡が造営され、佐藤（同）の官衙的な器種である金属器模倣形態碗Ｂや盤、高脚スカシ付高坏が一定量出土する。当該地域では置食器を用いた食事様式を受け入れた可能性は高いものの、官衙的ではない。

七段階（８世紀後半）では、栗囲土器様式の細別器種構成が単純化する。次の段階にはロクロ成形技術を用いた別の土器様式が成立する。

５．小地域圏内における各段階の遺跡の動態

小地域圏内（沿岸部の宮古市、山田町、大槌町のエリア）における各段階の遺跡の動態について、検討する。なお、一･二段階の野田村蒲沢遺跡は小地域圏から外れるため、今回の検討から除外する。

三段階

三段階の集落遺跡と考えられる宮古市津軽石大森遺跡の７・11・17・22・24・28・30号竪穴建物跡のうち、床面積40㎡以上の特大型建物は７号竪穴建物跡で、床面積20～30㎡の大型建物は22・28・30号竪穴建物跡、床面積10～19㎡の中型建物は11・17・24号竪穴建物跡である。

このことから、当該地域では、三段階の集落は四段階と比べて特大型・大型建物が主体であった可能性がある。

四段階

四段階の津軽石大森遺跡の２・９・14・15・16・21・23・25・26・31号竪穴建物跡のうち、床面積40㎡以上の特大型建物は２・16号竪穴建物跡で、床面積20～30㎡の大型建物は26号竪穴建物跡、床面積10～19㎡の中型建物は９・14・15・21・23・25・31号竪穴建物跡である。

このことから、当該地域では、四段階の集落は少数の特大型・大型建物とその他の中型・小型の建物の構成であった可能性がある。

特大型建物の16号竪穴建物跡と中型の21号竪穴建物跡では坏類が豊富に出土しており、現状では建物の広さによる分化と個人別食器の数量には相関がみられない。

五・六段階

五･六段階前半の集落遺跡と考えられる間木戸Ⅱ遺跡の第26号竪穴建物からは､多くの坏類（食器）･甕類（調理具）･壺類（貯蔵具）とともに、鉄製品が４点（鉄鏃３点、刀子１点）出土した。限られた調査範囲ではあるものの、他の竪穴建物からは出土していない。

このことから、当該地域では、少なくとも五・六段階に専有的に金属製品を所有する人々がいた可能性がある。

七段階

七段階の間木戸Ⅴ遺跡の第３号竪穴建物は、建物外に竪型炉を伴う製鉄関連遺構を構成している。少なくともこの段階には、当該地域において鉄生産が行われていたことがわかる。

６．おわりに

本稿では岩手県域の太平洋沿岸中部地域（沿岸部の宮古市、山田町、大槌町のエリア）における６世紀から８世紀の土器様相について検討した。

その結果、細別器種の構成から岩手県域の太平洋沿岸中部地域（沿岸部の宮古市、山田町、大槌町）における栗囲土器様式を認識し、大様式圏内に位置付けた。また、この構成は地域的なまとまりを示していることから小様式圏に位置付けた。

それらを基にして周辺地域との比較を行い、土器群の並行関係と細別器種構成の特徴を示した。

また、小様式圏内（沿岸部の宮古市、山田町、大槌町のエリア）での遺跡の動態を簡潔に示した。

今後は、栗囲土器様式と他の土器様式との比較や地域的な小様式圏同士での比較を行うことで、それぞれの地域社会のあり方を考えていきたい。

末筆になりますが、資料調査にあたっては竹下将男・長谷川真・川向聖子の各氏から御教示御配慮をいただきました。記して感謝します。

註

⑴　平成26年度宮古市遺跡報告会（2015）において、津軽石大森遺跡県営住宅建設予定地区調査出土資料の展示資料中に、口縁部が長く外反する大型の有段丸底坏があった。その特徴から大型坏Ｂの可能性がある。一～三段階に該当する資料がさらに蓄積されるであろう。現在、宮古市教育委員会市で整理中の資料であり、報告書刊行が待たれる。

掲載資料

【一・二段階】
１～７・14～17・21：蒲沢遺跡米田地区１号竪穴住居
８～13・18～20：蒲沢遺跡南浜地区９号竪穴住居

【三段階】
22・23・24・30 ～ 32・48：津軽石大森遺跡７号竪穴
26・39・54：津軽石大森遺跡11号竪穴
50：津軽石大森遺跡17号竪穴
25・33・37・38・41 ～ 44・47・49・51・53：津軽石大森遺跡22号竪穴
27・36・45・46・52：津軽石大森遺跡24号竪穴
34・35：津軽石大森遺跡28号竪穴
28・29・40：津軽石大森遺跡30号竪穴

【四段階】
91・103・105・119：津軽石大森遺跡２号竪穴
97：津軽石大森遺跡９号竪穴
56・78・81・92：津軽石大森遺跡14号竪穴
93・107・113・116：津軽石大森遺跡15号竪穴
58 ～ 60・62 ～ 64・71 ～ 76・82・85 ～ 87・89・94・96・98・100・101・108・111・114・115：津軽石大森遺跡16号竪穴
55・61・67 ～ 69・77・88・90・95・106・110・112・118：津軽石大森遺跡21号竪穴
57・65・66・79・80・83・84・109・117：津軽石大森遺跡23号竪穴
104：津軽石大森遺跡25号竪穴
99・102：津軽石大森遺跡26号竪穴
70：津軽石大森遺跡31号竪穴

【五・六段階前半】
120・124・125・127・128・130・131・133 ～ 136・139・140：間木戸Ⅱ遺跡26号竪穴
121・122・123・126・129・132・137・138：間木戸Ⅱ遺跡30号竪穴

【五・六段階後半】
141 ～ 144・150 ～ 153・155・158：山口館跡 SI04
147：山口館跡 SI08
145・146・154・156・157：山口館跡 SI13

149：山口館跡 SI16
148：山口館跡 SI1001

【七段階】
159 ～ 165：間木戸Ⅴ遺跡３号竪穴

引用・参考文献

〈報告書〉

※岩文振埋＝岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書は略して集数を記載

(財)岩文振埋　1989『夏本遺跡発掘調査報告書』第134集

(財)岩文振埋　1999『山口館跡発掘調査報告書』第310集

(財)岩文振埋　1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』第287集

(財)岩文振埋　2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第318集

(公財)岩文振埋　2015『間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書』第640集

(公財)岩文振埋　2015『津軽石大森遺跡発掘調査報告書』第641集

野田村教育委員会　2015『蒲沢遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第５集

宮古市教育委員会　1990『狐崎遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書第22集

宮古市教育委員会　1992『花輪鰹沢遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書第34集

〈論文・研究報告〉

宇部則保　2013「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』２　八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

遠藤勝博・相原康二　1983「岩手県南部における所謂第Ⅰ型式の土師器・前期の土師器について」『考古学論叢』Ⅰ

佐藤敏幸　2007「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　vi．宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部

菅原祥夫　2007「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　ii．福島県中通り地方中部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部

杉本　良　1998「岩手県北上盆地における蝦夷（エミシ）集団の動態」『考古学研究』45－１　考古学研究会

千葉啓蔵　2004「沿岸部」『岩手県土器集成（４～８世紀)』集落遺跡検討会

高橋信雄　1982「３．古代」『岩手の土器　－年内出土資料の集成－』岩手県立博物館

高橋千晶　2007「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　vii．岩手県南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部

辻　秀人　2005「土器研究の方法」『東北学院大学論集』歴史学地理学第39号　東北学院大学学術研究会

辻　秀人編　2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部

辻　秀人　2007a「東北地方土師器成形技法考　－丸底の作り方、段の作り方－　」『考古学論究』真陽社

辻　秀人　2007b「総括」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部

西　弘海　1982『土器様式の成立とその背景』真陽社

樋口知志　2013『阿弖流為　－夷俘と号すること莫かるべし－　』ミネルヴァ書房

村田晃一　2007「第Ⅱ章　東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　ｖ．宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部

南部屋敷

中　村　隼　人

本稿は中世の北東北を領有した南部氏関連の城館で検出される大型掘立柱建物の復元設計案作成に関する検討過程を詳述したものである。復元対象には青森県南部町に位置する三戸南部氏の居城聖寿寺館と、青森県鰺ヶ沢町に位置する大浦氏の居城種里城で検出された十六世紀代の大型掘立柱建物を選択した。復元案の提示に至るまでの検討過程を詳述することにより研究史の整理総括がなされた。また中世後期段階の北東北の住宅建築では、敷梁を用いた和小屋が存在せず身舎梁間を大型化させることができなかった可能性などを示唆した。

1．序

本稿では室町・安土桃山時代の南部領内の城館遺跡で検出され、城主の館と比定される大型掘立柱建物の復元設計案の作成を行なう。復元の対象となる建物には聖寿寺館（青森県南部町）と種里城（青森県鰺ヶ沢町）で検出された大型掘立柱建物を選択した。また復元対象の年代には中世南部の大型掘立柱建物が最も複雑化かつ大型化する十六世紀を設定した。南部氏関連の城館遺跡についてはこれまで多くの発掘調査がなされ、断片的ではあるが当該期の建築水準の一端が解明されている。またこれとは別に少数ではあるが当該期の同地方の建築文化を伝える史料類も存在している。

本稿は発掘調査及び史料調査によって明らかにされた当該期の建築文化について、複眼的に比較検討を行い、これまでの研究史を整理総括することを第一の目的とする。また復元案提示に至る検討過程を詳述することにより、建築文化研究に対し新視点を提供することを第二の目的としている。

2．中世南部氏の領域変化

得宗被官であったと考えられる南部氏が甲斐から糠部に入部した時期については不明な点が多いが、現在では鎌倉時代末期までには地頭代として入部していたとする説が有力である。南北朝期になると陸奥守北畠顕家から糠部郡検断奉行に任じられた根城南部氏四代南部師行は根城（青森県八戸市）を本拠とし糠部を領有した。室町時代後期以降南部氏は東北地方北部のほぼ全域を勢力域としたが、国人の家臣化は進んでおらず、有力氏族間の内紛がみられるなど、領国の経営は不安定なままであった。

また戦国時代に至るまでは根城南部氏が南部氏一族の領主層を代表する存在であったが、天文年間（1532 ～ 1555）には一族中の三戸南部氏や九戸氏が台頭し、発言力を強めた。

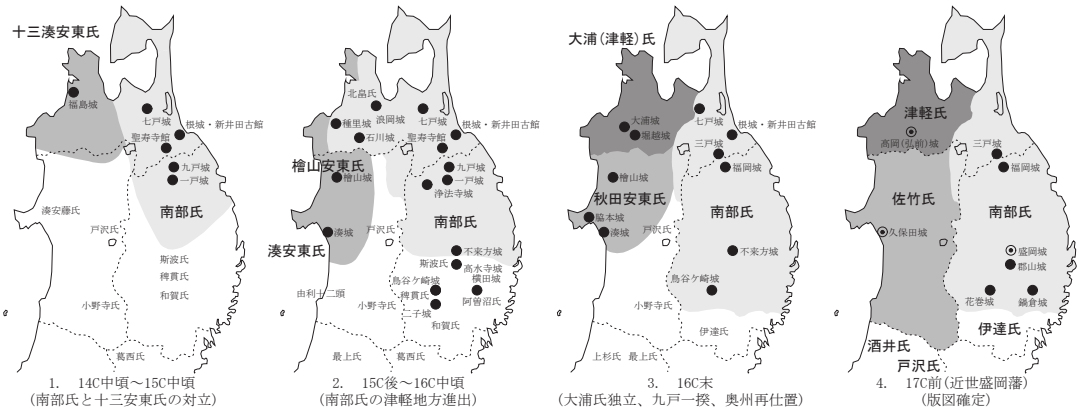


図１　中世南部氏の支配領域の変遷

天正十八年（1590）三戸南部氏二十六代南部信直は秀吉の小田原攻めに参陣し、続く奥州仕置にも従軍した。これに伴い、秀吉から所領安堵の朱印状を得た信直は豊臣大名としての地位を確立した。またこれを期に一族内の曖昧な上下関係は一新され、三戸南部氏が南部氏宗家の地位を手に入れた。有力氏族のうち根城南部氏などは三戸南部氏の家臣として服属することを承諾したが、九戸氏らはこれを承服せず翌天正十九年三月に挙兵した（九戸一揆）。奥州再仕置軍の加勢を得た信直は同年九月九戸城を攻略し、大浦（津軽）氏を除く全ての南部諸氏を家臣化した（図１－３）。

また同年には大浦（津軽）氏の所領安堵に伴う三郡の失領（平賀郡、鼻和郡、田舎郡）と、この代替地の加増（和賀郡･稗貫郡）があり、盛岡藩の版図も確定した（図１－４）。なお天正十八年（1590）秀吉により発せられた領内諸城破却令を受けた信直は、天正二十年（1592）六月に領内四十八城のうち三十六城を破却した旨を言上している。南部領内の中世城館の多くはこれにより城館としての機能を失った。

３．既往研究の整理

３．１　有力氏族の館で認められる建築文化の変遷

中世南部氏の建築文化に関する既往研究として拙稿を挙げたい（中村隼人2015a）。同論考は南部氏関連の中世城館遺跡で検出され、主家の館と比定される大型掘立柱建物を、身舎の構成とその変化により分類検討したもので、当該期の南部の館が「身舎梁間二間の直屋」から、「梁間二間の身舎を複数連結させた建物」、「身舎梁間三間の直屋、「梁間三間の身舎を複数連結させた建物」へと発達・大型化する傾向を明らかにした（図２）。

ここでは同論考の成果に加え、近世段階の南部の館で確認される諸相も合わせて概観し、建築文化の変遷について整理を行いたい。具体的には南部氏関連の有力氏族の中でも建築文化に関する研究成果の蓄積が多く、様相を把握しやすい三戸（盛岡）南部氏・根城（遠野）南部氏・大浦（津軽）氏の本拠で認められる諸相について分析と比較を行いたい。

三戸（盛岡）南部氏　三戸南部氏の事蹟が史料として確実になるのは三戸南部氏十三代守行の頃からである。三戸南部氏が奥州に下向後、最初に本拠としたと考えられている聖寿寺館（青森県南部町）でも十四世紀中葉から十五世紀初頭の碗･皿類が一定量出土しており、文献史料の内容と整合する（南部町教育委員会2014）。天文八年（1539）の聖寿寺館焼亡を機に、三戸南部氏は三戸城（青森県三戸町）へと本拠を移した。天正十八年（1590）三戸南部氏二十六代南部信直は豊臣大名としての地位を確立するが、翌十九年の九戸一揆平定後は、九戸氏の本拠であった九戸城の名を福岡城と改め、同城を本拠とした（岩手県二戸市）。また九戸一揆平定後も同地に居残った奥州再仕置軍によって、三戸城と福岡城は高石垣を持つ近世城郭へと姿を変えた。

その後豊臣軍軍監浅野長政の進言により、信直は南に大きく拡がった版図に合わせるように不来方（岩手県盛岡市）へと本拠を移すこととした。嫡子利直を総奉行とし慶長三年（1598）から盛岡城の築城が始められるが、度重なる火災と水害により作事は遅々として進まず、盛岡城に入城できない期間が長く続いた。二代藩主となった利直は福岡城や郡山城（岩手県紫波町、旧高水寺城）、盛岡城下内丸の新丸御殿などを移り住み、盛岡城本丸御殿の完成を待った。盛岡城本丸及び中丸御殿が恒久的に藩主の居所として機能を果たすのは三代藩主（三戸南部氏二十八代）重直の治世である寛文八年（1688）を待たなければならなかった（盛岡市教育委員会2008）。

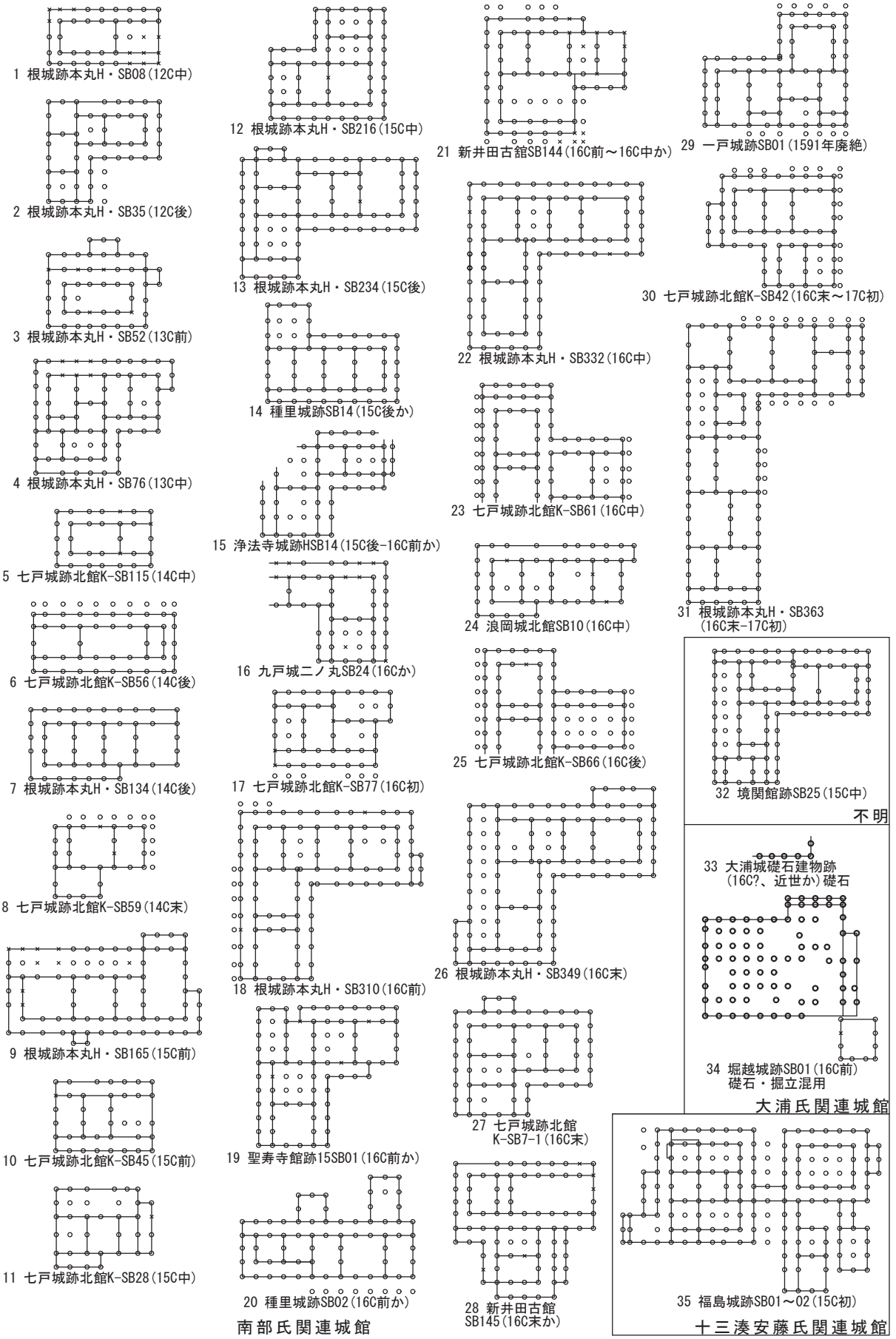


図２　中世南部氏関連の城館で検出された大型掘立柱建物跡　S=1/800

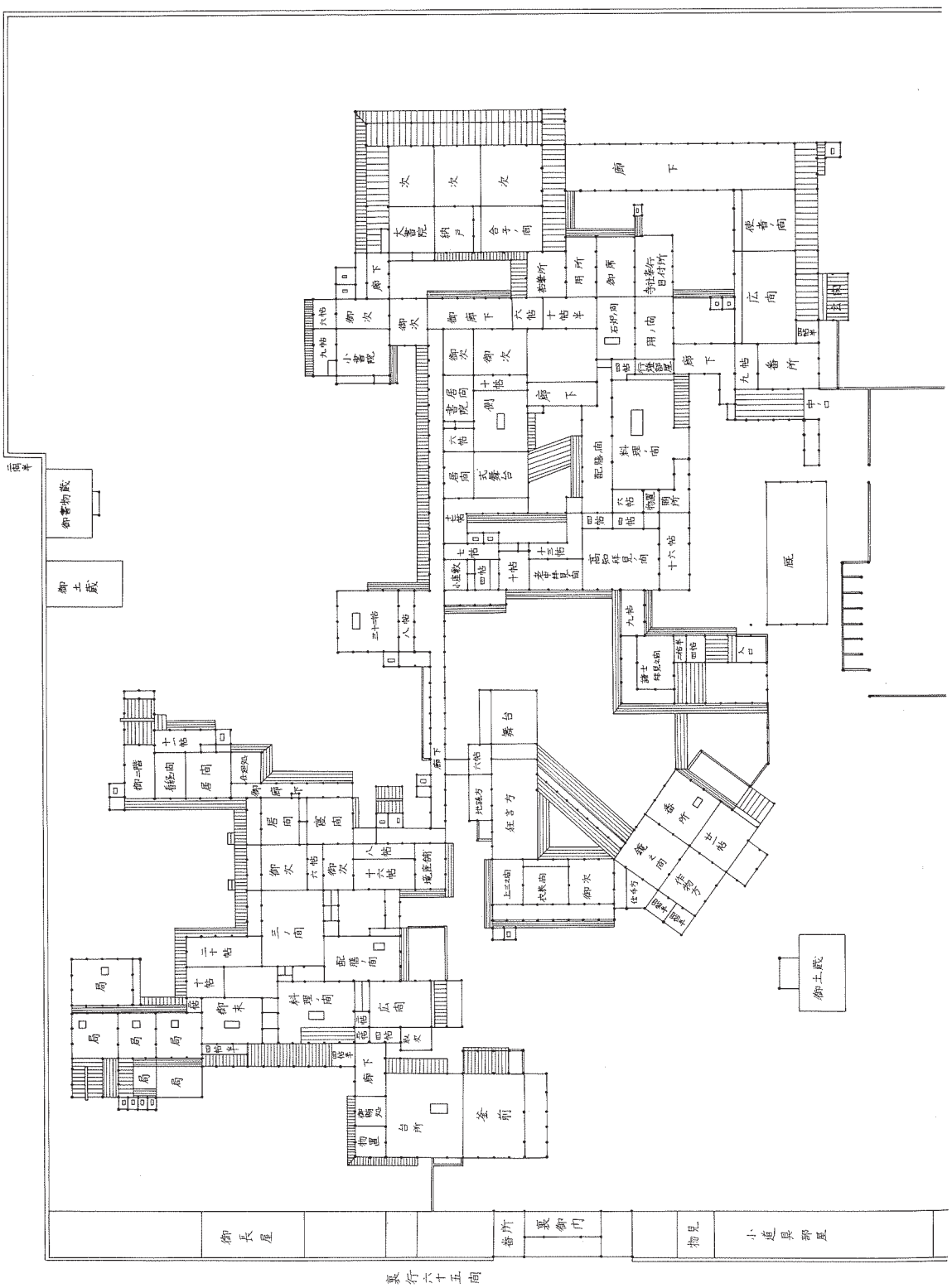


図３　盛岡城新丸図

聖寿寺館（青森県南部町） 十四世紀中葉～天文八年（1539）

史料：発掘成果　建物：掘立あり　竪穴あり　礎石なし　身舎梁間：三間

曲輪：中世的　庭園：なし　石垣：なし　瓦：なし

三戸城（青森県三戸町） 十六世紀中葉～天正十九年（1591）

史料：発掘成果　建物：不明　身舎梁間：不明

曲輪：中世的　庭園：不明　石垣：あり　瓦：あり

備考：石垣は奥州再仕置後のものである。瓦も同様か

福岡城（岩手県二戸市、旧九戸氏本拠九戸城） 天正十九年（1591）～十七世紀前葉

史料：発掘成果　建物：不明　身舎梁間：不明

曲輪：近世的　庭園：不明　石垣：あり　瓦：なし

備考：曲輪範囲と石垣は奥州再仕置後のものである。

郡山城（岩手県紫波町、旧高水寺斯波氏本拠高水寺城） 元和元年（1615）～寛文五年（1665）

史料：発掘成果　建物：掘立あり　竪穴なし　礎石あり　身舎梁間：不明

曲輪：中世的　庭園：不明　石垣：なし　瓦：あり

備考：検出層位の解釈が曖昧、奥州再仕置前の段階で礎石化していたのかは不明である。

盛岡城新丸御殿（岩手県盛岡市） 寛永十八年（1641）～寛文七年（1667）頃

史料：絵図　建物：掘立不明　竪穴なし　礎石不明　身舎梁間：大型化

曲輪：不明　庭園：あり　石垣：なし　瓦：不明

備考：同時代の鍋倉城本丸屋敷が礎石化しているため新丸御殿も礎石化が濃厚である。

盛岡城本丸・中丸御殿（岩手県盛岡市、旧福士氏本拠不来方城）

慶長三年（1598）着工、寛文八年（1668）～明治五年（1872）

史料：絵図・発掘調査　建物：掘立なし　竪穴なし　礎石あり　身舎梁間：大型化

曲輪：近世的　庭園：あり　石垣：あり　瓦：あり

根城（遠野）南部氏　根城南部氏が根城（青森県八戸市）を築城したのは建武元年（1334）といわれている。以降寛永四年（1627）の遠野（岩手県遠野市）村替に至るまでの約三百年間、根城南部氏は根城を居城とした。天正十八年（1590）の諸城破却令により根城も破却の対象となったが、「破却」は建物を含めた城内の全施設を破壊する行為を指すものではなく、根城の場合、門・橋・柵の破壊や、堀の埋め戻しなど、城としての防御機能を失わせるための改変のみが行われた（八戸市教育委員会1993）。つまり「破却」以降も城内の建物は存在し、城主達は根城での生活を続けた。

前述した天正十八年の三戸南部氏の小田原参陣とこれに伴う所領安堵を契機とし、根城南部氏は三戸南部氏の家臣となることを選んだ。寛永四年（1627）には盛岡藩の太守である三戸南部氏により、遠野（岩手県遠野市）への転封を命じられ、同年中に家臣や僧侶を率い遠野へと移住した。

遠野への村替後に根城南部氏が居所としたのが鍋倉城であるが、同城は根城南部氏の移封に伴い築城された新城ではない。元来は同地方を長く領有した阿曽沼氏が築城した横田城を祖形としている。阿曽沼氏は慶長五年（1600）に家臣の反乱に遭い、伊達領へ落ち延びる。以降遠野は三戸南部氏の支配下となり近世盛岡藩の一部となった。遠野城下は三戸南部氏が任命する城代によって統治される期間が続いたが、歴代の城代は横田城には入城せず、城下近郊に居を構えたため、城内はもとより城下も大いに荒廃した（南部叢書刊行会1928）。村替を命じられ遠野を治めることになった根城南部氏は空城となっていた横田城の名を鍋倉城と改め、自らの居城とした。根城南部氏の入城当初は荒れ果て

た阿曽沼氏時代の屋敷が残されおり、これに手を加え館として再用した。しかしこの屋敷は慶安四年（1651）に焼亡する。同年には根城南部氏の手によって新しい館の建設がなされ、この館が近世を通じ鍋倉城本丸屋形として利用された（遠野市教育委員会2012、中村隼人2012b、2015d）。

根城　（青森県八戸市）　十二世紀中葉から寛永四年（1627）頃
史料：発掘調査　建物：掘立あり　竪穴あり　礎石なし　身舎梁間：三間
曲輪：中世的　庭園：なし　石垣：なし　瓦：なし

鍋倉城　（岩手県遠野市、旧阿曽沼氏本拠横田城）　慶安四年（1651）から明治二年（1869）
史料：絵図・発掘調査　建物：掘立あり　竪穴あり　礎石あり　身舎梁間：大型化
曲輪：中世的　庭園：あり　石垣：あり　瓦：なし
備考：掘立及び竪穴も検出されているがともに根城南部氏入城以前の遺構である。

大浦（津軽）氏　延徳三年（1491）三戸南部氏被官である南部光信は下国安藤氏の押さえとしての命を受け、久慈（岩手県久慈市）から種里（青森県鰺ヶ沢町）へと入部し、同所に種里城を築城した（中田書矢2005）。近年の研究成果により、大浦氏の本拠の移転は廃絶と引越という単線的なものではなく、十六世紀前葉には種里城と大浦城、十六世紀後葉には大浦城と堀越城というように二つの城館を併存させる様態であったことが明らかになっている（関根達人2004、2005）。天文二年（1533）に起きた津軽領主層の反乱の際には南部氏方に従いこれを鎮圧した大浦氏だが、その後は独立の機運を高め、津軽地方の南部氏方の城館を次々と攻略した。光信の後裔である大浦為信は天正十七年（1589）以降、秀吉との結びつきを深め、同十九年には領地安堵の朱印状得て、姓を津軽へと改めた。

種里城　（青森県鰺ヶ沢町）　延徳三年（1491）から十六世紀前半
史料：発掘調査　建物：掘立あり　竪穴あり　礎石なし　身舎梁間：三間
曲輪：中世的　庭園：なし　石垣：なし　瓦：なし

大浦城　（青森県弘前市）　文亀二年（1502）から文禄三年（1594）
史料：発掘調査　建物：掘立なし　竪穴あり　礎石あり？　身舎梁間：不明
曲輪：近世的　庭園：不明　石垣：なし　瓦：なし
備考：調査面積が狭く全容は不明。礎石列の間尺は十六世紀のものとしては不適当である。

堀越城　（青森県弘前市）　十六世紀前半から慶長十六年（1611）
史料：発掘調査　建物：掘立あり　竪穴なし　礎石あり　身舎梁間：大型化
曲輪：近世的　庭園：不明　石垣：なし　瓦：なし
備考：礎石建物の下面で掘立や竪穴が検出されず、当初段階での礎石化が確定している。

高岡城　（青森県弘前市、寛永五年（1628）弘前城に改称）慶長十六年（1611）から明治六年（1873）
史料：絵図・発掘調査　建物：掘立なし　竪穴なし　礎石あり　身舎梁間：大型化
曲輪：近世的　庭園：あり　石垣：あり　瓦：あり

まず三戸南部氏と根城南部氏の館で認められる建築文化の変遷について整理を行いたい。

両氏が糠部入部以降、居城とした聖寿寺館と根城では、館になる規模の礎石建物が検出されていない。梁間三間の身舎を複数連結させる掘立柱建物が曲輪内で最大の建物となり、これを館としている。曲輪内には大型竪穴建物も併存し、庭園・瓦・石垣は存在しない。両城館で認められる曲輪景観の諸

相は、中世段階の南部の館で認められるそれの典型例ということができる。本稿では詳述しないが図２で示した城館遺跡の殆どを同じ文脈で解釈することが可能である。

次いで三戸南部氏が本拠としたのが三戸城と福岡城（九戸城）である。両城はともに天正十九年（1591）の九戸一揆平定後も居残った奥州再仕置軍の手によって大きく改変がなされており、建築文化の具体については未詳な点が多い。ともに部分的な発掘調査が行われているが、調査面積が狭く全容の把握には至っていない。加えて天正十九年以前と以後の遺構の区別が難しく、奥州再仕置軍介入以前の様相を特定することが難しい。このため両城に関しては詳述を避けたい。

またこの二城とは別に三戸南部氏が盛岡城本丸及び中丸御殿に入城する以前に、短期間居城とした遺跡として、郡山城と盛岡城新丸御殿がある。

このうち郡山城では部分的な発掘調査が行われており、館になりうる規模の礎石建物が検出されている（紫波町教育委員会1976）。ただし三戸城・福岡城同様、調査面積が限定的で全容は未詳である。また検出層位の解釈が曖昧であるなど、奥州再仕置以前の段階で建物の礎石化がしていたのかについても判断が難しい。

盛岡城新丸御殿については絵図が残されており、近世初頭段階の様相を知ることができる（もりおか歴史文化館蔵、佐藤巧1979所収）。絵図に描かれた盛岡城新丸御殿は図２で挙げた中世の館から大きく建物が変化している（図３）。まず構造面に目を向けると図２に挙げた中世の館が身舎梁間三間を一つの限界とし、ごく少数梁間四間のものがみられる様相であるのに対し、盛岡城新丸御殿では身舎梁間の間数が明確に長大化している。また構造の発達は間取りの変化に直結していることも理解できる。間取りに目を向けると図２に挙げた館のうち、奥州再仕置以前の建築が想定できる建物の居室列は全て一列に限定されている。これに対し盛岡城新丸御殿では居室列が二列化している。この変化はつまり敷梁を用いた和小屋を実現することが可能になったことを示している（図４－３）。

なおここで挙げた新丸御殿絵図のほかにも盛岡城本丸及び中丸御殿（もりおか歴史文化館蔵、佐藤巧1979所収）や鍋倉城本丸屋形（個人蔵、遠野市教育委員会2012所収）についても絵図面が残されており、その具体を知ることができる。奥州再仕置後に建設されたこれらの館は、いずれも身舎梁間が大型化し、建物同士が渡廊下によって連結される施設配置になっている（中村隼人2015b）。つまりここで挙げた御殿のいずれもがほぼ同水準の建築技術によって造られていたと考えて大過ない。発掘調査が行われていないため､盛岡城新丸御殿が礎石化していたかについては現時点では不明であるが、ほぼ同時代に造られた鍋倉城本丸屋形が礎石化していることから考えると、盛岡城新丸御殿も同様に礎石化していたと比定して問題はないだろう。三戸城が三戸南部氏の居城であった段階の様相が未詳であるため断言はしかねるが、三戸南部氏と根城南部氏の館が近世化（礎石建物化及び敷梁を用いた身舎梁間の大型化）を実現した背景には、奥州再仕置軍の介入による築城理念の移入と、より高度な建築技術の移植があったと想定するのが現時点では妥当である。

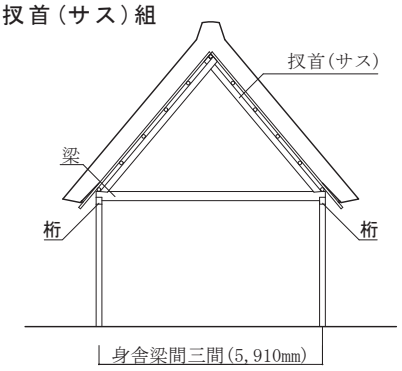
次に大浦（津軽）氏関連の館で認められる建築文化の変遷についても整理を行いたい。

延徳三年（1491）に南部光信が築城した種里城は、前述した南部氏関連の城館でみられるものと同様の建築文化が展開している｡曲輪内の最大の建物は梁間三間の身舎を複数連結させる掘立柱建物で、竪穴建物が併存し、庭園・瓦・石垣は認められない。南部光信が種里に入部し、津軽で最初に築いた種里城は、根城や聖寿寺館と同様に「南部の館」として理解することができる。

これに続いて築城された大浦城と堀越城では、ともに館となりうる規模の礎石建物が検出されている。しかしこのうち大浦城で検出されている四間分相当の礎石列をその城館期である十六世紀代の遺構と判断することは現時点では難しい（図２-33）。検出位置が調査区縁辺部に位置し、連続する建物

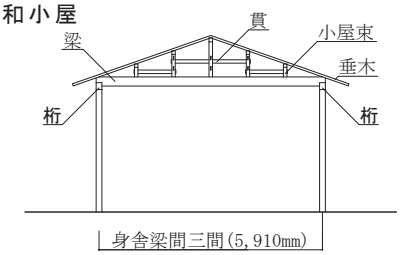
代表的な小屋組

1. 扠首(サス)組



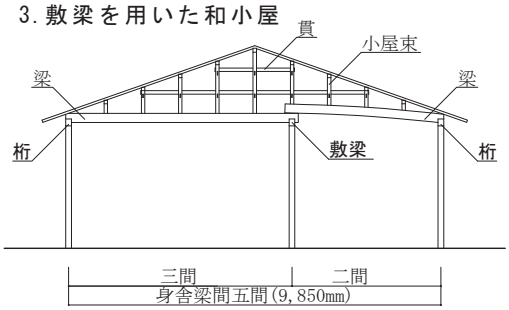
概要：サスと呼ばれる大径材を三角に組み合わせ屋根を支える
　　鉛直荷重はサスによって斜めに受け流され柱に伝わる
勾配：サスは互いに寄りかかる斜材であるため急勾配屋根になる
葺材：急勾配屋根になるため葺材には萱が適している
特徴：高い施工精度が必要ない
　　桁から桁までのスパンは梁一本で持たせなければならない

2. 和小屋



概要：梁の上に束を立て屋根を支える
　　鉛直荷重は小屋束から垂直に梁に伝わるため梁に大径材が必要
勾配：緩勾配・急勾配いずれも対応可能
葺材：急勾配なら萱か板、緩勾配なら板か瓦が適している
特徴：小屋束や貫が存在するため高い施工精度が求められる
　　桁から桁までのスパンは梁一本で持たせなければならない

3. 敷梁を用いた和小屋



概要：梁間が広く一本の梁で小屋を架けれない為、梁を重ねた和小屋
　　梁間の途中に柱を立て柱頭に敷梁を渡す
勾配：和小屋と同様
葺材：和小屋と同様
特徴：桁から桁までのスパンを複数本の梁で架ける

考えられる小屋組の組み合わせ

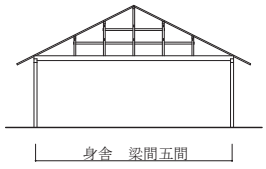
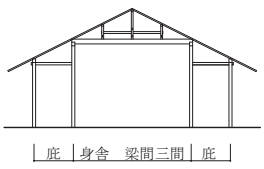
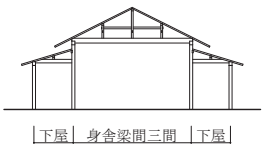
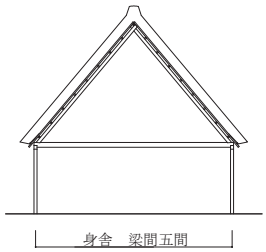
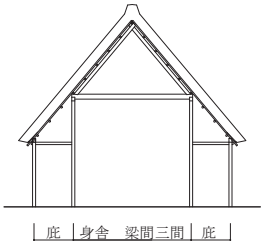
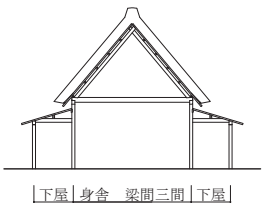
	梁間五間の身舎	梁間三間の身舎＋庇	梁間三間の身舎＋下屋
和小屋	 **4. 身舎梁間五間の和小屋**	 **5. 身舎梁間三間＋庇の和小屋**	 **6. 身舎梁間三間＋庇の和小屋**
扠首組	 **7. 身舎梁間五間のサス組(高島案)**	 **8. 身舎梁間三間＋庇のサス組**	 **9. 身舎梁間三間＋下屋のサス組**

図4　代表的な小屋組とその特徴

の主体部が調査区外に伸びる可能性が高いため、平面形を特定することはできないが、少なくとも現時点で検出されている礎石列の間尺は、大浦城の城館期の一間の間尺としては短く、妥当性が認められない。大浦城は廃城後の藩政期においても弘前城の詰城として利用されたことが知られているが、あるいはこの礎石建物は近世段階のものと理解するのが現段階では穏当であろうか。

大浦城に続いて大浦氏の拠点となった堀越城（十六世紀前半）では明確に館と比定できる礎石建物が検出されている（図２-34）。礎石の下面から掘立柱建物や竪穴建物が検出されることがない状況から考えると、堀越城は大浦氏が入城した当初段階から館の礎石化と身舎梁間の大型化が実現していたという理解ができる。近年の中世城館遺跡の発掘事例増加に伴い、北東北以南の守護所や国人居館では地域差はあるが、遅くとも十五世紀後半から十六世紀初頭段階には館と比定される大型建物が礎石化する傾向が指摘されている（早川圭2014）。このように堀越城で認められる建築文化の近世化（礎石建物化及び敷梁を用いた身舎梁間の大型化）は、全国の事例との比較で考えるならば幾分遅い。とはいえ中世を通じ、館が礎石化しなかった三戸南部氏・根城南部氏との比較の中で考えるならば明確に先んじていたことも分かる。加えて、大浦城と堀越城は北東北の中世城館で唯一「曲輪を重ねる」タイプの城館でもある（佐々木浩一2002）。近世城郭の築城理念に繋がる曲輪の配置を早い段階で取り入れている点で意義深い。種里城段階ではいまだ「南部の館」を築いていた大浦氏だが、これに続く大浦城・堀越城の築城段階では独自性を強め、当時の北東北以南の守護所や国人居館で用いられていた築城の理念と、より高度な建築技術を自ら望み、積極的に移植していた様相がうかがえる。

対して三戸南部氏と根城南部氏の館では、奥州再仕置軍の到来と同時に、建物の礎石化・身舎梁間の大型化・曲輪配置の近世化・庭園と高石垣の普請が可能になっている。これはこれらの理念と技術が一時期に移植されたものであることを示している。三戸南部氏と根城南部氏の建築文化の近世化は奥州再仕置軍の介入によって受動的になされたという表現もまた可能であろう。

三戸南部氏・根城南部氏の館の特徴

礎石化	三戸城・福岡城初現か　郡山城濃厚　鍋倉城確定	奥州再仕置後
梁間大型化	三戸城・福岡城初現か　鍋倉城確定　中世段階の大型化は不可能	奥州再仕置後
曲輪の近世化	盛岡城確定	奥州再仕置後
庭園	鍋倉城・盛岡城新丸御殿確定	奥州再仕置後
瓦	郡山城初現か　盛岡城確定	奥州再仕置後
石垣	三戸城・福岡城確定	奥州再仕置後

→受動的な近世化

大浦（津軽）氏の館の特徴

礎石化	堀越城確定	奥州再仕置前
梁間大型化	堀越城確定	奥州再仕置前
曲輪の近世化	大浦城確定	奥州再仕置前
庭園	堀越城初現か　高岡城確定	奥州再仕置後
瓦	高岡城確定	奥州再仕置後
石垣	高岡城確定	奥州再仕置後

→能動的な近世化

３．２　北東北以南の地域の守護所・国人居館との比較

次に北東北以南の守護所や国人居館で認められる建築文化と、南部の館で認められる建築文化について比較と検討を行いたい。

施設配置

東山文化の成立以降、守護所や有力国人居館では、庭園（池泉庭園ないし平庭（枯山水））を取り囲むよう主殿・会所・常御殿などの複数の大型建物が建てられ、渡廊下で繋がれる施設配置が形成される（図５）。また公的行事は主殿、遊興行為は会所、生活空間は常御殿といったように一棟の建物に一つの機能を担わせる形態に機能の分化が進む。館内の主要建物は礎石化し、身舎も大型化する。屋敷内に竪穴建物が造られることはない。

対して南部の館ではいまだ庭園跡は検出されていない（図６右）。また複数の大型建物を渡廊下で連結させるような施設配置が確認されることもないことに加え、屋敷内には大型竪穴建物も併存するなど、北東北以南の館の常識から考えれば極めて異質な景観が展開している。なお一時期に複数の大型掘立建物が同時存在した可能性があるのは、根城や聖寿寺館などのごく一部の主要城館に限定されている。これに準ずる格の館では一時期に存在した大型建物が一棟のみである可能性が高い。

主殿

北東北以南の守護所や有力国人居館に造られた主殿は、盃事などを行う儀礼空間という位置づけがなされている。角屋に設けられた中門と呼ばれる出入口を下手とし、この反対に続き間を設け、庇を廻した。続き間の奥を上座、手前を下座とし、ここで対面儀礼を行った。つまり席次により身分の序列を可視化し、主従関係の確認を行う装置としての機能が主殿には求められた。館内のもう一方の主要施設である会所は遊興行為を行う建物である。主人と家臣が同列に並び、芸事や饗宴を行う空間である会所は、主従の上下関係を否定し、対等な個人としての関係性を深めるために造られた。つまり室町以降の武士社会では、主殿において行われる身分体系の肯定と、会所において行われる身分体系の否定という二通りの習俗を前提として、主従関係の形成がなされていた。

対して南部の館において屋敷内最大の建物となるのは図２で図示したような梁間三間の身舎を複数連結させる大型掘立柱建物である。現時点ではこの建物は主家の生活空間であり、かつ主殿が担っていた対面儀礼を行う場であったと解釈されている。形態的な特徴に即して比較するならば、北東北以南の地域に築かれた主殿が持ち合わせる角屋の出入口を持つ建物が皆無であるほか、庇ないし下屋が全周する建物もごく少数しか認められない。北東北以南の守護所や有力国人居館で確認されるような身舎梁間が大型化した礎石建物による主殿が当該期の南部の館に存在しない。

建築文化と習俗

以上ここでは屋敷内の施設配置と、主殿の特徴について整理を行ったが、比較においても明らかなように、中世後期の南部氏が持っていた建築文化と習俗の異質性は際立っている。室町・安土桃山時代の南部の館には庭園が存在せず、かつ大型の礎石建物が渡廊下で連結される事例も認められない。主殿としての形態的特徴を持つ建物や、会所と比定できる建物も検出されない。つまり北東北以南の館で行われていた習俗を実現するために必要な建物がそもそも造られていなかったということが分かる。またこれらの建築を造らなかった（ないしは造れなかった）南部の館のありようは、南部氏が主殿と会所において行われていた主従関係の確認と否定という行為を重要視していなかったことを示し

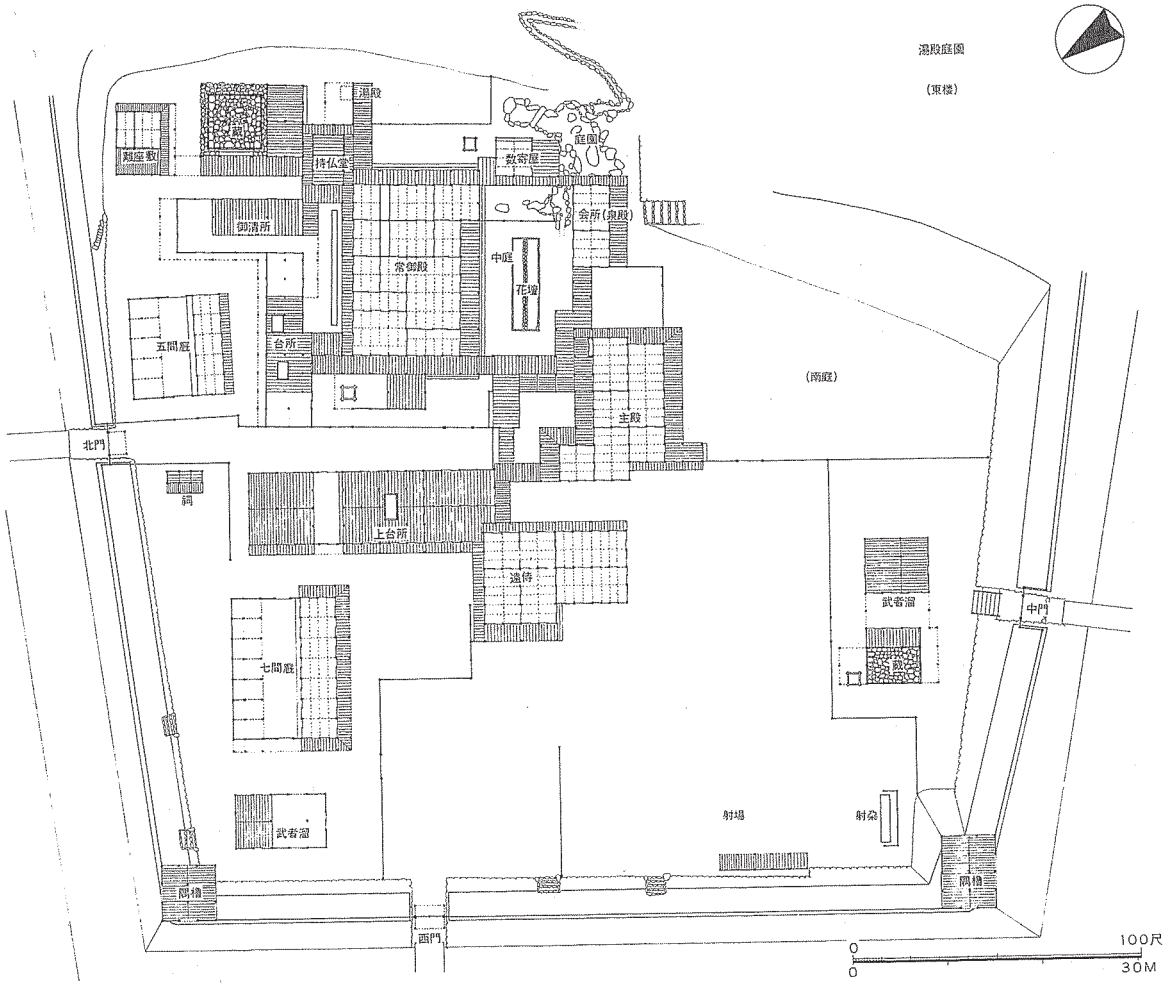


図５　一乗谷朝倉邸の施設配置（十五世紀前半～天正元年（1573））

図６　安土桃山時代の石垣・石積み（左）と室町時代の庭園（右）の分布

てもいる。当然建物の構造の変化に先んじて、空間の使い方の変化が先行していた可能性もあるが、大浦氏の事例にみられたように自ら望んで北東北以南の地域で展開していた建築技術と習俗を移入していないという点を前景化するならば、南部氏の主従関係のありようが同時代の武家社会の中では異質な様態を示していたと推論しても軽妄にはならないだろう。当該期の北東北はいわば普請と作事の両技術の近世化が最も遅れた地域である。習俗の移植という側面においても最も後進した地域という評価が妥当であろう。織豊権力に取り入れられた時期が最も遅い地域でもあり、いわゆる織豊系城郭の移入も実現しないなど、他地域で展開していたものと等質の物質文化と精神文化が展開していたと考えることが難しい（図６左）。主従関係を含めた人々の心ありようも、中世的な同族連合的結合に近い様相であった可能性が高い。

３．３　史跡根城主殿復原工事（平成元年～同六年（1989 ～ 1995））

中世段階の南部の館に関する立体復元考証の先例として、八戸市根城跡の環境整備事業を挙げることができる。八戸市を委託者とし財団法人文化財建造物保存技術協会が復元設計及び工事監理を行った史跡根城跡環境整備事業は、根城破却直前の十六世紀末を復元対象年代とし、主殿をはじめとする複数の建物の復元を行った。復元工事がなされた主殿建物は柱脚部を掘立柱とするほかは、ほぼ同時代の大型礎石建物の主殿と同等の建築技術を用い施工している。

根城本丸の復元主殿は、上屋柱（身舎）五寸、下屋柱（庇）四寸二分、孫庇柱三寸五分のヒバ面取角柱で計設を行っている（図２-26、図７）。転ばし根太を用いた板床の建物が想定されており、軸部には切目長押・長押・内法貫・飛貫が入る。壁は小壁のみを土壁とし、長押以下は板壁である。側廻りの板壁は胴貫を二本入れ、貫内面に竪板を縦貼りし釘打ちしている。建物内部の板壁は柱に胴縁を打ち、この片面に竪板を縦貼りし釘打ちしている。掘立柱建物であることを考慮したためか、基本的に内法貫より下には貫を入れていない。ただし例外として側廻りの板壁部分にのみ胴貫を入れている。屋根は五寸勾配の入母屋屋根で栩葺である。小屋組は和小屋の緩勾配屋根とし、桔木を入れる。身舎を廻る一間の空間は庇とし、化粧屋根裏天井としている。身舎内部の居室は格に応じ棹縁天井と葦簀天井を使い分けている。内外とも建具が多く入る開放的な建物で、側廻りは外側を舞良戸、内側を明

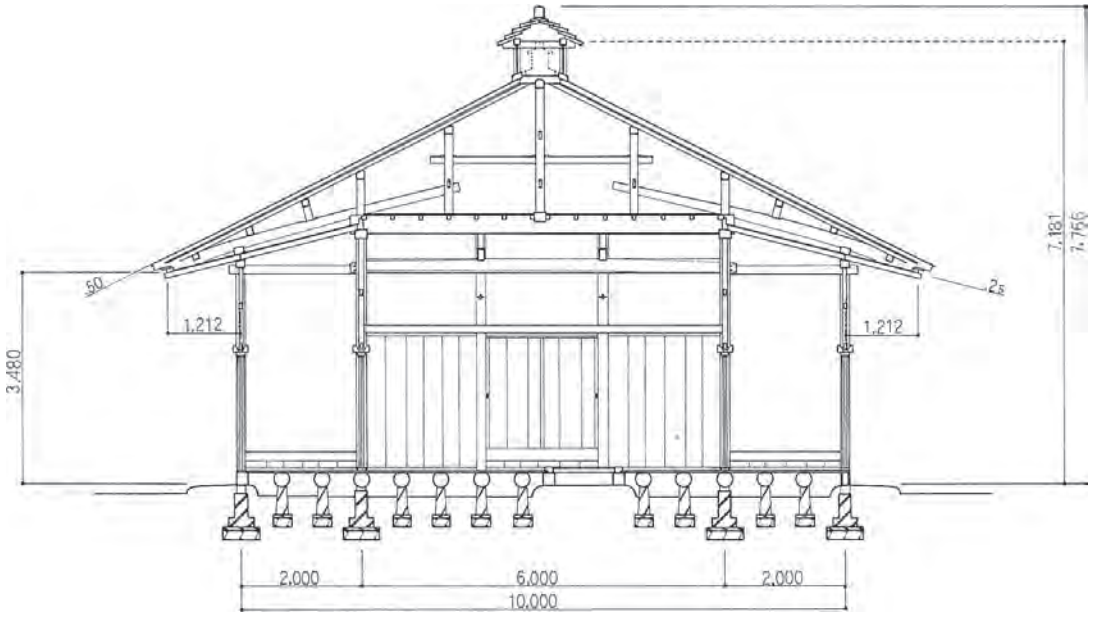


図７　根城本丸　復原主殿断面図

障子としている。また部屋の格に応じ、板戸・腰高障子・襖を使い分ける。

用材の樹種は基本的には全てヒバである。化粧材や床板はもとより、転ばし根太を含む床組も全てヒバである。梁は当然マツだが、一部の野物と建具にスギが使われる程度で、ヒバが多用されている。

当時の発掘成果を複数人の建築史研究者が考証し、立体復元を実現した同整備事業は、日本全体でみても極めて先駆的かつ野心的な試みであった。現存遺構が皆無であることに加え、指図や絵巻物などの史料も極めて限定的な中世後期の地方武士の館の景観イメージについて、多大な影響を与えた事業と評することができる。

４．復元の基本方針

復元建物の選定　冒頭でも触れたとおり、復元建物の年代には中世段階の南部の館が最も複雑化かつ大型化した十六世紀代を想定したい。また本稿では複数の建物を復元の対象に選びたい。平面構成や構造面の特徴などにおいて差異の認められる複数の建物を復元することによって、検証に多様性を持たせることが可能であると考えたためである。以上の理由から、本稿では聖寿寺館跡15SB01（図２-19）と種里城 SB02（図２-20）の復元を行うことにした。

復元の基本方針【小屋組】　前述した根城復元主殿は小屋組を身舎梁間三間の和小屋とし、その外に一間の庇を廻す構成を想定している（図４-５、７）。また中世の南部氏関連城館について多くの論考を遺した高島成侑は自らが復元した掘立柱建物の館について、複数の復元鳥瞰図を描いている。高島は多くの場合、急勾配の萱葺屋根を描いており、サス組の小屋＋庇という構成を想定していたことがわかる（図４-８）。

梁間五間の小屋組を造る場合、その構成は大まかに言って次の七択になる。

⑴　敷梁を用いた和小屋（図４-３）
⑵　身舎梁間五間の和小屋（図４-４）
⑶　身舎梁間三間の和小屋＋庇（図４-５、根城復元主殿）
⑷　身舎梁間三間の和小屋＋下屋（図４-６）
⑸　身舎梁間五間のサス組（図４-７）
⑹　身舎梁間三間のサス組＋庇（図４-８、高島復元案）
⑻　身舎梁間三間のサス組＋下屋（図４-９）

このうち⑵身舎梁間五間の和小屋（図４-４）と⑸身舎梁間五間のサス組（図４-７）が実現していた可能性については即座に除外できる。もし仮に五間の梁間を一本の梁で架け渡せるほどの長材が当時の南部地方に豊富にあったとするならば、図４-４や図４-７のように桁から桁までの五間の間に全く柱が入らない空間がみられるはずである。しかし図２で挙げた大型掘立柱建物の中に同様の空間を確認することはできない。また中世段階の南部の館で確認される梁間五間の建物は、例外なしに一番外側の柱穴列の一間内側にも柱穴列が並ぶ。この傾向は側から一間内側の柱穴列が構造上必要欠くべからざるものだったことの証左といえるだろう。また同様の建物群では、一番外側の柱穴列のうち中間あたりの柱が一本無い場合なども珍しくない。しかし側から一間内側の柱穴列が抜かれる事例はより少ない。このことから考えると側から一間内側に並ぶ柱穴列こそが、荷重の負担が最も大きかった可能性が高く、同所が身舎であったとの解釈が成り立つ。つまり梁間五間の身舎を想定するより、梁

間三間の身舎を想定する方がより妥当性が高く、⑵と⑸は否定される。そもそも五間にも及ぶ例外的な長材をこれだけ多く揃えることができたと想定すること自体が無稽であろう。

次いで⑴敷梁を用いた和小屋（図４－３）が実現していた可能性については、前章の検討において既に否定されている。仮に敷梁を用いた和小屋を作ることが可能であるほどの建築技術が室町・安土桃山時代の南部にあったとするならば、先述の堀越城のように建物を礎石化させ、身舎梁間を大型化させる方向に建物が発達するはずである。つまり中世段階の南部の館では、敷梁を用いた和小屋を作ることができず、身舎梁間を大型化させることができなかった。そしてだからこそ図２に挙げるような梁間三間の身舎を複数連結させる平面の館が多く建てられたと考えるのが妥当である。

次に⑶身舎梁間三間の和小屋＋庇（図４－５）、⑷身舎梁間三間の和小屋＋下屋（図４－６）が実現していた可能性についても除外したい。前述したように、当該期の南部では間違いなく「敷梁を用いた和小屋」の館を作ることができなかったわけだが、それ以前にそもそも「和小屋」の館を造ること自体が不可能だったのではないかと筆者は考えている。和小屋は梁の上に小屋束を立て、屋根を支える小屋組で、屋根勾配を自由に決定できるという特長がある（図４－２）。一方で小屋束の下端は梁天端に短ほぞ差しされているだけなので自立性が低い。このため水平材によって、小屋束同士を固定させる必要があるが、多くの場合小屋束に貫穴を掘り、貫を通し、楔締めし、小屋束を固定させる。またこれが不可能な場合は小屋束の側面に小屋筋交や触れ止めなどを釘打ちし、固定する。この程度の施工難易度の収まりを実現することができたならば、柱脚部を礎石化させることも可能であったはずだが、これを実現していないという点で判然としない。つまり身舎梁間の大小を問わず、室町・安土桃山時代の南部の館には、和小屋の小屋組が存在せず、小屋組は全てサス組だったと理解するのが現時点では妥当なのではないだろうか。少なくともそうでなければ、中世を通じ、なぜ掘立柱建物ばかりが造られたのかという根本的な問題に対しての説明がつかない。

残る⑹身舎梁間三間のサス組＋庇（図４－８）と⑺身舎梁間三間のサス組＋下屋（図４－９）による小屋構成はいずれも実現可能かつ妥当な小屋組であると考える。両案の妥当性について積極的に優劣をつけることは難しいが、本稿では⑺身舎梁間三間のサス組＋下屋という小屋構成によって対象建物の復元を行いたい（図４－９）。理由は複数あるが蒙古襲来絵詞（作成年代十三世紀後半から十四世紀前半、内容年代文永十一年から弘安四年（1274から1281））、男衾三郎絵詞（作成年代十三世紀末、内容年代鎌倉時代）、法然上人絵伝（作成年代十四世紀初頭、内容年代十二世紀前半）、一遍上人絵伝（作成年代正安元年（1299）、内容年代十三世紀代）など、中世に成立した絵巻物に描かれた地方武士の館や富裕層の住宅の多くが⑺と同様に身舎を急勾配（サス組）萱葺屋根とし、その周囲に一間の緩勾配板葺下屋を廻す建物としている点を大きく評価した。

ただしここで挙げた絵巻物はいずれも復元年代に設定した十六世紀代と比べ、年代的に古い史料である点で注意が必要である。復元年代に選択した十六世紀代の上層住宅は様式史的には書院造の該当期となるが、上記の史料類はこれを遡る寝殿造の該当期のもの含まれている。つまり建物内部で行われていた習俗などについては比較の対象とはなりえず、復元年代の内容には整合しない。

しかし一方でこれらの絵巻物に描かれた地方武士の館は、屋根構成を含む構造面の特徴という点で十六世紀代の南部の館と強い類似性を持つ。上述の絵巻物に描かれた地方武士の館と十六世紀代の南部氏城館で検出される大型掘立柱建物はともに身舎梁間三間（一部四間）を一つの限界とする建物である。つまりこれらの史料は敷梁を用いた和小屋によって身舎梁間の大型化がなされる以前の武士の館の様相を示しているという点で史料性が高い。また⑺はサス組の検討例の中では最も棟高さが低く、施工も容易であり、かつ部材も少量で済む点も考慮した。

なお室町・安土桃山時代の上層住宅（武家住宅や貴族住宅など）の様相を語る際に挙げられる史料はほぼ限定的である。現存遺構ならば園城寺勧学院客殿（慶長五年（1600））、園城寺光浄院客殿（慶長六年（1601））、指図ならば匠明殿屋集に描かれた昔六間七間主殿之図と東山殿屋敷之図（慶長十三年（1608））、絵画史料ならば洛中洛外図（歴博甲本）に描かれた細川管領邸といったように、ごく少数の限定された史料のみが比較の対象に選ばれる。

しかしこれらの史料は、十六世紀代の南部の館の景観を復元するにあたって適当なものとはいえないだろう。ここで挙げた史料はいずれも身舎梁間が大型化している。つまり南部の館の一つの限界である身舎梁間三間を大きく超えた小屋組を既に実現している点が問題である。復元年代とここで挙げた比較史料の年代が近いため、建物の内部で行われていた習俗などについては類似性が認められるだろう。しかし建築技術の差、つまり物理的な実現性においてこれらの史料は実体性を持っていない。このため本稿ではこれらの史料を小屋構成の比較に用いることは避けた。

復元の基本方針【軸組】 軸組については貫の無い建物を想定した。根城復元主殿では内法貫より上の貫は同時代の礎石建物と同程度に入れている。しかし本稿では貫なしでも柱が自立するという掘立柱建物の利点を活かすためにも貫の無い建物を提案したいと考えた。板壁部分は全て柱に釘打ちした胴縁に竪板縦張りとする仕様を想定した。一度は民族例などに従い、萱壁の建物や板床の無い建物が存在した可能性についても想定したが、程なくこの可能性は除外した。後述する聖寿寺館や種里城で認められる角柱の事例は建具の存在を想起させる。また聖寿寺館などで検出される根石の存在は建物の沈下を避ける必要があったことを伝えてくれる。具体的な納まりについては未詳だが板壁や建具は一定程度存在したと考えるのが相応であると判断した。以外の床組・壁・建具などの具体については基本的に根城復元工事の内容に準じた。

復元の基本方針【部屋名称】 各部屋の名称については南部家関連文書に記載された室名などに拠った。復元を行った建物はともに主人の座敷を「亭」、主人が来客に茶を振る舞う部屋を「茶の間」とした。根拠は遠野古事記（遠野（根城）南部氏家臣宇夫方広隆著、宝暦十三年（1763））の以下の記述に拠る。なお文中の「直栄様」は根城南部十九代八戸直栄を示している。直栄の治世は天正二十年から文禄四年（1592 から 1595）である。「直栄様八戸に御座被成候比、御家中に座敷を亭と称シ候由、遠野え御引越被成候ても御譜代衆の家にては申傳、予十五六歳の比迄老人衆は客来レは亭え御通リ候様と申候もを承候、（中略）八戸二御座被成候比より御茶の間と云御座敷有、御家中ニも大身小身共に玄関より入口の座敷に炉を切リ流し前を付ケて茶の間と称し毎家に有、此座敷は客を招候時炉にて亭主自湯を沸シ晩茶を調、或は茶を煎じ進候を馳走と仕候由、流し前は泊り客の手水所に用い候由、亂世時代は放火の災難も繁く且又武士は何レも今日限々と在る境界故、屋作は風雨を凌グ用心迄に小住居ニ仕客出会も茶ノ間にて会釋たる風俗御治世ニ成ても暫く遺り、八戸より引移候御譜代衆遠野にての屋作に見習新参衆の家にも元禄以前までの作事には茶ノ間という座敷有。」とある。

また同書には根城（遠野）南部家高臣の座敷における畳の有無についての記述も残されている。なお文中の新田殿は、主家の移封に伴い八戸から同行した根城南部家の高臣である新田氏を指す。新田氏は根城南部氏中では本家に次ぐ家格を有した名家である。遠野移入後の新田氏は代々鍋倉城二ノ丸に居を構えた。「直栄様遠野え御引越より間近キ此の事ニ候哉、新田市良殿御宅御成、座敷え敷ク縁付の畳常は箱え入れて蔵え入置、御成の時斗り敷候由中館･澤里御両家も御家老衆の座敷にも畳無之、御成の時は新田殿畳を借用被成候由、其畳箱とて大キなる箱新田殿蔵ニ有を予幼年の頃見申候、高知

の家さへ右の通ニ候間､況ヤ百石以下の居宅を推察すべし｡」とあることから畳敷の部屋は設けなかった。「二之間」、「台所」、「納戸」などは当該期の指図や文書などに示された一般的な名称を用いた。

５．対象建物の復元

５．１　聖寿寺館跡15SB01（図2-19）

復元建物の概要　青森県南部町に位置する聖寿寺館は三戸南部氏の本拠として知られる中世城館である。十四世紀中頃に築城され、廃城は天文八年（1539）、盛期は十五世紀後半から十六世紀前葉と考えられている。史跡指定範囲は三光寺地区・本三戸八幡宮地区・聖寿寺館跡の三地区からなるが、今回復元を行う15SB01は聖寿館跡内に築かれた建物で、平成二十六年度調査区及びこれと連続する平成二十七年度調査区内から検出された。聖寿寺館の発掘調査は平成五年（1993）から二十三年間にわたり実施されているが、現時点でおよそ館全体の二割程度の面積の調査がなされている。平成十九年度以降は聖寿館内でも掘立柱建物が多く検出される遺跡北西部分の調査が進められている（図８）。遺構の検出傾向として興味深いのは近年の調査区に限定して、根石と角柱痕が認められるということである（図９-１～３）。柱痕自体はこれまでの調査区においても頻繁に検出されていたが、そのいず

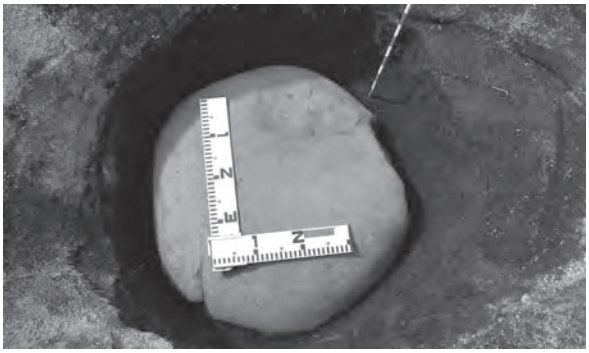
図８　聖寿寺館　遺構配置図

れもが丸柱であった（図９－４）。また同様に近年の調査区は金箔付土器や向鶴紋の刀装具など、遺跡全体の中でも優品の遺物が集中する地域でもある。

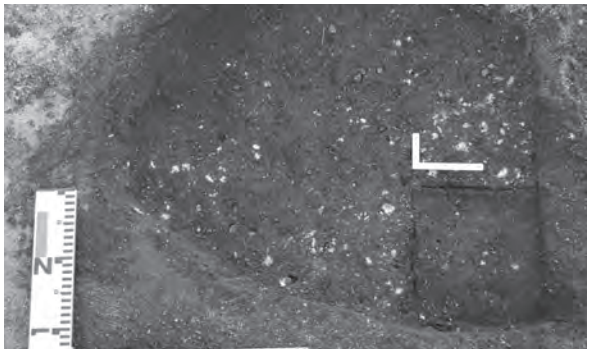
復元対象建物に選択した15SB01の復元は、南部町教育委員会に最新の遺構配置図のデータをご提供いただき筆者が行った。掘立柱建物の復元を行ったのは平成十九年度以降の全調査区に相当し、全体で掘立柱建物跡40棟と柵列跡13本を認めることができた。また復元の結果、根石と角柱痕が集中し、優品の遺物が多く出土する近年の調査区で復元された建物群が、調査区全体の中でも最大の建物となることも明らかになった。前述したように既調査区の割合は館全体の二割程度にすぎないが、復元がなされた掘立柱建物の規模と、遺跡内の他の地域では確認することのできない優品の遺物の存在から考えると、近年の調査区付近に城館内の中心施設が存在したと類推することもできそうである。

検出された角柱痕の材径は小径のもので三寸角（91mm）、大径のもので六寸二分角（188mm）で、最も多い寸法は五寸五分角（167mm）程度である。また平成二十七年度調査区内で検出された複数の柱材に対して樹種同定がなされているが、大型の掘立柱建物ではヒバ、小型の掘立柱建物ではヒバ・マツ・カエデ、柵跡ではコナラ、竪穴建物ではクリが用いられている。施設内の重要施設を想定できる大型掘立柱には対候性に優れる良材であるヒバを用い、これより劣る小型掘立柱建物や柵跡に雑木を用いるなど、樹種の特性に合わせた用材の使い分けがなされていたことが理解できる。

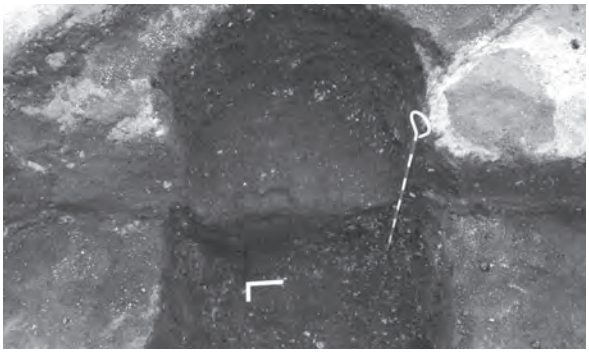
なお天正年間（1573 ～ 1591）の成立が考えられる南部利直書状では、江戸在住の三戸南部氏二十七代南部利直が国家老に対し、三戸城の作事や普請について指示を出していることが知られており（岩手県教育委員会1982）、この中には「外路地之屏栗ノ柱なく候は檜ノふし有やすきニて可仕候、ふしの有ハ結句つよく候」という一文がある。文中の檜は南部桧（ナンブヒノキ）の異称をもつ青森ヒバを指すという解釈ができる。利直は三戸城の塀の材料にクリないしはヒバを用いるように指示していたことが分かる。柵の用材の樹種としては、聖寿寺館の事例と完全に一致はしないが、当時の南部地方においてはヒバとクリが重用されていたことを知ることができる史料である。



1.15SB01　柱穴るノー　根石検出状況



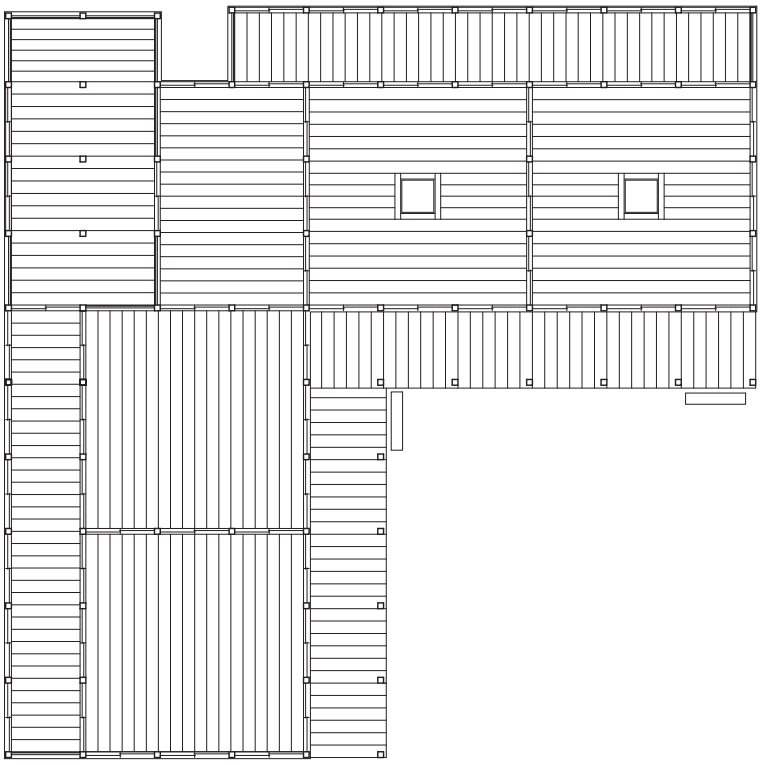
２. 角柱痕１（平成二十七年度調査区）



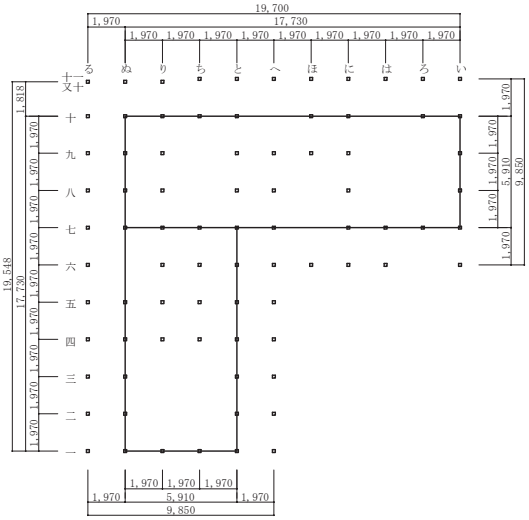
３. 角柱痕２（平成二十七年度調査区）

４. 丸柱痕（平成二十三年度調査区）

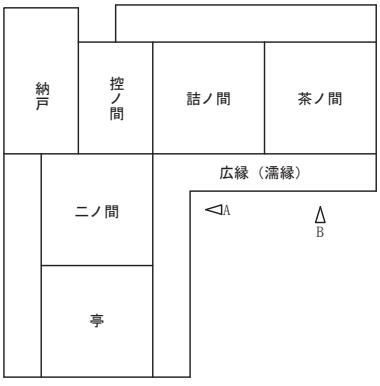
図９　聖寿寺館　近年の調査成果



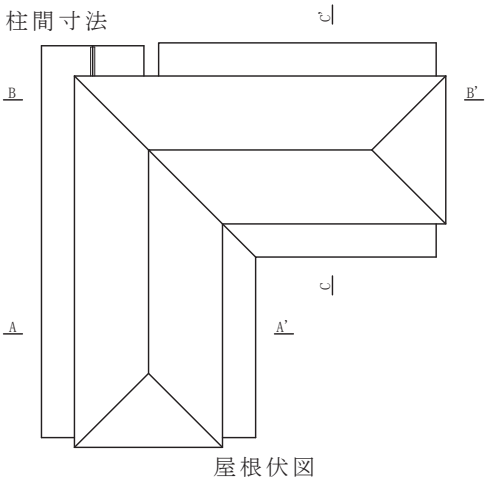
聖寿寺館跡　15SB01復元平面図　S=1/200



身舎配置と柱間寸法

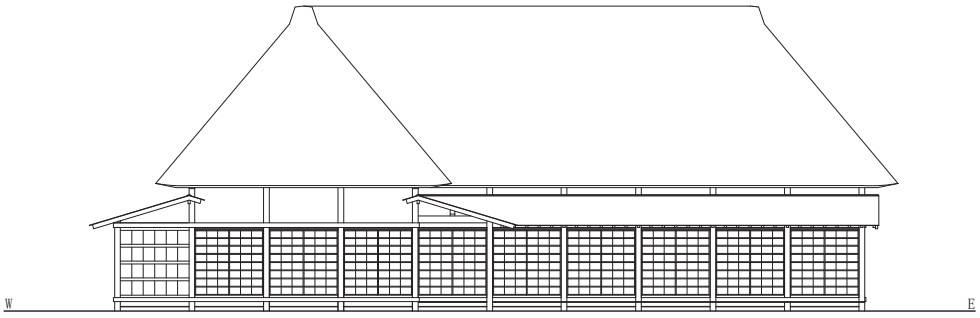


室名称と出入口

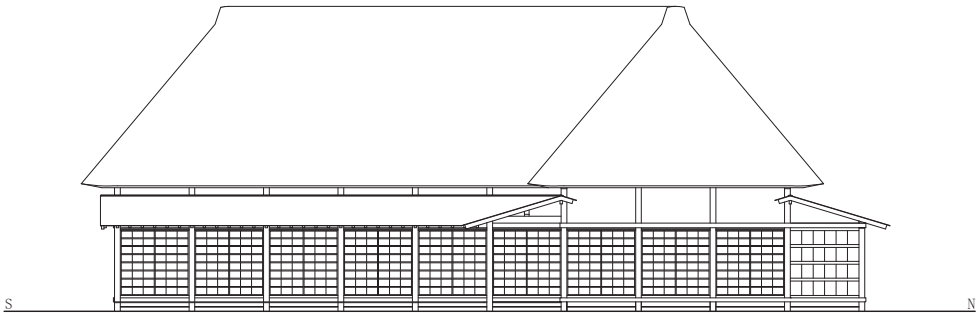


屋根伏図

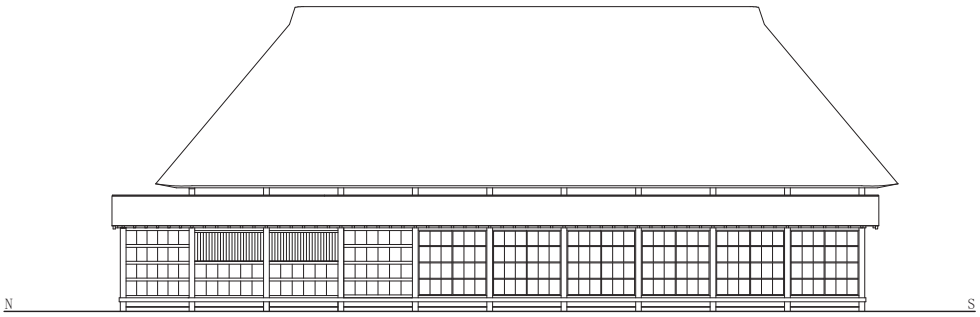
図 10　聖寿寺館跡　15SB01 復元案 (1)



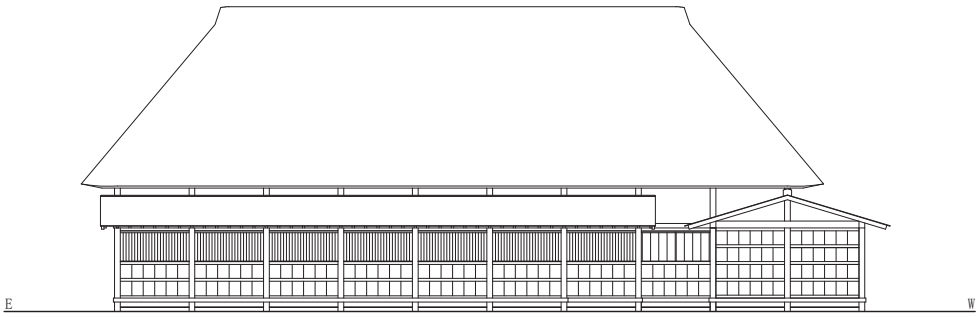
南立面図 S=1/200



東立面図 S=1/200



西立面図 S=1/200



北立面図 S=1/200

図 11　聖寿寺館跡　15SB01 復元案 (2)

復元建物の選定理由　15SB01を復元対象とした理由は三点ある。一点目は聖寿寺館が南部氏関連城館の中でも根城と並んで上位に位置する主要城館であったためである。これに準ずる城館との比較を行うためにも、聖寿寺館の館については検討を行う必要があると考えた。二点目は今回検出することができた聖寿寺館の掘立柱建物跡の中で15SB01が最大級の建物であったためである。聖寿寺館の既発掘調査区内で検出された建物を代表する可能性が高い点を評価した。三点目は身舎と下屋の構成が明快であり、かつその構成が南部氏関連の室町及び安土桃山時代の大型掘立柱建物で最も多く認められるものであったためである。

当該期の南部氏関連の主要城館で検出される屋敷内最大の掘立柱建物は、梁間三間の身舎をＬ字やＴ字に繋ぐ平面になる（中村隼人2015a）。15SB01も同様の平面をしており、今回の復元対象にふさわしいものであると考えた。また小屋構成と居室の連続性という二点において15SB01と根城の復元主殿であるＨ・SB349は類似している（図２-26）。平面規模では劣るものの根城復元主殿で選択された各種細部との比較が行える利点も考慮した。

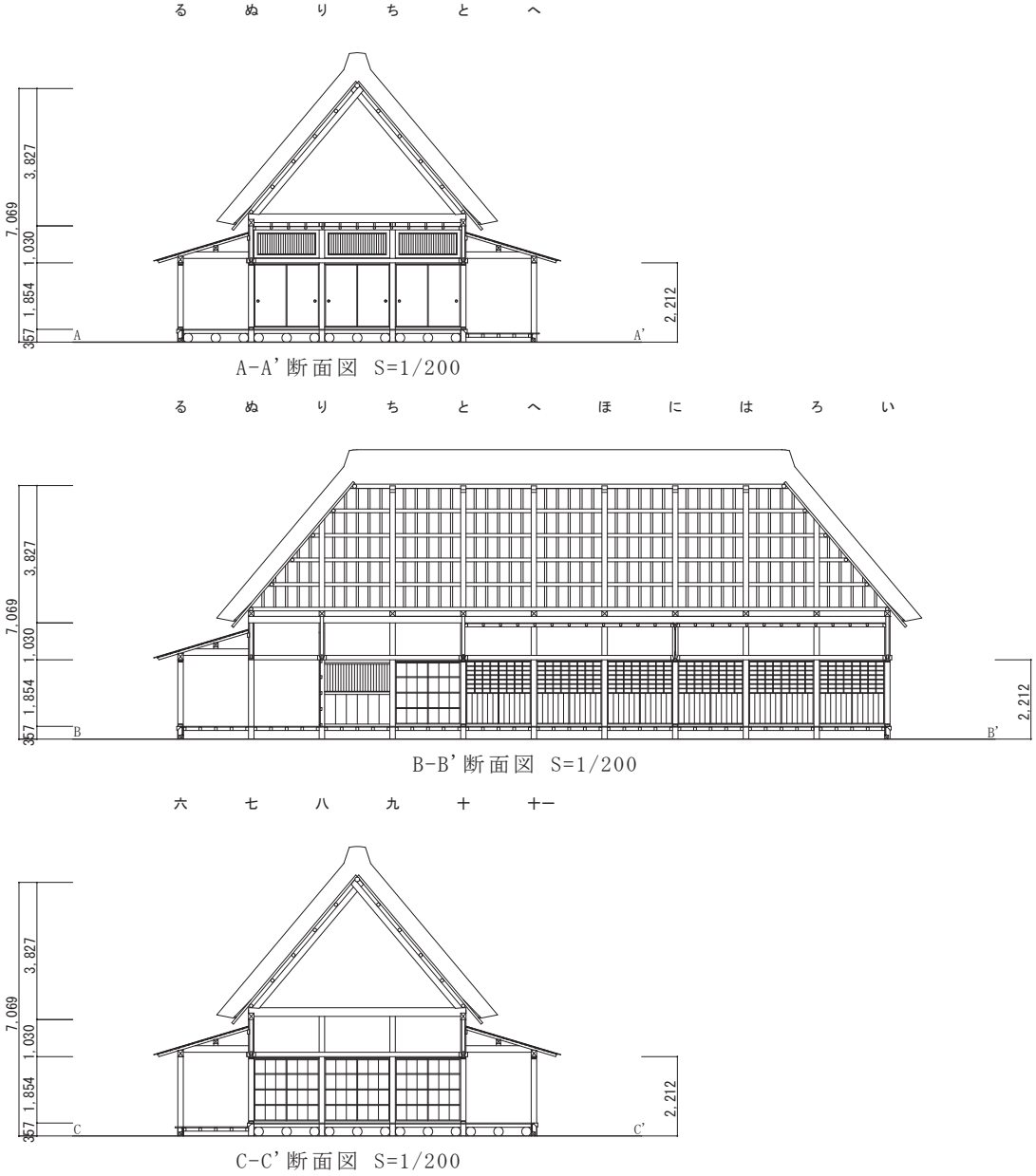
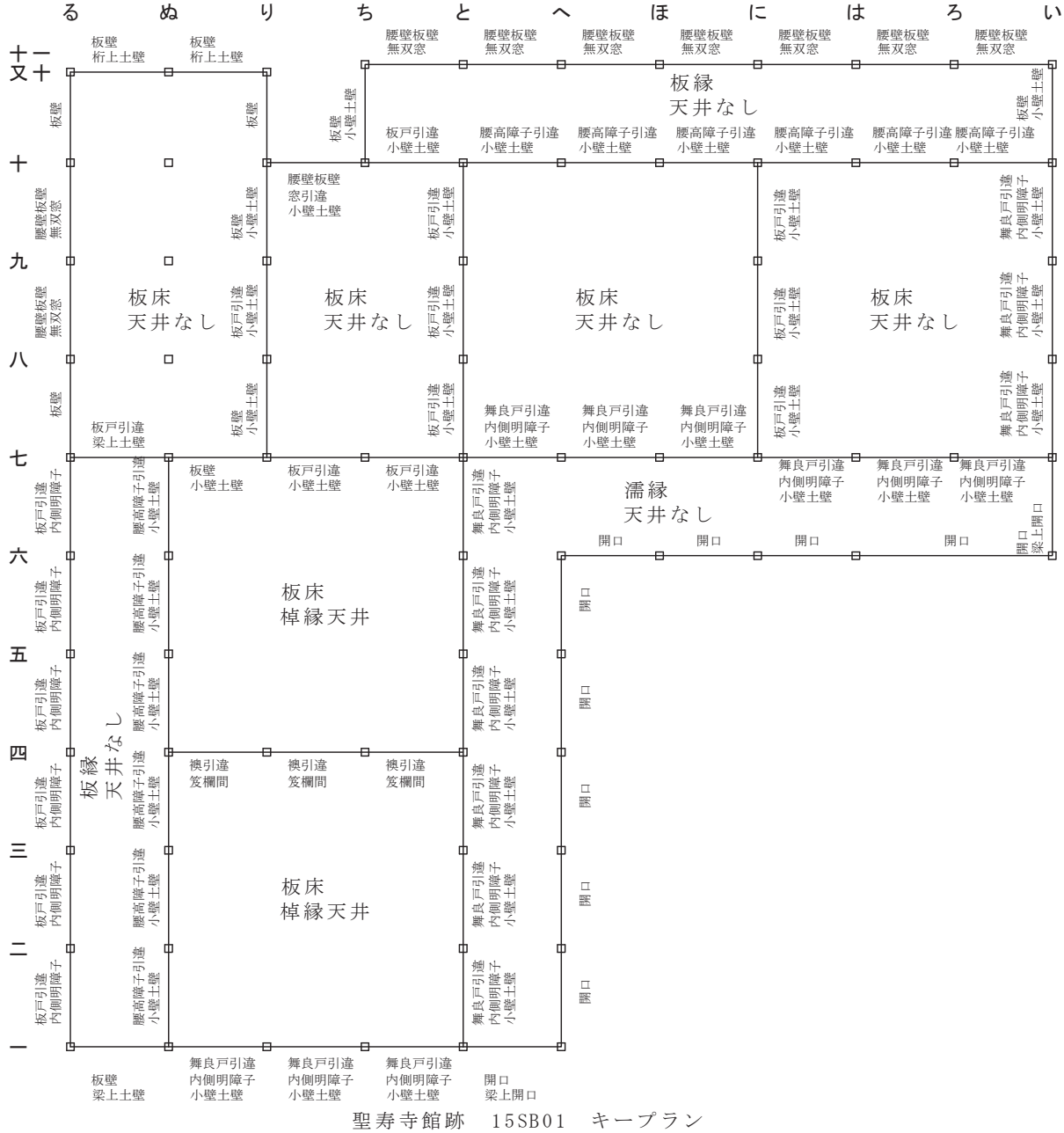


図 12　聖寿寺館跡　15SB01 復元案 (3)

なお15SB01の推定年代には十六世紀前半を比定したが、これは共伴遺物の年代に拠ったものではない。単純に既調査区内で最大の建物であるというだけの理由で、聖寿寺館の最盛期である十六世紀前半の帰属を想定したに過ぎず、これが絶対的なものではないことは明記しておきたい。図２での比較でも明らかなように15SB01の平面規模は同時代の根城で検出されている建物に比べ幾分小さい（図２-18）。これを勘案するならば15SB01の年代はもう少し遡る可能性も考えられる。今回復元を行った15SB01の性格や推定される帰属年代が今後の調査成果によって変化する可能性があるということついてはここに付記しておきたい。なお平成二十六年度以降の調査区内で検出された掘立柱建物に関する既往研究はない。

復元建物の具体　図10で示したとおり梁間三間の身舎をＬ字型に連結させた建物であると考えた。小屋組及び軸組の具体に関しては前章で検討したとおりである。萱屋根の棟は東北では一般的な芝棟



聖寿寺館跡　15SB01　キープラン

図 13　聖寿寺館跡　15SB01 復元案 (4)

（クレグシ）とした。なお根城復元主殿では居室の格に応じ、床高さに高低差を設けているが、本稿では室町・安土桃山時代の南部氏にこのような過剰な序列の可視化を行う発想はなかったと考え、床高さは一律にした。

5．2　種里城跡 SB02（図２-20）

復元建物の概要　種里城は鰺ヶ沢に入部した南部光信によって築かれた城館で、築城は延徳三年（1491）、廃絶は十七世紀初頭頃、盛期は十五世紀末から十六世紀前半と考えられている。種里城主郭の発掘調査は昭和六十三年（1988）から行われ、東西200m ×南北100m の範囲の主郭のうち四割程度の調査が行われている。掘立柱建物の復元は高島成侑と佐々木浩一がそれぞれ行っており、掘立柱建物148棟、柵列86本が検出されている。この他にも竪穴建物跡12棟、井戸跡19基、溝跡、土坑、カマド状遺構などが検出されており遺構の密度は高い。主郭は一様な平坦面ではなく、丘陵の緩斜面を切土しいくつかの小平場を設けることで屋敷割を形成している。このうち最も標高の高い最北の平場でのみ角柱及び角柱痕跡が検出され、これ以外の平場では角柱が認められない（図15）。今回復元を行う SB02もこの最北の平場で検出された建物である。

復元建物の選定理由　SB02を復元対象とした理由は三点ある。一点目は種里城が南部光信の鰺ヶ沢入部に際し新造された城館であるという点にある。根城や聖寿寺館などの南部氏中の有力氏族の本拠に造られた建物とは異なる建築文化が展開していたことが予想されるとともに、先立って復元を行った聖寿寺館跡15SB01や根城復元主殿との比較が有益なものになりえるとの想定もできたためである。二点目は同建物が種里城の既発掘調査区内で検出された掘立柱建物中最大級の建物であったためである。種里城を代表する建物である可能性が高い点を評価した。三点目は SB02が角柱と丸柱を混用する珍しい事例であったためである。上述したように SB02が検出された平場は種里城の中で、唯一角柱及び角柱痕が検出される地域である。SB02の柱穴では土中に残された五寸五分角（167mm）のクリ材をはじめ、多くの柱痕が検出されている。番付ヘノ五の柱穴で三寸三分（100mm）の角柱痕、るノ三で四寸三分（130mm）の角柱痕、ヘノ二で三寸三分×四寸（100×120mm）の角柱痕、ほノ一で二寸六分（80mm）の丸柱痕が検出されている。角材及び角柱痕の寸法にバラつきがみられるが、これが建物の使用段階の材径を反映したものであるか、柱痕形成段階での個体差であるかの判断は難しい。種里城15SB01とは異なり柱穴に根石は伴わない。

なお SB02の推定年代には十六世紀前半を比定したが、これも共伴遺物の年代に拠ったものではない。聖寿寺館の場合と同様、単純に既調査区内で最大の建物であるというだけの理由で、種里城の最盛期である十六世紀前半の帰属を比定したに過ぎない。

復元建物に対する既往研究　同遺跡で検出された掘立柱建物に関する既往研究として高島成侑1995を挙げることができる。高島は今回の復元対象である SB02について復元鳥瞰図を遺しており（図14）、同建物を「身舎の梁間が３間となり、四方に庇が廻る」掘立柱建物と表現している（高島成侑1995）。建物西半の屋根が建物東半の屋根に比べ梁間間数が少なく、棟の位置が低いことから考えると、高島は同建物の西半を身舎梁間二間、東半を身舎梁間三間となる建物と理解していたことがわかる。建物北東部の角屋は萱葺大屋根とは異なる表現がなされており、板屋根を想定していたことが読み取れる。外観は板壁縦貼り、側廻りの建具は外側舞良戸引違、内側明障子である。

またこれとは別に佐々木浩一2000も既往研究として挙げることができる。佐々木2000は青森県内の

中世城館や集落遺跡で検出された掘立柱建物の変遷案を提示したものである。出土遺物の年代のほか、検出遺構間の新旧関係や遺跡の年代幅・盛期などを勘案し、当該遺跡における一時期の施設配置の実態について推論を提示した論考で、対象年代ごとの掘立柱建物の類型を考えるうえで非常に有効な研究と評価できる。本稿で復元を行ったSB02の採用柱穴は基本的には佐々木浩一2000に拠ったが、

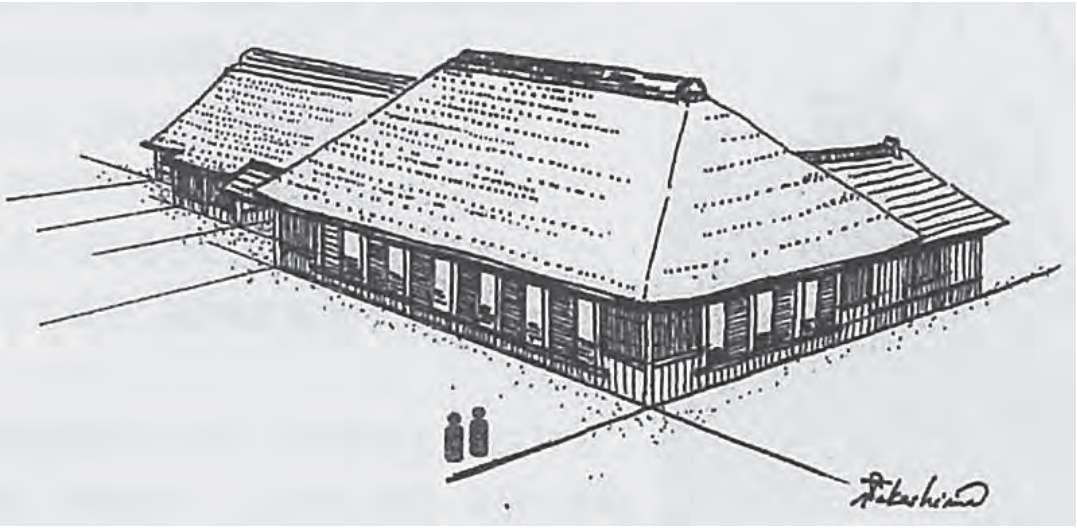


図 14　種里城跡　SB02 鳥瞰図（高島成侑作成）

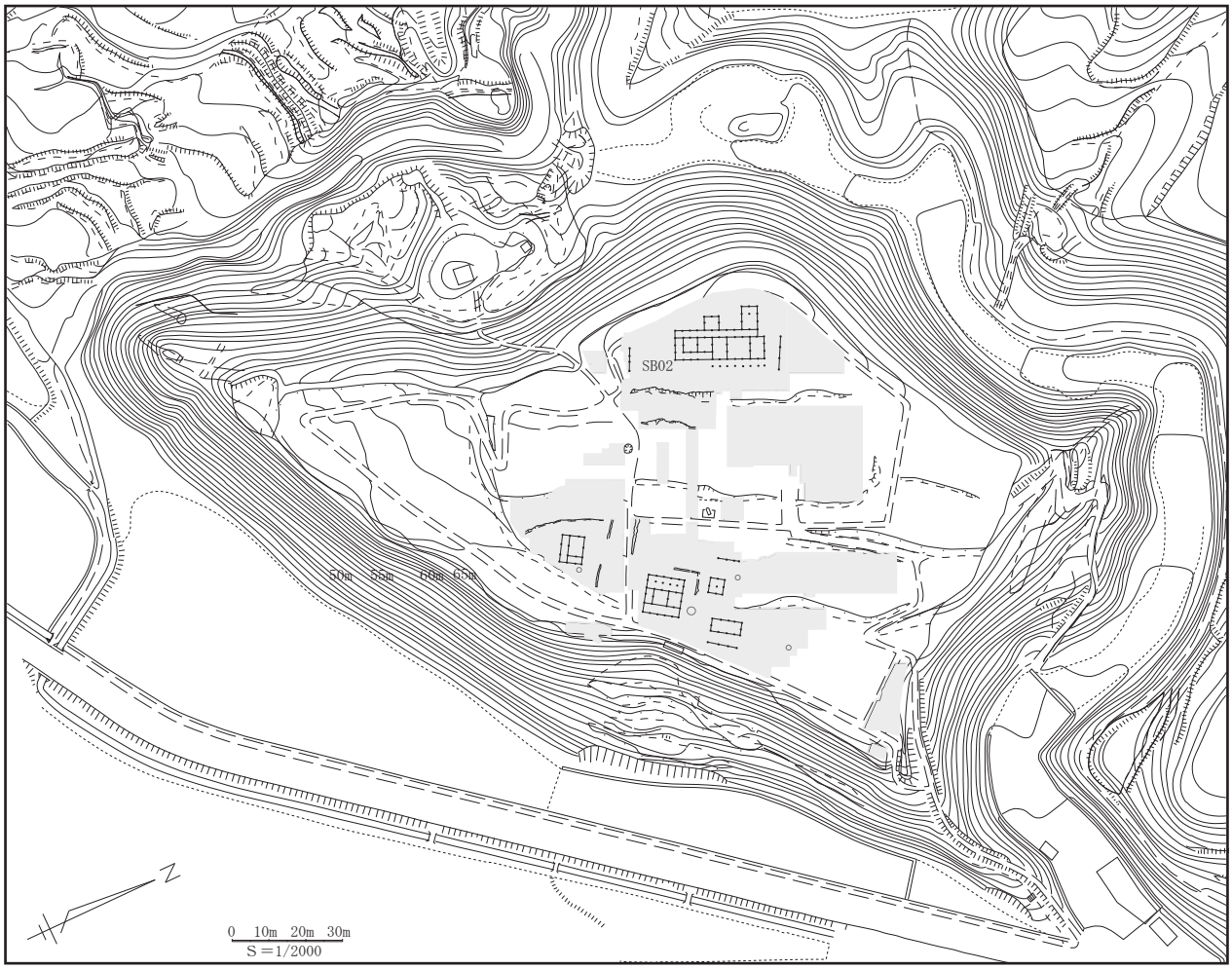
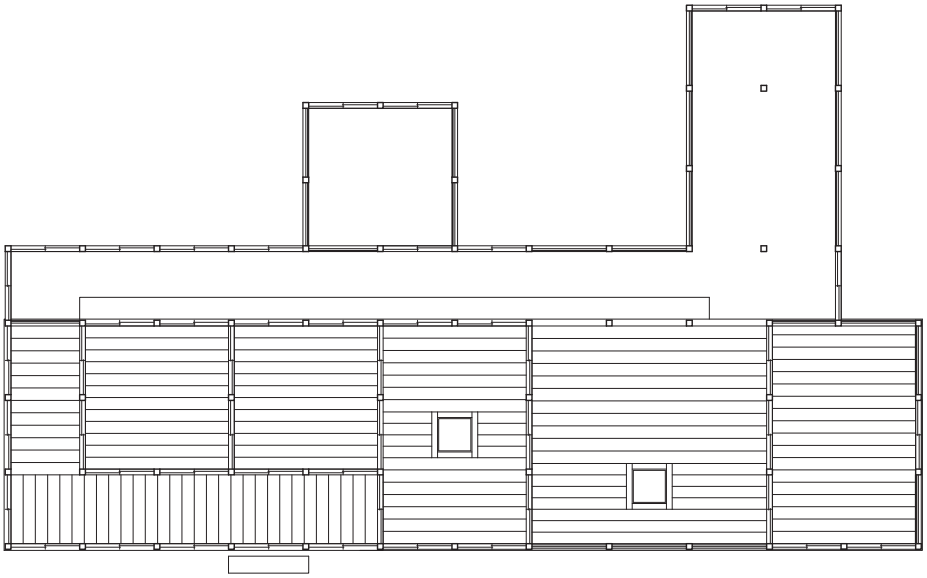
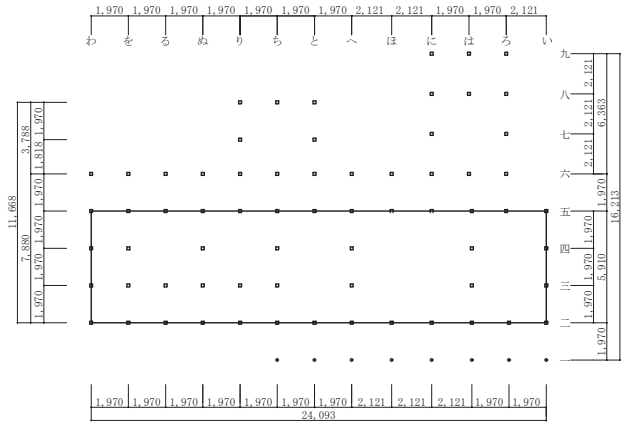


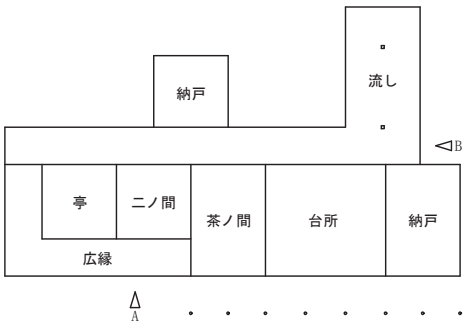
図 15　種里城跡　遺構配置図（十六世紀）



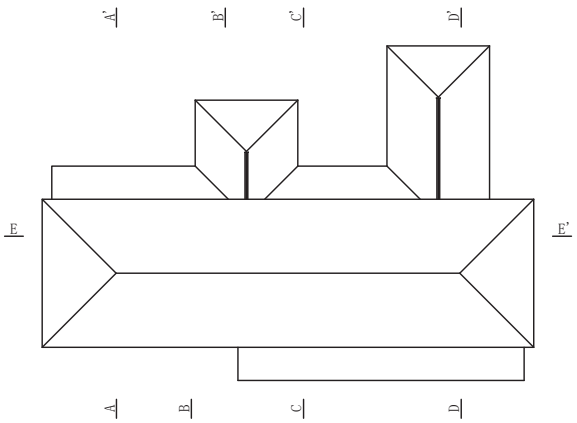
種里城跡　SB02復元平面図 S=1/200



身舎配置と柱間寸法

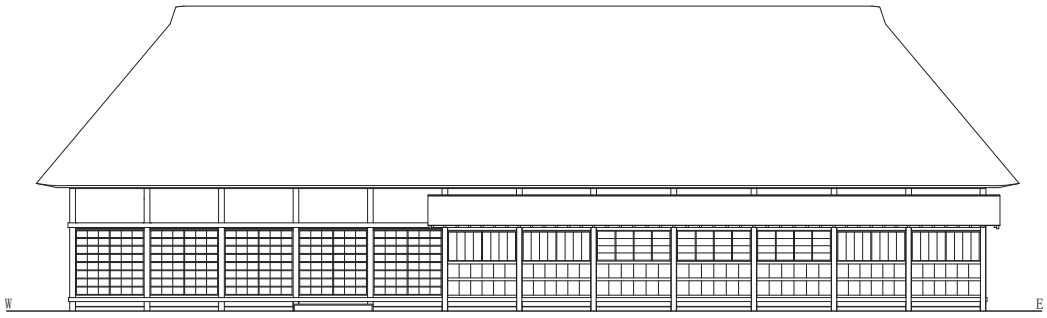


室名称と出入口



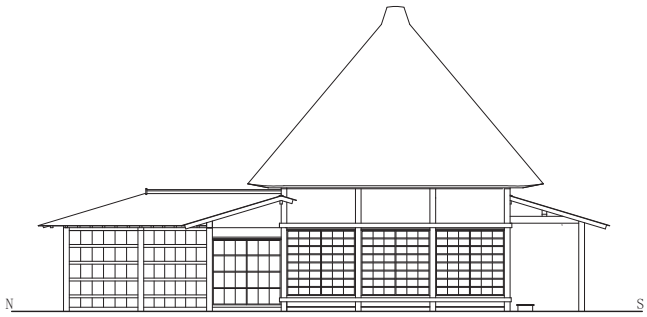
屋根伏図

図 16　種里城跡　SB02 復元案 (1)

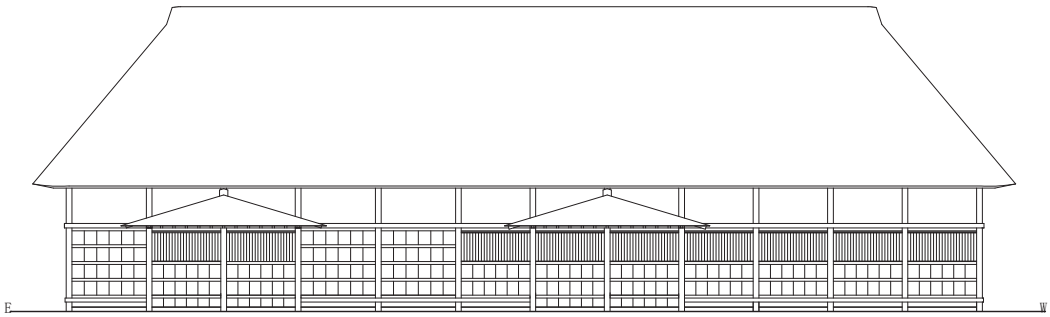


南立面図 S=1/200

東立面図 S=1/200

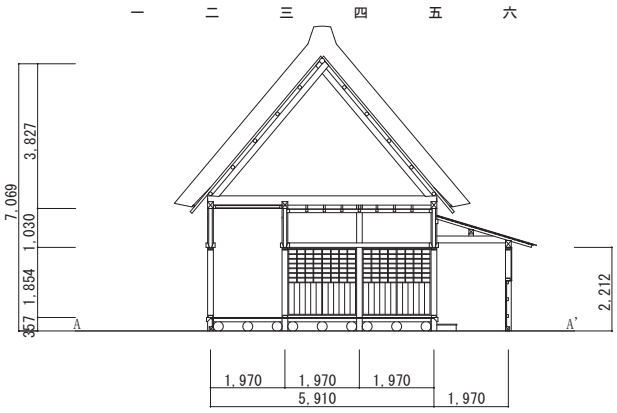


西立面図 S=1/200

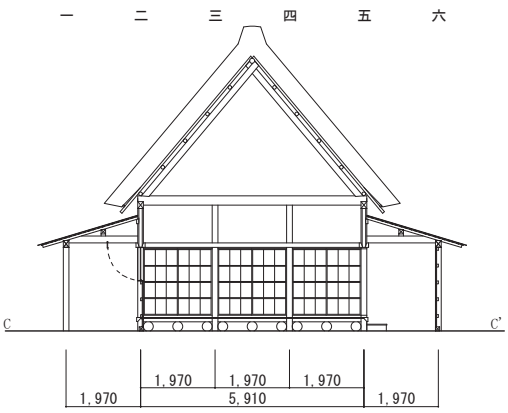


北立面図 S=1/200

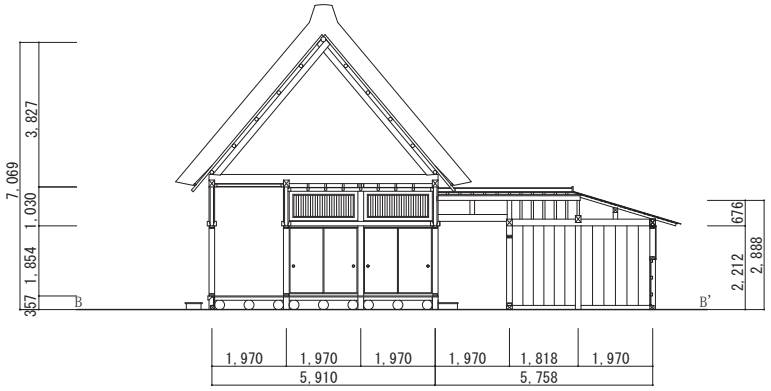
図 17　種里城跡　SB02 復元案(2)



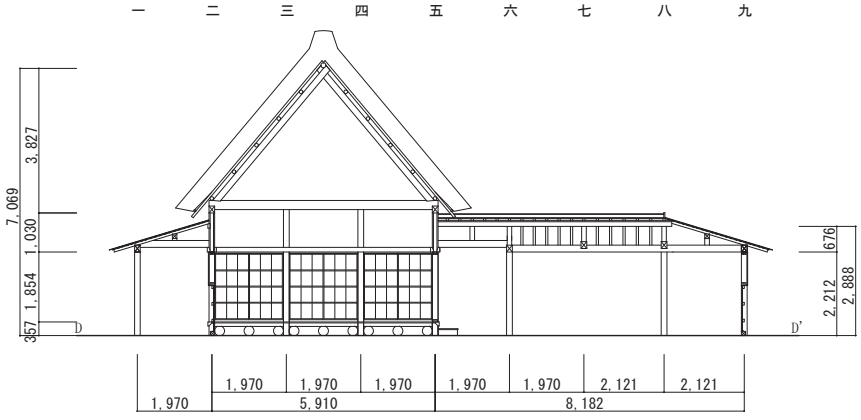
A-A'断面図 S=1/200



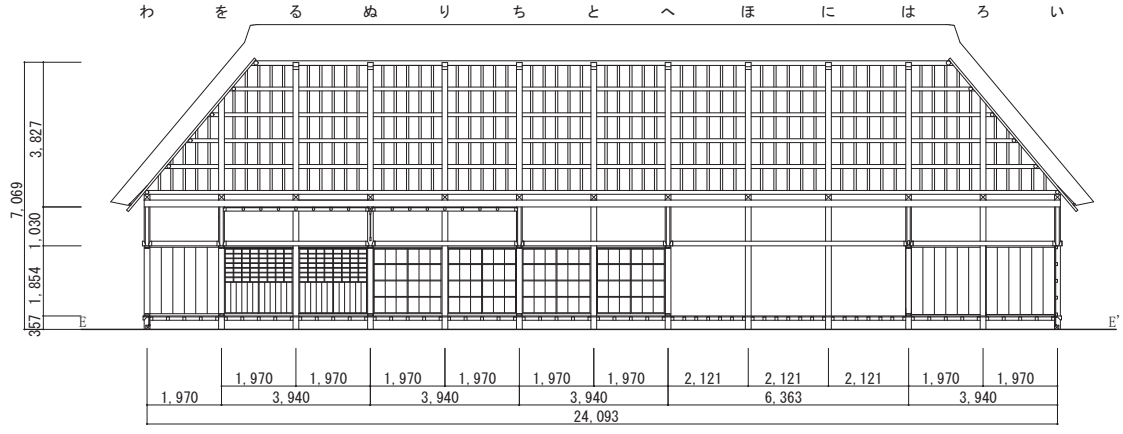
C-C'断面図 S=1/200



B-B'断面図 S=1/200



D-D'断面図 S=1/200



E-E'断面図 S=1/200

図 18　種里城跡　SB02 復元案 (3)

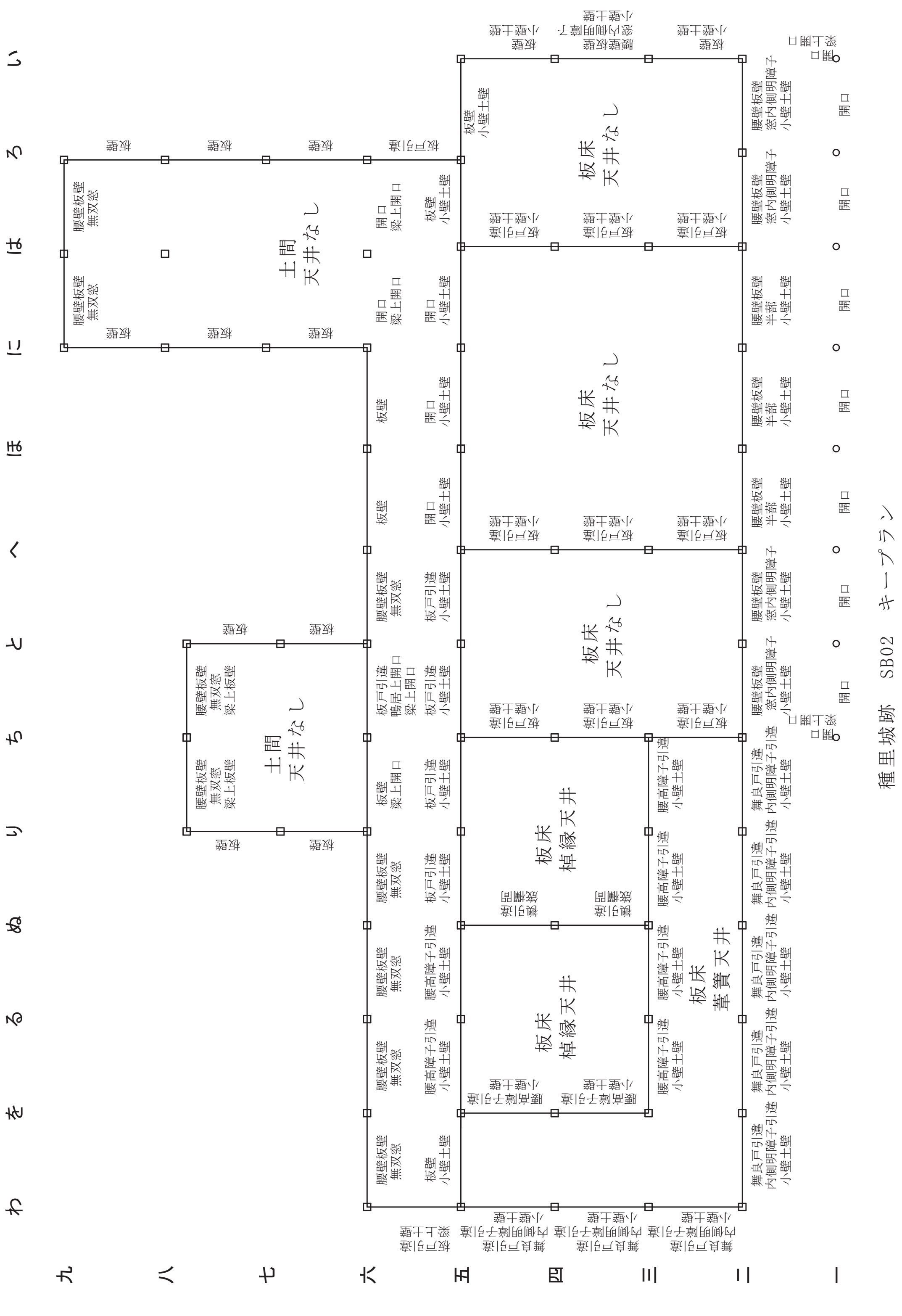


図19　種里城跡　SB02 復元案(4)

鰺ヶ沢町教育委員会からご提供いただいた遺構配置図のデータや、調査中及び整理作業時に造られたフィールドカードの内容を勘案し、建物の規模と間取りの解釈については改変を行った。よって復元対象である種里城SB02は本稿を初出とする。

復元建物の具体　図16で示したとおり東西を桁行方向とし、梁間三間の身舎の北側に、梁間二間の角屋が二つ取りつく建物であると考えた。実際に復元を行ってみての感想だが、番付二通りから五通りまでの梁間三間は柱穴列の対応が良好である。対して番付五通りと六通りの柱穴列の対応が悪く、ここで構造の連続性が絶たれることが理解できた。番付一通りの柱材は丸柱であるという解釈で復元を行ったため、同所には建具を入れず全面開口の下屋とした。また厳寒多雪の津軽の気候に合わせ、濡縁は設けなかった。ほかにも雪仕舞を考慮し側廻りの建具には窓や半蔀など腰壁が残るものを多用した。小屋組及び軸組の具体に関しては前章で検討したとおりの仕様で復元を行ったが二ヶ所の角屋の周囲には雨落溝と考えられる溝跡が認められたため、これに合わせ屋根形状と軒の出を想定した。

間取りについてだが、番付二通りから五通りまでの梁間三間の身舎の東西で空間を分節した。当該期の南部地域の一間の間尺は六尺五寸（1,970mm）である。種里城SB02でも同様の寸法が多用されているが、梁間桁行ともに六尺五寸の基準寸法が用いられる空間は番付へ通り以西の建物西半に限定される。建物東半は梁間寸法のみ六尺五寸になるものの、桁行寸法が七尺（2.121mm）になる部分が多いほか、柱穴同士の対応関係も建物西半に比べ劣るなど様相が異なる。このことから建物西半は建具が入る空間（続き間・対面儀礼の場・公的空間）、建物東半は建具の少ない空間（主家の生活空間）と考えた。戸や窓は一間六尺五寸となる柱間にのみ限定的に入れ、これ以外の寸法になる部分は板壁ないしは半蔀と考えた。台所と納戸に炉を設けたが､これは実際に検出された焼土の位置に合わせた。

種里城等の主要城館に準ずる格の館の場合、一時期に存在した大型建物は一棟のみであった可能性が高い。当然一棟の大型建物の内部に公的空間と生活空間が併存していたという想定が必要で、土間（炊事空間）も一定面積存在したと考えるのが妥当であろう。北東北以南の地域で展開したいわゆる「主殿」は、十六世紀代に至るとその機能を儀礼空間へと特化させる。住空間としての機能は常御殿へと移されていく傾向が認められる。しかし種里城においてはこの限りではなく、あくまでも住宅としての様相を多く残す姿であった可能性が高い。

6．結

以上本稿では、中世段階の南部の館で展開していた建築文化の具体について整理検討を行った。結果①中世段階の三戸南部氏・根城南部氏の館では礎石建物が認められないほか、身舎梁間の大型化がなされず、居室列は一列のままである。天正十九年（1591）の奥州再仕置軍の介入を契機とし、館の礎石化・身舎梁間の大型化・居室列の二列化が実現する。両氏の建築文化の近世化は受動的なものと表現できる。②大浦氏の館では堀越城の築城段階（十六世紀前半）で館が礎石化するほか、身舎梁間が大型化し、居室列が二列化する。種里城築城段階（延徳三年（1491））には、「南部の館」を築いていた大浦氏は、続く大浦城・堀越城築城段階で独自性を強め、当時の北東北以南の守護所や国人居館で展開していた習俗を実現させるために、能動的に建築文化を近世化させている。③中世の南部の館には、同時代の北東北以南の守護所や国人居館で行われていた習俗を実現するための施設が造られていない。主殿と会所において行われた主従関係の形成を重要視しない社会であった可能性が高い、ことなどを指摘することができた。

またこれに続く復元設計案の作成においては、ともに十六世代の建物である聖寿寺館15SB01と種

里城SB02の二棟を対象とし、その具体について検証した。結果当該期の南部の館の小屋組が身舎梁間三間のサス組と下屋によって構成されるものであり、貫が用いられていなかった可能性があることを指摘することができた。本稿で行った復元設計案作成に関する検討の内容が問題提起となり、建築史研究のみならず隣接諸分野対し新視点を提供できれば幸いである。

最後に今後の北東北の中世建築史研究について注釈めいた文章を添えて本稿を閉じたい。

本稿では復元設計案の作成に際し、掘立柱建物の館には、敷梁も和小屋も貫も無い、という前提で検討を進めたが、本来この問題はここまで単純化されるものではない。北東北では近世段階でも変わらずに掘立柱建物を主体とする景観が展開されるわけだが、奥州再仕置後に造られたものと考えられる根城本丸H·SB363（図２-31、十六世紀末から一七世紀初頭）や、浜通遺跡SB01 ～ 03·05·06（佐々木浩一2000、青森県東通村、十六世紀末から十七世紀初頭）、八幡遺跡SB13（中村隼人2007、青森県八戸市、十七世紀中葉以降）は、上記において否定した敷梁・和小屋・貫を使用しなければ建築できない。このように中世段階では礎石建物に使われる建築技術と掘立柱建物に使われる建築技術との間に大きな隔たりがあったわけだが、奥州再仕置後に至るとこの格差が減じ、掘立柱建物でありながらも、細部においては礎石建物と同様の仕様にすることも可能であったという理解が必要である。

また現段階での唯一の例外である福島城跡SB01・02についても触れておきたい（図２-35、青森県五所川原市、十五世紀初頭）。福島城は港湾都市十三湊を支配した十三湊安藤氏の館として知られる。同建物は掘立柱建物でありながら同時代の「主殿」で認められる形態的特徴を持つ点で異例である。十三湊安藤氏の優れた建築文化と強い中央志向をうかがうことができるとともに、中世段階の掘立柱建物であっても、敷梁・和小屋・貫を使用することができたことを証明する事例である。この事例だけをみれば中世段階の南部の館でも敷梁・和小屋・貫の使用が可能であったと考えることもできるかもしれないが、それは短慮であろう。繰り返しになるが、図２に挙げた奥州再仕置以前の南部の館は例外なく身舎梁間が大型化していない。十三湊安藤氏は十五世紀初頭段階で、敷梁・和小屋・貫を使用することが可能であったが、南部氏はこの限りではないと考えるのがやはり妥当であろう。

とはいえこれも奇態である。青森県八戸市是川に現存する清水寺観音堂は文中でも触れた根城南部氏の高臣である新田氏を願主とし、天正九年（1581）に建立されたことが棟札によって知られている。現存建物であることからも分かるように、清水寺観音堂は礎石建物の三間堂で、和小屋も貫も使われる純然たる禅宗様仏堂である。つまり奥州再仕置以前の段階で南部には正規の建築の知識と技術を持つ工人が存在し、限定的ではあるが礎石建物を造ることも可能であったということが理解できる。

また観音堂の願主である新田氏の居城、新井田古館の発掘調査も行われているのだが、この調査成果が面白い（中村隼人2014、図２-21・28、青森県八戸市、十四世紀末から十七世紀初頭）。新井田古館では観音堂と同時代の成立を比定できる館が検出されているが、この館は他の南部の館と同様に掘立柱建物である。つまり新田氏は礎石建物の仏堂を建築することが可能であったにも関わらず、自らの館を丸柱の掘立で造っているのだ。西国では礎石建物による寺院の成立から程なく富裕層の住宅も段階的に礎石化していく。しかし北東北では同様の傾向がみられない。北東北でも社寺は移入当初段階から礎石建物で造られる。しかし平泉段階はもとより織豊期に至ってもなお住宅は掘立のままなのだ。あるいは文中でも触れた習俗の移入に関する意識の差や、工人の絶対数、集住人口の具体、材木の受容と流通・加工の問題など、社会全般の諸相についての理解が進んだならば、この問題も説明が可能になるのかもしれない。だが少なくとも今の筆者はこの理由を説明する言葉を持っていない。

本稿を草するにあたり高島成侑、佐々木浩一の両氏をはじめ、岩舘岳、木村才人、中田書矢、布施和洋の各氏に貴重なご教示や資料の提供を受けた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

図版出典

１南部町教育委員会2014を改変　２－１～４・７・９・12～13八戸市教育委員会1993改変
２－５～６・８・10～11・17・23・25・27・30七戸町教育委員会2006改変　２-14佐々木浩一2000b 改変
２-15浄法寺町教育委員会1999　２-16中村隼人2015a　２-18・22・26・31八戸市教育委員会1993
２-19～20、４、10～13、16～19本稿初出　２-21八戸市教育委員会2014　２-24高島成侑1986改変
２-28八戸市教育委員会2014改変　２-29一戸町教育委員会1986　２-32青森県埋蔵文化財センター 1987
２-35中村隼人2012a　２-33岩木町教育委員会1996　２-34大野敏2015改変　３佐藤巧1979　５吉岡泰英1983
６左乗岡実2014改変　６右藤田若菜2012改変　７文建協1994　８－１～５南部町教育委員会提供本稿初出
14中田書矢2005(高島成侑作成)　15鰺ヶ沢町教育委員会提供本稿初出

参考文献

青森県教育委員会　2012 『福島城跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第522集
一戸町教育委員会　1986 『一戸城跡－昭和60年度発掘調査概報－』一戸町第15集
岩木町教育委員会　1996 『大浦城跡遺跡』
岩手県教育委員会　1982 『岩手県戦国期文書Ⅰ』文化財調査報告書第七十三集
大野敏　2015 「建築史学からみた堀越城跡　発掘成果に基づく本丸内建築の検討過程」
　『堀越城シンポジウム資料集　よみがえる津軽為信最後の居城』
佐々木浩一　2000 「青森県中・近世遺跡の景観 小沢館・境関館、浜通遺跡・十三湊遺跡・種里城」『青森県史研究第５号』
　2002 「扇の要　東北北部における中世城館の曲輪配置」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀記念献呈論文集
佐藤巧　1979 『近世武士住宅』叢文社
七戸町教育委員会　2006 『七戸城跡 北館曲輪発掘調査総まとめ報告書』
浄法寺町教育委員会　1999 『浄法寺城跡平成10年度町内遺跡発掘調査概報』
紫波町教育委員会　1976 『二日町古館遺跡第１次第２次発掘調査報告書』文化財調査報告書第８集
関根達人　2004 「出土陶磁器からみた津軽 (大浦) 氏関連城館跡の検討」『貿易陶磁研究24』
　2005 「城跡にみる南部氏・津軽氏近世大名への道筋」『日本海域歴史大系４』清文堂
　2015 「考古学からみた堀越城跡　出土陶磁器にみる津軽 (大浦) 氏の津軽統一過程」
　『堀越城シンポジウム資料集　よみがえる津軽為信最後の居城』
高島成侑　1986 「浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について」『八戸工業大学研究紀要第５巻』
　1995 「種里城跡の掘立柱建物」『種里城跡Ⅲ』鰺ヶ沢町文化財シリーズ第12集
遠野市教育委員会　2012 『鍋倉城本丸跡発掘調査報告書』遠野市埋蔵文化財調査報告書第10集
中田書矢　2005 「種里城跡」『鰺ヶ沢町史史料編』
中村隼人　2007 「八幡遺跡の掘立柱建物跡について」『八幡遺跡発掘調査報告書Ⅳ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第115集
　2012a 「福島城跡内郭南東隅屋敷の空間秩序からみた十三湊安藤氏像」『福島城跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集
　2012b 「鍋倉城本丸屋敷の空間秩序」『鍋倉城本丸跡発掘調査報告書』遠野市埋蔵文化財調査報告書第10集
　2014 「新井田古館跡検出の掘立柱建物跡の特質」『新井田古館遺跡第28地点』八戸市埋蔵文化財調査報告書第147集
　2015a 「南部諸城の研究」『公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要第34号』
　2015b 「発掘成果と文献史料からみる青森県の建築文化」『青森県史文化財編建築』
　2015c 「中世南部氏城館の特異性」『日本建築学会東北支部研究報告集計画系第78号』
　2015d 「遠野鍋倉城の建築」『日本建築学会東北支部研究報告集計画系第78号』
南部叢書刊行会　1928 「遠野古事記」『南部叢書第四冊』
南部町教育委員会　2014 『史跡聖寿寺館跡整備基本計画書』
乗岡実　2014 「石積み・石垣」『中世城館の考古学』高志書院
八戸市教育委員会　1993 『根城 本丸の発掘調査』八戸市埋蔵文化財報告書第54集
　2014 『新井田古舘遺跡第28地点』八戸市埋蔵文化財調査報告書第147集
早川圭　2014 「礎石建物」『中世城館の考古学』高志書院
弘前市教育委員会　2013 『史跡津軽氏城跡　堀越城跡発掘調査報告書14』
藤田若菜　2012 「戦国武将の居館に配された複数の庭園空間」『一乗谷朝倉氏資料館紀要2012』
文化財建造物保存技術協会　1994 『根城　主殿復原工事報告書』
盛岡市教育委員会　2008 『史跡盛岡城跡Ⅱ　第２期保存整備事業報告書』
吉岡泰英　1983 「朝倉館の建築的考察」『朝倉氏遺跡資料館紀要1983』

岩手県における近・現代遺構の検討

－炭窯跡について－

阿　部　勝　則

本稿では、近年の岩手県の発掘調査で事例が増えつつある、20世紀の約100年間に造られた近・現代の炭窯跡について検討する。結果、昔窯から岩手窯に至る形態的変化、地域的特徴、立地条件や個々の炭窯を造る際の設置者による工夫の有様などを把握することができた。

１．はじめに

岩手県の山間部の発掘調査において頻繁に調査される遺構のひとつに炭窯跡がある（註１）。炭窯は、古代以降、現代まで形を変えながら営まれてきた製炭施設である。なかでも20世紀の約100年間に造られた近・現代の炭窯跡は、近年の発掘調査で事例が増えつつあるが、中世以前を主要な対象とする行政発掘の制約のなかでは、詳細な調査が困難であることも少なくない（註２）。しかし、これまで主に民俗事例や歴史的事象として検討されてきた炭焼きや木炭のみならず、炭窯の形態や立地など考古学的手法による発掘調査の記録から発信できる情報も、炭焼きの具象を明らかにする有効な方法のひとつと考えられる。本稿では、これまでに岩手県の発掘調査で確認された近・現代に属するとみられる炭窯跡の調査事例を集成し、検討する（註３）。

２．岩手県の炭焼き・木炭・炭窯の研究史

⑴　岩手県の歴史における炭焼き・木炭生産

「木炭王国」といわれ、木炭生産量日本一の岩手県おいて、大正から昭和にかけての本県の歩みを語るうえで、炭焼き・木炭生産は、岩手県の歴史書でも必ず触れられる事項である（註４）。その記述は、日本の社会経済史的な背景のもとに隆盛した岩手県の木炭生産について触れているが、実態として、岩手県の木炭生産量日本一の栄華は、山村の貧しさの所産であったこと。炭焼きが盛んであったことは森林資源の豊かさを示すと同時に山間地で平野部が少なく、冷涼な気候であるがゆえに米の収穫量が少なく、農作物の生産性の低かった、地理的・歴史的な背景と表裏の関係にあるとされている。

⑵　岩手県の炭窯の研究史と問題の所在

岩手県の炭焼きの研究は、これまで畠山　剛氏による精力的な研究により牽引されてきた（註５）。その視点は、一貫して炭焼きに従事する人々の生活に置かれている。その内容を要約すれば、決して豊かではない、山村の貧しさのうえに成立した木炭生産量日本一という、炭焼きの表と裏（光と影）について、炭焼きを生業とした人々の記録や、体験者への聞き取り調査など民俗学的手法によって実態を明らかにし、岩手木炭を岩手の近・現代史に位置づけることに成功した。岩手県の近・現代史において人々の生活を語るうえで、炭焼きは欠くことのできない生業のひとつとして指摘されている（註６）。隣県に目を向けると、秋田県の炭焼きを検討した高橋　正氏の論考も、やはり民俗学的手法により炭焼きを調査・検討したものである（註７）。

また、川井村（現宮古市）で発行された『川井村民俗誌　民具編－図説・民具とその周辺－』（2000）・『川井村北上山地民俗誌　上巻』（2004）は、炭窯の造り方（築窯）・炭焼きの工程、使用された道具など、炭焼きの作法についてまとめられた貴重な記録の集成である（註８）。

一方、近年、近・現代の炭窯跡の発掘調査事例が沿岸部において特に顕著になりつつある。考古

学的手法からの情報発信としては、鉄文化の源泉を探る視点から、製鉄遺跡との係わりで、岩手県における発掘調査での炭窯跡（木炭窯）の調査事例を集成し、その特徴を検討した佐々木清文氏の論考がある（註９）。同論では、古代から近現代の炭窯跡の事例16遺跡74事例を集成している。そのうち、４遺跡６事例（滝谷Ⅲ遺跡・扇畑Ⅲ遺跡・上の山Ⅶ遺跡：改良窯４：昭和、北上南部工業団地：土窯２：近現代）が、近現代の事例（全体の８％）として提示されているが、近現代の改良窯は考察の主たる対象からは外れており、詳しく触れられていない。また、その後の調査事例の増加に伴い、個別事例の報告が蓄積されていても、その特徴について本格的に追求された形跡はない。

このようにみてくると、炭焼きの研究は、民俗学的視点を中心に進められてきており、炭窯自体を資料として体系化した言及は少なく、調査報告書において炭窯の形態や時期について詳細に言及した例は多くない（註10）。さまざまな要因により、詳細な調査・報告が困難な場合はあるが、民俗学的資料として残されている炭窯の記録を基にして考古学的な調査事例を解釈していくことはできる。そして、より良い炭を作ろうとする製炭者の努力と工夫のあり方は、炭窯にこそ集約されており、その物的証拠は、土中に作られた構造物（遺構）としての炭窯跡である。ゆえに質的にも量的にも考古学的手法による炭窯跡の記録が、炭焼きの実態を解明するうえでも有効な方法であると考える。

以上のことから、炭窯跡の調査事例について、考古学的視点から検討を加えてみたい（註11）。

３．炭窯の構造と造り方（第１図）

ここでは、炭窯の種類・炭窯の構造・炭窯の造り方・炭焼きの工程について確認する（註12）。

⑴　炭窯の種類

製炭の種類により炭窯の構造は異なる。炭窯の種類は、大別して土窯・石窯があり、他にたたら用の大炭窯などがある（註13）。炭の種類は黒炭と白炭に大別され、黒炭は土窯、白炭は石窯で作られる。土窯は、周囲に粘土を固めて築き、開口部が比較的小さく、年代や地域で形態が異なる。石窯は、石組を積んで隙間に粘土を詰めて築き、開口部が比較的大きい。両者の違いは遺構で確認される。

⑵　炭窯の構造

基本的な炭窯の構造を確認する。炭窯の構造は、大きく、煙道（煙道口・排煙口）・炭化室・点火室から構成される（註14）。窯の規模（幅／奥行きの比率など）・平面形は、窯の形態で異なり、一様ではない。この点は一定の時間で形態が変化していく炭窯の年代を把握する手がかりとなる。

⑶　炭窯の造り方

炭窯は、次の手順で造られる。まず窯の底型を掘る。胴部には窯土を盛り、槌等で打ち固める。その際、外側に木杭を打ち込み、柴木を絡めて「しがらみ」を組み、割板を横に重ねて土留めをつくり、窯土を盛って、粘土を固めながら積み上げていく。煙道は、点火室と反対側の炭化室の奥に底部から上部に向って排煙口を設ける。最後に灰になる炭を燃やして着火し、粘土を焼き固める。

⑷　炭焼きの工程

炭焼きは、次のように行われる。黒炭を製炭する土窯は、焼成温度400～700度とされ、出煙が止まり、窯の中の温度を冷まし、窯口を開いて出炭する。完全に火が消え、冷めてから炭を窯から出す。できた木炭は、炭質の柔らかい黒色の木炭で、炭材はナラ・クヌギなどの広葉樹が多用される。表面に樹皮が残るため、火が付き易い炭である。白炭は、1,000度以上の高温で焼き、火の付いた状態で外に出し、炭窯の外で炭灰を掛けて消火する。できた木炭は、材質の堅い、表面が白色を帯びた木炭で、カシなどの堅い木が用いられる。備長炭が有名で、堅いため火持ちが良く、叩くと金属音がする（註15）。

４．岩手県の木炭史と炭窯の変遷

⑴　岩手木炭史（第１表）

ここでは、近代以降の炭窯について、築窯と製炭の背景を知るため、岩手県の木炭史と実際に造られた炭窯の形態の変遷について触れておきたい。

木炭生産の主な目的は、エネルギー資源の確保にあり、木炭生産の盛衰は、日本及び世界の近代化の歴史と密接にかかわっている。また、消費・販売には流通・交通網の拡充が必須の条件である。

日本の歴史の歩みをみると、明治27（1894）年の日清戦争、明治37（1904）年の日露戦争、大正３（1914）年の第１次世界大戦、昭和12（1937）年の日中戦争、昭和14（1939）年・昭和16（1941）年の第２次世界大戦・太平洋戦争と、戦争があいついだ20世紀前半は、日本の戦争体験とともにエネルギー資源の確保のために木炭生産が盛んに行われた時期であった。日本では、昭和15（1940）年に木炭の生産量が史上最高になり、昭和12（1937）年には、岩手県の木炭生産量が全国第１位となっている。この時期の木炭生産は、戦争への対応もあり、政府による木炭の買い上げなど、国家による統制が行われた時期であった（註16）。

岩手県では、明治23（1890）年の東北本線上野－盛岡間の開通、43年後の昭和８（1933）年の山田線盛岡－宮古間の開通が、岩手県から東京方面への木炭の移出・生産量の増加に大きな変化をもたらした出来事であった。それまでの木炭の輸送手段は、八戸を経由する船に拠る海上輸送であったが、鉄道開通とともに陸上輸送に移行し、輸送手段の改善が生産量の増産につながっていった。

戦後は、政府による木炭生産の統制が撤廃され、自由競争になる。昭和28（1953）年には、日本の木炭生産量が戦後最大となるが、その後は、石油などのエネルギーに取って代わられ、1960年代から木炭の生産量は減少する。以後、暖房用・炊事用の燃料は、石油・ガス・電気などに代わっていった。岩手県の生産量も20世紀半ばをピークとして減り続けている。とはいえ、木炭の全国生産量に占める岩手県の割合は依然として高い（註17）。その後、エネルギー資源のみならず、脱臭や自然エネルギー利用など環境改善の視点から、近年、木炭の効用が見直され、現在に至っている。

⑵　炭窯の変遷（第１図）

このような歴史的な背景のもと、岩手県において造られた主だった炭窯の形態の変遷を辿ってみる。特に発掘調査で確認することができる地下構造の特徴に留意しながら確認していく。炭窯の名称は、考案者・考案元によって命名されている例が多く、ここでもそれに従う。

昔窯

次代の楢崎窯が普及されるまでの19世紀末から20世紀初頭（明治39（1906）年頃）まで、主流であった炭窯の形態である。大きさは、奥行き４～５尺（約1.2～1.5m）・幅４～５尺、高さ4.5尺（約1.3m）、腰の高さ３尺（約0.9m）、幅／奥行きの比率は1.0である。平面形は円形で、平面の径と同程度の高さがあったことが特徴である。生産量は50貫（１貫＝3.75kg）といわれている。

楢崎窯

楢崎敬三氏の考案による炭窯で、明治39（1906）年以降に普及した改良製炭窯である。大きさは奥行10尺（約3.0m）・幅7.7尺（約2.3m）・高さ５尺（約1.5m）で、幅／奥行きの比率は0.77である。平面形は窯口を頂点とする三角形である。初期には補助煙道として耳煙道が付く特徴があったが、有効に機能しなかったことから、改善の過程で無くなったようである。奥行に向って１尺（約0.3m）につき３分（0.009m）下げるという工夫を凝らし、床面に傾斜が設けられている。

小野寺窯

小野寺清七氏の考案による炭窯で、大正10（1921）年以降に普及した。大きさは奥行11尺（約3.3m）・

幅７尺（約2.1m）・幅／奥行きの比率は0.63、平面形は卵形で、大小二つの円を組み合わせて、卵形になるよう設計された。点火室の幅が１尺４寸（約0.42m）とされており、窯口の大きさが、炭化室の短軸の約１／５と狭くなっている。

岩手１号窯

佐々木圭助氏の考案による炭窯で、昭和25（1950）年以降に普及した。奥行10尺（約3.0m）・幅7.5尺（約2.25m）。平面形は卵形である。後の岩手窯の先駆けとなった。

岩手窯

岩手県木炭協会の考案による炭窯である。昭和31（1956）年以降に普及した。岩手１号窯の系統上にある。幅／奥行きの比率が0.75になるよう設計された。平面形は卵形である。奥行き･幅の数値（規模）ではなく、比率を呈示することで、炭窯を造る土地の広さに制約があっても、大きさを調整して相似形に炭窯を造ることが可能となった。結果として､造られた炭窯の規模には大小の差があっても、均質な製炭を可能にした。煙道では排煙口に向って傾斜が設けられる。岩手大量窯は、岩手窯を基本として、大量生産を目的としてより大きな規模で造られた炭窯のことである。

その他、地域的に造られた炭窯として、大正４（1915）年頃、東山地区に存在した東山窯、江戸時代後期から明治時代にかけて宮古市田代・箱石地区にあったとされる田代窯（平面形は卵形・大きさは長さ2.8尺（約0.84m）・高さ1.5尺（約0.45m）などの地域的に限られた炭窯、昭和８（1933）年以降に普及し、岩手１号窯の先駆けとなった浅沼久氏の考案による岩手窯などもある。他に白炭の製炭を目的とした石窯も存在する。

以上、土窯を中心とした炭窯の変遷をまとめると次のようになる。19世紀末から20世紀初頭:昔窯。20世紀初頭：楢崎窯。20世紀前半：小野寺窯。20世紀後半：岩手１号窯。岩手窯。

５．発掘された炭窯跡

⑴　調査事例の集成（第２表）

岩手県内の発掘調査事例から炭窯跡の事例を集成した。表の項目と記載内容は次のとおりである。所在地は市町村名（本文では旧市町村名も併記）で示した。遺跡名・遺構名は報告書記載のままである。立地は報告書記載内容に準じ、記載の無い場合は掲載図より筆者が読み取ったものもある。炭窯跡の平面形・規模の計測値は、報告書記載の形状・数値を基本的に引用し、未記載のものは必要に応じて筆者が計測した。付属施設・関連施設・出土遺物・年代は､報告書に記載された内容を引用した。備考欄には、炭窯の特徴や、他遺構との重複関係など留意すべき事項を記載内容から抽出した。炭窯の形態の同定については、報告書に記載されている場合のみ引用した。

2015年時点で集成できた事例は、69例（39遺跡）である。市町村別に事例を示す。

・八幡平市３遺跡４例：曲田Ⅰ遺跡１（旧安代町)､扇畑Ⅱ遺跡１（旧安代町)､上の山Ⅶ遺跡２（旧安代町）（註18)。
・二戸市５遺跡７例：馬立Ⅱ遺跡１、大久保遺跡１、西久保遺跡１、広沖遺跡１（旧浄法寺町)、五庵Ⅲ遺跡３（旧浄法寺町)。
・軽米町３遺跡６例：上尾田の館跡２、宮沢遺跡３、水吉Ⅵ遺跡１（註19)。
・九戸村１遺跡１例：滝谷Ⅲ遺跡１。
・岩手町１遺跡１例：東の沢遺跡１。
・雫石町１遺跡１例：元御所遺跡１。
・西和賀町２遺跡５例：大渡Ⅱ遺跡１（旧湯田町)、越中畑Ⅴ遺跡４（旧湯田町)。

・花巻市１遺跡２例：田瀬柏森館２（旧東和町）。
・北上市３遺跡４例：兵庫館跡１（旧和賀町）、上反町遺跡１（旧和賀町）、南部工業団地遺跡２。
・奥州市４遺跡16例：下尿前Ⅱ遺跡１（旧胆沢町）、下尿前Ⅳ遺跡１（旧胆沢町）、市野々遺跡11（旧胆沢町）、大平野Ⅱ遺跡３（旧胆沢町）。
・平泉町１遺跡１例：花立Ⅰ遺跡１。
・一関市１遺跡１例：大平遺跡１。
・住田町１遺跡３例：子飼沢Ⅰ遺跡３。
・久慈市３遺跡４例：平沢Ⅰ遺跡１、源道遺跡１、山根館跡２。
・田野畑村３遺跡３例：大芦赤空洞遺跡１、和野ソマナイ遺跡１、尾肝要Ⅰ遺跡１。
・宮古市６遺跡９例：小堀内Ⅰ遺跡１（旧田老町）、八木沢野来遺跡１、八木沢Ⅱ遺跡２、木戸井内Ⅳ遺跡３、金浜Ⅰ遺跡１、金浜Ⅱ遺跡１。
・山田町１遺跡１例：焼山遺跡１（註20）。

以下、炭窯跡の分布、炭窯の形態が同定された炭窯跡の事例、炭窯の立地条件、炭窯の構造的特徴、付属施設、出土遺物について検討する。

⑵　炭窯跡の分布

調査事例から炭窯跡の分布傾向をみる。内陸北部（20基・28%）と沿岸北部（17基・24%）に多い。北上山系の北部及び沿岸北部の分布の高さは、当時の炭窯が造られた状況を反映している。炭窯の種別は、土窯（推定含む）66基（96%）、石窯３基（４％）で、石窯３基のうち奥州市（旧胆沢町）２基と他地域に比べて奥州市で確認数が多いことも、当地域が石窯による白炭の生産地であったことと一致する（註21）。

⑶　炭窯の形態が同定された炭窯跡の事例（第２図）

これまでの発掘調査事例で、おおよその年代観とともに炭窯の形態が同定され、報告書で言及されている事例がある。このなかで代表的な事例を概観する。

奥州市大平野Ⅱ遺跡１号炭窯跡：楢崎窯の事例

窯底の規模は3.12m（10.2尺）×2.60m（8.5尺）、窯の両辺が直線的で、点火室が25㎝と短軸の約10分１に窄まる三角形状（報告書では団扇型）の平面形から、楢崎窯と推測された炭窯跡である。煙道は斜面上・点火室は斜面下に設けられている。この炭窯には、点火室前に3.62×2.53m の作業室と推測される掘り方を持つ。炭窯の長軸と作業室の長軸は直交する。さらに作業場から、長さ4.7m、幅0.25 ～ 0.46m の溝跡が延びている。

田野畑村和野ソマナイ遺跡１号炭窯跡：小野寺窯の事例

南向きの谷地形の緩斜面で確認された。地形に沿って斜面上位に煙道・斜面下位に点火室が設けられている。隣接して掘立柱建物跡が確認されている。性格は不明だが、検出状況・規模から炭窯跡と同時期に建てられた関連する建物跡と推測されている。炭窯跡は、平面形・規模、聞き取り調査などから、炭窯が機能していた時期：昭和16年以前に築窯された小野寺窯と推測された事例である。

奥州市下尿前Ⅳ遺跡１号炭窯跡：石窯の事例

長軸9.10m。短軸7.30m。深さ1.17m で、大規模な炭窯である。内部は瓢箪形で、前後に分かれ、製炭室と前庭部とされている。壁に礫が積み上げられ、白炭製炭の石窯と推測された事例である。

軽米町宮沢遺跡 RZ01・02・03炭窯跡：岩手窯の事例

南向きの緩斜面で、約400㎡の範囲に３基の炭窯跡（RZ01・RZ02・RZ03）が確認された。RZ01・RZ02炭窯跡は所有者が同じで、RZ02炭窯跡（旧）→ RZ01炭窯跡の新旧関係がある。RZ03炭窯跡は

２基より旧い炭窯跡である。３基の炭窯跡は、RZ03炭窯跡→ RZ02炭窯跡→ RZ01炭窯跡と造り替えられ、それに伴い、① 炭窯の規模が拡大し、② 効率よく製炭するために施設に工夫が施された、ことが報告されている。加えて、設置位置が所有者宅に近づいていったことも窺える。① 規模の拡大は、３基の窯底の面積を比較すると、RZ03炭窯跡（5.8㎡： 1）→ RZ02炭窯跡（11.68㎡：約２倍）→ RZ01炭窯跡（16.68㎡:約３倍）と規模が拡大している（註22)。② 施設への工夫は､製炭時の排水・除湿を目的とした施設が炭窯内外に設けており、RZ01・02炭窯跡には、炭窯を中心に斜面上方に半円状に溝が巡らされている。規模は、開口部の幅約0.8 ～ 1.0m、深さ約1.2m である。RZ02炭窯跡の炭化室の窯底には木炭が敷かれていた（註23)。RZ03炭窯跡では、造り替えに伴い、窯底を20㎝底上げしていた。３基の炭窯跡の周辺には柱穴群が確認されており、規則的な配置を認めるに至っていないが、炭窯の上屋を支えた柱穴群と推測される。また、RZ01・03炭窯跡の窯底の壁際に沿って確認された小柱穴は、窯壁をつくる際に立てた支柱の痕跡と推測される。これらの炭窯跡の使用時期は、昭和50年頃と聞き取り調査されており、岩手窯・岩手大量窯として造られた炭窯と推測される。所有者宅の裏庭に設けられた炭窯で、道路にも近く、燃料材の補給や木炭の搬送に便利な場所である。

⑷ 炭窯の立地条件

炭窯を造る場所として適する条件は、水が湧かないこと。山沢の入り口の近くで、飲料水・用水が確保でき、近くに道があり、運搬の便が良いこと。風が当たらず、冬は雪崩の心配がないこと。平坦面または山腹を切り崩した平地が好まれる。調査事例を見ると、南向きの緩斜面が多く、谷底などの凹地や斜面地の地形を利用した事例もある。避けられる条件は過剰な水分・湿気である。故に炭窯の周囲に溝を設けて排水し、窯底の地下に木炭を敷いて除湿・保温するなどの工夫を加える。斜面に炭窯を造る場合は、煙道を斜面上位側に設け、点火室を斜面下位側に設ける。時代とともに効率性を求めて、いわゆる奥地製炭から庭先製炭に移行しても炭焼きを行うための基本的な条件は変わらない。

遺跡別に傾向をみると、同一遺跡で複数の炭窯跡が確認された事例がある。限られた調査範囲の中で複数の炭窯が確認される事例は、その土地が炭焼きに適した土地として選択され、一定期間使用された結果である。なかには、軽米町宮沢遺跡・宮古市八木沢Ⅱ遺跡のように遺構の重複関係から時間的変遷が辿れる事例がある。また、数基の炭窯が同時に存在していた可能性をもつ事例もある。遺跡単位で調査数が最も多かった事例は、奥州市市野々遺跡で11基の炭窯跡が確認されている（註24)。

⑸ 炭窯の構造的特徴

大別すると､煙道(排煙口・煙道口)・炭化室・点火室で構成される。窯の規模(幅／奥行きの比率・長軸／短軸の比率)・平面形は、窯の形態で異なり、一様ではない。また、それぞれの構造には使用に伴う痕跡もあり、調査の際の手がかりとなる。

遺構としての特徴をみると、土窯の場合、点火室は焼土化して赤変し、内部は密閉による還元作用により窯壁・窯床は黒色化し、硬く締まる。窯壁の外側は被熱により赤変している場合が多い。煙道には、排煙口に耐火煉瓦・鉄板、煙道口に土管などが用いられる。煙道の内側にはタール状の付着物が確認される。地下構造として、炭窯の床下に木炭を敷く場合や、再利用に際し、窯底を上げた事例もある。炭窯の耐用年数や生産量の拡大に伴い、炭窯を同一地点で造り替えた事例もある。炭窯内部は、天井の崩落土で埋まっている場合が多く、埋没せずに窪地として確認される場合もある（註25)。多くの場合、遺跡全体が後世に削平を受けた場合は、窯の周囲に粘土により盛土した痕跡が残ることは稀で、地下に掘り込まれた部分しか確認できない。排気管が確認された事例もない。斜面地利用の場合は、半地下式に竪穴状に掘り込まれた部分が確認される（註26)。

⑹ 付属施設

炭窯本体の他に、周辺に次のような施設の痕跡を伴う事例がある。

溝跡

炭窯の周囲に周溝ともいえる溝が設けられた事例がある。炭窯の斜面上方側からの排水を目的として設けられた施設である。軽米町宮沢遺跡 RZ01炭窯跡では、開口部の幅約0.8m・深さ約1.2m。RZ02炭窯跡では、開口部の幅約1.2m、深さ約1.2m の溝が設けられており、炭窯と周溝の間は、１～ 1.5m離れている。宮古市木戸井内Ⅳ遺跡１号炭窯跡でも斜面上位の煙道側に周溝が廻っている。

掘立柱建物跡など

炭窯跡の周囲には、炭窯の覆い屋（上屋いわゆる鉢小屋）のほか、木炭を置く倉庫などの建物跡（作業小屋）の存在が想定される。また、周辺には製炭者の住まいの痕跡も想定される。しかし、炭窯跡の周辺に付属する建物跡（柱穴群・竪穴など）が見つかった事例は多くない。確認された主な事例は次のとおりである。軽米町宮沢遺跡 RZ01・02・03炭窯跡：炭窯の上屋跡。八幡平市五庵Ⅲ遺跡ⅠB６炭窯跡：上屋跡。八幡平市曲田Ⅰ遺跡ＦⅣ-081炭焼場跡：作業小屋跡。北上市兵庫館跡炭窯跡：作業小屋跡。奥州市大平野Ⅱ遺跡１号炭窯跡：作業小屋跡。和野ソマナイ遺跡１号炭窯跡：作業小屋跡。作業小屋と推測される小屋跡は、炭窯の前方、点火室側に位置する事例が多く、建物跡と竪穴状の掘り方として確認されており、その長軸は、炭窯の長軸と直交するように設けられている（註27）。

土取り穴

炭窯を造る際の粘土を採取する土取り穴が確認された事例がある。八幡平市曲田Ⅰ遺跡ＦⅣ-081炭焼場跡：１基。同扇畑Ⅱ遺跡ＧⅢ区炭窯跡：２基。西和賀町大渡Ⅱ遺跡ＣⅢｍ６炭窯：３基。同越中畑Ⅴ遺跡１号炭窯跡：１基。同２号炭窯跡：２基。奥州市下尿前Ⅱ遺跡１号炭窯跡：１基。田野畑村大芦赤空洞遺跡１号炭窯跡：１基。土取り穴の形状は不整形で凹凸があり、いくつかの穴の集合体のようにみえる。炭窯とは数ｍ離れている。

⑺ 出土遺物（第３図）

第一に炭化材がある。製炭した木炭は製品として出荷されるので、残された炭化材は、製品となる炭材の滓が残ったものと推測される。窯内から出土した木炭の樹種には、ナラ・アカマツ・クリなどの報告がある。一般的にはナラ炭が多いと思われる。炭窯の構造物としては、煙道などに使用された耐火煉瓦・鉄板・土管などがある。

また、炭焼きを行った際に使用したと思われる道具がある（註28）。多くは消耗品で、作業の終了時には回収され、破損すれば廃棄されるため、現場に残されることは稀である。また、木質部分・金属部分の材質も時間の経過で劣化が進むため、残りにくい性質のものである。しかし、そのようななかでも炭焼き時に使用される特徴的な道具は、把握しておきたい。これまでの事例では、鉤・針金・鋸・鑢（やすり）などが出土している。田野畑村尾肝要Ⅰ遺跡では、木材を掻き出したり、灰を寄せたりするときに使用する「えんぶり」と呼ばれる道具（鉄製部分のみ）が出土している。

６．炭窯跡の調査方法と課題

⑴ 構造の特徴を把握する

遺構としての炭窯跡は、地上部分は失われ、地下部分しか残らないことが多い。周囲にある付属施設を含め、炭焼きの一連の工程を見据えた諸施設の配置を想定して調査することが望ましい（註29）。

⑵ 形態・年代を追求する

炭窯の構造の把握や、聞き取り調査などから可能な限り使用年代を推測し、築窯時の模範となった

炭窯の形態を特定したい。その積み重ねが、遺構としての炭窯の実態の把握につながる。

⑶　製炭方法の変遷

製炭方法の移り変わり

さて、ここまで近・現代の炭窯跡の時期的変遷・地域的な形態を確認してきた。概ね円形から楕円形を基調とし、直線的な壁を持つ炭化室、点火室・煙道などの部位を持つ構造である。このような築窯の構造とそれによる製炭法は、どこまで遡りえるのであろうか。岩手県では、古代の鉄生産との関わりで炭窯跡の調査事例が増加しつつある。比較して、中世・近世の事例は決して多くなく、その実態は詳細が不明な部分が多い。伏せ焼き法の製炭から築窯製炭への変遷が想定されるなかで、近・現代の炭窯跡と差別化される、近世・中世・古代の炭窯の調査成果について概観しておきたい（註30）。

近世の炭窯跡

これまでの調査でも近世の年代観が示されている炭窯跡の事例がいくつかある。住田町子飼沢Ⅰ遺跡で調査された３基の炭窯跡を概観すると、1号炭窯跡は現代、２号・３号炭窯跡は近世の年代観（放射性炭素年代測定値）が提示されている。平面形は楕円形というよりは、奥行きと幅の差がほぼ無い円形もしくは隅丸方形に近い形状である。形態・規模から昔窯であった可能性もあろう。近世（17世紀～ 19世紀）でも、より新しい時期（19世紀代）の可能性があるのかもしれない（註31）。

ほかに近世の事例としては、密鋳銭の鋳銭場跡が確認された軽米町駒板遺跡があり、径１～２ｍの楕円形・長方形や、長さ４～ 10m、幅１ｍほどの溝形の炭窯跡がまとまって確認されている。これらの規模・形態は、古代・中世の調査事例に類似する規模・形態である（註32）。

古代・中世の炭窯跡

古代の炭窯跡は、近年、三陸沿岸部の調査で製鉄遺跡との係わりで事例が増えつつある。宮古市島田Ⅱ遺跡や同八木沢ラントノ沢Ⅱ遺跡、山田町後山Ⅰ遺跡などの代表的な事例を概観すると、円形・楕円形・溝状を含む長楕円形などの形態が見られる。製炭方法は、伏せ焼き法が想定されている（註33）。炭窯跡には、出土遺物が伴わないことが多いため、帰属する年代は、同じ調査で確認された鉄生産関連遺構の年代観や、出土した炭化材による放射性炭素年代測定値で提示されることが多い。

中世の事例として、宮古市山口館跡で調査された炭窯跡（報告書では製炭土坑）３基がある。内訳は、径約140㎝、深さ約60㎝、径約110㎝、深さ約29㎝の円形基調の製炭土坑２基。径約300×82㎝、深さ41.6㎝の溝状の製炭土坑１基（※放射性炭素年代測定値（360±40yrBP）である。出土遺物は無いが、館内部で調査された鍛冶工房跡群と同時期の16世紀と推定されている。形態は、穴を掘り窪めた土坑タイプで、伏せ焼き法による製炭と推測される。上記炭窯跡の規模・形状は、古代の炭窯跡との大きな差異を見いだせない。実態として、古代から中世・近世への炭焼き・炭窯の形態の変化はどのようであったのか。速断は控えるが、今後の調査での事例増加と検討をもって個々の事例の差別化を進めることから、各時代の炭窯跡の実態を射程に置くことができると思われる（註34）。

7．まとめ

本稿では、発掘調査の事例で確認された近・現代に属する炭窯跡を検討した。その特徴をまとめる。

- 立地：山間では湧水しない緩斜面に造られる事例が多く、時期が新しくなると、製品の搬送に便の良い道路の近くの平坦地に降りてくる。いわゆる奥地製炭から庭先製炭へと変化する。
- 構造：炭化室・点火室・煙道。それぞれの部位で使用に伴う痕跡を残す。
- 付属施設：排水・除湿を目的とした周溝や地下構造を伴う。窯を覆った上屋、周囲の作業小屋の痕跡となる掘立柱建物跡や竪穴。窯を造る際の粘土採取を目的とした土取り穴などがある。

・出土遺物：窯の構造物として耐火煉瓦や土管。炭焼きの際に使用した鉤・えんぶり・鋸などの道具がある。

・年代観：20世紀の約100年間で、戦前と戦後を中心に数度の形態的変化を遂げている。

8．おわりに

炭窯を造るうえでの製炭者の個別の工夫の有り方は、個々の事例の検証に拠らざるを得ない。その点で発掘調査の事例によって炭窯跡の記録が残される意味は大きい。記録の蓄積が求められる所以である。はじめて炭窯跡を調査してから15年が経った。その後の事例の増加に比べて検討に費やしたあゆみは牛歩であった。自戒して次の課題に備えたい。集成には遺漏も多いと思われる。ご指摘いただければ幸いである。本稿をまとめるにあたり、次の方々にご指導いただいた。記してお礼申し上げたい（敬称略）。佐々木清文・濱田　宏・星　雅之・久保賢治・小林弘卓。

註

⑴　報告書で使用された遺構名称は、炭窯・炭窯跡・製炭窯跡・炭焼場・製炭遺構・炭焼窯など複数ある。本稿で調査事例を引用する際は、報告書記載の個別の名称を使用し、統一的に用いる場合は、炭窯跡とする。また、歴史的事象として取り扱う場合は、炭窯とする。

⑵　埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲は、原則として、おおむね中世まではすべて。近世は政治・行政関連の遺跡、生産業関連の遺跡を主な対象とし、宗教関連の遺跡、城下町・都市遺跡、交通・運輸関連遺跡は、遺構等の遺存が明確な場合という条件が付され、一般集落については、地域において特徴的な性格を有する場合という条件が付される。近現代の遺跡は地域にとって特に重要な意義を有する遺跡を埋蔵文化財とする定義されている（傍線筆者）。近現代は、対象とする遺構が、地域的な特性を表現する具象としての認識の有無が判断基準となる。本稿との係わりでは、炭焼き・炭窯が、近現代に岩手県で生きた人々の生活を復元するうえで重要な意義を持つと認識できるか、どうかで判断が分かれよう。

関連法令を次に掲げる（『埋蔵文化財保護マニュアル二訂版』平成26年３月　岩手県教育委員会より）。(pp.59)。

「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化について」〔岩手県教育委員会　教文第1341号〕以下、関連する部分の抜粋である。

１　埋蔵文化財包蔵地の把握と周知について

⑴　埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲

ア　埋蔵文化財として扱う範囲に関する原則

㋐　おおむね中世までの遺跡はすべて埋蔵文化財の対象とする。

㋑　近世に属する遺跡については、次に掲げるものについて埋蔵文化財の対象とする。

ａ　城郭・城館等政治・行政関連の遺跡

ｂ　窯跡・製鉄遺跡等生産業関連の遺跡

ｃ　寺社等宗教関連の遺跡については、遺構等の遺存が明確な場合。

ｄ　城下町・都市遺跡については、遺構等の遺存が明確な場合。

ｅ　交通・運輸関連遺跡については、遺構等の遺存が明確な場合。

ｆ　一般集落については、地域において特徴的な性格を有する場合。

ｇ　その他地域において必要なもの。

㋒　近現代の遺跡については、地域にとって特に重要な意義を有する遺跡を埋蔵文化財の対象とする。

イ　埋蔵文化財として扱う範囲の要素

遺跡の時代・種類を主たる要素とし、遺跡の所在する地域の歴史的な特性、文献・絵図・民俗資料その他の資料との補完関係、遺跡の遺存状況、遺跡から得られる情報量等を副次的要素とすること。

次に、近・現代遺構の調査事例を取り上げている、いくつかの文献の記載例をあげる。年代順。

【事例１】『遺跡が語る北海道の歴史』(1994）では「コラム８　炭窯」が立項され、北海道窯を例示し、深川市内蘭２遺跡の炭窯、伊達市谷藤川右岸遺跡の炭窯の２事例を写真掲載している。また次の記載がある。「木炭は窯のなかで材木を蒸し焼きにしてつくられます。北海道では江戸時代から炭焼きがおこなわれていましたが、本格的になるのは大正時代より後といわれています。炭焼き窯は山間部の沢沿いなどに点々と残されており、遺跡の発掘調査を行うと偶然、炭焼き窯跡にゆきあたることがあります。いままでは炭焼き窯のような新しい時代のものは調査もせずに掘り下げてしまうことが多かったのですが、最近になってようやく図や写真などの記録がとられるようになってきました。石油がエネルギーの主役になり、石炭がかえりみられなくなったように、わたしたちの暮らしが移り変るにつれ、いままであたりまえであった技術や道具がどんどん忘れられてゆきます。考古学は縄文時代のような大昔のことだけを調べる学問ではありません。より新しい時代、場合によっては、ついきのうのことも考古学の対象になります。明治時代からあとの新しい時代につくられた工場などを考古学的に調査する研究が最近さかんになりつつあり、「産業考古学」とよばれています。炭焼き窯の調査も産業考古学のひとつ

といえますが、研究はこれからです。」(pp.168)。同書は、財団法人　北海道埋蔵文化財センター 15周年記念誌として編集されたものである。同10周年記念誌『北海道の遺跡』(1989) でも、北海道の歴史年表　近代（開拓時代）で炭窯跡（内薗２）が取り上げられている。なお、同25周年記念誌『遺跡が語る北海道の歴史』(2004) では、当該項目は取り上げられていない。

【事例２】『季刊考古学』(第72号、2000) で「近・現代の考古学」の特集が組まれている。副題は「戦争遺跡・宗教遺跡・産業遺跡の調査例と研究課題」である。このなかで、東北の近・現代の遺跡（遺構・遺物）を概観した大竹は、近代産業と伝統産業に大別し、近・現代伝統産業の遺構・遺物として、⑴陶磁器の生産、⑵木炭の生産、⑶鋳銭座遺構、⑷現代イモ穴遺構、を取り上げている。木炭の生産に係る大竹の指摘は、次のとおりである。「炭窯は、現在でも、その基本構造は変化せず、遺跡調査のおり、発見されることがある。ところで、近代の炭窯は改良研究が盛んに行われ、大竹式をはじめ多くの炭窯が誕生した。秋田県では福島県出身の吉田来秋が大正６年 (1917) に指導した吉田式白（黒）炭窯が普及し、その改良が進んでいる。しかし、近年炭焼をしなくなったため、その技術を継承している人からの聞き取り調査や、実際に炭窯を製作して保存する必要がある。」(pp.43)。

【事例３】「岩手考古学会設立20周年記念　回顧と展望」(『岩手考古』第20号、2009) の「第11章　近世」では、「４　生産遺跡（製炭）」が立項され、次の記載がある。「鉄生産関連遺跡及びその周辺では燃料材生産用の炭窯が検出されることが多い。古代以来の伝統的な形態である「伏焼窯」が多いが（割沢遺跡例など)、近世後期から近現代に属する「築窯」も県北部や沿岸中部で報告されている（軽米町宮沢遺跡〔県埋文358集〕、宮古市木戸井内Ⅳ遺跡〔前掲〕、八木沢Ⅱ遺跡〔県埋文528集〕、金浜Ⅱ遺跡〔県埋文546集〕など)。」(pp.139)。なお、同学会の第21回岩手考古学会10周年記念大会　1998の【研究発表】テーマ「岩手考古学会の現状と課題」の「中・近世」では、当該事項（近・現代の炭窯）に触れられていないことから、1998年から2009年の約10年間で調査事例が増加したことが伺える。

【事例４】『岩手を掘る－いわて発掘30年－』(2008) では、「第九章　近世の岩手」として、民家・墓・鉄山・たたら跡・金採掘坑など生産に係わる遺跡、城館・堰跡・密鋳銭場などが取り上げられている。同書で「近代」は立項されていない。

【事例５】『発掘された日本列島 '95 ～ 2015　新発見考古速報』1995 ～ 2015年（21年間の21冊）における、各時代の遺跡の取上げ方を確認する。時代別に見ると、旧石器時代･縄文時代･弥生時代･古墳時代･古代･中世は、掲載遺跡数の増減はあるが各年取り上げられている。近世は、2105年に該当遺跡がなかった以外は各年取り上げられている。続縄文時代は、1995年に取り上げられた。近代は７度取り上げられている。内訳は、1995年（１遺跡)・1998年（２遺跡)・2009年（１遺跡）は「近世・近代」で立項され、2010年（３遺跡)・2011年（１遺跡)･2012年（１遺跡)･2015年（１遺跡）は「近代」で立項された。該当年次に注目すべき調査成果があった遺跡が取り上げられる訳だが、2010年以降、「近世・近代」から「近代」に立項が変わり、近代の遺跡の取り上げ方が大きくなった様子が読み取れる。

以上の文献での指摘を要約すると次のようになる。① 急速な社会変化に伴い、過去のものになっていくモノの記録化の必要性と近代の遺跡の取り上げ方の変化(【事例１・２・５】)。② 近年の調査事例の増加。特に岩手県では2000年以後の炭窯跡の調査事例の増加(【事例３】)。① の課題に対して、② の調査事例の増加は解決の糸口のように思われるが、実際の記録化の可否は、調査者の判断に拠るところが大きい。緊急調査である行政による発掘調査では、限られた時間の中で、確認されるすべての時代の遺構を同じ精度で調査することも現実的に困難であり、遺跡の特徴を的確に反映した調査が求められる。近年の震災復興関連の調査では、この傾向が特に強い。一方、今回、集成できた69事例は、緊急調査として行われた、いわゆる行政発掘による調査成果であり、さまざまな制約のある調査の中で、調査担当者が炭窯跡の記録の必要性を感じ、記録、報告したものである。

⑶　本稿では、いわゆる築窯による炭窯を検討の対象としている。そのため、伏せ焼き法の痕跡とされる土坑タイプの製炭遺構については、当該期のものでも副次的に扱っている。また、近・現代の時代区分として、所属する時期は、明治（1868 ～ 1911)・大正（1912 ～ 25)・昭和（1926 ～ 1988)・平成（1989 ～現在）である。戦前・戦後で、近代・現代とする。

⑷　鈴木　宏　1995「日本一の馬産と木炭」『図説　岩手県の歴史』河出書房新社、同1999「山の恵みと山訴訟」『岩手県の歴史』山川出版社などの最近の岩手県の通史類を参照。

⑸　畠山　剛　1971『炭焼物語』、同　1980『岩手木炭』、同　2003『炭焼きの二十世紀－書き置きとしての歴史から未来へ－』の三部作。

⑹　註４参照。

⑺　高橋1995。この論考は、秋田県立博物館企画展「炭の民族誌」を契機にまとめられたものである。同論考により秋田県の炭焼きを概観すると、秋田県の炭焼きの特徴として、大正６年、吉田窯の考案者である吉田来秋氏による功績が大きいこと。現在の炭焼き改良窯の系譜を５か所の事例調査からみると、白炭窯は、吉田式白炭窯の系統、黒炭窯は、昭和初期秋田県の製炭技師佐藤克三氏の考案による佐藤式黒炭窯の系統が多いことを指摘している。なお、岩手県で功績の大きかった、楢崎窯を考案した、広島県の楢崎敬三氏が秋田県に招聘されていないことは岩手県との差異といえる。

⑻　川井村教育委員会　1982・2003・2009、川井村歴史民俗資料館　1995、川井村文化財調査委員会　2000・2004の報告書を参照。

⑼　佐々木　1994。論文中の「４　発掘調査された木炭窯跡」「５　木炭の種類」(pp.38 ～ 42) を参照。

⑽　このことを象徴的に示す事例がある。岩手県立博物館の総合展示室において、炭焼きは、民俗部門で展示・紹介されている。歴史部門でも考古部門でもない。炭焼き（の行為）は、これまで民俗学的視点から言及されることが多かった領域である。一方、炭焼きにとって必須のモノである炭窯については、本格的に追求されるに至っていない。なお、同部門の炭焼小屋復元模型（縮尺１／10）は、炭焼き小屋：いわゆる鉢小屋と、その脇に設けられた出し小屋などから構成されている。

⑾　本稿作成に先立ち、岩手県立博物館の平成23年度館内調査研究報告会〔個別報告〕において、「岩手県の近・現代遺構－炭窯跡について－」と題して報告し、中間的なまとめをおこなった。発表の機会を与えられたことに感謝したい。なお、この報告の内容は、従来、民俗学的視点で提示されてきた炭焼き・炭窯の年代観の成果が、考古学的視点で調査事例が増えつつある炭窯跡の報告に十分に反映されていない

ことの反省から、両者の成果を合わせて、炭窯の具象をより明らかにし、歴史的事象として位置付けていく必要がある、という趣旨であった。

⑿　以下、本稿２・３・４の内容は、畠山　2003・川井　2004ほかの文献などに記載された内容から、まとめたものである。

⒀　佐々木　1994。畠山　2003。

⒁　炭窯の部位名称は、点火室を燃焼部・焚口と記載するなど報告書により複数の名称が見られるが、本稿では『岩手窯の栞』に倣う。

⒂　土窯・石窯の違い、黒炭・白炭の違いを分かり易く例示した資料を紹介する。

盛岡方言絵のはがき：挿絵 中井汲泉＜絵はがき一＞畠山　2003より

「石窯　土窯　白い木炭は石窯　黒い木炭は土窯／雪コあ消えないうちに　サッサとさ木炭コくばって　おらも津軽石の
鮭に曲屋のにごりざけコで　正月すんべなっす　　おどう／石窯日がま　土窯は十日　土窯は早い　石窯は長い」（pp.168）。

同絵葉書の畠山氏の意訳は次の通り。「石窯は白炭窯、土窯は黒炭窯／雪があるうちに炭を家に運んで津軽石川でとれた鮭と自家製のにごり酒で正月を祝いましょう／石窯は一日で焼け土窯は十日で焼ける、だけど黒炭は火持ちがわるく白炭は火持ちがよい」（pp.172）。

⒃　都市部の人口増加と木炭の無煙性という特徴から、一般家庭の暖房燃料・炊事用燃料として急激に木炭の需要が増加する、質より量が問われた時代である。そのなかで、貧しい生活を強いられていた生産者の利益を追求する営みも続けられており、木炭生産を生産者個人で行う段階から、組織的に行うことで、生産者の待遇も徐々に改善されてきたという（畠山2003）。

⒄　林業統計要覧・木炭統計資料などによれば、戦後の都道府県別木炭生産量の推移をみると、昭和25（1950）年から平成21（2010）年まで、岩手県は第一位で、全国の約10%を占めている。ただし、生産量を見ると、昭和25年の生産量約15万１千ｔ、平成21年の生産量約４千ｔで、比較すると、約60年間で生産量は約１／30に減少している。

⒅　上の山Ⅶ遺跡の炭窯跡２基（1980年調査）は、『滝谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』（1983刊行）において、同遺跡で調査されたAJ11炭窯跡の参考資料として報告されている。

⒆　水吉Ⅵ遺跡の炭窯跡（第３図）は、調査されたが、報告書に掲載されていない。本稿で紹介するにあたり、調査担当者の濱田　宏氏に事例の紹介をご教示いただいた。諸条件により記録しても報告できない場合でも、別の機会を得て報告していくことが望まれる。註18参照。

⒇　焼山遺跡の事例については、久保賢治氏にご教示いただいた。

(21)　畠山　2003に引用されている、昭和３（1928）年から同６（1931）年頃と推定される「県内各式窯の分布」（pp.112）を見ると、黒炭ガマ13,380枚（90%）、白炭窯1,364枚（10%）、計14,794枚（100%）である。そのうち7,943枚（60%）が小野寺窯である。水沢市で白炭窯300枚（20%）の占める比率が高いこと。内陸北部・沿岸北部で炭窯の枚数が多いことは、調査事例の確認例の傾向ともおおむね一致する。

(22)　この他にも炭窯の造り替えに伴い、規模が拡大する事例がある。【事例１】宮古市八木沢Ⅱ遺跡SW01炭窯跡（2.162㎡）→SW02炭窯跡（4.465㎡）の造り替え（約２倍）。【事例２】軽米町上尾田の館跡１号炭窯跡（4.76㎡）→２号炭窯跡（9.40㎡）の造り替え（約２倍）。炭化室の床面積の比較による。

(23)　この他にも、炭窯の窯底の地下に木炭が敷かれていた事例がある。西和賀町越中畑Ⅴ遺跡１号炭窯跡・同２号炭窯跡。奥州市下尿前Ⅱ遺跡１号炭窯跡。同大平野Ⅱ遺跡１号炭窯跡・住田町子飼沢Ⅰ遺跡１号炭窯跡など。

(24)　市野々遺跡（岩文振第397集）では、調査面積13,800㎡中に11基の炭窯跡が確認された。炭窯跡の報告は、平面形・規模が一覧表に提示されているが、２号炭窯跡を除く10基の炭窯跡の個別図・写真は掲載されておらず、遺構配置図に位置が示されている。11基の炭窯跡の性格や立地については、「この地域で炭焼きが盛んに行われていた近現代のものと思われるが、詳細は不明である。」（pp.193）として、深く追求されていない。遺構配置図で11基の炭窯跡を見ると、隅丸方形を呈する短辺の一方に張り出し状の形状があるように見受けられる。詳細は不明だが、２号炭窯跡の図を参考にすると、煙道の張り出しの可能性があり、その方向は、おおむね北側から西側にあるように読み取れるが、地形との係りは読み取れない。11基の炭窯跡は、２～３基のまとまりがあるようにも見える。炭窯同士の重複は無いようである。なお、図示された２号炭窯跡の床面・壁面が、直線的ではなく、曲線的であることに留意しておきたい。

なお、岩手県教育委員会による当遺跡の試掘調査では、縄文時代早期・晩期の竪穴住居跡や、火山灰と土師器が出土する平安時代の掘立柱建物跡の柱穴群が検出されることが想定されていたが（同報告書「Ⅰ　調査に至る経過」・岩手県教育委員会　2001（pp.39））、本調査では確認されていないようである。

(25)　炭窯跡に限らず、時期の新しい遺構は、埋没しきらない状態で確認されることが多いが、新しいという先入観に捉われず、炭窯跡の下位に存在する遺構の確認にも注意したい。近・現代の炭窯と判断できる事例でも、遺構の上下関係（重複関係）から、炭窯跡に切られているより旧い遺構が、炭窯跡の下位に存在する可能性がある。炭窯跡の下位から旧い時代の遺構が確認された事例をあげる。【事例１】軽米町宮沢遺跡では、RA06住居跡（古代）（旧）→RZ01炭窯跡（新）の重複関係が確認された。RA06住居跡の遺存状況は悪く、カマド周辺の痕跡が確認された程度であったが、炭窯が造られた際に壊されたことが判明した。【事例２】岩手町東の沢遺跡では、ほぼ同一地点で３号住居跡（縄文時代後期）→２号住居跡（縄文時代晩期）→炭窯跡（現代）の重複関係が確認された。炭窯跡のほぼ直下から縄文時代後期の竪穴住居跡・晩期の竪穴住居跡が確認された。より旧い遺構が埋没した窪みを利用して炭窯が造られた事例である。【事例３】久慈市山根館跡の２号炭窯跡は、16世紀代の中世城館の堀跡が埋没し、南向きに開放した窪地を利用して造られていた。

(26)　炭窯の掘り方については次の事例に留意したい。久慈市山根館跡の４号採掘坑は、５号採掘坑を切っていた検出状況。開口部径360×330㎝、底部径330×290㎝、深さ180㎝の規模。壁が直立し、平面形が楕円形で、斜面上位側に張り出しを持つ形状が、同調査区で確認された２基の炭窯跡（１号炭窯跡・２号炭窯跡：現代）の規模・形状と類似することから、炭窯の掘り方であった可能性が指摘されている。炭窯を造るために斜面地を竪穴状に掘り込んだが、何らかの理由で炭窯を造り上げるまでに至らなかったと推測される。

(27)　調査事例のように、炭窯の前面で確認される作業小屋の例は、現代の炭窯の写真を参照のこと。

⑵⑻　炭焼きの際に使用する道具として次のものがある（川井村教育委員会　2003より）。名称（呼び名）は、地域により異なるものもあると思われる。炭焼用具：鎌・しゃぐし・つるはし・唐鍬・えぶり・窯打ち槌・窯打ち手木（窯打用具）。炭材を準備するための用具。炭材を割るための用具。搬出用具：荷込み用具と運搬用具に大別・細分されている。石窯（白炭）の専用用具として、まっか・立てまっか（窯の中で、Ｙ字の又になった部分で押しながら炭材を立てる）・かん出しかぎ。土窯・石窯の共通用具として、大えぶり（窯から掻き出した炭を集めるのに使用する）・こまざらい。荷込み用具として、炭切り鋸・糸鋸・荷込みかぎ、などが紹介されている。

⑵⑼　炭窯に限ったことではないが、構造を把握することは効率的な調査に有益である。記録すべき情報の取捨選択の判断を助ける。

⑶⑽　製炭は目的により樹種も施設も異なる。このような状況のなかで、いわゆる築窯を含むすべての炭窯跡・製炭遺構を比較することに無理があるのは承知しているが、ここでは、広義の製炭遺構について各時代の様相を概観するために試みる。

⑶⑴　子飼沢Ⅰ遺跡の１号炭窯跡は、マウンド上の高まりの中央がやや窪む状況で検出された。埋土から金属製の雨傘の骨が数本出土し、底面の下位に除湿を目的にした炭化材層が確認されている。また、炭窯跡の２ｍ南東側から見つかった付属施設と考えられる方形基調の浅い土坑は締まりのない柔らかい埋土で、未炭化のクルミの実が出土している。これらの状況と２点実施した放射性炭素年代測定の結果から現代と報告された年代観により、本稿では近・現代の炭窯跡の事例として取り上げた。２・３号炭窯跡は、１号炭窯跡と同時期もしくはやや旧くなる可能性がある。なお、１号炭窯跡については、規模・形状と３個の煙道を持つ構造から、大股種山の鉄山に関連する江戸時代の大炭窯であった可能性も指摘されている（佐々木　2012）。

⑶⑵　軽米町駒板遺跡（岩文振第98集）では、調査した炭窯跡について次の記載がある。「駒板遺跡で検出された炭窯跡は、平面形が長楕円形・円形・溝状を基調とするピットであることに特徴がある。これを炭窯跡として他のピットと区別した理由は、埋土に多量の炭化材を含むこと、底部に現地性焼土が存在することである。また当地方では明治時代末年まで、上部構造を持たない炭窯で木炭生産が行われていたとの伝承がある。」(pp.126)。本遺跡で調査された炭窯跡28基は鋳銭場と係わる近世の年代観が与えられている。まとめの項「３　炭窯跡について」に次の記載がある。「これらの炭窯跡は、現在も利用されている炭窯と異り、上部構造を持たないものと考えられる。筆者らはかって田老町小堀内遺跡でビール瓶を共伴する炭窯跡を調査したが、この炭窯は粘性の強いロームを方形のブロックとし、これで底部・壁を構築する物であった。当遺跡で検出された炭窯は、こうした底部・壁および上部構造の痕跡は確認できなかった。岩手県北部で上部構造をもつ炭窯が導入されたのは明治末年であり、軽米地方に楢崎窯が入ったのは明治45年頃といわれている。それ以前の在来窯は、奥行き５尺の円形で、地面に穴を掘って燻しつけたにすぎなかったと伝えられている。この炭窯で焼く木炭の多くは、炭化不十分で赤炭と称したといわれる（註１）。以上のことから、当遺跡で検出された炭窯跡は明治時代以前のものと考えられるが、どこまで遡れるかについては不明である。なお、南斜面の下位で鋳銭場が検出されたが、そこで出土した坩堝の量から、鋳銭場では相当量の木炭を消費したはずである。これら木炭が鋳銭場と関係があったことは十分に考えられよう（註２）。註１「軽米町史」軽米町誌編纂委員会　昭和50年１月１日　岩手木炭協会早坂松次郎氏によれば、伏せ焼きと称し、在来の製法であって、不良炭が多く生産されることから、明治以降築造されることが少なくなったという。註２　同上早坂松次郎氏によれば、伏せ焼きによる木炭は火力があまり強くなく、フイゴによる火力調整がしやすいことから、改良窯普及後も鍛冶炭として生産されることがあった。ただし、その際はクリの木が良いとされたという。」(pp.159)

記載の内容は、明治末まで上部構造を持たない（築窯でない）土坑タイプの施設で炭焼きが行われていた。また、改良窯普及後も、鍛冶炭にはクリ材を用いるなど、木炭の用途に応じて土坑タイプの炭窯でも製炭されていた、との証言の記録である。留意したい。文中の「奥行５尺の円形」の炭窯とは、昔窯のことかと推測される。

製炭施設は、古代に端を発する遺構であり、用途の違いとともに造り方も異なる遺構である。さしあたり、長期的に継続する遺構を識別し、同一地点が長期間使用される遺跡を調査する視点として、時代・対象とも異なるが、参考に次の指摘を掲げておく（羽柴1996より）。「12世紀の平泉文化の研究は非常に重要であることはもちろんである。だがそれ以外の時代にも平泉では人が生活を営んでいたのである。12世紀の研究を中心に考えるとしても、12世紀以外の遺構、遺物を正確に把握し、それを除外することができなければ、正確な12世紀の様相を復元できないはずである⑵。」(pp.25)。「(註) ⑵平泉遺跡群では、12世紀の遺構確認面も近世の遺構確認面も同一面の場合が多い。同一面から検出した遺構の中から、12世紀の遺構を抽出するには正確に他の時期の遺構を把握する必要があるはずである。」(pp.55)。視点は、新しいものを的確に判別しながら、より古いものを特定していく方法である。また、同様の視点で、現代の建物址の調査の積み重ねが近世・中世の建物址を追及することを可能にするとの指摘もある（元御所遺跡（岩埋文第28集）pp.176)。炭窯跡についても、まずは近・現代の炭窯跡を明確に識別することが、近世以前の炭窯跡を抽出することに繋がっていくと思われる。

⑶⑶　「岩手考古学会設立20周年記念　回顧と展望」(『岩手考古』第20号、2009）では、「第８章　古代」の「３　生産遺跡」を立項し、木炭の生産遺構について触れている。「製鉄・鍛冶工程に必要不可欠である木炭生産については、炉跡などの周辺に構築されることが多く調査事例も沿岸部に集中している。宮古市では、トロノ木Ⅰ遺跡、萩沢Ⅱ遺跡、木戸井内Ⅲ遺跡、島田Ⅱ遺跡、山田町では前述の上村遺跡、山ノ内Ⅲ遺跡などで調査され、その形態は長楕円形や隅丸長方形を呈する煙道を持たずに掘り込まれた土坑状のものが多く、伏せ焼き法による製炭と推定されている。このような炭窯は、内陸部の北上市岩崎台地遺跡群、滝沢村室小路15遺跡などからも検出されている。なお、奥州市龍ヶ馬場遺跡、北上市南部工業団地遺跡からは平安時代とされる半地下式の炭窯が見つかっており、炭窯の構造や変遷を考える上で注目される。」(pp.94)。次に古代の炭窯跡について、いくつかの調査事例をあげる。【事例１】宮古市島田Ⅱ遺跡（岩文振第368集）では、調査した38基の炭窯について、平面形・規模（短軸に対する長軸の長さ）などの特徴から検討を行い、長楕円形（軸長比４以上・４～３）・楕円形（軸長比３～２・２未満）・楕円形・円形に分類している。同定された樹種はクリ材である。【事例２】山田町後山Ⅰ遺跡では、調査した15基の炭窯について、円形・長楕円形・隅丸長方形の３つに分類している。【事例３】宮古市八木沢ラントノ沢Ⅱ遺跡（岩文振第551集）では、調査した12基の炭窯を、円形・隅丸方形・長楕円形（軸長比１：４以上）に分類している。これまでの調査で、当該

時期の土坑タイプの製炭遺構：炭窯跡の平面形・規模の傾向は把握できるようになってきた。今後は、これまでの調査成果を踏まえつつ、新たな調査や整理の方法が求められる。また、諸事例から、沿岸部の古代製鉄関連の遺跡ではクリ炭を中心とした製炭が行われていた可能性が指摘されている（山田町教育員会　2002、「Ⅳ　分析・鑑定　後山Ⅰ遺跡出土炭化材の樹種」高橋利彦（木工舎「ゆい」）（pp.123 ～ 125））。鍛冶炭・炯屋炭など鉄生産の工程で使う炭はクリ・マツなどを使用するという指摘もある（註32）。留意したい。

なお、古代の炭窯跡について、より適正な名称として、「製炭土坑」の呼称が提唱されている。例えば、島田Ⅱ遺跡（岩文振第450集）の「５．島田Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種」高橋利彦（木工舎「ゆい」）（pp.342 ～ 344）に次の記載がある。「註報）（高橋2001）では、炭窯とされるSW27を「伏せ焼き土坑」と表記した。広義の「伏せ焼き法」あるいは「伏焼法」は、窯を築かずに行う各種の製炭法を指す。これに対し、狭義の「伏焼法」は平場に木材を横積みあるいは円錐状に立て、その上に枝条や土で覆って焼く方法＝「堆積製炭法」をいい、掘った穴の中で焚き火をし、その上に原木を積み重ね枝条や土で密閉して焼き上げる「坑内製炭法」とは区別されている（樋口1993, 岸本・杉浦1980）。そのため本稿では「製炭土坑」の表記を用いることとした。」。本稿では、いわゆる築窯による製炭遺構を主な対象とする。そのため、土坑タイプの製炭遺構の呼称の是非には立ち入らない。また、三浦　1948では、無蓋製炭法・坑内製炭法・堆積製炭法・築窯製炭法が記されている。

⑶4　近・現代の炭窯跡について、次の遺跡の事例から考えられることについても留意したい。田野畑村野場Ⅰ遺跡（岩文振第635集）では、近・現代の年代観が与えられている土坑（炭窯）３基（土坑２・土坑３・土坑18）・時期不明の土坑（炭窯）１基（土坑49）が報告されている。土坑２は、開口部径154×102㎝の長方形、深さ26㎝。土坑３は開口部径172×120㎝の楕円形、深さ15㎝。土坑18は開口部径385×170㎝の長方形、深さ42㎝。いずれも壁面・底面に焼成の弱い焼土が部分的に確認されている。時期は、出土遺物は無いが、形態から近現代の構築の可能性が高い、と記載されている。土坑49は、開口部径168×152㎝の円形、深さ18㎝。底面に焼成の弱い焼土が点在する。時期は、詳細不明とされている。これらの遺構は、本稿で検討対象としたいわゆる築窯ではなく、伏せ焼き法を想定させる土坑タイプの炭窯である。土坑２・３・18は、2012年に調査された遺構である。同遺跡では、2013年の調査で、平安時代10世紀の住居跡や焼土遺構が確認されている。また、「焼土遺構７～ 11は鍛冶作業の痕跡を残す平安時代住居跡が分布する区域から検出された。層位的見地からも該期の生成とみられる鍛冶炉又はその操業に付随する焼土の可能性がある。」（pp.227）と、鍛冶炉の存在が報告されている。他遺跡でも類似する規模・形状・特徴を有する古代の炭窯跡の事例が報告されており（註33）、同遺跡の４基の土坑（炭窯）の時期は、平安時代の炭窯跡であった可能性も考えておきたい。同時に近代以降においても、築窯ではなく、より簡易ないわゆる伏せ焼き法で製炭が行われたとの記録もあり（註32）、同様の遺構の年代特定には注意を要する。同遺跡の事例については、小林弘卓氏に調査時の所見を御教示いただいた。

参考文献

秋田県立博物館　1995 『企画展「炭の民族誌」解説資料』
阿部勝則　2007 「特集　宮古市八木沢Ⅱ遺跡　山間で営まれた人々の生活を探る」『わらびて』115号、岩手県立埋蔵文化財センター所報
大竹憲治　2000 「東北」『季刊　考古学』第72号、「特集　近・現代の考古学」、雄山閣出版株式会社
岩手県教育委員会　2001 『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成12年度）』岩手県文化財調査報告書第112集
岩手県教育委員会　2006 『岩手の製鉄遺跡－岩手県内重要遺跡詳細分布調査報告書－』岩手県文化財調査報告書第122集
岩手県教育委員会　2014 『埋蔵文化財保護マニュアル二訂版』
岩手県木炭協会　1991 『岩手窯の栞』
社団法人岩手県木炭協会　1971 『協会二十年のあゆみ　付　岩手木炭概史』
社団法人岩手県木炭協会　1992 『木炭協会40年のあゆみ』
社団法人岩手県木炭協会　2003 『木炭協会50年のあゆみ』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008『岩手を掘る－いわて発掘30年－』
岩手県立博物館　1990 『北の鉄文化』「北上山地と木炭」（pp.104）
川井村北上山地民俗資料館　1995 『ガイドと資料目録』
川井村教育委員会　1982 『川井村の民俗資料（川内地区）』文化財調査報告５集
川井村教育委員会　2003 『平成14年度国指定重要有形民俗文化財 北上山地川井村の山村生産用具コレクション』第一分冊
川井村教育委員会　2009 『川井村の民俗資料（川井地区）』文化財調査報告８集
川井村文化財調査委員会　2000 『川井村民俗誌　民具編－図説・民具とその周辺－』
川井村文化財調査委員会　2004 『川井村北上山地民俗誌　上巻』
佐々木清文　1990 「岩手の製鉄遺跡⑴」『岩手県立博物館研究報告』第８号、岩手県立博物館
佐々木清文　1994 「岩手の製鉄遺跡⑵」『紀要』ⅩⅣ、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
佐々木清文　2012 「子飼沢製鉄遺跡の概要」いわてたたら研究会発表資料（3.12）
鈴木　宏　1995 「日本一の馬産と木炭」『図説　岩手県の歴史』河出書房新社
鈴木　宏　1999 「山の恵みと山訴訟」『岩手県の歴史』山川出版社
高橋　正　1995 「秋田の炭焼き」『秋田県立博物館研究報告』第20号、秋田県立博物館
三浦伊八郎　1948『木炭講話』日本農林全書；第１号、日本農林社
羽柴直人　1996 「近世の「柳之御所」について」『紀要』ⅩⅥ、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

畠山　剛　1971 『物語歴史文庫８　炭焼物語』雄山閣出版株式会社
畠山　剛　1980 『岩手木炭』日本経済評論社
畠山　剛　2003 『炭焼きの二十世紀－書置きとしての歴史から未来へ－』彩流社
文化庁編　1995 ～ 2015『発掘された日本列島 '95 ～ 2015　新発見考古速報』（21冊）朝日新聞社、※2015は共同通信社
財団法人 北海道埋蔵文化財センター　1989 『北海道の遺跡』財団法人 北海道埋蔵文化財センター 10周年記念誌
財団法人 北海道埋蔵文化財センター　1994 『遺跡が語る北海道の歴史』財団法人 北海道埋蔵文化財センター 15周年記念誌
村田　淳　2009 「近世」「岩手考古学会設立20周年記念　岩手考古学・回顧と展望」『岩手考古学』第20号

炭窯跡の調査事例が記載された報告書一覧。左端のNo.は、第２表の遺跡No.に対応する。

1　1982 『曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第87集
2　1980 『扇畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第39集
3・4・60　1983 『小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第52集
5　1988 『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第122集
6・7　1988 『大久保遺跡・西久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第121集
8　1986 『広沖遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第111集
9 ～ 11　1986 『五庵Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第112集
12・13　1999 『上尾田の館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第300集
14 ～ 16　2001 『宮沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第358集
18　1983 『滝谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第49集
19　岩手町教育委員会　1996 『東の沢遺跡発掘調査報告書』岩手町埋蔵文化財調査報告書第６集
20　1982 『元御所遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第28集
21　1995 『大渡Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第215集
22 ～ 25　1994 『越中畑Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第201集
26・27　東和町教育委員会　1994 『田瀬柏森館遺跡発掘調査報告書』
28　1991 『兵庫館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第180集
29　1992 『上反町遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第181集
30・31　北上市教育委員会　1995 『南部工業団地遺跡発掘調査報告書』北上市埋蔵文化財報告書第18集
32　1997 『下尿前Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第252集
33　1996 『下尿前Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第269集
34 ～ 44　2002 『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成13年度）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第397集
45 ～ 47　2011 『大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第576集
48　1996 『花立Ⅰ遺跡第13次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第285集
49　一関市教育委員会　1985 『大平遺跡発掘調査報告書』
50 ～ 52　2011 『子飼沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第583集
53　1988 『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集
54　1989 『源道遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第138集
55・56　2002 『山根館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第390集
57　田野畑村教育委員会　2000 『大芦赤空洞遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第５集
58　2000 『和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第466集
59　2012 『尾肝要Ⅰ遺跡・姫松Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第592集
61　2008 『八木沢野来遺跡第１次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第511集
62・63　2008 『八木沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第528集
64・65　宮古市教育委員会　2006 『木戸井内Ⅳ遺跡発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書68
66　2009 『木戸井内Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第529集
67・68　2010 『金浜Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第553集
69　2016 『焼山遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第651集
1986 『駒板遺跡発掘調査報告書（第一分冊　古代～中世編）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集
2001 『島田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第368集
2002 『細浦Ⅵ・後山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』山田町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第９集
2004 『島田Ⅱ遺跡第２～４次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集
2006 『山口館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第485集
2010 『八木沢Ⅱ遺跡第２次・八木沢ラントノ沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第551集
2015 『野場Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第635集

第１表　岩手県の木炭生産に関連する年表

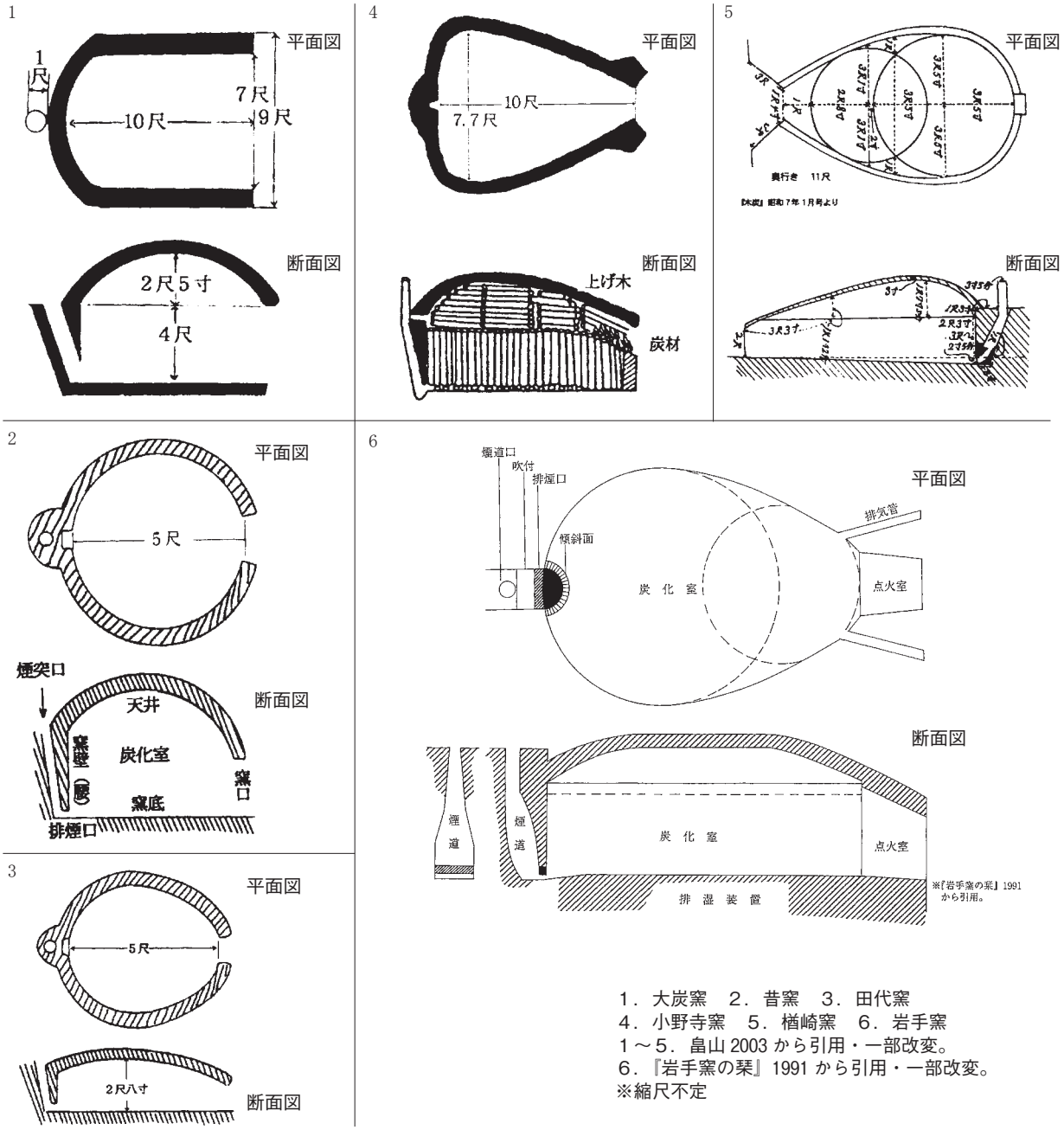
年代			木炭生産に関連する主な出来事		主な炭窯の形態変遷	木炭生産量（千t）
時代区分	和暦	西暦	日本	岩手		
	明治23	1890		東北本線上野ー盛岡間開通	**昔窯**	
	明治27	1894	日清戦争始まる（～1985）			
	明治31	1898		小原善次郎が岩手の木炭（白炭）を東京に移出する	（田代窯・箱石窯）	
	明治34	1901				19
	明治37	1904	日露戦争始まる（～1905）			
	明治39	1906		楢崎敬三が来県し、楢崎式製炭法（改良製炭法）を講習する	**楢崎窯**（1906）	
	明治40	1907				40
	大正 2	1913				92
	大正 3	1914	第1次世界大戦始まる（～1918）			
	大正 4	1915		岩手県の木炭生産量が全国第1位となる	（大竹窯）	
				「東山式製炭要解」発行	**東山窯**（1915）	
	大正 8	1919		宮古木炭同業者組合結成		
	大正10	1921		「岩手県木炭検査規則」制定、県営木炭検査を全国に先がけて実	（万代窯）	125
近　代				小野寺清七が楢崎式と東山式を折衷した小野寺窯を開発する。岩手県で「奨励窯」を指導・奨励し、普及する	**小野寺窯**（1921）	
	大正12	1923	関東大震災		（今助窯・戸崎窯）	
	昭和 2	1927		岩手県木炭移出共同組合設立		
	昭和 3	1928	「木炭日本標準規格」告示。尺貫法からメートル法に移行			128
	昭和 8	1933		県立六原農場に製炭部開設・主任浅沼久	**岩手窯**（1933）	
	昭和 9	1934		山田線盛岡ー宮古間開通。これ以後、宮古地方の木炭移出が海路から陸路になる		
	昭和10	1935		「岩手県林産物検査規則」制定、六原農場製炭部廃止		
	昭和11	1936				147
	昭和12	1937	日中戦争始まる	岩手県の木炭生産量が全国第1位となる		
	昭和14	1939	第2次世界大戦始まる(～1945)			
	昭和15	1940	木炭の生産量が史上最高となる			186
	昭和16	1941	太平洋戦争始まる（～1945）			
	昭和18	1943	木炭の政府買い上げ。木炭統制が始まる			
	昭和20	1945	第2次世界大戦・太平洋戦争終わる	佐々木圭助が六原農場で炭窯研究を行う		
			木炭統制が撤廃され、自由取引になる	佐々木圭助が岩手1号窯を考案。岩手木炭同業協会が設立される		
	昭和25	1950	朝鮮戦争（～1953）。国土総合開発法施行 北上特定地域総合計画が策定される		**岩手1号窯**(1950)	151
	昭和27	1952		社団法人岩手県木炭協会に改名。佐々木圭助が「黒炭岩手1号窯製炭法」を刊行する		
	昭和28	1953	全国木炭協会設立	県木炭協会で指導ｶﾞﾏ創出の研究に着手する		
			木炭の生産量が戦後最大となる			
現　代	昭和31	1956		岩手ガマ(協会指導ガマ)完成、「岩手窯の栞」発行	**岩手窯**(1956)	
	昭和35	1960	木材の輸入自由化	木炭検査条例が施行される	（大量窯）	134
	昭和37	1962	木炭の生産量の減少が顕著になる			
			「全国総合開発計画」が策定される			
	昭和44	1969	「新全国総合開発計画（新全総）」閣議決定			
	昭和45	1970				20
	昭和49	1974		県営木炭検査を廃止し、木炭検査は自主検査となる		
	昭和50	1975				5

第２表　岩手県における近・現代の炭窯跡の発掘調査事例

No.	所在地（市町村）	遺跡名	遺構名	立地	開口部径（cm）	底径（cm）	深さ（cm）	平面形	床面積（㎡）	煙道	付属施設
1	八幡平市	曲田Ⅰ	FⅣ-081炭焼場跡	斜面	450×250	−	40	卵形	−	○1個	小屋跡
2	八幡平市	扇畑Ⅱ	GⅢ区炭窯	斜面	−	−	−	楕円形	−	−	−
3	八幡平市	上の山Ⅶ	炭窯跡	−	−	−	−	−	−	−	−
4	八幡平市	上の山Ⅶ	炭窯跡	−	−	−	−	−	−	−	−
5	二戸市	馬立Ⅱ	DⅡc7炭窯	斜面	400×270	−	70	無花果形	−	○1個	−
6	二戸市	大久保	製炭窯跡	斜面	340×170	300×142	−	羽子板状	−	−	窯底に溝、横穴2・前庭部
7	二戸市	西久保	BⅣ101炭窯跡	斜面	(3.66)×1.68	−	−	不明	−	−	窯底に溝
8	二戸市	広沖	炭窯	斜面	210×140	−	40	楕円形	−	○1個	前庭部
9	二戸市	五庵Ⅲ	ⅠB6炭窯跡	斜面	320×200	−	82	無花果形	−	○1個	焚口脇に土坑、上屋の柱穴
10	二戸市	五庵Ⅲ	IG4炭窯跡	斜面	(400)×164	−	20	長方形	−	−	−
11	二戸市	五庵Ⅲ	ⅠH12炭窯跡	斜面	370×150	−	88	無花果形	−	○1個	焚口脇に土坑、上屋の柱穴
12	軽米町	上尾田の館跡	1号炭窯跡	斜面	380×250	−	100	無花果の実	4.76	○1個	−
13	軽米町	上尾田の館跡	2号炭窯跡	斜面	560×340	−	70	洋梨の実	9.40	○1個	−
14	軽米町	宮沢	RZ01炭窯跡	斜面	540×540	490×430	120	円形	16.68	○1個	周溝、上屋に伴う柱穴
15	軽米町	宮沢	RA02炭窯跡	斜面	450×360	440×340	110	卵形	11.68	○1個	周溝、窯底に材を敷く・上屋に伴う柱穴
16	軽米町	宮沢	RZ03炭窯跡	斜面	310×210	300×240	50	卵形	5.8	○1個	−
17	軽米町	水吉Ⅵ遺跡	ⅠF1f炭窯跡	斜面	360×365	297×318	45	円形	−	○1個	なし
18	九戸村	滝谷Ⅲ	AJ11炭焼窯	斜面	390×350	−	−	箆形	-	○1個	−
19	岩手町	東の沢	炭窯跡	斜面？	330×220	−	52	−	−	−	−
20	雫石町	元御所	炭窯址	斜面	270×170	−	−	−	−	−	窯底に石を敷き詰める
21	西和賀町	大渡Ⅱ	CⅢm6炭窯	急斜面	270×270	215×215	70	方形	−	○1個	−
22	西和賀町	越中畑Ⅴ	1号炭窯跡	斜面	440×410	−	−	−	−	−	窯底に木材を敷く
23	西和賀町	越中畑Ⅴ	2号炭窯跡	斜面	460×370	−	−	−	−	−	窯底に木材を敷く
24	西和賀町	越中畑Ⅴ	3号炭窯跡	斜面	410×340	−	−	−	−	−	−
25	西和賀町	越中畑Ⅴ	4号炭窯跡	平場	−	−	−	−	−	−	−
26	花巻市	田瀬柏森館	1号炭窯跡	斜面	200×140	130×80	44	堕円形	−	−	東側に灰原あり
27	花巻市	田瀬柏森館	2号炭窯跡	斜面	350×310	250×310	90	-	−	−	溝、南側に灰原
28	北上市	兵庫館跡	炭窯跡	平場	430×370	−	47	卵形	−	○1個	−
29	北上市	上反町	3号炭窯	平場	430×412	202×195	115	円形	−	○1個	−
30	北上市	南部工業団地	K301製炭遺構	丘陵頂部	320×200	240×180	70	無花果形	−	○1個	溝
31	北上市	南部工業団地	K303製炭遺構	裾部	370×250	270×210	70	無花果形	−	○1個	−
32	奥州市	下尿前Ⅱ	1号炭窯跡	緩斜面	450×320	−	60	卵形	−	−	作業部屋400×200、底面に材を敷く
33	奥州市	下尿前Ⅳ	1号炭窯跡	緩斜面	330×200	−	117	瓢箪形	−	−	前庭部
34	奥州市	市野々	1号炭焼窯	−	296×217	−	(12.1)	隅丸方形	−	−	−
35	奥州市	市野々	2号炭焼窯	−	370×276	247×340	35	隅丸方形	−	−	−
36	奥州市	市野々	3号炭焼窯	−	446×271	430×255	25	隅丸方形	−	−	−
37	奥州市	市野々	4号炭焼窯	−	404×300	356×236	26	隅丸方形	−	−	−
38	奥州市	市野々	5号炭焼窯	−	373×268	334×243	35	隅丸方形	−	−	−
39	奥州市	市野々	6号炭焼窯	−	436×307	383×240	33	隅丸方形	−	−	−
40	奥州市	市野々	7号炭焼窯	−	259×207	232×188	23	隅丸方形	−	−	−
41	奥州市	市野々	8号炭焼窯	−	512×290	487×254	39	隅丸方形	−	−	−
42	奥州市	市野々	9号炭焼窯	−	(282)×(210)	(265)×(199)	20	隅丸方形	−	−	−
43	奥州市	市野々	10号炭焼窯	−	350×303	−	(18.3)	隅丸方形	−	−	−
44	奥州市	市野々	11号炭焼窯	−	480×282	−	(3.3)	隅丸方形	−	−	−
45	奥州市	大平野Ⅱ	1号炭窯跡	−	390×316	312×260	34	団扇形	−	窪み	底面に材
46	奥州市	大平野Ⅱ	2号炭窯跡	−	417×323	335×300	26	団扇形	−	窪み	石組・焚口が張り出す
47	奥州市	大平野Ⅱ	3号炭窯跡	−	不明	不明	不明	不明	−	−	−
48	平泉町	花立Ⅰ第13次	炭窯跡	緩斜面	530×300	−	64	卵形	−	○1個	−
49	一関市	大平	炭窯(A地区)	平坦面	270×190	−	−	卵形	−	○1個	−
50	住田町	子飼沢Ⅰ	1号炭窯跡	斜面	540×364	−	128	不整な楕円形	−	○3個	窯の底面に炭化材層有り、奥の煙道にタール状付着物
51	住田町	子飼沢Ⅰ	2号炭窯跡	斜面	396×430	−	52	楕円形	−	○1個	窯の底面に炭化物層有り、1号炭窯跡より土壌化
52	住田町	子飼沢Ⅰ	3号炭窯跡	斜面	422×472	−	60	楕円形	−	○2個	窯の底面に炭化物層有り
53	久慈市	平沢Ⅰ	GⅡ-151炭窯	斜面	−	−	−	−	−	−	−
54	久慈市	源道	F36炭窯跡	斜面	518×442	450×350	70	卵形	11.1	○1個	なし
55	久慈市	山根館跡	1号炭窯跡	斜面	350×300	320×280	70	卵形	8.27	○1個	なし
56	久慈市	山根館跡	2号炭窯跡	斜面	340×320	300×320	60	卵形	8.24	○1個	なし
57	田野畑村	大芦赤空洞	1号炭窯跡	谷部	−	−	−	逆三角形	−	○2個	窯口の両脇に土坑2基
58	田野畑村	和野ソマナイ	1号炭窯跡	谷部	350×240	330×225	60	卵形	5.54	○1個	なし
59	田野畑村	尾肝要Ⅰ遺跡	1号炭窯	斜面	340×240	310×180	65	逆三角形	6.308	○1個	−
60	宮古市	小堀内Ⅰ	B5q14炭窯跡	斜面	400×320	−	70	馬蹄形	−	○1個	前庭部
61	宮古市	八木沢野来1次	1号炭窯	斜面	245×223	−	99	楕円形	2.8	○1個	−
62	宮古市	八木沢Ⅱ	SW01炭窯跡	斜面	309×228	285×201	74.5	卵形	4.465	○1個	なし
63	宮古市	八木沢Ⅱ	SW02炭窯跡	斜面	197×168	194×147	103.5	卵形	2.162	○1個	なし
64	宮古市	木戸井内Ⅳ	33号炭窯跡	斜面	450×230	−	−	卵形	−	○1個	−
65	宮古市	木戸井内Ⅳ	34号炭窯跡	斜面	400×250	−	−	卵形	−	○1個	−
66	宮古市	木戸井内Ⅳ	1号炭窯	斜面	354×272	−	−	倒卵形	−	○1個	溝
67	宮古市	金浜Ⅰ	1号炭窯	斜面	483×440	−	97	楕円形	−	−	−
68	宮古市	金浜Ⅱ	2号炭窯	斜面	202×213	−	50	堕円形	−	○1個	−
69	山田町	焼山遺跡	17号炭窯	斜面	242×100	−	60	隅丸方形？	−	○1個	−

（数値）：残存値

関連施設	出土遺物	出土材の同定	性格	時期	窯形の同定	備考
土取穴1	鉄製釣金具・針金	ー	ー	昭和8年	楢崎窯	3度の補修痕
粘土採掘坑	ー	ナラ	黒炭	1949年頃	ー	試掘溝、40・50俵
ー	ー	ー	ー	昭和30年前後	ー	第49集・参考資料
ー	ー	ー	ー	昭和30年前後	ー	第49集・参考資料
ー	ー	ー	ー	昭和30年代	ー	ー
なし	なし	コナラ	黒炭	現代（昭和30年以前）	ー	ー
なし	なし	ナラ	黒炭	現代（昭和30年以前）	ー	調査区域外
ー	土管・鋲	ー	ー	昭和初期	ー	ー俵15kgで4・5俵
ー	ー	ー	ー	昭和？	ー	ー
ー	ー	ー	ー	昭和？	ー	ー
ー	ー	ー	ー	昭和？	ー	ー
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	1号炭窯跡→2号炭窯跡
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	1号炭窯跡→2号炭窯跡
ー	鉄板1	ー	黒炭	現代（1975年以降）	岩手窯	RZ02炭窯跡→RZ01炭窯跡、1.5kgで40俵
ー	ー	イタヤカエデ	黒炭	現代（1975年以降）	岩手窯	RZ02炭窯跡→RZ01炭窯跡
ー	ー	ー	黒炭	現代（1965年以前）	岩手窯	窯底を上げる
ー	ー	ー	黒炭	昭和の中頃？	ー	1表15kgで20俵
ー	土管	ナラ	ー	昭和30年代	ー	ー
東側に表土上面に石組み。南側に炭の広がり。	ー	ー	黒炭	昭和30年代	ー	縄文時代後期・晩期の2・3号竪穴住居跡（旧）→炭窯跡（新）。
ー	ー	ー	ー	ー	ー	重機による地ならし焼土塊散乱
溝、土取穴3	ー	ー	ー	昭和初期	ー	ー
溝・土取穴1	なし	木材クリ	ー	昭和初期	ー	ー
土取穴2	なし	木材クリ	ー	昭和初期	ー	ー
ー	なし	ー	ー	昭和初期	ー	ー
ー	なし	ー	ー	昭和初期	ー	調査区域外
ー	ー	ー	石窯	昭和20～30年	ー	土盛400×400cm
ー	ー	ー	土窯	昭和20～30年	ー	土盛410×520cm
溝、作業場350×450	ー	ー	ー	大正～昭和初期	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
ー	なし	ー	ー	近・現代	ー	ー
ー	針金	ー	ー	近・現代	ー	ー
土取穴1	ー	ー	黒炭	近・現代	ー	ー
ー	鋸・鑢	ー	白炭	昭和時代	ー	窯体910×730cm
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	図・写真掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
ー	ー	ー	ー	近・現代	ー	配置図・表のみ掲載
作業施設・溝	ー	ー	黒炭	近・現代	楢崎窯	ー
ー	ー	ー	白炭	近・現代？	石窯	ー
ー	ー	ー	ー	近・現代？	ー	調査区外
ー	煉瓦	ー	ー	近・現代	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
焚口下位に土坑1・未炭化のクルミの実出土	金属製の雨傘の骨	ナラ	ー	現代	ー	放射性炭素年代測定値：moderrn(2点)、地元の方のご教示、昭和の炭窯
ー	ー	アカマツ	ー	近世？	ー	放射性炭素年代測定値：150±30yrBP
ー	ー	アカマツ	ー	近世？	ー	放射性炭素年代測定値：220±30yrBP　2号窯と類似する
ー	ー	ー	ー	現代	ー	図と写真のみ。個別記載省略
ー	ー	ー	ー	昭和10年代	ー	ー
なし	なし	なし	黒炭	昭和20～30年代	ー	ー
なし	土壁	なし	黒炭	昭和20～30年代	ー	ー
1号竪穴状遺構：炭窯構築材の採取穴1	なし	ー	ー	大正期以前か	ー	ー
掘立柱建物跡・小屋跡	なし	なし	黒炭	近代（昭和16年以前）	小野寺窯	ー
ー	えんぶり・鋸・筒型土製品	ー	ー	近代	楢崎窯	ー
ー	ー	ー	ー	終戦直後まで	ー	ー
ー	なし	ー	木炭	近・現代	ー	ー
なし	レンガ・土管	ケヤキ・ナラ	黒炭	現代・1950年代	岩手窯	SW02炭窯跡→SW01炭窯跡
なし	なし	アカマツ	黒炭	現代・1950年代	岩手窯	SW02炭窯跡→SW01炭窯跡
ー	ー	ー	ー	近世～近現代	ー	ー
ー	ー	ー	ー	近世～近現代	ー	ー
なし	なし	ー	ー	近世～近現代	ー	ー
ー	ー	ー	ー	近代	ー	ー
ー	煉瓦	ー	ー	大正時代以降	ー	第1～3次使用面
東側に用途不明の土坑	耐火煉瓦	ー	ー	近代	ー	ー



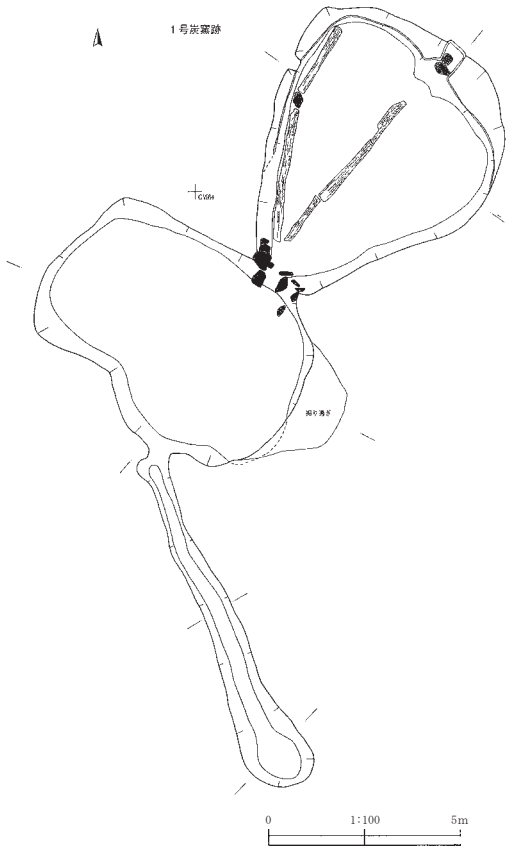
1．大炭窯　2．昔窯　3．田代窯
4．小野寺窯　5．楢崎窯　6．岩手窯
1～5．畠山 2003 から引用・一部改変。
6．『岩手窯の栞』1991 から引用・一部改変。
※縮尺不定

第１図　炭窯の形態分類模式図

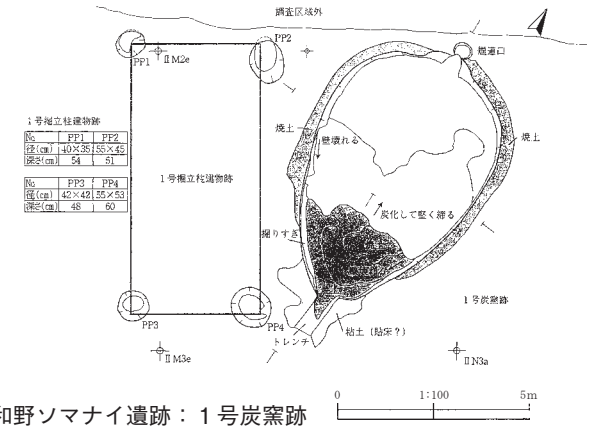
炭窯と炭窯を覆う上屋（鉢小屋）（南から）

道路脇に設けられた鉢小屋と作業小屋（北から）

現代の炭窯（宮古市内・筆者撮影）

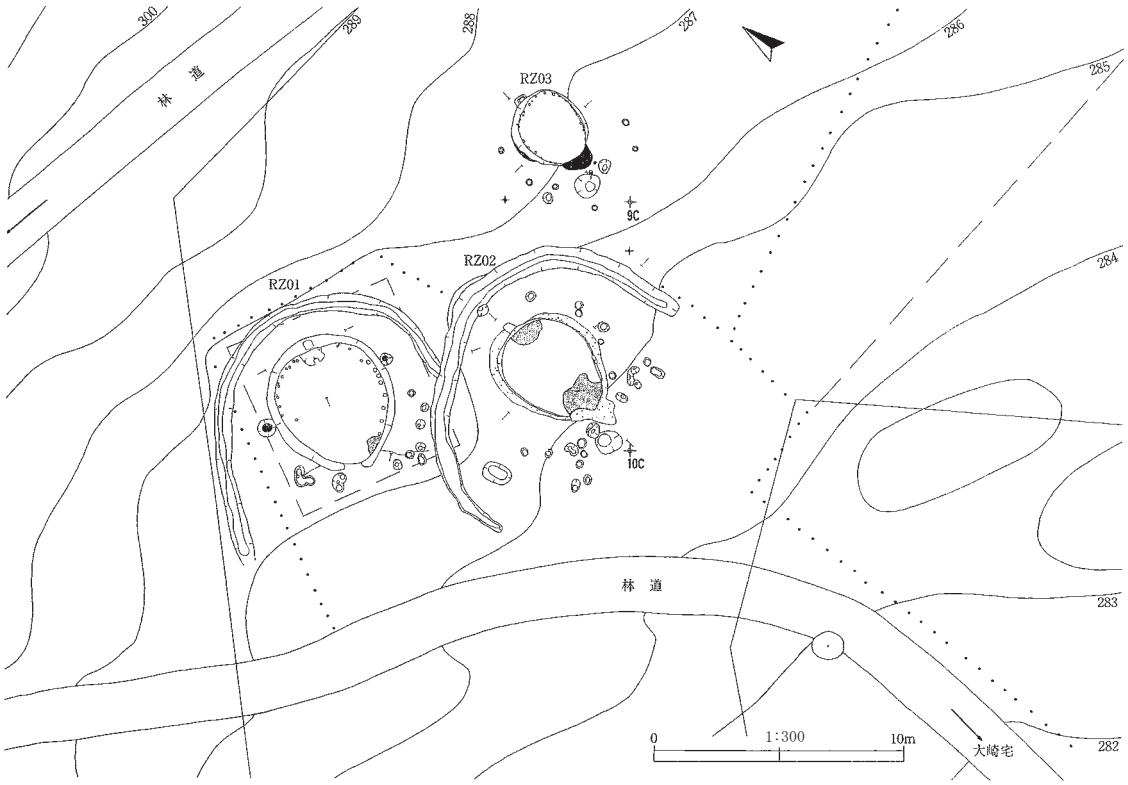


大平野Ⅱ遺跡：1号炭窯跡



和野ソマナイ遺跡：1号炭窯跡

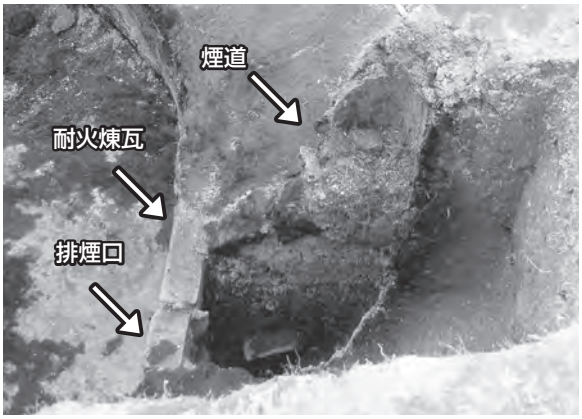
下尿前Ⅳ遺跡：1号炭窯跡



宮沢遺跡：RZ01・02・03 炭窯跡

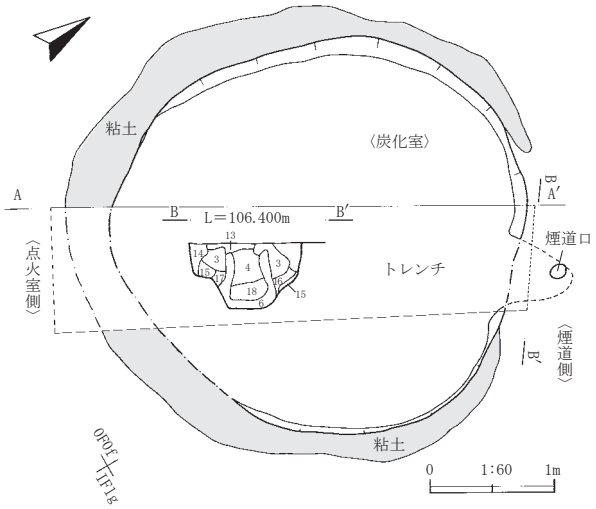
第２図　炭窯跡の調査事例１

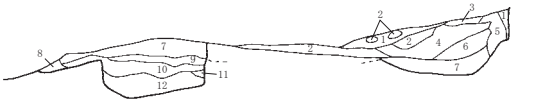
炭窯跡　平面



煙道　断面

八木沢Ⅱ遺跡・１号炭窯跡



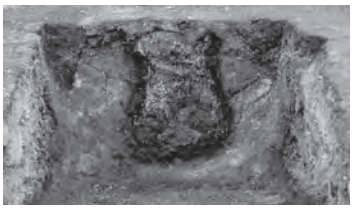


1　10ＹＲ２／２（黒褐）砂質シルト　粘性なし　しまりややあり　焼成を受けた南部浮石を少量含む
2　10ＹＲ６／８（明黄褐）浮石　粘性なし　しまりあり　草木根含む（炭焼きの際に上から散布？）
3　５ＹＲ４／８（赤褐）シルト　粘性ややあり　しまりややあり　焼土
4　10ＹＲ６／６（明黄褐）シルト　粘性なし　しまりなし　焼土や灰を含む南部浮石（５０％以上）
5　７.５ＹＲ５／６（明褐）シルト　粘性なし　しまりなし　灰を少量含む焼土
6　５ＰＢ２／１（紫黒）炭層　粘性なし　しまりなし　しまりのない炭化物からなる層
7　５Ｂ２／１（青黒）炭層　粘性なし　しまりあり　堅く締まる炭化物層（炭窯底面）
8　５ＹＲ３／４（暗赤褐）砂（粗砂）　粘性なし　しまりややあり　さらさらした焼土
9　７.５ＹＲ３／２（黒褐）砂（細砂）シルト　粘性なし　しまりあり　焼土粒、炭化物を含む
10　７.５ＹＲ３／４（暗褐）シルト　粘性ややあり　しまりあり　炭化物粒を含み焼成受ける
11　１０ＹＲ３／２（黒褐）砂　粘性なし　しまりなし　木根か？
12　７.５ＹＲ４／６（褐）浮石　粘性なし　しまりなし　被熱した地山（南部浮石層）
13　10ＹＲ４／６（褐）ローム層　粘性あり　しまりなし　南部浮石をわずかに含む
14　10ＹＲ２／２（黒褐）砂質シルト　粘性ややあり　しまりややあり　南部浮石を含む
15　10ＹＲ４／６（褐）砂質シルト　粘性ややあり　しまりなし　地山崩落土
16　10ＹＲ７／３（にぶい黄橙）粘土　粘性あり　しまりややあり　白色粘土
17　５ＹＲ４／６（赤褐）砂質シルト　粘性ややあり　しまりあり　16層の粘土ブロック含む
18　10ＹＲ２／３（黒褐）砂質シルト　粘性ややあり　しまりなし　炭化物を少量含む

炭窯跡実測図

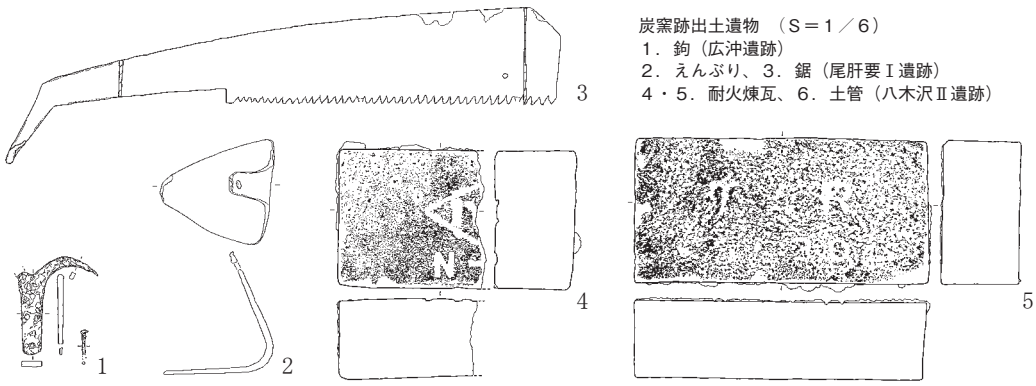
炭窯跡　平面（南西から）

炭窯跡　断面（北東から）



煙道断面(南西から)

水吉Ⅵ遺跡：IF1f 炭窯跡



炭窯跡出土遺物　（Ｓ＝１／６）
１．鉤（広沖遺跡）
２．えんぶり、３．鋸（尾肝要Ⅰ遺跡）
４・５．耐火煉瓦、６．土管（八木沢Ⅱ遺跡）

第３図　炭窯跡の調査実例２

県内出土の縄文土器胎土について(2)

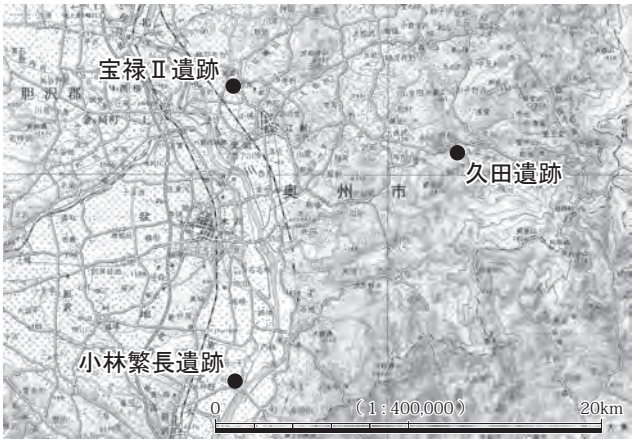
河　本　純　一

当紀要の34号にて、岩手県内における縄文土器の胎土研究を進めるための基礎作業として、盛岡市内の数遺跡から出土した土器の胎土観察をおこなった（河本2015）。今回もその作業の一環として、県南部の奥州市に所在する３遺跡から出土した縄文土器の胎土を観察し、県央部との比較検討などから、縄文時代中期から後期にかけての土器作りにおける材料選択の傾向について考察した。

１．はじめに

前号では、盛岡市に所在する芋田沢田Ⅳ遺跡・戸仲遺跡・山王山遺跡・川目Ａ遺跡から出土した縄文土器の胎土観察をおこなった。観察した総点数が十分とは言えず、様々な時期の土器を扱ったこともあり、胎土に反映されている当時の土器作りの実態について深く追究することはできなかった。しかし、今まで多くの場合、経験則的・感覚的にしか述べられてこなかった土器胎土の様相を視覚化し、その情報を議論として使い易いものにすることが少しはできたであろう。

今回も、縄文時代の土器作りの実態に深く踏み込む前に、まずは広く県内の様相を把握することに努め、県南部の奥州市に所在する３遺跡から出土した縄文土器の胎土観察をおこなった。



（国土地理院「一関」S=1/200,000　2013年６月１日発行を縮小・加筆）

第１図　胎土観察をおこなった各遺跡の位置

２．観察資料

今回は、奥州市に所在する、宝禄Ⅱ遺跡・久田遺跡・小林繁長遺跡の３遺跡（第１図）から出土した土器で、報告書（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003、2009、2010）に実測図が掲載されているものの一部を観察資料とした。観察した土器およびその観察結果は、附表１・２に示した。

３．観察方法および胎土分類

⑴　観察方法

ニコン社の携帯型実体顕微鏡ファーブル（倍率20倍）を用いて土器胎土を観察した（註１）。観察の際には、土器の断面だけでなく、器表面も観察し、総合的に土器の胎土を評価している。断面だけでは、観察面積が少なく、含まれる砂粒の種類・大きさ・量を評価するのが難しいからである。

⑵　胎土分類

今回は、土器に含まれる砂粒・混和材の種類および大きさによる分類を設けた。

ａ）砂粒・混和材の種類（第１表）

観察した土器の胎土に含まれていた主な砂粒としては、黒色光沢粒（角閃石または輝石）・雲母・凝灰岩・無色鉱物（長石・石英）があり、少数ながら変成岩や、頁岩またはチャートと考えられる堆積岩、安山岩と思われる有色の砂粒も認められた。また、砂粒以外にも土器片・海綿骨針・植物質な

第１表　砂粒・混和材の種類による胎土分類

分類	特徴
A類	黒色光沢粒（角閃石または輝石）を一定量含む土器。
B類	雲母を一定量含む土器。
C類	変成岩を一定量含む土器。
D類	凝灰岩を一定量含む土器。
E類	頁岩やチャートまたは安山岩と考えられる、灰色や黒色の砂粒を一定量含む土器。
F類	土器片を一定量含む土器。
G類	海綿骨針を一定量含む土器。
H類	上記のような特徴的な砂粒・混和材を含まず、ほぼ無色鉱物（長石・石英）だけからなる土器。

※ 黒色光沢粒と雲母をともに含めばAB類、変成岩と凝灰岩をともに一定量含めばCD類と、上記の分類記号を足し合わせた分類を適宜設定し、土器胎土観察表に記載している。
なお、一定量とは、観察した土器片中にその砂粒・混和材が不偏的に含有されており、少なくとも2㎠中に1粒は0.5㎜以上でその存在が認められる量を指す。

第２表　砂粒・混和材の大きさによる胎土分類

分類	特徴
２－類	2.0㎜～2.5㎜の砂粒・混和材を一定量有する土器。2.5㎜以上のものはほとんど含まれていない。
１＋類	1.5㎜～2.0㎜の砂粒・混和材を一定量有する土器。2.0㎜以上のものはほとんど含まれていない。
１－類	1.0㎜～1.5㎜の砂粒・混和材を一定量有する土器。1.5㎜以上のものはほとんど含まれていない。
０類	1.0㎜未満の砂粒・混和材で構成されている、及び肉眼ではそれらを確認できないもの。

どの存在が確認できた（註２）。

今回は、これらの砂粒・混和材のあり方に基づき第１表に示すＡ～Ｈ類という、含まれる砂粒・混和材の種類による分類を設けた。

ｂ）砂粒・混和材の大きさ（第２表）

含まれる砂粒・混和材の大きさについて、第２表に示す０～２－類という分類を設けた（註３）。

４．分析結果

⑴　宝禄Ⅱ遺跡

後期前葉～中葉の資料計20点を観察した。土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・凝灰岩を確認できた。第３表に示したように、黒色光沢粒を含む土器が20点中18点と最も多く、このほか雲母を含む土器が５点、凝灰岩を含む土器が４点存在している。また、以上のような特徴的な砂粒を含まず、無色鉱物だけを含む土器も２点存在している。

20点中７点の土器に頁岩またはチャートと考えられる砂粒の存在を確認できたが、いずれも１つの土器片につき、１、２点程度とその含有量は極めて少なく、意図的に材料として選ばれたものとは考えられない。無色鉱物の含有状況を見ると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うものの２種類が存在している。胎土観察した20点のうち、前者が８点、後者が12点と、どちらかが顕著に多いといったことは認められなかったが、雲母を含む土器についてはいずれも前者であった。

含まれる砂粒・混和材の大きさは第２図に示したが、１－類が60.0％、０類が40.0％と、１㎜前後のものが多く認められる。

胎土と型式学的な特徴との関係を見てみると、№１～８のような口縁部が外反するものにはＡ類とＡＢ類（写真１－１）が存在するが、凝灰岩を含む土器は認められなかった。一方、№16～19のような口縁部が直線的に立ち上がるものにはＡＢ類とＡＤ類（写真１－２）が存在し、特に凝灰岩を

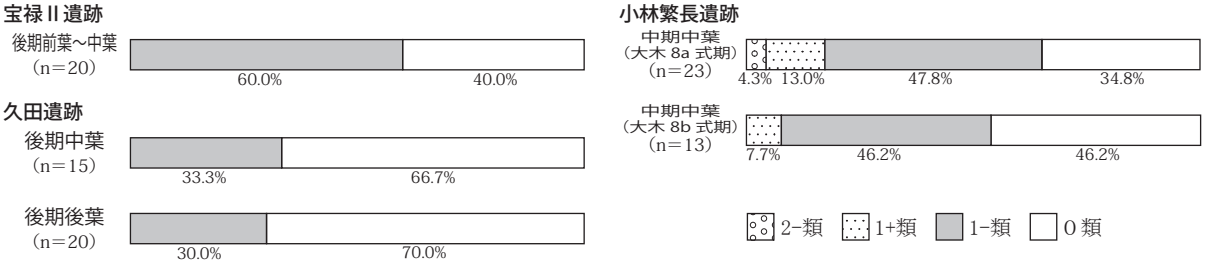
第３表　砂粒・混和材の含有状況

遺跡・時期 ＼ 胎土	宝禄Ⅱ遺跡	久田遺跡		小林繁長遺跡	
	後期前葉～中葉	後期中葉	後期後葉	中期中葉（大木8a式期）	中期中葉（大木8b式期）
黒色光沢粒を含む	18/20	8/15	14/20	22/23	10/13
雲母を含む	5/20	6/15	9/20	0/23	0/13
変成岩を含む	0/20	0/15	1/20	0/23	0/13
凝灰岩を含む	4/20	0/15	0/20	9/23	3/13
その他有色砂粒を含む	0/20	1/15	1/20	0/23	0/13
土器片を含む	0/20	0/15	0/20	5/23	2/13
海綿骨針を含む	0/20	0/15	1/20	0/23	0/13
長石・石英のみ	2/20	4/15	1/20	0/23	2/13

(参考) 盛岡市内の遺跡における土器胎土の様相

戸仲遺跡	山王山遺跡
中期後葉	中期中葉
13/27	14/24
6/27	1/24
4/27	1/24
12/27	10/24
0/27	0/24
4/27	4/24
0/27	0/24
4/27	0/24

※雲母と変成岩をともに含めば、それぞれで１点ずつ集計しているので、縦列の合計は総観察点数より多くなる。



第２図　含まれる砂粒・混和材の大きさ

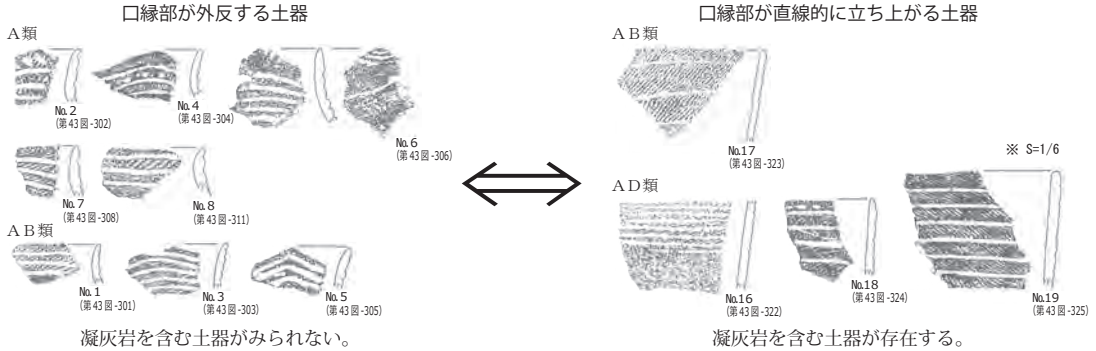
含む土器が多い（第３図）。つまり、口縁部形態が異なるこの２者では、使用された材料も異なっていたようである。

報文において、口縁部が外反する土器（報文Ⅲ群①類）と口縁部が直線的に立ち上がる土器（報文Ⅲ群②類）との間には時期差が存在することが考えられていることから、この２者における土器胎土の違いは、材料選択の傾向が時期的に変化したために生じた現象である可能性が想定される。このことは、口縁部が直線的に立ち上がる土器とは時期差が認められない、沈線による区画文が施される№10 ～ 14のような土器（報文Ⅲ群③類）においても、意図的に混和したとは言えない量ではあるが、凝灰岩の存在が確認できる土器が多いことからも支持されよう。

⑵　久田遺跡

後期前葉～後葉の資料計40点を観察した。ここでは、比較的まとまった観察点数を得ることのできた、後期中葉および後葉の様相について述べる（註４）。

後期中葉の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・頁岩・チャート・安山岩を確認できた。第３表に示したように、黒色光沢粒を含む土器が15点中８点と最も多く、雲母を含む土器（写真１-３）も６点存在している。また、安山岩と思われる有色砂粒を含む



第３図　口縁部形態と胎土との関係

土器が１点、以上のような特徴的な砂粒を含まず、無色鉱物だけを含む土器（写真１－４）が４点存在している。

１つの土器片に１点でも変成岩や凝灰岩の存在を確認できたものはなく、意図的に加える砂粒以外のものがほとんど混じらないような環境下で材料の調達・調合がなされたものと考えられる。無色鉱物の含有状況を見ると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの３種類が存在している。長石を主体として石英が少量伴うものが15点中１点であるのに対し、石英を主体として長石が少量伴うものが６点と、石英が主体となるものが多い傾向がみられる。なお、宝禄Ⅱ遺跡でもそうであったように、雲母を含む土器については、いずれも長石と石英の量がほぼ同じ程度のものであった。

含まれる砂粒・混和材の大きさは第２図に示したが、１－類が33.3％、０類が66.6％と、１㎜以下のものが多く認められる。

胎土と型式学的な特徴との関係については、観察できた総点数に対し形態・文様のバリエーションが多いために、現状では論じることができない。

後期後葉の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・変成岩・頁岩・チャート・安山岩・海綿骨針を確認できた。第３表に示したように、黒色光沢粒を含む土器（写真１－５）が20点中14点と最も多く、雲母を含む土器（写真１－６）も９点と比較的多く存在している。このほか変成岩を含む土器（写真２－７）が１点、頁岩またはチャートと思われる砂粒を含む土器（写真２－８）が１点、海綿骨針を含む土器（写真２－９）が１点、以上のような特徴的な砂粒を含まず、無色鉱物だけを含む土器が１点存在している。

必ずしも材料として意図的に選ばれたものとは考えられないが、１つの土器片に１点でも変成岩が認められたものが、20点中４点存在している。無色鉱物の含有状況を見ると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの３種類が存在している。石英を主体として長石が少量伴うものが20点中２点であるのに対し、長石を主体として石英が少量伴うものが６点と、長石が主体となるものが多い傾向がみられる。なお、雲母を含む土器については長石と石英の量がほぼ同じ程度のものか、長石を主体とするものであり、石英を主体とするものは認められなかった。

含まれる砂粒・混和材の大きさは第２図に示したが、１－類が30.0％、０類が70.0％と、１㎜以下のものが多く認められる。

胎土と型式学的な特徴との関係については、観察できた総点数に対し形態・文様のバリエーションが多いために、現状では論じることができない。

以上のように、久田遺跡においては後期中葉・後葉ともに、黒色光沢粒を含むものが多く見られ、雲母を含む土器も少なからず存在しているという点で、ほぼ同じ傾向がみられた。しかし後期後葉になると、変成岩が混じる割合が高くなり、石英の目立たないものが多くなるなど、材料選択や製作環境に若干の変化が生じた可能性が考えられる。

⑶　小林繁長遺跡

中期前葉～中葉の資料計40点を観察した。ここでは、比較的まとまった観察点数を得ることのできた、中期中葉、大木８ａ・８ｂ式期の様相について述べる（註５）。

大木８ａ式期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・凝灰岩・土器片を確認できた。第３表に示したように、黒色光沢粒を含む土器（写真２-10）が23点中22点と最も多く、凝灰岩を含む土器（写真２-11）が９点、土器片を含む土器（写真２-12）が５点存在して

いる。

必ずしも材料として意図的に選ばれたものとは考えられないが、１つの土器片に１点でも雲母が認められたものが23点中３点、同様に変成岩が認められたものが４点、頁岩またはチャートと思われる砂粒が認められたものが６点、安山岩などその他の灰～黒色の砂粒が認められたものが５点存在している。無色鉱物の含有状況を見ると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うものの２種類が存在している。前者が23点中15点、後者が８点と、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものがやや多いようである。

含まれる砂粒・混和材の大きさは第２図に示したが、２－類が4.3％、１＋類が13.0％、１－類が47.8％、０類が34.8％と、１㎜以上のものが多く認められる。

胎土と型式学的な特徴との関係については、観察できた総点数に対し形態・文様のバリエーションが多いために、現状では論じることができない。

大木８ｂ式期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・凝灰岩・土器片を確認できた。第３表に示したように、黒色光沢粒を含む土器が13点中10点と最も多く、凝灰岩を含む土器が３点、土器片を含む土器が２点存在している。また、以上のような特徴的な砂粒を含まず、無色鉱物だけを含む土器が２点存在している。

必ずしも材料として意図的に選ばれたものとは考えられないが、１つの土器片に１点でも変成岩が認められたものが13点中１点存在している。１つの土器片に１点でも雲母や頁岩またはチャートといった砂粒を認められたものがない点で、大木８ａ式期とはやや様相が異なる。無色鉱物の含有状況を見ると、長石と石英の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うものの２種類が存在している。前者が13点中３点、後者が10点と、石英が主体となるものが多い傾向がみられる。

含まれる砂粒・混和材の大きさは第２図に示したが、１＋類が7.7％、１－類が46.2％、０類が46.2％と、１㎜以上のものが多く認められる。

胎土と型式学的な特徴との関係については、観察できた総点数に対し形態・文様のバリエーションが多いために、現状では論じることができない。

以上のように、小林繁長遺跡においては大木８ａ・８ｂ式期ともに、黒色光沢粒を含むものが多く見られ、凝灰岩や土器片を含む土器も少なからず存在しているという点で、ほぼ同じ傾向がみられた。しかし、大木８ａ式期は変成岩や頁岩またはチャートなどの砂粒が混じることが多く、大木８ｂ式期は石英が主体となるものが多くなるなど、各時期で材料選択や製作環境に違いが存在していた可能性が考えられる。

５．県央部で出土した縄文土器胎土との比較検討

以上、各遺跡における分析結果の概要を述べてきた。以下、前号で扱った盛岡市内の分析例も参照しつつ、縄文時代中期～後期にかけての土器製作における材料選択の傾向について概括する。

中期中葉においては、県央・県南両地域ともに黒色光沢粒を含む土器以外には、凝灰岩を含む土器および土器片を含む土器が一定量見られる。しかし、後期以降にその存在が顕著になる、雲母を含む土器はほとんど見られない。今回は県南部の中期後葉の資料を扱うことはできなかったが、県央部の様相として当時期は雲母や変成岩・凝灰岩・土器片と様々な砂粒・混和材が使用されている。そして後期になると、土器片が混和材として使用されることが終わる。前葉～中葉のうちには雲母だけでなく凝灰岩を含む土器もみられるが、後葉には凝灰岩の使用も終わり、雲母を含む土器のみが顕著な存在となってくる。

このように見ると、中期中葉までは凝灰岩や土器片を含む材料を用いて土器製作をおこなっていたが、中期後葉～後期前葉の間にかけてその流儀は廃れ始め、雲母を含む材料を用いるように漸移的に変化していった可能性が想定される。

6．おわりに

今回は、県南部における縄文時代中期～後期における土器胎土の様相を具体的に提示した。材料選択における特徴的な傾向として、中期中葉は凝灰岩や土器片を含むものが見られ、後期になると雲母を含むものが見られることが挙げられる。また、混入物や無色鉱物の含有状況などから各時期における製作環境や材料選択の変化を見いだせる可能性を指摘できた。そして、前号でおこなった盛岡市内での分析事例との比較検討をおこなうことにより、材料選択の漸移的な変化の様相を提示することができた。とはいえ、まだ観察した総点数自体は少ないものであり、今後の研究の蓄積次第では訂正すべきところも多く出るであろう。現状ではあくまでも予察段階である。

今回の分析結果自体も、すでに経験則的には知られていることではあろうが、このように具体的に提示されることは少なかったものと思われる。今後も観察資料を増やしていき、土器胎土研究の叩き台を作ることができれば幸いである。

註

⑴ 土器胎土を観察し評価する上での作業内容の詳細、および附表１・２として提示した土器胎土観察表の記述内容については、前稿（河本 2011）を参照されたい。

⑵ どのような特徴を有する砂粒をどの岩石・鉱物や混和材と認定したかについては、前稿（河本2015）を参照されたい。

⑶ 今回は2.5mm 以上の砂粒を一定量含む土器は認められなかったので、第２表で示した基準で全ての土器を分類できた。

⑷ №１・３・６～８・10・16・21・22・24・25・32～34・38を後期中葉、№４・５・９・11～13・15・18・19・23・26～29・31・35～37・39・40を後期後葉として扱った。

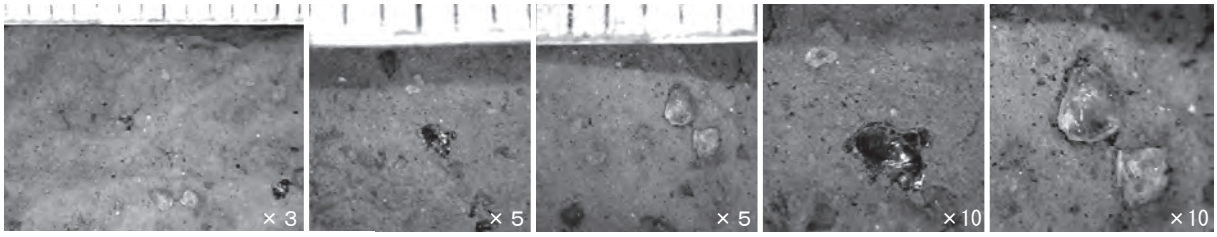
⑸ №５～27を大木８ａ式、№28～40を大木８ｂ式として扱った。

参考文献

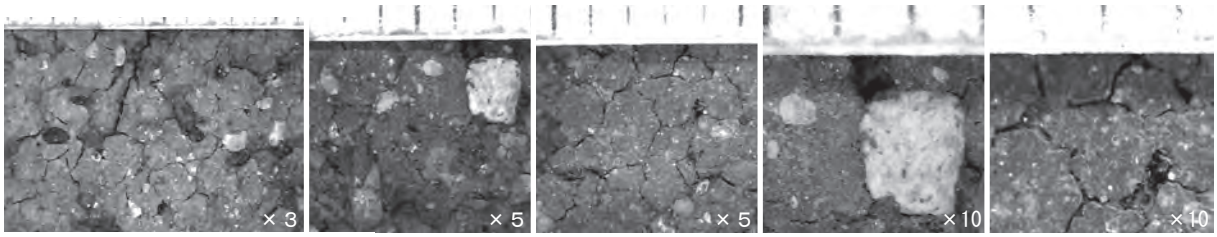
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003 『久田遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第406集
2009 『宝禄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第541集
2010 『合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第570集

河本純一　2011 「泉南地域における縄文土器胎土の時期的変化」『大阪文化財研究』38 財団法人大阪府文化財センター

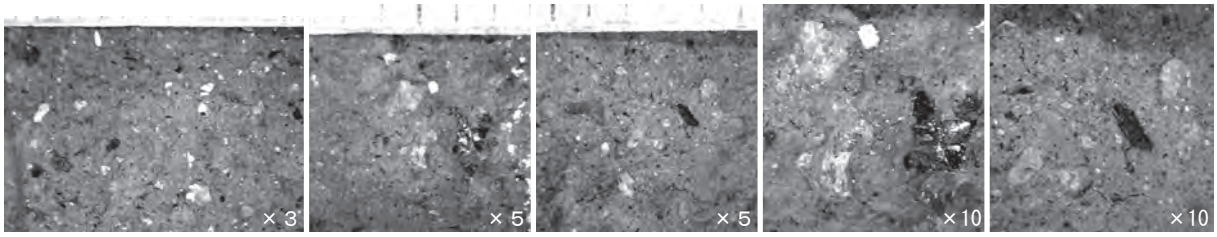
河本純一　2015 「県内出土の縄文土器胎土について－肉眼による胎土分類からの検討－」『紀要』34（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



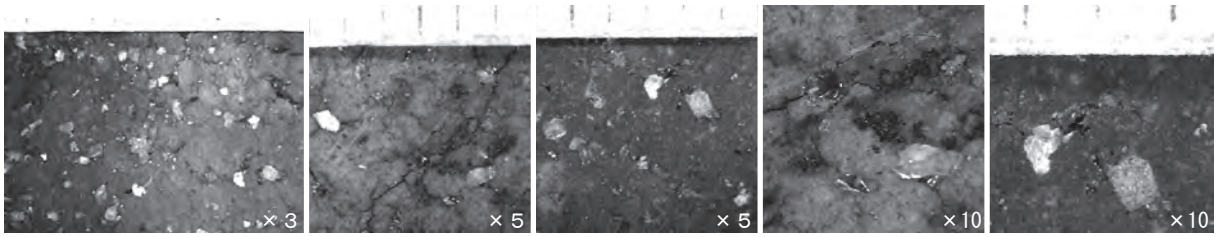
1．宝禄Ⅱ遺跡　第 43 図 -301（後期前葉～中葉、AB1- 類）



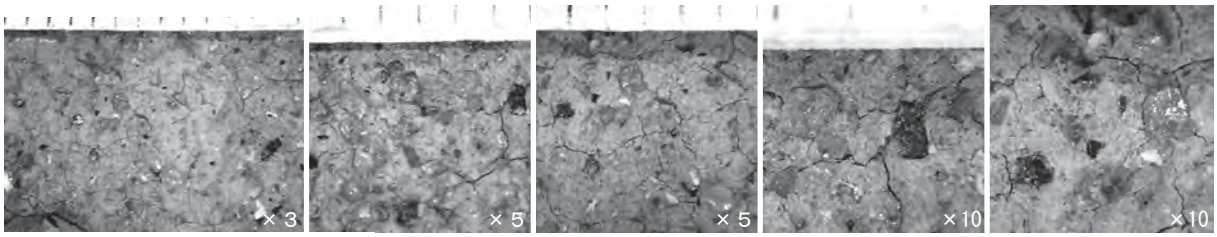
2．宝禄Ⅱ遺跡　第 43 図 -322（後期前葉～中葉、AD1- 類）



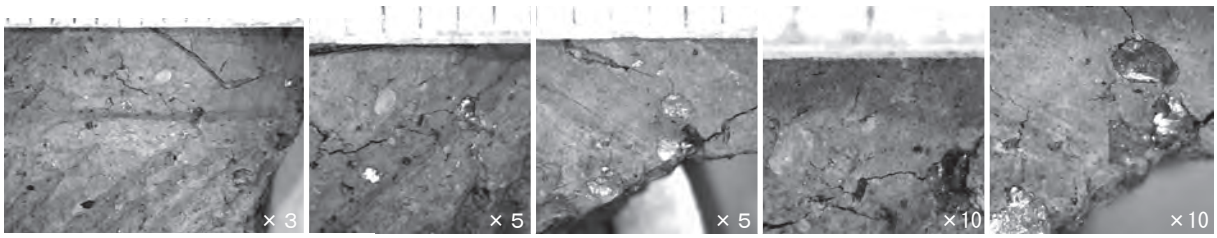
3．久田遺跡　第 89 図 -531（後期中葉、AB1- 類）



4．久田遺跡　第 89 図 -534（後期中葉、H0 類）

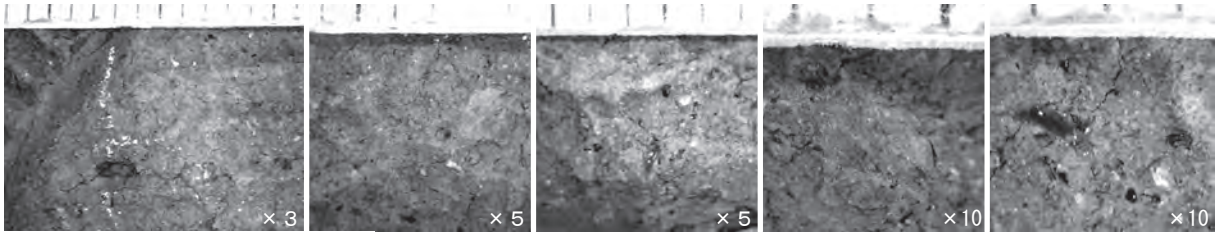


5．久田遺跡　第 88 図 -517（後期後葉、A0 類）

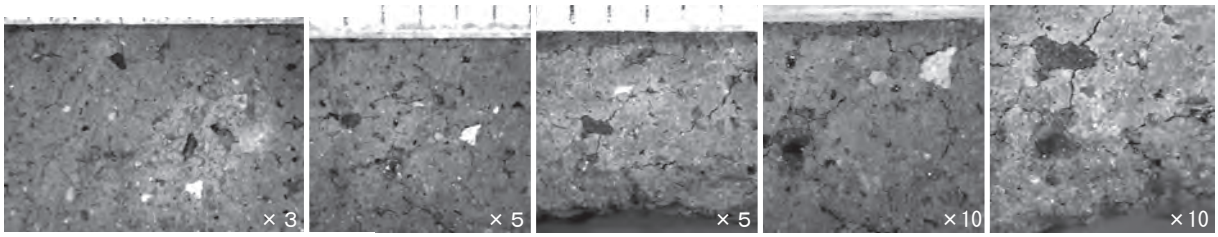


6．久田遺跡　第 88 図 -509（後期後葉、B0 類）

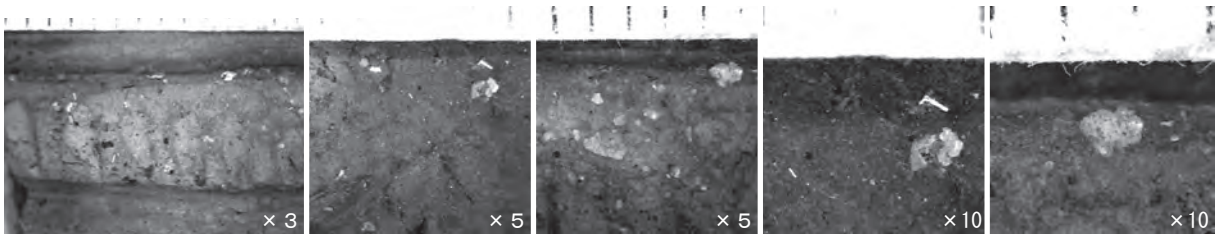
写真１　縄文土器の胎土写真 (1)



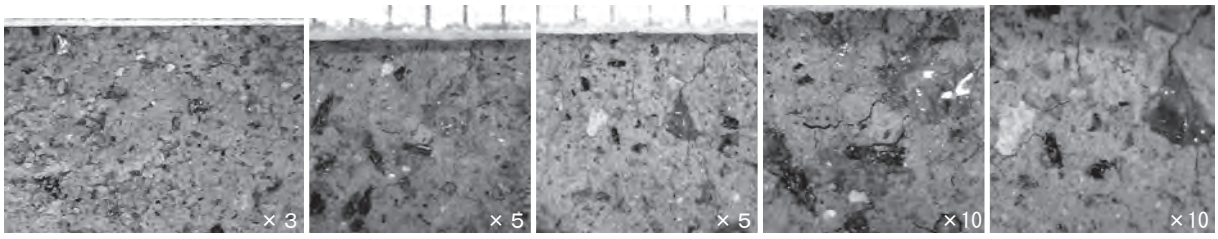
7．久田遺跡　第 90 図 -548（後期後葉、AC0 類）



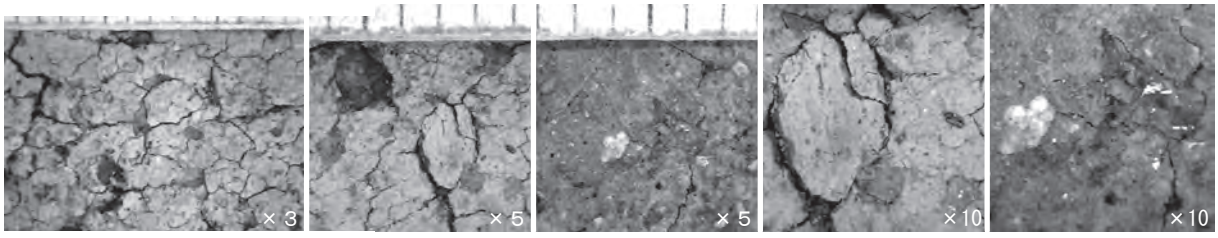
8．久田遺跡　第 87 図 -498（後期後葉、AE0 類）



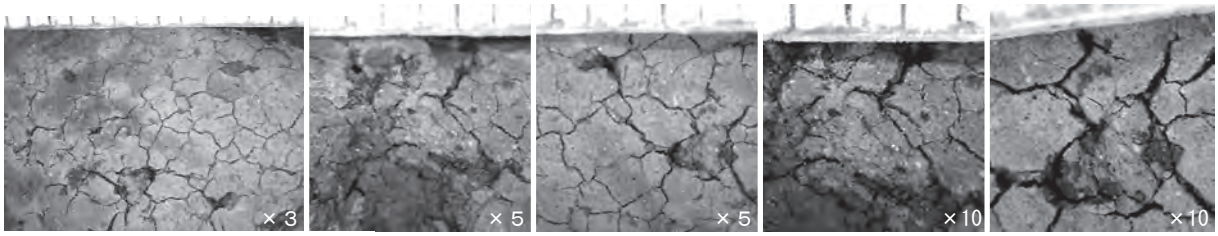
9．久田遺跡　第 87 図 -495（後期後葉、G0 類）



10．小林繁長遺跡　第 61 図 -218（中期中葉、A0 類）



11．小林繁長遺跡　第 62 図 -235（中期中葉、AD1- 類）



12．小林繁長遺跡　第 63 図 -250（中期中葉、F1+ 類）

写真２　縄文土器の胎土写真 (2)

附表１　土器胎土観察表（1）

宝禄Ⅱ遺跡

報告書：須原拓 2009『宝禄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第541集，（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒種									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	変成岩	凝灰岩	頁岩・チャート	灰色・黒色砂粒	無色鉱物	酸化砂粒	土器片	植物質
1	第43図-301	AB1-	2.5YR/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	<0.5少	1.0s×0～1 0.5少			(0.5)		1.0s×0～1 0.5			△
2	第43図-302	A0	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/1 黄灰	0.5多				(1.0)		(1.0) 0.5多			
3	第43図-303	AB0	2.5Y4/1 黄灰	10YR6/2 灰黄褐	<0.5少	0.5					0.5	(2.0)		
4	第43図-304	A1-	2.5YR/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	<0.5少			(0.5)			1.0s×0～1 0.5多			
5	第43図-305	AB1-	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	<0.5少	(1.0) 0.5					1.0s×0～1 0.5多	(1.0)		△
6	第43図-306	A1-	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	0.5			△			1.0s×1 0.5多	(1.0)		
7	第43図-308	A0	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5YR/2 灰白	<0.5少			△			(1.0) 0.5多			
8	第43図-311	A1-	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y5/2 暗灰黄	<0.5	(0.5)					1.0s×0～1 0.5多			
9	第43図-312	A0	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y4/1 黄灰	<0.5少	(1.0)		0.5極少	(0.5)		0.5多			
10	第43図-315	H1-	2.5Y5/1 黄灰	N4/0 灰				(1.0) (0.5)			1.0s×1 0.5多			
11	第43図-316	AB0	2.5YR/3 淡黄	5Y5/1 灰	<0.5少	0.5少		(3.0)	(3.0) (1.0)		0.5多	(0.5)		△
12	第43図-317	A1-	7.5YR8/6 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	0.5少			(2.0) 0.5極少			1.0s×0～1 0.5			△
13	第43図-318	A1-	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	(1.0) <0.5少			(1.0) (0.5)			1.0s×1～2 0.5多			
14	第43図-319	A1-	10YR8/2 灰白	2.5Y4/1 黄灰	<0.5少			0.5極少			1.0s×0～1 0.5多			
15	第43図-320	AD0	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	<0.5少			0.5少	0.5極少		(1.0) 0.5多	(0.5)		△
16	第43図-322	AD1-	10YR4/1 褐灰	10YR4/2 灰黄褐	<0.5			1.0s×0～1 0.5少	(0.5)		1.0s×0～1 0.5多			
17	第43図-323	AB1-	2.5Y7/2 灰黄	7.5YR6/6 橙	<0.5少	(1.0) 0.5少					(2.0) 1.0s×0～1 0.5多			
18	第43図-324	AD1-	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	<0.5			0.5少			1.0s×1 0.5多			
19	第43図-325	AD0	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	<0.5少			0.5少	(1.0) (0.5)		(2.0) (1.0) 0.5多			
20	第44図-329	H0	N3/0 暗灰	5Y5/1 灰	<0.5極少						(1.0) 0.5少			

No.3・17には2mm大の泥塊らしき粒を1粒確認できた。No.13には１点だけであるが海綿骨針を確認できた。

No.2・4・6～8・10・13・14・16・18～20に含まれる無色鉱物は、石英が主体であり長石は少ない。

久田遺跡

報告書：千葉正彦・菊池賢 2003『久田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第406集，（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒種									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	変成岩	凝灰岩	頁岩・チャート	灰色・黒色砂粒	無色鉱物	酸化砂粒	土器片	植物質
1	第87図-491	H0	10YR4/1 褐灰	2.5Y4/1 黄灰	<0.5極少	△				(3.0)	(1.0) 0.5	(1.0)		△
2	第87図-492	H0	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR6/4 にぶい黄橙	<0.5極少	△					(2.0) (1.0) 0.5			△
3	第87図-494	AB0	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	(0.5) <0.5少	0.5少					0.5			
4	第87図-495	G0	5Y4/1 灰	5Y5/1 灰					(1.0)		(1.0) 0.5			
5	第87図-498	AE0	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/3 にぶい黄	<0.5少	(0.5)			0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) (0.5)		
6	第87図-500	E0	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	<0.5極少				△	(1.0) 0.5少	(1.0) 0.5			
7	第88図-501	B1-	10YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	△	1.0s×0～1 0.5					(1.0) 0.5多			
8	第88図-508	AB0	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y4/1 黄灰	<0.5少	(1.0) 0.5少					0.5	(1.0) (0.5)		
9	第88図-509	B0	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5極少	(1.0) 0.5				(0.5)	0.5			
10	第88図-512	H0	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐	<0.5極少				(0.5)		0.5	(0.5)		△

久田遺跡 続き

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒種									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	変成岩	凝灰岩	頁岩・チャート	灰色・黒色砂粒	無色鉱物	酸化砂粒	土器片	植物質
11	第88図-514	H1-	10YR4/2 灰黄褐	5YR3/4 にぶい赤褐	<0.5極少	0.5極少				(0.5)	1.0s×0～1 0.5	(0.5)		△
12	第88図-515	A0	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/2 灰黄褐	<0.5少	(0.5)				△	0.5			
13	第88図-517	A0	2.5Y4/1 黄灰	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5少	(0.5)					0.5			
14	第88図-518	A1-	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	<0.5少	0.5極少					1.0s×0～1 0.5多			
15	第88図-519	A1-	5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	<0.5少	(1.0) 0.5極少					1.0s×0～1 0.5			△
16	第88図-520	A0	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/2 暗灰黄	<0.5少						0.5			△
17	第88図-521	AB1-	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	<0.5	0.5					1.0s×0～1 0.5			
18	第88図-522	B0	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/2 灰褐	<0.5極少	0.5					(1.0) 0.5			
19	第88図-523	B0	2.5Y4/1 黄灰	N3/0 暗灰	<0.5極少	0.5少					0.5			
20	第88図-524	AB1-	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5少		1.0s×0～1 0.5			△	(1.0) 0.5			△
21	第89図-527	H0	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y4/1 黄灰	<0.5極少						0.5			
22	第89図-531	AB1-	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	<0.5少		(1.0) 0.5				1.0s×0～1 0.5多			
23	第89図-533	A0	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y4/2 暗灰黄	<0.5少		(0.5)				(2.0) (1.0) 0.5			
24	第89図-534	H0	10YR5/2 灰黄褐	N2/0 黒							(1.0) 0.5			
25	第89図-535	A0	2.5Y4/1 黄灰	10YR6/3 にぶい黄橙	<0.5少		(0.5)				(1.0) 0.5			
26	第89図-536	AB1-	10YR5/4 にぶい黄褐	2.5YR5/6 明赤褐	0.5		0.5少				1.0s×1 0.5多			
27	第89図-540	AB0	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	(0.5) <0.5少		0.5			(0.5)	(0.5)			
28	第89図-541	A0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	<0.5		(0.5)				0.5	(0.5)		
29	第89図-542	AB0	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	<0.5少		0.5多				(1.0) 0.5			
30	第89図-545	A1-	2.5Y5/1 黄灰	10YR7/3 にぶい黄橙	<0.5少		(0.5)				(3.0) 1.0s×0～1 0.5	0.5極少		
31	第90図-548	AC0	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	<0.5少			(1.0) 0.5少			(1.0) 0.5			
32	第91図-563	AB0	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/2 灰黄褐	<0.5少		0.5				0.5			
33	第91図-564	A1-	2.5Y4/1 黄灰	10YR6/4 にぶい黄橙	(1.0) <0.5少		(0.5)				1.0s×0～1 0.5			
34	第91図-565	B1-	2.5Y4/1 黄灰	10YR6/3 にぶい黄橙	<0.5極少		1.0s×0～1 0.5多				0.5少			
35	第91図-566	B1-	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y5/1 黄灰	<0.5極少		1.0s×0～1 0.5		(1.0)		1.0s×0～1 0.5			
36	第91図-567	AB1-	10YR4/2 灰黄褐	2.5Y6/1 黄灰	<0.5少		1.0s×0～1 0.5				1.0s×0～1 0.5	(0.5)		
37	第91図-569	AB1-	10YR4/1 褐灰	10YR6/3 にぶい黄橙	<0.5少		1.0s×0～1 0.5		(1.0) 0.5極少		1.0s×0～1 0.5			
38	第91図-574	A1-	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	<0.5少		(0.5)				1.0s×0～1 0.5			
39	第92図-590	A0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5		(0.5)		(3.0)		0.5多			
40	第93図-591	A0	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y4/1 黄灰	<0.5少						(1.0) 0.5			

No.4は少量の海綿骨針を含む。No.24・40も１点だけであるが海綿骨針を確認できた。

No.1・6・24・28・30・33・38・40に含まれる無色鉱物は、石英が主体であり長石は少ない。一方、No.4・7・12・13・17・18・20・36に含まれる無色鉱物は、長石が主体であり石英は含まれていないか、含まれていたとしても極めて少量である。

小林繁長遺跡

報告書：杉沢昭太郎・菊池昌彦 2010『合野遺跡・小林繁長遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第570集，（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

No.	資料番号	胎土分類	色調		含有砂粒種									
			内面	外面	黒色光沢粒	雲母	変成岩	凝灰岩	頁岩・チャート	灰色・黒色砂粒	無色鉱物	酸化砂粒	土器片	植物質
1	第59図-191	A1-	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	<0.5少					(1.0)	(2.0) 1.0s×0～1 0.5多	(0.5)		△

附表２　土器胎土観察表(2)

小林繁長遺跡 続き

No.	資料番号	胎土分類	色調 内面	色調 外面	含有砂粒種 黒色光沢粒	雲母	変成岩	凝灰岩	頁岩・チャート	灰色・黒色砂粒	無色鉱物	酸化砂粒	土器片	植物質
2	第60図-205	A0	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	<0.5						0.5	0.5		
3	第60図-206	A0	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	<0.5			(0.5)	0.5極少	△	(1.0) 0.5多			
4	第60図-209	AF1-	7.5YR6/6 橙	10YR5/3 にぶい黄褐	0.5多				(1.0)		1.0s×0～1 0.5		1.0s×0～1 0.5少	
5	第61図-214	A1-	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5少					(1.0) 0.5極少	(3.0) 1.0s×0～1 0.5		0.5極少	△
6	第61図-218	A0	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/2 灰黄褐	(1.0) 0.5多	(0.5)					(1.0) 0.5	0.5少		
7	第61図-219	A0	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	0.5				(0.5)		0.5		(0.5)	
8	第61図-222	A0	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	<0.5少				(2.0)	(3.0) (1.0)	(1.0) 0.5			
9	第61図-223	AD1-	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄	0.5多			1.0s×0～1 0.5少			1.0s×0～1 0.5			
10	第61図-225	A0	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	<0.5少		(0.5)		(3.0) (2.0)		(1.0) 0.5多			
11	第61図-226	A1-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐	<0.5少						(5.0) (3.0) 1.0s×0～1 0.5			
12	第62図-228	ADF1-	10YR7/6 明黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	<0.5少		(5.0) (4.0)	(2.0) (1.0) 0.5少			1.0s×0～1 0.5		(2.0) 1.0s×0～1 0.5	
13	第62図-230	ADF1+	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	<0.5少			(1.0) 0.5少			(3.0) 1.0s×0～1 0.5少		1.0b×0～1 0.5少	△
14	第62図-231	AD1-	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	(1.0) 0.5多			(1.0) 0.5少			1.0s×0～1 0.5			
15	第62図-232	AF1+	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5少		(2.0)	(3.0) 0.5極少		(2.0)	(4.0) (2.0) 1.0s×0～1 0.5		1.0b×0～1 0.5少	
16	第62図-233	AD1-	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	<0.5少		(1.0)	1.0s×0～1 0.5少		△	(2.0) 1.0s×0～1 0.5			
17	第62図-234	A1-	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR5/2 灰黄褐	<0.5多			0.5極少	(4.0)		(2.0) 1.0s×0～1 0.5			
18	第62図-235	AD1-	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y8/3 淡黄	<0.5少			(2.0) 1.0s×0～1 0.5少		(1.0) 0.5極少	(1.0) 0.5			
19	第62図-236	AD1-	2.5Y6/2 灰黄	10YR6/6 明黄褐	<0.5			(2.0) 1.0s×0～1 0.5			(1.0) 0.5多			△
20	第62図-238	AD1-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	<0.5			(3.0) (2.0) 1.0s×0～1 0.5少	(0.5)		0.5			
21	第62図-239	AD2-	7.5YR5/4 にぶい褐	2.5YR5/6 明赤褐	<0.5少			(3.0) 2.0s×0～1 1.0 ×1～2 0.5多			(2.0) 1.0s×0～1 0.5多			
22	第63図-240	A0	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	<0.5			(0.5)	(1.0)		(1.0) 0.5	(1.0)		
23	第63図-242	AF0	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	<0.5多						0.5		(3.0) (1.0) 0.5少	
24	第63図-243	A1-	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	<0.5少			△			1.0s×0～1 0.5			
25	第63図-247	A0	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	<0.5			(2.0) (0.5)			(1.0) 0.5			
26	第63図-248	A0	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR7/3 にぶい黄橙	<0.5少	(0.5)		△			(1.0) 0.5			
27	第63図-250	F1+	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	<0.5極少	(0.5)					(0.5)		1.0b×0～1 0.5	
28	第63図-251	A0	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y5/1 黄灰	0.5少			△			0.5多			
29	第63図-252	AD1-	7.5YR4/1 褐灰	5YR5/4 にぶい赤褐	<0.5少			(2.0) 1.0s×0～1 0.5少			(1.0) 0.5			
30	第63図-253	H0	10YR3/1 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	<0.5極少						(1.0) 0.5多			

小林繁長遺跡 続き

No.	資料番号	胎土分類	色調 内面	色調 外面	含有砂粒種 黒色光沢粒	雲母	変成岩	凝灰岩	頁岩・チャート	灰色・黒色砂粒	無色鉱物	酸化砂粒	土器片	植物質
31	第63図-254	F0	2.5Y4/1 黄灰	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5極少			△			(2.0) (1.0) 0.5		(2.0) (1.0) 0.5少	
32	第63図-255	AD1-	7.5YR6/6 橙	2.5Y5/1 黄灰	<0.5少			(1.0) 0.5			1.0s×0～1 0.5少			
33	第63図-258	AD1+	7.5YR4/3 褐	10YR4/2 灰黄褐	<0.5			(2.0) 1.0b×1 0.5			(2.0) 0.5			
34	第64図-260	A1-	5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	<0.5多			0.5極少			1.0s×0～1 0.5多	0.5極少		
35	第64図-261	A1-	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	<0.5多						1.0s×0～1 0.5			△
36	第64図-262	AF1-	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	<0.5少						(2.0) (1.0) 0.5		(2.0) 1.0s×0～1 0.5	
37	第64図-264	H0	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	<0.5極少			(1.0)			(1.0) 0.5極少			
38	第64図-267	A0	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	<0.5						(1.0) 0.5	(0.5)		
39	第64図-268	A0	10YR4/1 褐灰	10YR5/3 にぶい黄褐	<0.5			△			0.5多			
40	第64図-269	A1-	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y4/1 黄灰	<0.5		(1.0) (0.5)				(3.0) 1.0s×0～1 0.5多			△

No.8には3mm大の泥岩らしき砂粒を1粒確認できた。No.17・35には１点だけであるが海綿骨針を確認できた。

No.1～5・9・10・14・19・21・23・25・28～30・32～35・38～40に含まれる無色鉱物は、石英が主体であり長石は少ない。

気仙地域における弥生時代後期に属する土器について

野　中　裕　貴

平成27年度に当センターで調査を実施した陸前高田市に所在する西和野Ⅰ遺跡から、弥生時代後期の「赤穴式」とみられる土器と続縄文系統の土器である「後北式」が出土している。平成26年度に陸前高田市教育委員会で調査を行った愛宕下Ⅱ遺跡からも同様の出土例があり、岩手県沿岸南部にも遠方地域との交流の軌跡を垣間見ることができる。「後北式」が県内の遺跡から出土することは以前から知られていることであるが、事例数はさほど多いとは言えず、沿岸南部での出土は稀である。また、弥生後期と「後北式」の同一遺跡内からの出土事例も極めて少ない状況にある。今回の出土例は弥生時代後期及び、「後北式」の分布で空白域となっていた沿岸南部の穴を埋めると共に双方の関係性を提示することが期待できるものと考え、資料紹介を行うものである。

１．はじめに

今回、主に紹介を行う資料は、筆者が担当した陸前高田市の西和野Ⅰ遺跡、陸前高田市教育委員会が調査した愛宕下Ⅱ遺跡から出土した弥生後期及び「後北式」である。従来までは気仙地域でこの類の土器の出土例はあまり知られていなかったが、近年の発掘調査によりその存在が明るみに出てきており、双方の分布域を再検討する必要があるものと考える。今回の出土例は弥生時代後期及び、「後北式」の分布で空白域となっていた沿岸南部の穴を埋めると共に、双方の関係性を提示することが期待できると考える。本稿では、従来までの双方の分布域を周辺の気仙地域を含めて改めて整理していくと共に資料紹介を行う。

県内における双方の関係性についてはじめて着目したのは江坂輝彌氏である。江坂氏は、県北域に「後北式」と古式土師器が伴う出土例を挙げ、この二つを併行するものとして捉えた。その際に「後北式」と弥生終末期の「赤穴式」との関係性について文化的背景を踏まえて述べており、「後北式」と古式土師器を「赤穴式」に後続するものとして位置づけた（江坂1954）。その後、盛岡市の永福寺山遺跡から弥生後期・「後北式」・古式土師器の三種類全ての出土がはじめて確認され、製作技法や胎土・施文技法といった観点から相互関係の解明が試みられた。その中で主に着目されたのは古式土師器と「後北式」の関連性であり、弥生後期と「後北式」との関連性はこれに付随するような形で指摘されるにとどまっている（武田・高橋1982、中村1982）。

近年に至るまで前述の通り、県内の弥生後期と「後北式」との関係性について解明を図ろうとする積極的な議論の場はあまり設けられなかった。しかしながら、秋田県の寒川Ⅱ遺跡で土壙墓内から弥生終末期の十王台系土器と「後北C_2式」の明確な共伴事例が発見されたことや北海道地方で「赤穴式」系統の土器が発見されていることにより、共伴の可能性が指摘されるようになってきた。また、県内の「後北式」の出土事例の微増と同一遺跡内出土の弥生終末期土器の発見事例も相まって、相互関係について解明を試みる動きが顕在化してきている現状がある（斎藤1993）。

２．岩手県内における弥生時代後期の略史

県内では弥生後期に該当する土器型式として東北南部に分布した「天王山式」の流れを汲む「常盤式」や「湯舟沢式」、「赤穴式」などの型式が設けられてきた。

県内の弥生土器の編年を試みた小田野哲憲氏は５時期に分類し、その変遷を示した（小田野1987）。その過程で「常盤式」、「湯舟沢式」は第Ⅳ期、「赤穴式」は第Ⅴ期に位置づけ、「赤穴式」が「常盤式」、

「湯舟沢式」に後続する型式であるとした。更に「赤穴式」と「後北C$_2$式」が併行関係にあると捉えている。これにより、弥生後期に大きく分けて２段階の変遷が存在することが判明したのである。編年の際に着目された各型式の特徴を下記に簡潔に示す。尚、「湯舟沢式」に関しては「常盤式」と異なる点が多い（小田野1986）としているものの大きく第Ⅳ期として捉えられているため、本稿でも特徴の記載をまとめている。

「常盤式」・「湯舟沢式」：「常盤式」は伊東信雄氏（伊東1954）、「湯舟沢式」は小田野氏（小田野1986）が設定した型式である。器種は大型の壺・甕・鉢が主体を占めており、高坏・蓋は稀である。壺と甕には複合口縁も散見される。文様で特徴的なのは口縁部や頸部に施文される交互刺突文である。他に刺突文、連弧文、連続山形文などがある。磨消縄文も用いられる。頸部には無文帯をもつものが多く、体部には撚糸文や付加縄文が出現し、縦走するものが多い。頸部や底部付近で条の末端が交差状を示すものもある。

「赤穴式」：江坂氏が設定した型式である（江坂1954）。器種は甕が多くなり、「常盤式」にみられていた複合口縁は姿を消し、代わりに口縁部が肥厚した形で残る。文様は「常盤式」と同様に交互刺突文が見受けられるが、横位置に器面と平行に施文される「常盤式」とは異なり、「赤穴式」の場合は斜方向に施文されるものも出現する。また、交互刺突を区切る上下の沈線も間隔がまばらになり、刺突の配列も規則性を欠く。他に羽状撚糸文、頸部や底部付近で交差したり、縦走する撚糸文・付加縄文が特徴的である。

以上が各型式の特徴であるが、型式設定に用いられた資料が細片であったことや、一括遺物の出土例がほとんどないことから型式定義の解釈がそれぞれ異なり、認識に差異が生じた。そのため、前述の変遷を再証明する新たな観点が必要となった。

そのような中、斎藤邦雄氏は当該期における特徴的な文様として挙げられている“交互刺突文”に着目し、変遷の段階を論じた（斎藤1993）。斎藤氏は交互刺突文のバリエーションに着目し、これが時間差によるものと捉え、４段階による変遷の可能性を設定した。それぞれの段階の内容を下記に簡潔に示す。

Ⅰ段階：肥厚した口縁部を中心に立体的かつ肉彫的な交互刺突様浮線文が施文される段階で、区画帯として使用される場合が多く、口縁に並行して配される。他に連弧文などがある。

Ⅱ段階：典型的な交互刺突文が施文される段階で、浮線文とはならず立体さを失い、平行沈線文間に上下からの突き起こしにより結果的に交互刺突波状文となる。区画帯として使用される場合が多く、口縁に並行して配される。工具は器面と並行に当てられているようである。他に各種沈線文がある。

Ⅲ段階：交互刺突文は平行沈線文と併用されるが、施文部位が胴部文様帯にまで拡大し、施文位置も口縁部に対して斜位置に配される。刺突手法は斜位または垂直になされ、交互刺突文の整然さ・規則性が失われ、形骸化してしまう。所謂「交互崩れ」と称される段階である。他に各種沈線文がある。

Ⅳ段階：綾絡文をもつ羽状撚糸文・縦走する撚糸文・屈折する撚糸文などの特殊撚糸文により特徴づけられる段階である。他に沈線文が入るものもあるようである。

以上のような段階に沿って分類を行った結果、小田野編年の第Ⅳ期にあたる「常盤式」がⅠ段階に、「湯舟沢式」がⅡ段階に概ね該当することが判明し、「常盤式」と「湯舟沢式」の区別が図られた。更に第Ⅴ期にあたる「赤穴式」はⅢ段階とⅣ段階の少なくとも２時期に細分されることが判明したのである。ただし、「赤穴式」に関しては多様な内容を含むため更に区分される可能性もあるとしている。当該期の分類には斎藤氏のこの分類手法が適していると考え、本稿でもこの分類に従うものとする。

3．岩手県内における「後北式」の略史

「後北式」は北海道続縄文時代の代表的な土器で、「江別式」や「坊主山式」の別称がある。「後北式」とは「後期北海道薄手式土器」の略で、器形や文様によってＡ～Ｄ式の４つのタイプに大きく分けられる。Ｃ式は更にC_1式とC_2式に細分されるが、近年ではC_2式とＤ式を同時期と考え、C_2・Ｄ式と呼ばれる場合が多い。東北地方に顕著に見られるのはこのＣ式で、C_1式期に青森県まで、C_2・Ｄ式期には東北地方一円に分布域が南下し、拡大していったとされている。しかしながら、その出土状況は特異で、細片または遺構に伴わずに完形に近いものが単独出土するといった特徴をもつ。

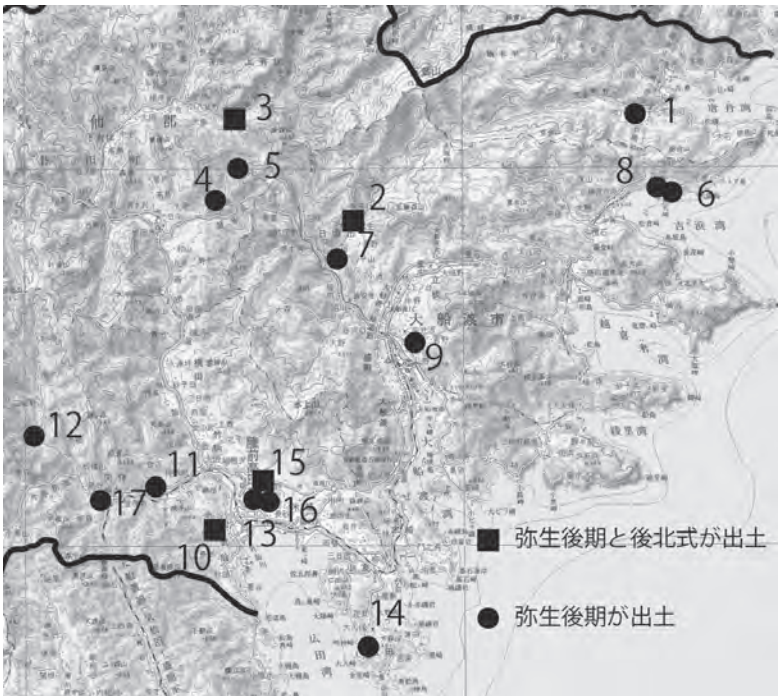
県内で確認されている「後北式」は帯縄文・三角形連続刺突文・微隆起線文・刻目隆帯などの特徴から多くがC_2・Ｄ式の範疇に収まるものと解されてきた。分布は北上川流域・馬淵川流域・沿岸北部に偏る傾向にある。斎藤氏は県内出土のC_2・Ｄ式を文様要素・文様展開・施文手法から３つの群に分類し、これが時期差によるものであるとの考えを示している。それぞれの群の内容を下記に簡潔に示す（斎藤1993）。

①群：曲線を主体としたモチーフの展開や、帯縄文・微隆起線文・三角形連続刺突文・刻目隆帯などのC_2・Ｄ式の典型的な特徴が見られる段階。

②群：単位文様・モチーフの展開は①の群と同様であるが、帯縄文を囲繞する微隆起線文が沈線文に変化する。三角形連続刺突文は鋭利さを失い、中には円形刺突文になる例もある段階。類例は少ないとされる。

③群：口縁部を周繞する刻目隆帯が数条見られるが、帯縄文・微隆起線文・三角形連続刺突文のいずれかが欠落する段階。

以上のような分類を行った結果、①群はC_2・Ｄ式の中でも隆盛期に、②・③群を退化形態の存在や各文様に欠落があることから隆盛期の土器とは様相を異にした後出の段階として位置づけている。一方で、胎土分析の観点から時期差も検討する必要があるとの課題点も残してはいるが、現時点での有効な分類手段であり、本稿でもこの分類に従うこととした。



弥生後期　出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時期
1	荒川和山遺跡	釜石市（唐丹町）	縄・弥
2	上鷹生遺跡	住田町	縄・弥・続縄・中
3	小松洞穴	住田町	縄・弥・続縄・古・中
4	城内遺跡	住田町	縄・弥
5	湧清水洞穴	住田町	縄・弥・古・中
6	十二役貝塚	大船渡市	縄・弥・古
7	関谷洞穴	大船渡市	縄・弥・古
8	向野貝塚	大船渡市	縄・弥・古
9	向山遺跡	大船渡市	縄
10	愛宕下Ⅱ遺跡	陸前高田市	縄・弥・続縄・古
11	打越遺跡	陸前高田市	縄・中
12	木戸口蝙蝠穴	陸前高田市	縄・弥
13	高田城跡	陸前高田市	縄・中
14	中沢浜貝塚	陸前高田市	縄・弥・古
15	西和野Ⅰ遺跡	陸前高田市	弥・続縄・古
16	花館跡	陸前高田市	弥・中
17	女神洞穴	陸前高田市	縄・弥・古

第１図・表　気仙地域における両型式の出土遺跡一覧及び位置図

４．気仙地域から出土した弥生時代後期及び「後北式」の特徴

前述の研究史を基に、陸前高田市の西和野Ⅰ遺跡・愛宕下Ⅱ遺跡から出土した資料を中心とした気仙地域出土の当該期の土器を検討する。遺跡位置と詳細を図表に示す（第１図・表）（註１）。西和野Ⅰ遺跡・愛宕下Ⅱ遺跡に関しては資料を実見した際の特徴を表にそれぞれまとめている。西和野Ⅰ遺跡は報告書作成段階のため資料の写真掲載は行わなかったが、愛宕下Ⅱ遺跡は実見した資料の写真も掲載している（註２）。その他の遺跡に関しては、当該期の特徴が表れている資料を何点か抜粋して掲載し、検討を加えた。（第２図）

⑴　西和野Ⅰ遺跡

両型式とも表土及び方形周溝内の流れ込み土層より出土している。弥生後期は不規則な交互刺突文と付加条縄文が施される特徴からⅢ段階に対応するものと考えられる。「後北式」はC_2・Ｄ式で、③群のような文様要素の欠落がないことから①または②群に位置づけられると考えられる。

	弥生後期	後北式
器形	薄手で頸部がくびれる甕形の器形であると推定される。	薄手で、内湾する器形であると推定される。
文様	・口縁部は２本引いた沈線の間を斜方向に刺突する不規則な交互刺突文が施される。 ・頸部に補修孔あり。 ・体部は付加条縄文が間隔を開けて縦方向に施文される。	・口縁部付近に刻み目を伴った隆帯が２条施されている。 ・隆帯の下部には三角形連続刺突列が施される。 ・磨滅しているため判別が定かではないが体部に帯縄文の施文の痕跡が確認できる。
内面調整	ナデが横方向に施される。輪積痕が明確に確認できるものも見受けられる。	ナデが斜方向に施される。また、内面にも一部、刻み目状の刺突が施されている。
胎土	やや赤みを帯び、石英等のやや大きめの鉱物が混入。	やや赤みを帯び、石英等のやや大きめの鉱物が混入。
焼成	概ね良好である。	概ね良好である。

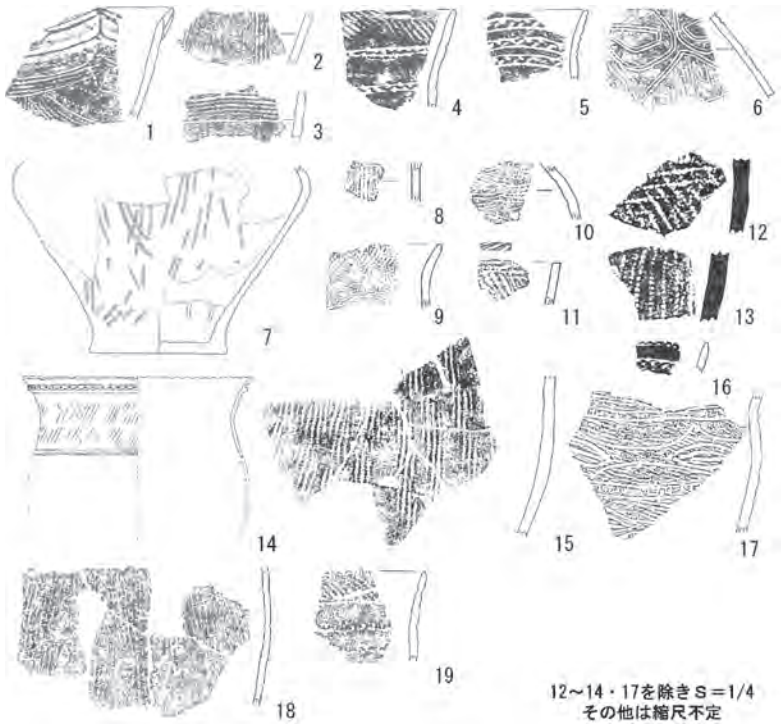
⑵　愛宕下Ⅱ遺跡

両型式とも包含層中より出土している。弥生後期は一見すると、交互刺突文が整然と施文されているような印象を受けるが、間隔が疎らであったり、交互の刺突となっていない箇所が見受けられる。また、付加条縄文の施文方向が部位によって変化することからもⅢ段階に対応すると思われる。「後北式」はC_2・Ｄ式で、沈線によって文様が区画されていることから②群に位置づけられると考えられる。

	弥生後期	後北式
器形	頸部付近がくびれ、体部上方が膨れる甕形の器形である。	薄手のつくりで、内湾する器形である。
口唇部	－	刻み目が見受けられる。
文様	・口縁部は２本引いた沈線の間を斜方向に施文する交互刺突文が２列施される。 ・体部は付加条縄文が間隔を開けて施文される。施文方向は頸部及び体部下方が縦方向、膨らみが最大になる体部上方及び底部付近が横方向となる。	・口縁部に刻み目を伴った隆帯が２条施されている。 ・体部には帯縄文が施され、鋭い沈線が帯縄文の施文される方向に沿って区画するような形で施される。また、三角形連続刺突列も沈線に区画されるような形で存在する。沈線で弧状の文様を描こうとしたと考えられる。
内面調整	ナデが横方向及び斜方向に施される。	ナデが斜方向に施される。
胎土	やや赤みを帯び、石英等の鉱物が混入。	白っぽく、比較的粒子の細かい鉱物が混入。
焼成	概ね良好である。	概ね良好である。

写真１　愛宕下Ⅱ遺跡出土の弥生後期土器

写真２　愛宕下Ⅱ遺跡出土の後北式土器



第２図　気仙地域の当該期土器

⑶　他の気仙地域の遺跡

高田城跡と花館跡に関しては資料を実見し、その他の遺跡は各報告書より検討を行った。１～７は上鷹生遺跡出土の資料で、１～３が後北C$_2$・D式、４～７はⅢ段階に該当するものと考えられる。１は口縁部下に隆帯が２条めぐり、体部には鋭い沈線で区画された中に帯縄文が施される。施文方法が愛宕下Ⅱ遺跡出土資料と似ており、② 群に属すものと考えられる。２・３も同様に帯縄文が施されている。４・５は交互刺突文が複数列施されている。６は幾何学状の文様モチーフが描かれている。８～11は小松洞穴出土の資料で、８は帯縄文が施される後北C$_2$・D式、９～11がⅢ段階以降に該当するものと考えられる。12・13は湧清水洞穴出土の資料である。12はクロスするように付加条縄文が施文される。14は関谷洞窟出土の資料で、Ⅰ段階に位置づけられている資料である。15・16は打越遺跡出土の資料で、16は不規則な交互刺突文が施される。17は中沢浜貝塚出土の資料で連弧文が施されている。18・19は花館跡出土の資料で、19は無文帯の中に不規則な交互刺突文が施されている。Ⅲ段

階に該当するものであると判断を下している。

高田城跡は器厚が他と比べ、やや厚いが、付加条縄文の施文特徴からⅢ段階以降に該当するものであると判断を下している。花館跡の他の資料も概ねⅢ段階に該当すると思われる。

５．おわりに

以上のように概観してきたが､「後北式」が出土する遺跡からは「赤穴式」に該当する土器が見つかっており、併行関係にあることは従来の研究史からも相違ないと思われる。斎藤氏は後北 C_2・D 式後半段階と赤穴式相当段階が併行関係にあることを想定しているが、今回検討した資料も数は少ないながらも、②群とⅢ段階には対応が見られ、その内容に合致するものと判断している。

両型式の出土遺跡共に分布がある程度まとまっている傾向が見て取れることから何箇所か同種の土器を使用していた集団の拠点が存在していたと推測される。当地域における「後北式」の存在は続縄文文化の影響が及んでいたことを裏付けるもので、潜在的な分布はより密なものと考えられる。いかにして「後北式」が当該地域に伝播してきたのか、在地の集団にどのような影響を与えたのかを検討することが今後の課題である。その観点も含めて更に相互関係を検討する必要があると考える。

最後に、愛宕下Ⅱ遺跡の資料を実見させて頂いた陸前高田市教育委員会の皆様に記して感謝申し上げます。

註

⑴第１表の時期の記載は縄文を縄、弥生を弥、続縄文を続縄、古代を古、中近世を中というように略して記している。

⑵報告書作成段階だが、陸前高田市教育委員会より許可を頂いて掲載している。写真は筆者がコンパクトデジカメで撮影。

参考文献 （以下、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書を岩文埋報とする。）

伊東信雄　1954「岩手県佐倉河村発見の弥生式土器」『古代学』３-２
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988『打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書』岩文埋報第131集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1992『本宿遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第172集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1997『上鷹生遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第253集
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2015『花館跡発掘調査報告書』岩文埋報第638集
岩手県立博物館　2000『気仙郡住田町小松洞穴発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第16冊
江坂輝彌　1954「日本石器時代の文化６」『奥羽史談』６-１
大船渡市立博物館　1991『気仙の遺跡―大船渡市・三陸町の各遺跡の出土品―』
大船渡市立博物館　1999『気仙の遺跡Ⅱ―陸前高田市・住田町の各遺跡の出土品―』
小田野哲憲　1986「湯舟沢遺跡３区の弥生式土器」『湯舟沢遺跡』滝沢村教育委員会
小田野哲憲　1987「岩手の弥生式土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第５号
斎藤邦雄　1993「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』第５号
住田町教育委員会　1973『湧清水洞穴遺跡』
高橋昭治・武田良夫　1982「岩手県における後北式文化」『北奥古代文化』第13号
中村五郎　1982「続縄文土器をめぐる諸問題」『北奥古代文化』第13号

出典

第１図　国土地理院発行20万分の１地勢図「一関」を50％縮小・改変・加筆
第２図　各遺跡発掘調査報告書等から転載

執筆者（五十音順）

阿部　勝則（あべ　かつのり）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子　昭彦（かねこ　あきひこ）	（公財）岩手県文化振興事業団博物館
河本　純一（かわもと　じゅんいち）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター （（公財）大阪府文化財センターより派遣）
佐藤　　剛（さとう　つよし）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター （（公財）北海道埋蔵文化財センターより派遣）
須原　　拓（すはら　たく）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
中村　隼人（なかむら　はやと）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
野中　裕貴（のなか　ゆうき）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
米田　　寛（よねた　ひろし）	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

紀要　第 35 号

（平成 27 年度）

印　刷　平成 28 年 3 月 17 日

発　行　平成 28 年 3 月 24 日

発　行　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電話（019）638-9001

FAX（019）638-8563

印　刷　永代印刷㈱

〒 020-0857　岩手県盛岡市北飯岡一丁目 8-30

電話（019）636-0011

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2016

ISSN-0285-5712

BULLETIN OF THE RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURAL ARTIFACTS

VOL. 35

CONTENTS

Articles

A Study of Assembled flakes in Nakano site －Based on Observation of flakes－

SUHARA,Taku

Clay Figurines in the Tohoku Region of the Final Jomon Period (6)
－Materials from sites in the northern three prefectures mainly before the early phase, from sites in the rest of the southern prefectures, and the supplement of (4)(5)－

KANEKO, Akihiko

A mode of pottery from the 6th to the 8th century in the Pacific Ocean seaboard middle area of Iwate Prefecture

YONETA,Hiroshi SATO,Tsuyoshi

Nanbuyashiki

NAKAMURA,Hayato

A Study about Structural remains of the Charcoal Kiln of Modern Period in Iwate Prefecture

ABE,Katsunori

Notes

Pottery paste of Jomon ware excavated in Iwate prefecture (2)

KAWAMOTO, Junichi

Materials of Archaeological Reserch

Pottery of the Late Yayoi Period in the Kesen region

NONAKA,Yuuki

AGENCY FOR CULTURAL PROMOTION
IWATE PREFECTURE
Mar. 2016